

中国歴代の地理総志に見る詩跡の著録とその展開

—安徽省宣城市区・池州市、および山東省済南市区を通して—

植 木 久 行

序 文

中国では歴代、多くの地理書—総志（全国性区域志）・方志（行政区域を単位とする地方志）—が作成され、この部門が占める書籍の分量は、集部の文集と並ぶ双璧である。しかも中国の地理書は、いわば各地の個性を形成する人・地・事・物の四類を含む、百科全書的なものが多い。行政（治政）に主眼を置く実用的な地理書のほかに、人物を記載し、文学作品（詩文）を引用・集録する、いわば地域の総合的な文化誌（総合文化志的地域叙述）、と呼ぶこともできる地理書が出現している。^{〔注1〕}

本稿では、主として大半が現存する歴代の著名な地理総志を用いて、いわゆる詩跡（歴代の詩人たちに詠みつかれて著名になり、詩歌の新しい創造に点火して表現の核となりうる力をたたえた地名〔古典詩語〕。詩歌との緊密な一体感〔詩歌によって生み出された独特の連想作用—特定の景物・情趣・発想・テーマ・語彙など〕を伴って認識・理解される場所〔宮殿・高樓・橋・亭・関所・祠廟・旧宅・墳墓・寺院などを含む〕で、単なる名勝古跡とは異なる、詩歌を主体とした概念^{〔注2〕}が、どのように著録されているのか、現地調査（2005年・2006年）に赴いた南の安徽省宣城市区・池州市と、北の山東省済南市区を例にして考察したい。その結果は、今後、個々の詩跡調査における地理総志利用のあり方を明確に示すことになろう。

第1章 安徽省宣城市区

〔1〕 現存する最古の地理総志は、唐の元和8年（813）に成る李吉甫撰『元和郡県図志』40巻、目録2巻である。（目録と6巻分欠）賀次君点校『元和郡県図志』（中華書局、中国古代地理総志叢刊、1983年）巻28、江南道4、宣州宣城県の条には、「敬亭山は、州の北十二里、即ち謝朓 詩を賦するの所」とある。本書は、地方の文化よりも治政（行政）の参考に供する方面に重点を置いており、こうした芸文（詩文）との関連に言及することは多くなく、この記載は貴重である。後世、敬亭山が、宣城市区を代表する詩跡になることを暗示していよう。

〔2〕 北宋初期の太平興国年間（976～984）ごろに成る^{〔注3〕} 楽史撰『太平寰宇記』（200巻、目録2巻、文海出版社、宋代地理書四種之一、1962年。大きな欠落は巻119のみ）巻103、江南西道、宣州宣城県、敬亭山の条にいう、「『郡国志』及び宋の『永初山川記』（南朝・劉澄之撰『永

初山川古今記』)に云ふ、宛陵の北に敬亭山有り。山に神祠有り。即ち謝朓 神を賽り(お礼の祭りをする)^{〔注4〕}、詩を賦するの所。其の神は梓華府君と云ふ。頗る靈驗有り、と。「賦詩之所」の語は、前掲の『元和郡県図志』の記述を踏襲する。

『太平寰宇記』は、州ごとに風俗・姓氏・人物・土産など、文化的方面を加味した項目を新たに加えて、当地の全貌を表す「総合的な地域別百科事典」的内容を備えた地理書^{〔注5〕}へと変貌しつつあった。これは、確かに「土地に対する認識が、単なる治政の対象という存在から、その土地の持つ文化的背景までも含めて認識しようという、文化的存在へと変化しつつあることを物語って」(松尾幸忠^{〔注6〕})いよう。しかし芸文に関する部門(門類)はまだ独立せず、各県に引く詩句も多くない。宣城県の条も、詩文に関する言葉は、これのみである。^{〔注7〕}

[3] 続いて北宋中期の元豊3年(1080)に成る^{〔注8〕}王存・曾肇・李德芻^{すう}撰『元豊九域志』(10巻、王文楚・魏嵩山点校、中華書局、中国古代地理総志叢刊、1984年)巻6、江南東路、宣州宣城県の条には、昭亭山(=敬亭山)や句溪水などの著名な山川を記すが、それを詠んだ芸文(詩文)には言及しない。北宋の紹聖四年(1097)、黄裳の上表に基づいて、『元豊九域志』の簡略な記載を増補することになった。新たに「古蹟」の部門を加えた『新定九域志』^{〔注9〕}巻6、宣州、古蹟の条にも、詩跡と呼ぶべき昭亭山や謝公亭などを書き記すが、芸文的な言及はなく、その由来や場所についての簡略な説明にとどまっている。ただ古蹟は詩跡と重なることも多いため、その解説は北宋期の古いものとして貴重である。

『元豊九域志』は、行政区名、地里(四至八到)・疆域・戸数・貢物などを書きこんだ、いわば各地の行政地理状況を知る簡明な手冊(ハンドブック)―行政便覧のようなものであった。当時、各地の歴史的文化的内容(人物・古蹟・芸文など)への言及は、まだ地理総志の必須項目である、とは認識されていなかったのである。

[4] 北宋末の政和年間(1111~17)に成る^{びん}歐陽恣撰『輿地広記』(38巻、李勇先・王小紅校注、四川大学出版社、宋元地理志叢刊、2003年)巻24、江南東路、宣州宣城県の条にも、ただ「敬亭山有り」とのみある。これは、『輿地広記』が歴代の地理沿革(境域の変遷)と山谷・河流、州県の治所の変遷などの記述を主体とし、芸文(詩文)的視点がないためである。

[5] 南宋期、地理的方面(四至八到、疆域、戸口)の記述は省略されていく。北中国が金の支配下にあつて、淮河以南の地に偏在した南宋時代、公式(官修)の総誌は結局編纂されなかったが、民間では注目すべき二つの総誌―『輿地紀勝』と『方輿勝覧』が編纂された。学問・文化の進歩にともなって、皇帝の統治の参考に供するためではない、いわば名勝古蹟や人物を中心にすえた、詩文の創作・鑑賞のための地理知識を重視した、新傾向の詳細な地理事典であった。『元和郡県図志』や『太平寰宇記』などには見られ

ない「詩」（『方輿勝覽』では「題詠」）と「四六」の二部門が新たに設けられており、両書がいわゆる詞章の学に偏った地理総志であることを象徴している。なお南宋期に編纂された、『乾道四明図経』（張津等）、『呉郡志』（范成大）、『琴川志』（孫応時、鮑廉）、『嘉泰会稽志』（施宿等）、『剡録』（高似孫）、『開慶四明統志』（梅応発等）、『景定建康志』（周応合）、『咸淳臨安志』（潜説友）、『咸淳毘陵志』（史能之）などの方志も、独立した部門（門類）を設けて詩文を集録しており、同じ風気の中にあることがわかる。（このうち、前五書の成立は、『輿地紀勝』『方輿勝覽』に先行する）^{〔注10〕}

宝慶3年（1227）の翌年以降に刊行された、婺州金華県（浙江省金華市）の王象之撰『輿地紀勝』200巻（31巻が全欠、一部の欠は17巻に及ぶ。李勇先校点、四川大学出版社、宋元地理志叢刊、2005年、嘉定14年〔1221〕の自序、宝慶3年の李璣^{（とく）}の序）は、南宋期の最も完備した大型の総志（全国的方志）である。^{〔注11〕}

南宋領内の府州を一巻ずつに配当し、府県の沿革、風俗形勝、景物、古跡、官吏、人物、仙積、碑記、詩、四六等に分けて記述する。なかでも碑記・詩・四六の三部門は、本書の創設にかかり、きわめて芸文を重視した構成である。^{〔注12〕} 当地を詠んだ作品を集録する「詩」の部門以外にも、景物や古跡などの条に、しばしばそれらを詠んだ詩文を引用するが、境域、戸口、郷里数などは記されていない。ちなみに、四六とは、四六文（四六駢儷文）の基調を成す四字・六字の対句（偶句）を集録した部門である。

王象之の自序によれば、天下の各地に在る山川の精華（風物名勝）と、それを歌詠・記述した詩文を広く集め、文学者（騷人才士）がこれを見れば、立ちどころに当地の山川の風趣を会得して、作詩作文の際の、無尽蔵の資料宝庫にすることにあつた。^{〔注13〕}

これは、地理総志編纂の目的を従来の国家統治（治政）に対する奉仕から、広範な文学者（騷人才士）に対する奉仕へと、大きく方針転換したことを意味していよう。

『輿地紀勝』巻19、寧国府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。2つの詩跡に係る詩句の場合、一方の詩跡の条にのみ置いて、重複引用を避けた。

● 所収部門・詩跡・詩人・詩句（引用句数）の順に記述

※ [] 内は、引用者の増補・訂正。

【景物上】

□高齋 ○六朝齊・謝元暉（朧）「〔郡内〕高齋視事閑坐、答呂法曹」（詩題のみ、ただし後の【詩】の条に、「郡内高齋」と題して、「窓中列遠岫、庭際俯喬林」を引く）

○唐・劉禹錫 詩「〔訓宣州崔大夫見寄〕「内史高齋興有余」（1句）

○唐・韋蘇州「〔応物〕 詩「送五経趙随登科授広徳尉」（注…趙随が人名、広徳は宣州の属県）「高齋謁謝公」（1句）

□宛溪 ○唐・李白 詩「題宛溪館」「吾憐宛溪水〔好〕、百尺照心明」（2句）

○宋・孫錫 詩「句溪雖可鑑、未若宛溪清」（2句）

□句溪 ○六朝齊・謝元暉（朧）「將之〔遊〕湘中〔水〕、尋句溪」（詩題のみ）「唐人

留詠多し」として、以下を引く。

○唐・李白 詩 [別韋少府] 「洗心句溪月」(1句)

○唐・杜牧 詩 [張好好詩] 「沙暖句溪蒲」(1句)

□響山 ○唐・李白「登響山 [九日登山]」 「築土接響山、俯臨宛水湄」(2句)(注…唐・
權德輿の記も引く)

★「青溪」(=清溪)の条に、李白らの詩も引かれるが、これは「青溪」(清溪)の流れ
る土地の管轄が唐代の後期、宣州から池州へと変化したために生じた誤解にもとづいて
おり、ここでは取り上げない。【詩】の条も誤って引く。

【景物下】

□環波亭 ○宋・梅聖俞(堯臣) 詩 [宣州環波亭] 「令 [今] 吾太守樂、副 [慰] 此邦 [郡]
人望」(2句)

□宛陵堂 ○宋・呂居人(本中) 詩 [寄宣城故旧] 「疊嶂楼前 [頭] 納涼処、宛陵堂下
探梅時」(2句)

□資深堂 ○宋・郭祥正(功甫) 詩 [感懷、贈李公択] 「君來宣城幕、衆謂得杜牧。我
適遊昭亭、林中騎白鹿。時趨資深堂、遇君亦休沐」(6句)

□曲肱亭 ○宋・黃魯直(庭堅) 「題宛陵張待舉曲肱亭」詩 「仲蔚蓬蒿宅、宣城詩句中。
[この後、二句脱] 偃蹇勲業外、嘯歌山水重。…」(8句)(注…【詩】の条にも、冒頭の2
句を引く)

□平雲閣 ○宋・郭祥正(功甫)「賦平雲閣」詩 「宣城多名山、詩人旧経歴。独無平雲篇、
疑怯作者敵」(4句)

□秋水閣 ○宋・郭祥正(功甫)「題秋水閣」詩 「偶登秋水閣、静吟秋水篇。…」(4句)

□列岫亭 ○宋・郭祥正(功甫)「列岫亭」詩 「謝公遺句惜埋沈、更作新定一百尋。 …」
(4句)(注…謝朓「郡内高齋視事閑坐、答呂法曹」詩の「窓中列遠岫」にもとづく)

★資深堂・曲肱亭・平雲閣・秋水閣・列岫亭は、その所在地が明記されないが、ひと
まず宣城市区内にあったものと考えておく。

□陵陽山 ○宋・郭祥正(功甫)「双溪樓 [宣州双溪閣夜宴、呈太守金光禄]」詩 「陵陽
之 [三] 峰压千里、百尺危楼勢相倚」(2句)

□敬亭山 ○唐・李白 詩 [独坐敬亭山] 「相看兩不厭、只有敬亭山」(2句)

○唐・李白 詩 [登敬亭山、南望懷古、贈寶主簿] 「敬亭一迴首、目尽天南端」(2句)

★所引の『図経』に「即ち謝朓 詩を賦するの所」とあるが、六朝齊・謝朓自身の「敬
亭山」(「遊敬亭山」)詩そのものは引用しない。また、次の項目に昭亭山の名が見えるが、
昭亭山は敬亭山の別称である。(昭亭山には、詩が引かれていない)

□双羊山 ○宋・梅聖俞(堯臣) 詩 [早春田行] 「風雪双羊路、梅花山下村」(2句)

□開元寺 ○唐・杜牧「題宣州開元寺」詩 「南朝謝朓城、東吳最深処。…」(2句)

【古跡】

□謝朓北楼 唐・李白「秋登宣城謝朓北楼」詩 「誰念北楼上、臨風懷謝公」(2句)

【人物】楊処士の条、唐・許渾「寄昭亭楊処士」〔… 謝公楼上晚花發、楊子宅前春草深〕（4句）

★参考【碑記】の条に、『宣城詩』（唐人已前の詩篇、編集の人の姓名を失す）を著録。

【詩】

以下、宣城県を含む寧国府内に関する詩が、基本的に作者の生存時代に従って集録されており、前掲の□印のごとき、山川・堂亭・寺観の名称を持たない。それでここでは、詩跡ごとに分類して示す。その名称は、前引の項目と重複するものを含む。

□敬亭山(前掲2首) ○唐・李白「至敬亭山[自梁園至敬亭山、見会公、談陵陽山水、…]」(会公は僧)「稠疊千万峰、相連入雲去」(2句)「水国饒英奇、潜光臥幽草」(2句)(注…それぞれ独立して示す)

○唐・李白「登敬亭山[登敬亭山、南望懷古、贈寶主簿]」(前出)「敬亭一迴首、目尽天南端。…」(4句)

○唐・李白 詩[寄従弟宣州長史昭]「爾佐宣城郡、守官清且閑。常誇雲月好、邀我敬亭山」(4句)

○唐・李白「別韋少府」「洗心句溪月、清耳敬亭猿」(上句は□句溪の条に前出)(2句)

○唐・李白「觀胡人吹笛」「十月吳山曉、梅花落敬亭」(2句)

○唐・李白「敬亭山[独坐敬亭山]」「衆鳥高飛尽、孤雲独去閑。相看兩不厭、只有敬亭山」(全4句。前掲の□敬亭山の条には、後半2句のみを引く)

○唐・孟浩然 詩[夜泊宣城界]「石逢羅刹礙、山泊敬亭幽。…」(4句)

○唐・白居易「題宣城郡齋[宣州崔大夫閣老、忽以近詩数十首見示…]」「謝元暉没吟声寢、郡閣寥寥筆硯閑。… 再喜宣城章句動、飛觴遥賀敬亭山」(全8句)(注…白居易の自注に、「謝宣城(朶)の『郡内』詩に云ふ、『窓中に 遠岫^{つう}列なる』と」「謝に又た『敬亭山に題す』詩有り。並びに『文選』に見ゆ」とある)

○唐・劉禹錫「九華歌[山]」「[[君不見] 敬亭之山黄索漠、兀如断岸無稜角。宣城謝守一首詩、遂使声名齊五岳」(4句)

○唐・劉禹錫 詩[[詵宣州崔大夫見寄]]「遥想敬亭春欲暮、百花飛尽柳花初」(注…前掲の□高齋の条に、本詩の一句を引くが、この4句は見えない)

○唐・劉長卿「行至宣城」「敬亭暮色晴臨道、句水寒流澹不波」(4句)(注…『全唐詩』に未見?)

○唐・杜牧 詩[自宣州赴官入京、逢裴坦判官…]「敬亭山下百頃竹、中有詩人小謝城」(2句)

○唐・杜牧 詩[偶遊石盍僧舍]「敬岑草浮光、句沚水解脈」(2句)

○唐・韋応物「送宣城[路]録事」「… 雪林謝家宅、山水敬亭祠」(4句)

○唐・趙嘏「宛陵望月[寄沈学士]」「一川如画敬亭東、待詔閑遊处处同。…」(4句)

○唐・陸龜蒙「寄友人[寄友]」「敬亭寒夜溪声裏、同聽先生講太元[玄]」(4句)

○宋・蹇柳溪 詩「我聞敬亭無足取、岑寂況在東南涯。声名一日遍宇宙、正以謝守詩瑰奇」(4句)

□宛溪（前掲二首） ○唐・李白 詩 [寄崔侍御] 「宛溪霜夜聽猿愁、去國長為不繫舟」（2句）

○唐・李白 詩 [題宛溪館] 「吾憐宛溪水 [好]、百尺照心明」（注…□宛溪の条に前出）
（2句）

□謝朓北樓（前掲一首、補一首） ○唐・李白「秋登宣城謝朓北樓」 「江城如画裏、山曉望晴空。…」（6句）（注…前掲の□謝朓北樓の条に引く本詩の「誰念北樓上、臨風懷謝公」は尾聯。ここでは、それ以外の6句を引く）

○唐・鄭準「題宛陵北樓」 「… 若使 [遣] 謝宣城不死、必応吟尽夕陽川」（4句）

○唐・鮑溶「北樓 [宣城北樓、昔從順陽公會於此]」 「詩樓郡城北、窓牖 敬亭山。…」
（4句）

□開元寺（前掲一首） ○唐・杜牧「題宣州開元寺水閣」 「六朝文物草連空、天澹雲閑今古同。…」（全8句）

○唐・杜牧「題 [宣州] 開元寺」 「南朝謝朓城、東吳最深處」（2句。前掲の□開元寺の条に見える）

○唐・杜荀鶴「題開元寺[門閣]」 「一登高閣眺清秋、滿目風光尽勝遊。何處画橈尋綠水、幾家鳴笛咽紅樓」（4句）

○唐・趙嘏「題開元寺水閣」 「年来独向此遊頻、謝氏青山与寺隣。…波穿十里橋連寺、絮压千家柳送春」（6句）（注…『全唐詩』に未見。『全唐詩補編』415頁所収）

□高齋（前掲3首） ○唐・韋応物 詩 [送五經趙隨登科授広徳尉] 「独往宣城郡、高齋謁謝公」（2句）（注…前掲の□高齋の条には、下句のみを引く）

□疊嶂樓 ○宋・蘇為「宣城」 「宣城花疊嶂、樓前簇綺霞。…」（4句）

○宋・盧革 詩 「疊嶂最驚目、排青隱星絡。…」（4句）（注…『方輿勝覽』卷15、寧国府、山川の条に、「疊嶂、陵陽山の上に在り」とあるが、『輿地紀勝』中には見えない）

○宋・蘇文定公（轍）詩 [次韻侯宣城疊嶂樓双溪閣長篇] 「仰攀疊嶂高、俯閱双溪美」（2句）

○宋・林希「疊嶂樓有懷吳門朱伯厚」詩 「虎丘換得敬亭山、句水松陵数舎間。…」（4句）

[★参考【碑記】の条に、「題疊嶂樓詩」（原注…南齊の謝朓）、「題疊嶂樓壁」（原注…唐の独孤霖）とある]

□句溪（前掲3首） ○宋・郭祥正（功甫） 詩 [遊陵陽、謁王左丞代、先書寄献] 「昭亭扶春入画戟、句溪洗月供吟盃」（2句）

これによれば、宣城を代表する詩跡は敬亭山であり、ついで謝朓北樓とその後身にあたる疊嶂樓（唐の刺史独孤霖の再建・改称）であった。次に続くのが開元寺や宛溪である。なおそれらの詩跡は、唐の李白や杜牧（観察使の幕僚として宣城に二度滞在）によって詠まれて定着化し、北宋の郭祥正（近くの当塗出身で青山に住み、李白の後身と評された詩人、『青山集』がある。^{注14}）は、地元（宣城）出身の梅堯臣よりも当地の堂亭を多く詠んでいる。前掲の項目のうち、環波亭・資深堂・平雲閣・秋水閣・列岫亭などの亭閣は、後世ほとんど詠

み継がれず、環波亭はむしろ後述する済南のそれの方が知られている。この意味では、いわゆる詩跡とは見なしがたい。

[6] 『輿地紀勝』の刊行からやや遅れた嘉熙3年(1239)ごろ、それを簡略化した形態を持つ地理総志が出版されはじめた。^(注15) 建寧府崇安県(福建省武夷山市)の祝穆撰『新編四六必用方輿勝覽』(嘉熙3年の呂午の序と自序を持ち、前集43巻、後集7巻、続集20巻、拾遺1巻から成る)が、それである。本書も『輿地紀勝』と同様に、境域・戸口・田賦などの部門を欠く一方、詩文・記序を多く引用・集録した、詩文の創作・鑑賞のための地理事典であるが、^(注16) 四六の部門だけは、かえって『輿地紀勝』よりも詳しく、所収の駢語(対語)は、作者自身が各種の資料に基づいて新たに編修したものを多く含む。(他方、『輿地紀勝』所収のそれは、他の人が作成したものを集録する) 四六の文体を作成する用途に応ずることが編纂の主眼であったことは、書名中の「四六必用」の語によって明白である。当時、四六の文体は、科挙の受験だけでなく、天子の詔勅の執筆にも用いられ、さらには社会に通行する書啓・祭誄・碑文等にも使用されていた。^(注17) (本書には、県沿革と碑記の両項はない)。

また『輿地紀勝』に引用・集録される詩文のうち、文はおおむね摘録であるが、『方輿勝覽』は詩・文の異同を問わず、全篇を引くことが多い。そして【題詠】の部門以外は、詩題を記さないケースが大半である。

原刻本刊行の三十年後、子の祝洙増訂の『新編方輿勝覽』70巻が咸淳3年(1267)に出版され、この系統の増訂本が宋末・元明期広く流布していく。^(注18)

ここでは、増訂本『方輿勝覽』(全70巻、施和金点校、中華書局、中国古代地理総志叢刊、2003年)を使用する。南宋の領域17路を府州郡に分け、まず古来の建置沿革、そして「事要」として郡名・風俗・形勝・土産・山川・(陵寢・堂舎〔堂院〕)・樓閣〔樓台〕・台榭〔亭榭〕・仏寺・道観・祠墓・古跡・名宦・人物・題詠・(外邑)・四六などの順で記されている。なかでも風俗・景勝や題詠・四六等の詳述に本書の特色がある。『輿地紀勝』を踏襲した箇所(特に建置沿革の部門)も存在するが、単なるその節略・改編本ではなく、編者が長年努力して独自の編纂体例を備えた新著であった。^(注19) ちなみに「題詠」門には、府・州(軍・監)の治所が置かれた土地の風物名勝に関する詩句を収め、時おりその後に見える「外邑」の部門は、その治所以外の、周囲に広がる府・州に所属する各県の、風物名勝に関する詩句を収めている。^(注20)

『方輿勝覽』巻15、寧国府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

● 所収部門・詩跡・詩人・詩句(引用句数)の順に記述

※ [] 内は、引用者の増補・訂正。また◎は『輿地紀勝』所収の詩。

【山川】

□敬亭山 ○六朝齊・謝元暉(朏)「敬亭山」詩「茲山亘百里、合沓与雲齊。…」(全20句)

★もと作者名を謝靈運に誤る。この影響は大きく、明代の『寰宇通志』『大明一統志』も同じく誤る。『方輿勝覽』の影響の大きさを物語る一例である。

◎唐・李白 詩 [登敬亭山、南望懷古、贈寶主簿] 「敬亭一回首、目尽天南端」(全20句。
『輿地紀勝』は、2句・4句の引用)

◎唐・劉禹錫 詩 [九華山] 「[君不見] 敬亭之山黃索漠、兀如斷岸無稜角。宣城謝
守一首詩、遂使声名齊五嶽」(4句)

★次の項目に昭亭山の名が見えるが、昭亭山は敬亭山の別称である。この点は『輿地
紀勝』に同じく、詩も引かれていない。

□双羊山 ◎宋・梅聖俞(堯臣) 詩 [早春田行] 「風雪双羊路、梅花山下村」

□響山 ◎唐・李白 詩 [九日登山] 「築土接響山、俯臨宛水湄」

□双溪 ○宋・楊廷秀(万里) 詩 [曉過花橋、入宣州界] 「敬亭・宛陵故依然、疊嶂・
双溪阿那辺。謝守不生梅老死、倩誰海内掌風煙」(注…謝守は謝朓、梅老は梅堯臣)

□宛溪 ◎唐・李白 詩 [題宛溪館] 「吾憐宛溪水 [好]、百尺照心明」

★清溪の条に、李白「清溪行」詩を引くが、これは『輿地紀勝』と同じ誤り。

【堂亭】

□宛陵堂 ◎宋・呂居人(本中) 詩 [寄宣城故旧] 「疊嶂楼前 [頭] 納涼処、宛陵堂下
探梅時」

□曲肱亭 ◎宋・黄魯直(庭堅)「題宛陵張待拳曲肱亭」詩 「仲蔚蓬蒿宅、宣城詩句中。[4
句脱] 晨鷄催不起、擁被聽松風」(4句)

□謝公亭 ○唐・李白 詩 [謝公亭] 「池花春映日、窓竹夜鳴秋。謝令 [亭] 離別処、
風景亦 [每] 生愁」(注…後半の二句が詩の冒頭。そして二句の後に前半の2句が来る)

□高齋 「謝元暉に詩有り」とのみ記し、詩は引用しない。

【楼閣】

□疊嶂楼 唐の独孤霖の文のみ引き、詩は引用しない。

□北楼 ◎唐・李白 詩 [秋登宣城謝朓北楼] 「江山 [城] 如画裏、山晚望晴空。 …
誰念北楼上、臨風懷謝公」(全8句)

【寺觀】

□開元寺 ◎唐・杜牧 詩 [題宣州開元寺水閣] 「六朝文物草連宮 [空]、天淡雲閑今
古同。…」(全8句)

【題詠】

以下、宣城県を含む寧国府内に関係する詩が、基本的に作者の生存時代に従って集録
され、前掲の□印のごとき、山川・堂亭・寺觀の名称を持たない。それでここでは、詩
跡ごとに分類して示す。その名称は、前掲のものと同なるものを含む。なお『輿地紀勝』
の【詩】は、一首ごとに引用詩句を列ねた後、作者と詩題が小字で注される。これに対
して、『方輿勝覽』の【題詠】は、詩中の名句(1句)をかかげ、作者、詩題、残りの詩
句が小字で注され、形態を異にする。

□宛水 (=宛溪) ○宋・黄魯直 (庭堅) 詩 [送舅氏野夫之宣城] 「… 晚楼明宛水、春騎簇昭亭」 (四句)

□疊嶂楼 ○宋・林希「疊嶂楼有懷吳門朱伯厚」詩「虎丘換得敬亭山、句水松陵數舍間。…」

●『方輿勝覽』は『輿地紀勝』よりも小さな地理総志であるため、詩跡 (その候補を含む) の名称の数量と引用する詩句も格段に少ない。たとえば、敬亭山に関する詩数の場合、『輿地紀勝』は (重複を除いて) 17首、『方輿勝覽』は3首である。しかし『輿地紀勝』には見えない詩句が散在するだけでなく、謝公亭のごとき詩跡が初めて取り上げられており、無視できない参照価値を備えている。重要な詩跡に絞り込まれている点も評価すべきであろう。

[7] 大徳7年 (1303) に成る官修『大元一統志』 (第2次本) 1300巻は、明代に散佚し、今日伝わる趙万里校輯『元一統志』 (中華書局、1966年。しばらく汲古書院、1970年影印本による) には、寧国路の条を欠いており、著録状況は全く未詳である。

[8] 小型の元代地理総志として、大徳7年 (1303) の政区を基本とした元の劉応李原編・詹有諒改編『大元混一方輿勝覽』が今日伝わる。これは本来、元代の類書『新編事文類聚翰墨大全』 (大徳11年 [1307] 初刊、全208巻、宋末元初の劉応李編) の一部分 (地理門の一部) として編撰されたものであり、元の泰定元年 (1324) に刊行された、詹有諒改編『新編事文類聚翰墨大全』本 (全125巻) が元末以降流布した。現在伝存する単刻本も、その地理部分のみを抽出した三巻本である。^(注21)

本書は、その書名から連想されるように、南宋の旧領に関しては『方輿勝覽』の記述を摘録し、北方については歴代の地志・図経・旧籍などを用いて作成し、北方の関外や西南地区は、史料が比較的新しいとされている。

『大元混一方輿勝覽』 (郭声波整理本) 巻下、寧国路の条には、以下の如く詩跡に関する詩句が見える。

【景致】

□敬亭山 「謝元暉に詩有り」とのみあり、詩句は引かれていない。

□北楼 ○唐・李白 詩 [秋登宣城謝朓北楼] 「江山 [城] 如画裏、山晚望晴空。… 誰念北楼上、臨風懷謝公」 (『輿地紀勝』『方輿勝覽』と同じ全8句)

【題詠】

表記のしかたは、『方輿勝覽』の【題詠】と同じく、名句 (1句) をかかげ、作者、詩題、それを含めた詩句 (ただし『方輿勝覽』よりも極めて簡略) が、小字で注される。

□宛水 (=宛溪) ○宋・黄庭堅 詩 [送舅氏野夫之宣城] 「晚楼明宛水、春騎簇昭亭」 (2句。『方輿勝覽』にも見える)

本書の南方部分は、基本的に『方輿勝覽』の極端な簡略であるため、詩跡考察におけ

る価値に乏しい。ただこの極端な簡略にも生き残る詩跡の名称は、注目されてよい。

[9] 明代最初の地理総志は、景泰7年(1456)に成る官修『寰宇通志』(陳循等編、119巻)である。府・州ごとに、その建置沿革・郡名・山川・形勝・風俗・土産・宮殿・公廨・学校・書院・樓閣・館駅・堂亭・池館・台榭・井泉・関隘・寺觀・祠廟・府第・橋梁・陵墓・古跡・名宦・遷謫・人物・科甲・題詠の各項に分けて詳述する。

本書の編纂は、初め「事実を採る凡例は、一に祝穆の『方輿勝覽』に准ず」であったが、後に方針変更がなされたという(明・葉盛『水東日記』巻25)。しかし譚優学の指摘^{〔注22〕}するごとく、景物方面の部門(門類)が細かいこと、各巻の終りに題詠の部門を設けること、記叙文は全篇を収録することなど、『方輿勝覽』の編纂形態を踏襲する所が少なくない。本書は、元・明の稀覯本を影印した民国の鄭振鐸編『玄覽堂叢書続集』に収められて、始めて参照できるようになった地理総志である。

『寰宇通志』(明景泰間内府刊初印本を影印した、国立中央図書館出版、正中書局印行『玄覽堂叢書続集』、1985年)巻11、寧国府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

【山川】

□陵陽山 ○宋・郭祥正(功甫) 詩[宣州双溪閣夜宴、呈太守金光祿]「陵陽三峰压千里、百尺危樓勢相倚」(『輿地紀勝』にも見える)

□響山 ○唐・李白 詩[九日登山]「築土接響山、俯臨宛水湄」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

□双羊山 ○宋・梅堯臣 詩[早春田行]「風雪双羊路、梅花山下村」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

□敬亭山 ○唐・李白 詩[独坐敬亭山]「相看兩不厭、只有敬亭山」(『輿地紀勝』にも見える)

○唐・李白 詩[自梁園至敬亭山、見會公、談陵陽山水、…]「稠疊千万峰、相連入雲去」(『輿地紀勝』にも見える)

□宛溪 ○唐・李白 詩[題宛溪館]「吾憐宛溪水[好]、百尺照心明」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

□句溪 ○唐・李白 詩[別韋少府]「洗心句溪月」(1句。『輿地紀勝』にも見える)

★清溪の条に李白「清溪行」を引くが、これは『輿地紀勝』『方輿勝覽』と同じ誤り。

【樓閣】

□北樓 ○唐・李白 詩[秋登宣城謝朓北樓]「誰念北樓上、臨風懷謝公」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

★「(唐の)刺史独孤霖、名を疊嶂樓に改む」と注されており、疊嶂樓と謝朓北樓との関連に言及した記述として注目される。

□双溪閣 ○宋・蘇轍 詩[次韻侯宣城疊嶂樓双溪閣長篇]「仰攀疊嶂高、俯閱双溪美」

(『輿地紀勝』[本稿では、□暈嶂樓の条]にも見える)

【堂亭】

- 宛陵堂 ○宋・呂居人(本中) 詩[寄宣城故旧]「暈嶂樓前[頭]納涼処、宛陵堂下探梅時」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)
- 謝公亭 ○唐・李白 詩[謝公亭]「謝公[亭]離別処、風景亦[每]生愁」(『方輿勝覽』にも見える)

【寺觀】

- 景德寺 (=開元寺)「晋は永安と名づけ、唐は大雲と名づく。杜牧・許渾・趙嘏^か・杜荀鶴、皆な題詠有り。宋の景德中、今の名に改む。元(のとき)燬^やかる」とあるが、唐代の開元寺の名に言及しないのは不適切である。また詩句は全く引用しない。許渾以外の詩は『輿地紀勝』に見え、『方輿勝覽』は杜牧の詩のみ収める。

【墳墓】

- 蔣徵君墓 ○唐・李白 詩[宣城哭蔣徵君華]「敬亭山下墓[埋玉樹]、知是蔣徵君」(2句。本詩は『輿地紀勝』『方輿勝覽』の両書に見えない)

【題詠】

この部門(門類)の名一題詠は、『方輿勝覽』と同じである。収録する詩は摘録ではなく、詩全体を注するが、見出しは『方輿勝覽』のような詩中の名句(1句)ではなく、詩題を極端に簡略化したケースが多い。本条では、前掲の□印のごとき、山川・樓閣・堂亭・寺觀の名称を持たないので、詩跡ごとに分類して示す。

- 敬亭山 ○六朝齊・謝朓(朓)「敬亭山」詩「茲山亘百里、合沓与雲齊。…」(全20句。『方輿勝覽』にも見える)

★作者名を劉宋(六朝宋)の謝靈運に誤る。これは、すでに述べたごとく、『方輿勝覽』の誤りを受けたものである。

- 唐・李白 詩[登敬亭山、南望懷古、贈寶主簿]「敬亭一回首、目尽天南端。…」(『方輿勝覽』と同じ全20句。『輿地紀勝』は摘録)

- 北樓 ○唐・李白 詩[秋登宣城謝朓北樓]「江城如画裏、山晚望晴空。…」(全8句。『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える。すでに本書の【樓閣】の条に最後の2句を引く)

●『寰宇通志』には、謝公亭の項目を立てるなど、『方輿勝覽』の影響が大きい。しかし『方輿勝覽』には見えず、『輿地紀勝』に見える詩句をも引用する。また蔣徵君墓のごとく新たに掲げた項目もあるが、それ自体は詩作の継承性に乏しい。

[10] 明の天順5年(1461)に成る『大明一統志』(呂原等編、90卷)は、復位した英宗が、景泰帝の勅命によって編修された『寰宇通志』を抹殺すべく、「繁簡 宜しきを失い、去取 未だ当たらず」と厳しく批判して、『寰宇通志』の完成後、わずか2年あまりで、新たな総志の編纂を命じたものである。

しかし纂修者には重複が多く、『大元一統志』の体例を踏襲して完成したとされる内

容も、実質的には『寰宇通志』を改編したものと評してよい。確かに景物方面の部門(門類)を合併したり、題詠門を削って『方輿勝覽』以来の地理総志の形態を改変したが、陵墓・祠廟・寺観・橋梁・学校・公署などの部門は、基本的に『方輿勝覽』が確立した部門と同じである。(この点は『大清一統志』も同様) 本書の構成形態は、『寰宇通志』と大きな差異はなく、^{〔注23〕} 詞章の学に偏った、いかえれば詩文の創作・鑑賞のための地理知識に重点を置いた最後の地理総志、と評してよいだろう。

この『大明一統志』が頒行されて以降、『寰宇通志』の版木は破毀されてしまい、『大明一統志』のみが広く流布する結果になった。明の有名な旅行家徐霞客は、本書を旅の広域ガイドブックとして頻繁に活用していたという。^{〔注24〕}

『大明一統志』(和刻本)巻15、寧国府の条で、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

【山川】

□陵陽山 ○宋・郭祥正(功甫) 詩 [宣州双溪閣夜宴、呈太守金光禄] 「陵陽三峰压千里、百尺危楼勢相倚」(『輿地紀勝』にも見え、『寰宇通志』と同じ)

□響山 ○唐・李白 詩 [九日登山] 「築土接響山、俯臨宛水湄」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』と同じ)

□双羊山 ○宋・梅堯臣 詩 [早春田行] 「風雪双羊路、梅花山下村」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』と同じ)

□敬亭山 ○六朝齊・謝元暉(朧) [敬亭山] 詩 「茲山亘百里、合沓与雲齊。…」(14句。『方輿勝覽』にも見える)

★作者名を劉宋(六朝宋)の謝靈運に誤る。これは、すでに述べたごとく、『方輿勝覽』の誤りを受けたもの、『寰宇通志』と同じである。

□宛溪 ○唐・李白 詩 [題宛溪館] 「吾憐宛溪水 [好]、百尺照心明」(2句。『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』も同じ)

□句溪 ○唐・李白 詩 [別韋少府] 「洗心句溪月」(1句。『輿地紀勝』にも見え、『寰宇通志』と同じ)

【宮室】

□北楼 ○唐・李白 詩 [秋登宣城謝朓北楼] 「江城如画裏、山晚望晴空。…」(全8句。『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』も同じ)

★「(唐の)咸通中、刺史独孤霖、名を疊嶂楼に改め、自ら記を為る」と注され、『寰宇通志』とほぼ同じである。

□宛陵堂 ○宋・呂居人(本中) 詩 [寄宣城故旧] 「疊嶂楼前 [頭] 納涼処、宛陵堂下探梅時」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』も同じ)

□謝公亭 ○唐・李白 詩 [謝公亭] 「謝公 [亭] 離別処、風景一 [每] 生愁」(『方輿勝覽』にも見え、『寰宇通志』も同じ)

★【宮室】の部門に「敬亭」と題して、唐・李白 詩 [登敬亭山、南望懷古、贈寶主

簿]「敬亭一回首、目尽天南端。…」(『方輿勝覽』『寰宇通志』と同じ全20句。『輿地紀勝』は摘録)を引くが、敬亭という建物はなく、山の名である。これはおそらく、『寰宇通志』【題詠】の条に「敬亭」の見出しで引く李白詩を、ここに誤引したのであろう。敬亭の語に「亭」字がついているため、建物の名と考えたのであろうか。杜撰である。

【陵墓】

□蔣華墓 ○唐・李白 詩 [宣城哭蔣徵君華] 「敬亭山下墓 [埋玉樹]、知是蔣徵君」(詩句は『寰宇通志』に見えるものであり、『輿地紀勝』『方輿勝覽』の両書には見えない)

●『大明一統志』では、題詠門自体は削られたが、『寰宇通志』の題詠門に収められていた詩は、他の部門のなかに引用されており、詞章の学に偏向する特徴自体には大きな異同がない。従って詩跡考察の面では、『寰宇通志』『大明一統志』のうち、一方を見さえすれば、ほぼ支障がないといえよう。

[11] 清の道光22年(1842)には、官修『嘉慶重修一統志』(嘉慶25年[1820]を内容の下限とする『大清一統志』の第3次、最終増訂版。560巻、中華書局、中国古代地理総志叢刊、1986年。1934年、四部叢刊統編に影印した写本の重印・改装本である)が成る。^(注25)

本書は、歴代の地理総志の最高レベルに位置し、「行政区画をコードにした、人文・歴史地理的百科全書として、巨大な中国文明の財宝がこの中に蔵されている」(梅原郁「II 歴史地理学」と評された書物である。ただ詩跡や詩句の引用という観点からいえば、詞章の学としての地理総志は『大明一統志』で終止符が打たれたため、見るべき処は少ない。しかし詩跡となった地名の考証や建物の場所に関する詳細な記述は、充分参照すべき価値を持つ。

『嘉慶重修一統志』(『大清一統志』)巻115～7、寧国府の条に見られる、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

【山川】

□双羊山 ○宋・梅堯臣 詩 [早春田行] 「風雪双羊路」(1句。『輿地紀勝』『方輿勝覽』『寰宇通志』『大明一統志』に見える)

□敬亭山 『元和郡県図志』の「敬亭山は、州の北十二里、即ち謝朓 詩を賦するの所」を引くが、詩そのものは引用されない。しかし「一に昭亭山と名づく」と明言した点は、本書が地理的考察に有用であることを明確に表している。宛溪・句溪なども、水路の考証は詳細であるが、全く詩を引いていない。

【古跡】

□北楼 ○唐・李白 詩 [秋登宣城謝朓北楼] 「誰念北楼上、臨風懷謝公」(『大明一統志』をそのまま引く)

□双溪閣 ○宋・蘇轍 詩 [次韻侯宣城疊嶂楼双溪閣長篇] 「仰攀疊嶂高、俯閱双溪美」(『輿地紀勝』『寰宇通志』に見える)

●『嘉慶重修一統志』(『大清一統志』)は、詩跡研究の観点からいえば、『輿地紀勝』『方

輿勝覽』『寰宇通志』『大明一統志』よりも利用価値に乏しいが、詩跡の存在する場所を確認する場合、必読すべき文献である。

第2章 安徽省池州市

[1] 唐の李吉甫撰『元和郡県図志』巻28、江南道4、池州秋浦県の条には、池州市（旧・貴池市）内における秋浦水などを収録するが、詩との関連に言及する記事は見えない。

北宋初期に成る楽史撰『太平寰宇記』巻105、江南西道、池州貴池県の条にも、池州市を代表する詩跡の一つ、齊山などが見えるが、やはり詩文との関連に言及しない。続く北宋中期の王存・曾肇・李德芻撰『元豊九域志』巻6、江南東路、池州貴池県の条にも、『新定九域志』巻6、池州、古蹟の条にも、芸文的言及はない。北宋末の歐陽忞撰『輿地広記』巻2、江南東路、池州貴池県の条にも、同じく詩跡関連事項は見えない。

[2] 南宋の王象之撰『輿地紀勝』巻22、池州の条に見える、池州市の詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。2つの詩跡に係る詩の場合、一方の条に置いた。

● 所収部門・詩跡・詩人・詩句（引用句数）の順に記述

※ [] 内は、引用者の増補・訂正。

【景物上】

□齊山 ○唐・杜牧 詩 [九日齊山登高] 「[与客] 携壺上翠微」（即ち杜牧の九日登る所、杜牧の所謂「壺を携へて翠微に上る」、是れなり、と注される）

○宋・郭祥正（功甫）「追和李白秋浦歌 [十七首]」（其の8）「秋浦試北望、參天齊山奇。縁何謫仙客、名作碧蓮枝」（全4句。謫仙客は李白）

□清溪 ○唐・劉長卿 「[北帰] 次秋浦界清溪館」詩（詩句を引かない）

○宋・東坡（蘇軾）「清溪」詞 [清溪行]（詩句を引かない）

○宋・程師孟 詩 [弄水亭] 「昨夜清溪明月裏」（1句。後の【総池州詩】にも見える）

○唐・杜牧 「[池州] 清溪」詩 「弄溪終日到黄昏、照数秋来白髮根。…」（全4句）

【景物下】

□九峰楼 ○唐・杜牧之（牧）「登池州九峰楼 [寄張祜]」（詩句を引かない）

□弄水亭 ○唐・杜牧之（牧）「[春末題池州] 弄水亭」（詳しくは【詩】門に見ゆ、と注される）

○宋・郭祥正「和倪 [衍字] 敦復留題池州弄水亭」 「我寄江南隱、数為弄水遊。読君弄水篇、感慨 [慨] 攀巢由。…」（8句）

□翠微亭 ○宋・郭祥正（功甫）「追和李白秋浦歌 [十七首]」（其の16）「半空翠微亭、翫月動経宿。更待雨中来、林林看銀竹」（全4句）

□貴池亭 ○唐・杜牧之（牧） 詩 [題池州貴池亭] 「勢比凌歊宋武台、分明百里遠帆開。蜀江雪浪西江滿、強半春寒去却来」（全4句）

○宋・郭祥正「[追和梅侍読] 題貴池亭 [元韻]」 「寺挿孤峰压貴池、幽軒占勝敞双扉。

…」（4句）

□水車嶺 ○宋・郭祥正「追和李白秋浦歌 [十七首]」（其の9）「万丈水車嶺、還如九疊屏。北風来不断、六月亦氷生」（全4句）

□白筍陂 ○唐・李白「遊秋浦白筍陂」（二首）「何処夜行好、月明白筍陂。山光揺積雪、猿影挂寒枝」「白筍夜長嘯、爽然溪谷寒。魚龍動陂水、處處生波瀾」（1首8句のうち、前半4句をそれぞれ引く）

□金碧洞 ○唐・杜牧之（牧）詩「廢寺碧溪上、今為太平寺」（『全唐詩』未収？）

○唐・杜牧之（牧）詩「遊池州林泉寺金碧洞」「袖扠霜林下石稜、潺湲声断滿溪水。携茶臘月遊金碧、合有文章病茂陵」（全4句）

□玉鏡潭 ○唐・李白「秋浦宴 [与周剛清溪玉鏡潭宴別]」「清溪玉鏡潭 [席月開清罇]、溪当大樓南。溪水正南奔、廻作玉鏡潭」

●『輿地紀勝』では、当地に関係する詩を一般に【詩】の部門に一括して集録している。なかでも集中して詠まれた場所や建物、いわゆる著名な詩跡を持つ場合には、それを独立した項目として設けるときのがある。この池州の条の場合は、【総池州詩】【秋浦詩】【蕭相楼詩】【齊山詩】【九華山詩】に分かれている。多数の詩を集録した、詩跡ごとの区分けは、唐代以降の地理総志のなかでは唯一のことであり、詩跡研究の観点からは特に注目に値する。なお【総池州詩】の条では、秋浦・蕭相楼・齊山・九華山（これは、池州市以外の地）以外の、池州内に属する詩が、基本的に作者の生存時代に従って集録され、前掲の□印のごとき、山川・楼亭の名称を持たない。それでここでは、詩跡ごとに分類して示す。そのなかには、前掲のものと重なるものを含む。

【総池州詩】

□弄水亭（前掲2首） ○唐・杜牧 詩 [[春末題池州弄水亭]「使君四十四、兩佩左銅魚」「亭宇清無比、溪山画不如」（前掲は詩題のみ。ここでは2句ずつ分けて記す）

○唐・杜牧「題 [池州] 弄水亭」「弄水亭前溪、颯颯翠綃舞。綺席草芊芊、紫嵐峰伍伍」（4句）

○宋・陳舜俞 詩 [弄水亭]「未識貴池好、嘗聞弄水名。白鳥鑑中立、画船天上行」

□清溪（前掲4首） ○宋・蘇子由（蘇軾の誤り。子由は弟の蘇轍の字）詩 [清溪行]「大江南兮九華西、泛秋浦兮青 [清] 溪。…」（5句）

□齊山（前掲4首） ○宋・周邠 詩「小杜池辺暫艤舟、老齊山下共尋幽」（小杜は杜牧）

【秋浦詩】

○唐・李白「秋浦歌」[十七首]（この秋浦は県名）「秋浦長似秋、蕭条使人愁。…」（4句、其の1）

「秋浦猿夜愁、黄山堪白頭。清溪非隴水、翻作断腸流。…」（8句、其の2）

「秋浦錦馳鳥、人間天上稀。山鷄羞緑水、不敢照毛衣」（全4句、其の3）

「秋浦多白猿、超騰若飛雪。牽引条上兒、飲弄水中月」（全4句、其の4。弄水亭の

命名になった句)

「愁作秋浦曲、強看秋浦花。山川如剡峴、風日似長沙」(全4句、其の5)

「秋浦千重嶺、水車嶺最奇」(其の7)

「君莫向秋浦、猿声碎客心」(其の10)

○唐・李白「清溪 [半夜] 聞笛」 「羌笛梅花引、吳溪隴水清。寒山秋浦月、腸斷玉関情」

○唐・李白「[答杜秀才] 五松山 [見贈]」 「千峰夾水向秋浦、五松名山当夏寒」

○唐・杜牧 詩 [池州送孟遲先輩] 「秋浦倚吳江、去檝飛青鶻。溪山好图画 [画図]、
洞壑深閨闔」(4句)

○宋・蕭貫「清溪」 「山開明月峽、水写武陵溪。…」(4句。清溪は池州市 [唐代の秋浦県]
を流れる清流)

★五代・南唐の徐鉉「天慶觀記」(『輿地紀勝』卷22、池州、【風俗形勝】所引。徐鉉『騎省集』
卷12には、「池州重建紫極宮碑銘」と題する)に、「之を浸すに秋浦を以てし、之を鎮むるに
齊山を以てす」とあるように、秋浦(清溪)と齊山は池州の風土を代表する江山であり、
重要な詩跡となる。

【蕭相樓詩】(唐の大暦年間、蕭復が建て、杜牧が再建した樓閣)

○宋(?)・楊振 詩 「只思志業輸明主、豈為登臨愛好山」

○宋・蔣之奇 詩 「紫嵐千嶂寒、清溪百里碧。公名山水俱、芬芳永無極」

○宋・徐疇 詩 「滿城風物來春色、万里江山入酒盃」

○宋・蘇子由(轍)「呈滕侍郎 [池州蕭丞相樓]」(二首、其の1) 「樓成始覺江山秀 [勝]、
人去方知德業尊」

○宋・王鞏 詩 [蕭相樓] 「… 百尺樓高瞻故國、九華山色倚晴眸。定知直道傳千古、
杜牧文章在上頭」(全8句)

○宋・王鞏「過池陽 [重登蕭相樓]」 「不見當年兩翰林、江天為我結層陰。九華門外柳
三丈、蕭相樓前松十尋」(原注に「兩翰林は滕公甫・錢公鋸を謂ふなり」とある)

【齊山詩】

○唐・杜牧「九日齊山登高」 「江涵秋影雁初飛、与客携壺上翠微。塵世難逢開口笑、
菊花須挿滿頭歸」(4句)

○宋・楊緘 詩 「池陽佳致說齊山、公暇邀朋喜暫攀。浮世謾同流水急、野僧長伴白
雲閑」

○宋・蕭貫 詩 「秋風秋浦斷飛埃、路入齊山有梵台。黃菊綻時君始至、紫微去後我
重來」(紫微は紫微舍人 [中書舍人] となった杜牧)

○宋・董儼 詩 「白雲深處訪禪扉、一簇樓台鎖翠微」

○宋・董儼 詩 「千重遠木籠秋浦、万里澄江浸落暉。醉恨春深輸杜牧、滿頭無菊戴
將歸」(4句)

○宋・吳中復「齊山図」 「當時齊映為州日、從此山因姓得名。却自牧之賦詩後、每逢
秋至菊含情。行尋古洞諸峰峭、坐看寒溪數曲清。…」(8句)

- 宋・王鐸「齊山図」 「直自牧之懷古後、適當慧遠送図来」
- 宋・張伯玉「齊山図」 「東南真賞有齊山、路隔江湖到者難。絶筆掃成千仞翠、数峰高挂一堂寒。…」(8句)
- 宋・金君卿 詩 「秋浦南辺絶点埃、碧圀煙嶂一屏開。当時小杜行吟処、重見高陽騎従来」
- 宋・鄭雍 詩 「訪古直尋齊守事、誦詩還愛紫微才」(紫微は杜牧)
- 宋・夏噩^{がく} 詩 「謝守風流為勝事、杜郎吟詠属多才」(杜郎は杜牧)
- 宋・聞人安道 詩 「秋浦澄明郡境清、天然巖岫作南屏」
- 宋・梅堯臣(王安石の誤り) 詩 [和王微之秋浦望齊山、感李太白・杜牧之] 「齊山置酒菊花開、秋浦聞猿江上哀。此地流伝空筆墨、昔人埋没已蒿萊」(4句)
- 宋・孫坦 詩 「世識池陽慣魚味、不知山勝環其郭」
- 宋・劉定 詩 「岸岸俱垂釣、簷簷各見山。州侯行樂処、十里画図間」
- 宋・沈遼 詩 [齊山偶題](二首、其の1) 「杜子風情春水波、至今詩句使人夸。不知朽骨猶存否、山上年年黄菊花」
- 宋・李夔^き 詩 「紫微風韻謫仙身、曾此徘徊今幾春」(紫微は杜牧)
- 宋・狄咸 詩 「秋浦分光来郡閣、清溪送影落征船。翠微亭冠煙霞外、又遇携壺太守賢」
- 宋(?)・吳荀 詩 「齊山最是清虚地、不信塵埃会染人」
- 宋・陳統 詩 「齊山压清溪、蒼崖浸老碧。…」(4句)
- 宋・陳統 詩 「携壺上翠微、雅致何今昔。誰知一笑間、俯仰成陳跡」(最初の句は杜牧「九日齊山登高」詩中の句)
- 宋・錢鏐^{きょう} 詩 「来逢采石連江雪、坐見齊山扞檻梅」
- 宋? (詩人の名脱) 詩 「風流杜太守、黄花還引酌。…」(8句)
- 宋・温公(司馬光) 「[齊山詩] 呈王学士(哲、字微之)」 「江南 [上] 有奇山、群山 [峰] 轟如剪。昔聞齊刺史、置酒升絶巘。其人有惠政、嘉名自茲遠」(6句)

●【風俗形勝】の条に引く胡兆『秋浦志』序に、「九華・五松、齊山・清溪、秋浦・玉鑑 [鏡] 之潭、水車之嶺、成紀・白筍之陂、[李] 太白・[白] 樂天・[杜] 牧之、讀書論文、垂釣問宿、弄水登高、遐躅隠然、在人耳目云云」(筍の音はカ。遐躅は唐代詩人の足跡)とある。池州府内の詩跡が挙げられているが、これは山川に限定して述べたものに過ぎない。蕭相樓が池州の代表的な詩跡になっていたことを明示したのは、『輿地紀勝』の重要な貢献であり、唐代の池州刺史、杜牧に始まる弄水亭も宋代詠み継がれている。

池州を代表する詩跡が、杜牧以降歌い継がれた齊山であることは、集録された詩の圧倒的な数量によって明らかである。松尾幸忠「池州における二つの詩跡—齊山と杏花村—」(『中国詩文論叢』第25集、2006年所収)には、杜牧の「九日齊山登高」詩を念頭に置いた、別集類所収の宋詩、陳襄・韋驥・梅堯臣・王安石(前掲の詩句)・郭祥正以下の作、20首を収めている。そのなかに、前掲の蕭貫・董儼・吳中復・王鐸・金君卿・鄭雍・夏噩・

沈遼・李夔・陳統の詩人名が見えないことは、詩跡研究における『輿地紀勝』の価値を端的に物語るものであろう。

[3] 南宋の祝穆原撰、子の祝洙増訂『方輿勝覽』巻16、江東路池州の条に見える、池州市内の詩跡及びその候補に関係するものは、以下の如くである。2つの詩跡に関する場合、一方の詩跡の条に置いた。

● 所収部門・詩跡・詩人・詩句(引用句数)の順に記述

[] 内は、引用者の増補・訂正。また◎は『輿地紀勝』所収の詩。

【山川】

- 齊山 ◎唐・杜牧之(牧)「九日齊山登高」 「江涵秋影雁初飛、与客携壺上翠微。塵世難逢開口笑、菊花応[須]挿滿頭歸。直須[但將]酩酊酬佳節、不用登臨怨落暉。古往今來只如此、牛山何必更[獨]沾衣」(全8句。『輿地紀勝』には前半四句を引く)
- 水車嶺 ◎宋・郭功父(祥正)「追和李白秋浦歌[十七首]」(其の9)「万丈水車嶺、還如九疊屏。北風來不斷、六月自氷生」(全4句)
- 玉鏡潭 ◎唐・李白「秋浦宴[与周剛清溪玉鏡潭宴別]」 「清溪玉鏡潭[席月開清罇]、溪当大樓南」
- 秋浦 ◎唐・李白 詩「清溪半夜聞笛」 「羌笛梅花引、吳溪隴水清。寒山秋浦月、腸斷玉関情」
- ◎唐・李白 詩「秋浦歌」[十七首] 「秋浦多白猿、超騰若飛雪。牽引条上兒、飲弄水中月」(全4句、其の4)
- 白筍陂 ◎唐・李白 詩「遊秋浦白筍陂」(二首、其の2) 「白筍夜長嘯、爽然溪谷寒。魚龍動陂水、处处生波瀾」

【亭榭】

- 弄水亭 ◎唐・杜牧 詩「春末題池州弄水亭」 「使君四十四、兩佩左銅魚。…」(全16句。『輿地紀勝』には4句を収める)
- 貴池亭 ◎唐・杜牧 詩「題池州貴池亭」 「勢比凌歊宋武台、分明百里遠帆開。蜀江雪浪西江滿、強半春寒去却來」(全4句)
- 如剡亭 ◎唐・李白 詩「秋浦歌」[十七首] 「愁作秋浦曲、強看秋浦花。山川如剡県、風日似長沙」(全4句、其の5。『輿地紀勝』の【秋浦詩】にも見える)
- 翠微亭 ○宋・楊廷秀 詩序「詩題の誤り」 「從提學黃元章、登齊山寺後上清巖翠微亭、望郡城、左清溪、右大江、蓋絶境云」 「西山落日浴長江、併貫清溪作一光、… 客子要窮秋浦眼、翠微亭上上清旁」(全8句。『輿地紀勝』には見えない)

【樓台】

- 蕭相樓 ◎宋・王鞏 詩「蕭相樓」 「… 百尺樓高瞻故国、九華山色倚晴眸。定知直道伝千古、杜牧文章在上頭」(全8句)(注…杜牧「池州重建蕭相樓記」を引く)
- 九峰樓 ○唐・杜牧「登[池州]九峰樓寄張祐」詩 「百感由来不自由、角声孤起夕陽樓。

…」（全8句。『輿地紀勝』には詩題のみを引くが、詩句は引かない）

●『方輿勝覽』は『輿地紀勝』よりも小さな地理総志であるため、詩跡（その候補を含む）の数自体はほぼ同じであるが、引用する詩句の数量は格段に少なく、詩跡ごとに一首を引くのが一般的である。これは詩跡の持つ重要度を推し量ることを困難にするが、他方では各地に散在する詩跡の分布状況を容易に察知できる利便性がある。また齊山の翠微亭などでは、『輿地紀勝』と『方輿勝覽』は、それぞれ異なる詩人の作を引用する。やはり無視できない参照価値を備えている。

[4] 趙万里校輯『元一統志』には、池州路の条を欠いており、詩跡の著録状況は全く不明である。

元の劉応李原編・詹有諒改編『大元混一方輿勝覽』巻下、池州路の条の、詩跡に関するものは、以下の如くである。

【景致】

- 如剡亭 ○唐・李白 詩 [秋浦歌] [十七首] 「山川如剡峴、風日似長沙」（其の5。『方輿勝覽』にも見える）
- 弄水亭 ○唐・杜牧 詩 [春末題池州弄水亭] 「使君四十四、兩佩左銅魚。…」(12句。郭声波整理本は四句を増補し、全篇を収録。『方輿勝覽』にも見える)
- 九峰楼 ○唐・杜牧「登[池州]九峰楼寄張祜」詩 「百感由来不自由、角声孤起夕陽楼」（『方輿勝覽』にも見える）

●本条も、宣城市区と同様に南方地区に属するため、基本的に『方輿勝覽』の極端な簡略であり、詩跡の考察における価値は乏しい。

[5] 『寰宇通志』巻12、池州府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

【山川】

- 齊山 ○宋・吳中復 詩 [齊山図] 「当時齊映為州日、從此山因姓得名。却自牧之賦詩後、每逢秋至菊含情」（『輿地紀勝』の【齊山詩】の条に見えるが、『方輿勝覽』には収めない）
- 水車嶺 ○唐・李白「秋浦歌」（詩句を引かない。これは、十七首の其の7、「秋浦千重嶺、水車嶺最奇」を指す。『輿地紀勝』の【秋浦詩】の条に見えるが、『方輿勝覽』には収めない）

【楼閣】

- 蕭相楼 ○宋・蘇轍 詩 [呈滕侍郎池州蕭丞相楼]（二首、其の1）「楼成始覺江山秀 [勝]、人去方知德業尊」（『輿地紀勝』の【蕭相楼詩】の条に見えるが、『方輿勝覽』には収めない）
- 宋・王鞏 詩 [蕭相楼] 「百尺楼高瞻故国、九華山色倚晴眸」（『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える）
- 九華楼 ○宋・陳舜俞 詩 [題秋浦亭] 「只因山色好、来上九華楼」（『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見えない）

【堂亭】

- 弄水亭 ○宋・陳舜俞 詩 [弄水亭] 「未識貴池好、嘗聞弄水名。白鳥鑑中立、画船天上行」(『輿地紀勝』には見えるが、『方輿勝覽』未収。注…「堂亭俱に久しく廃す」)
- 翠微亭 ○宋・郭祥正(功甫) 詩 [追和李白秋浦歌 [十七首] (其の16) 「半空翠微亭、翫月動絳宿。更待雨中来、林林看銀竹」(全4句。『輿地紀勝』には見えるが、『方輿勝覽』未収。注…「遺址尚お存す」)

【題詠】

部門の名一題詠は、『方輿勝覽』と同じである。収録する詩は摘録ではなく、詩全篇を注するが、見出し語は『方輿勝覽』のような詩中の名句(1句)ではなく、詩題(その一部)が多い。従って前掲の□印のごとき、山川・楼閣・堂亭の名称を持たない。それでここでは、詩跡ごとに分類して示す。

- 秋浦 「秋浦歌」と題して、「秋浦長似秋、蕭条使人愁」で始まる唐・李白「秋浦歌十七首」の全篇を引く。これは『輿地紀勝』の【秋浦詩】の条に引く7首を上回る。全収録は明らかにバランスを欠くが、詩全篇を注する方針が徹底されたものか。

○唐・李白「清溪半夜聞笛」 「羌笛梅花引、吳溪隴水清。寒山秋浦月、腸斷玉関情」(『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)

- 玉鏡潭 ○唐・李白 詩 [与周剛清溪玉鏡潭宴別] (見出し語になる) 「…席月開清罇、溪当大樓南。溪水正南奔、廻作玉鏡潭。…」(全22句。『輿地紀勝』は4句、『方輿勝覽』は2句収録)

- 江祖石 ○唐・李白「独酌清溪江石上、寄權昭夷」 「我携一尊酒、独上江祖石。自從天地開、更長幾千尺。…」(全10句、前掲の総志には見えない)

- 清溪 ○唐・李白「宿清溪主人」 「夜到清溪宿、主人碧巖裏。簷楹掛星斗、枕席響風水、…」(全六句。前掲の総志には見えない)

- 白筍陂 ○唐・李白 「遊秋浦白筍陂」(2首) 「何処夜行好、月明白筍陂。山光搖積雪、猿影挂寒枝」 「白筍夜長嘯、爽然溪谷寒。魚龍動陂水、处处生波瀾」(『輿地紀勝』は2首各4句、『方輿勝覽』は1首4句を収録)

- 齊山 ○唐・杜牧 詩 [九日齊山登高] 「江涵秋影雁初飛、与客携壺上翠微。塵世難逢開口笑、菊花須插滿頭歸。但將酩酊酬佳節、不用登臨怨落暉。古往今來只如此、牛山何必淚 [独] 沾衣」(『方輿勝覽』と同じ全8句。『輿地紀勝』には前半4句を引く。見出し語は「九日登齊山」)

- 翠微亭 ○宋・岳飛 詩 [題池州翠微亭] 「經年塵土滿征衣、特特尋芳上翠微。好水好山看未足、馬蹄催趁月明歸」(全4句。前掲の総志には見えない)

●『寰宇通志』には、『輿地紀勝』には見えるが、『方輿勝覽』未収の詩句もあり、翠微亭の場合は、『輿地紀勝』や『方輿勝覽』には見えない宋・岳飛の著名な詩句を引く。さらに『方輿勝覽』には見えず、『輿地紀勝』に見える詩をも引用する。また江祖石のごとく、新たに掲げた項目もあるが、詩作の継承性には乏しい。

[6] 『大明一統志』卷16、池州府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

【山川】

- 齊山 ○唐・杜牧「九日登山」[九日齊山登高]「江涵秋影雁初飛、与客携壺上翠微。…」(前半4句。『寰宇通志』は【題詠】に収めて全篇を引く。『輿地紀勝』『方輿勝覽』にも見える)
○宋・呉中復 詩 [齊山図]「当時齊映為州日、從此山因姓得名。却自牧之賦詩後、每逢秋至菊含情」(『寰宇通志』『輿地紀勝』にも見える)
- 水車嶺 ○宋・郭功父(功父は功甫。郭祥正のこと)「和李白詩」[追和李白秋浦歌[十七首]](其の9)「万丈水車嶺、還如九疊屏。北風来不断、六月自氷生」(全4句。『方輿勝覽』『輿地紀勝』にも見えるが、『寰宇通志』に見えない)
- 清溪 ○唐・李白 詩 [宿清溪主人]「夜到清溪宿、主人碧巖裏。簷楹掛星斗、枕席響風水」(和刻本は清溪を青溪に作る。『寰宇通志』に見える)
- 秋浦 ○唐・李白 詩 [秋浦歌十七首]「愁作秋浦曲、強看秋浦花。山川如剡県、風日似長沙」(全4句、其の5。『寰宇通志』『輿地紀勝』にも見える)
○唐・杜牧 詩 [池州送孟遲先輩]「秋浦倚吳江、去檝飛青鶻。溪山好図画 [画図]、洞壑深閨闔」(『輿地紀勝』には見えるが、『寰宇通志』未収)

【宮室】

- 蕭相樓 ○宋・蘇轍 詩 [呈滕侍郎池州蕭丞相樓] (二首、其の1)「樓成始覺江山秀 [勝]、人去方知德業尊」(『寰宇通志』『輿地紀勝』にも見える)
- 九華樓 ○宋・陳舜俞 詩 [題秋浦亭]「只因山色好、来上九華樓」(『寰宇通志』のみに見える)
- 弄水亭 ○宋・陳舜俞 詩 [弄水亭]「未識貴池好、嘗聞弄水名。白鳥鑑中立、画船天上行」(『寰宇通志』『輿地紀勝』にも見える)
- 翠微亭 ○宋・郭祥正(功甫) 詩 [追和李白秋浦歌 [十七首]] (其の16)「半空翠微亭、翫月動經宿。更待雨中来、林林看銀竹」(全4句。『寰宇通志』『輿地紀勝』にも見える)
○宋・岳飛 詩 [題池州翠微亭]「經年塵土滿征衣、特特尋芳上翠微。好水好山觀 [看] 未足、馬蹄催趁月明歸」(全4句。『寰宇通志』のみに見える)

●詩文の創作・鑑賞のための地理知識に重点が置かれた最後の地理総志『大明一統志』では、題詠門自体は削られたが、『寰宇通志』の題詠門に収められていた詩は、他の部門のなかに引かれており、大きな異同はない。『寰宇通志』に見える江祖石と白笥陂は見えないが、この2つは作詩の継承性に乏しい場所である。また翠微亭における岳飛の詩は、明らかに『寰宇通志』を踏襲したものであろう。詩跡考察の面では、『寰宇通志』と『大明一統志』は、一方を見さえすれば大きな支障はなさそうである。

[7] 清の『嘉慶重修一統志』卷115～119、池州府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

【山川】

□齊山 「唐の杜牧に『九日齊山登高』詩有り」とのみあり、詩句を引かない。また『方輿勝覽』のなかに見える《齊山の名は齊映にもとづく》という説は、宋の呉中復の詩、周必大の記にもとづくものであり、その齊映は池州刺史になっていないため、池州刺史となった齊照の誤りであろうとする。本書が詩跡の場所を考察する際に有用なことを表す例であるが、詩の引用は少ない。

【古跡】

□九華楼 「唐の杜牧に『九華楼、寄張祐 [祐]』詩有り」とあるが、詩句を引かない。またこの杜牧詩は、じつは「登池州九峰楼寄張祐」詩（『方輿勝覽』『寰宇通志』にも見える）と題され、九華楼ではない。九華も九峰も同じく九華山を指し、『寰宇通志』巻12には、両楼は同じとする或説も見えるが…（『方輿勝覽』は両楼を区別する）

【寺観】

□太平羅漢寺 「唐の杜牧に『池州廢林泉寺』詩有り」とあるが、詩句を引かない。太平羅漢寺は唐の林泉寺の前身。『輿地紀勝』に引く杜牧の逸句？に、「廢寺碧溪上、今為太平寺」とある（前述）

□齊山寺 「宋の楊万里に『宿 [池州] 齊山寺、[即杜牧之九日登高處]』詩有り」とあるが、詩句を引かない。

●詞章の学への偏向が失われた『嘉慶重修一統志』は、詩跡研究の観点からいえば、『輿地紀勝』『方輿勝覽』『寰宇通志』『大明一統志』よりも利用価値に乏しい。太平羅漢寺・齊山寺など、従来の地理総志には珍しい項目であるが、作詩の継承に乏しい場所である。ただ齊山の名称に関する論説など、広く詩跡の場所の研究・確認には、やはり重要な文献である。

第3章 山東省済南市区

[1] 唐の李吉甫撰『元和郡県図志』巻10、河南道6、齊州歴城県の条には、済南市区内にある華不注山などが見えるが、詩と関連する記事はない。

北宋初期の楽史撰『太平寰宇記』巻19、河南道19、齊州歴城県の条にも、詩文との関連に言及しない。続く北宋中期の王存等撰『元豊九域志』巻1、京東路、齊州の条は、ただ行政区画のみを記し、『新定九域志』巻1には、齊州の条を欠いている。北宋末の歐陽忞撰『輿地広記』巻6、京東東路、齊州歴城県の条にも、詩跡関連事項は見えない。

[2] 南宋期を代表する王象之撰『輿地紀勝』と祝穆原撰、子の祝洙増訂『方輿勝覽』の両地理総志は、基本的に南宋の領域内を対象としており、淮河以北の北中国（当時、金の支配下）については記さない。しかし『輿地紀勝』の撰者王象之は、200巻を完成した後、南宋の領域外の「西北諸郡も亦た次第に編集す」（自序）る計画を抱いていた。それを裏づけるように、『大清一統志』『永楽大典』『記纂淵海』（南宋・潘自牧纂集）などの

書物から、南宋の領域外の地に関する『輿地紀勝』の逸文が大量に発見されている。近年編纂された『輿地紀勝輯補』(注26)『輿地紀勝』[四川大学出版社、宋元地理志叢刊、2005年]所収) 卷20、済南府、【景物】の条には、趵突泉などの名称も見えるが、詩句の引用はない。詩の引用を欠く点は、『輿地紀勝輯補』に共通する特色であり、北中国の詩跡に対して果たす『輿地紀勝輯補』の価値は、極めて乏しい。

[3] 趙万里校輯『元一統志』卷1、済南路の条に見える、詩跡関連事項は以下のごとくである。

【山川】

- 西湖(大明湖の異称)「南豊の曾鞏 郡を守りし日、詩有り」とあるが、詩句を引かない。
○宋・蘇轍 詩[和李誠之待制燕別西湖]「… 談笑万事畢、尊疊与客俱。高情生遠岫、清興発平湖。坐使羈遊士、皆忘歲月徂。…」(全16句)。さらにその長い序文も引用する。

【古跡】

- 百花台 宋・曾鞏 詩[百花台]「莫問台前花遠近、試看何似武陵遊」(ここも、「南豊の曾鞏 郡を守りし日、詩有りて曰く」として引く)
●西湖(大明湖)は、済南市区を代表する詩跡であり、それが当地(斉州)の長官になった北宋の曾鞏に始まるとする指摘は重要である。『元一統志』が残欠していなければ、巻数の多さ(1300巻)から考えて、詩跡に関する豊かな情報が得られたであろう。僅かな断片しか伝わらないのが惜まれる。
●小型の地理総志、元の劉応李原編・詹有諒改編『大元混一方輿勝覽』卷上、済南路の条は簡略であり、詩跡に関連する事項は全く見えない。これは重要な依拠資料である『方輿勝覽』の記載が南宋の旧領のみであったため、詩に関する資料を容易に得られない状況を反映する。南宋の旧領下にあった宣城・池州との違いは明白である。

[4] 『寰宇通志』卷70、済南府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

【山川】

- 華不注山 ○唐・李白 詩[古風五十九首](其の18)「昔我遊齊都、登華不注峰。茲山何峻秀、緑翠如芙蓉」

【台榭】

- 百花台 ○宋・曾鞏 詩[百花台]「莫問台前花遠近、試看何似武陵遊」(『元一統志』に見える)
□黄台 ○金・任詢 詩[済南黄台](三首、其の3)「緑樹[柳]橋辺簇錦鞍、紅紗影裏照煙鬢。帰来書几高烧燭、渾似江郷一夢間」

【井泉】

- 金線泉 ○宋・曾鞏 詩[金糸泉]「雲依美藻争成縷、月照寒[靈]漪巧上絃」(金

線泉と金系泉は同じ泉であろう。或いは一方が誤りか)

□舜泉 「宋・欧陽脩 詩有り、題詠に見ゆ」とある。(後引)

【題詠】

収録する詩は摘録ではなく、詩全篇を注するが、掲げる語は詩題(その一部)が多い。前掲の□印のごとき、山川・台榭・井泉の名称を持たないため、詩跡ごとに分類して示す。

□歴下亭 ○唐・杜甫 詩 [陪李北海宴歴下亭] 「東藩駐皂蓋、北渚凌清河。海右此亭古、濟南名士多。雲山已発興、玉佩仍当歌。脩竹不受暑、交流空湧波。…」(全12句)

□鵲山湖 ○唐・李白 詩 [陪従祖濟南太守汎鵲山湖] (三首) 「初謂鵲山近、寧知湖水遥。…」(全4句。其の1) 「湖闊數千里、湖光揺碧山。…」(全4句。其の2) 「水入北湖去、舟従南浦回。…」(全4句。其の3)

○唐・杜甫 「湖上懷李員外」詩 「野亭逼湖水、歇馬高林間。鼉吼風波 [奔] 波、魚跳日映山。…」(全8句)

□舜泉 ○宋・欧陽脩 詩 [留題齊州舜泉] 「… 虞舜已死三千年、耕田浚井雖鄙事、至今遺址 [跡] 尚依然、歴山之下有寒泉。…」(全18句)

□華不注山 ○宋・曾鞏 詩 [華不注山] 「虎牙千仞立儂儂、峻拔遥臨濟水南。翠嶺嫩嵐晴可掇、金輿陳跡久誰探。…」(全8句)

□趵突泉 ○元・趙孟頫 詩 [趵突泉] 「灤水発源天下無、平地擁出白玉壺。… 雲霧潤蒸華不注、波濤声震大明湖。…」(全8句)

□舜祠 ○元 [金]・元好問 詩 [舜泉、効遠祖道州府君体] 「重華初側陋、嘗 [嘗] 耕歴山田。至今歴城下 [下城]、有此東窓 [西] 泉。喪乱二十載、祠宇為灰煙。鹵 [兩] 泉廢不治、漸着瓦礫填。…」(28句、2句脱。舜泉は舜祠のほりにある)

●北中国にあっては、大型の地理総志『元一統志』がほとんど失われた現在、明代の『寰宇通志』が、詩跡及びその候補に関するものを調べるうえで、最初のまとまった地理総志である。この意味で南宋期の詳しい『輿地紀勝』や『方輿勝覧』を活用できる南中国とは、大きく異なっている。しかも『寰宇通志』は、各項目ごとに一首の詩だけを引く傾向を持ち、作詩の継承性を推測することは困難である。しかし唐の李白・杜甫、宋の曾鞏・欧陽脩、金の元好問、元の趙孟頫らによって、濟南の詩跡が形成されていったことを理解することができる。

[5] 『大明一統志』卷22、濟南府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。なお◎は『寰宇通志』に収める詩である。

【山川】

□華不注山 ◎唐・李白 詩 [古風五十九首] (其の18) 「昔我遊齊都、登華不注峰。茲山何峻秀、緑秀 [翠] 如芙蓉」(全10句)

□鵲山 ○宋・曾鞏 詩 [鵲山] 「一峰孤起勢崔嵬、秀色按藍入酒盃。…」(8句。『寰宇通志』に見えない)

- 鮑山 ○宋・曾鞏 詩 [鮑山] 「雲中一点鮑山青、東望能令兩眼明。若道人心是矛戟、山中那得叔牙城」(全4句、『寰宇通志』に見えない)
- 大明湖 (=西湖) ○宋・曾鞏 詩 [西湖] (二首、其の2) 「湖面平隨葦岸長、碧天垂影入清光。一川風露荷花暎、六月蓬瀛燕坐涼。…」(全8句。和刻本は大明湖を大明河に誤る。『寰宇通志』に見えない)
- 鵲山 ◎唐・李白 詩 [陪從祖濟南太守泛汎鵲山湖] (三首、其の2) 「湖闊數千里、湖光搖碧山。…」(全4句)
- 趵突泉 ◎元・趙孟頫 詩 [趵突泉] 「灤水發源天下無、平地擁出白玉壺。… 雲霧潤蒸華不注、波濤聲震大明湖。…」(全8句)
- 金線泉 ◎宋・曾鞏 詩 [金糸泉] 「王 [玉] 甃常浮灑氣鮮、金線 [糸] 不定路南泉。無風到底塵埃盡、界破冰綃 [霜] 一片天」(4句。中間の4句を略し、『寰宇通志』に見える2句を欠く。また『寰宇通志』と同様に、金線泉を掲げながら「金糸泉」詩を引く)
- 舜泉 ○宋・曾鞏 詩 [舜泉] 「山麓旧耕迷故壟、井幹余汲見飛泉。清涵広陌能成雨、冷浸平湖別有天」(『寰宇通志』には見えない)

【宮室】

- 歷下亭 ◎唐・杜甫 「[陪李北海] 燕 [宴] 歷下亭」詩 「東藩駐皂蓋、北渚凌清河。海右此亭古、濟南名士多。雲山已發興、玉佩仍當歌。脩竹不受暑、交流空湧波。…」(全12句)
- 鵲山亭 ○宋・曾鞏 詩 [鵲山亭] 「大亭孤起壓城顛、屋角峨峨插紫煙。灤水飛綃來野岸、鵲山浮黛入晴天」(全4句。『寰宇通志』には見えない)
- 北渚亭 ○宋・曾鞏 詩 [北渚亭] 「四楹虛澈地無隣、斷送孤高与使君。…」(全8句。『寰宇通志』には見えない)
- 水香亭 ○宋・曾鞏 詩 [水香亭] 「… 群玉過林抽翠竹、双虹垂岸跨平橋。煩 [頻] 依美藻魚争餌、清見寒沙水滿橈。莫問荷花開幾曲、但知行處異香飄」(全8句、『寰宇通志』には見えない)
- 環波亭 ○宋・曾鞏 詩 [環波亭] 「… 楊柳巧含煙景合、芙蓉争帶露華開。城頭山色相圍出、簷底波聲四面來。…」(全8句、『寰宇通志』には見えない)
- 百花台 ◎宋・曾鞏 詩 [百花台] 「煙波与客同樽 [尊] 酒、風月全家上采舟。莫問台前花遠近、試看何似武陵遊」(全4句。『元一統志』『寰宇通志』には、後半2句のみ)
- 黄台 ◎金・任詢 「登台」詩 [濟南黄台] (三首、其の3) 「綠樹 [柳] 橋邊簇錦鞍、紅紗影裏照煙鬢。帰来書几高烧燭、渾似江郷一夢間」(『寰宇通志』に見える)

【関梁】

- 百花橋 ○宋・曾鞏 詩 [離齊州後] (五首、其の4) 「從此七橋風与月、夢魂長到木蘭舟」(『寰宇通志』には見えない)
- 芙蓉橋 ○宋・曾鞏 詩 [芙蓉橋] 「雁翅横連杜若洲、碧闌干影在中流。…」(全4句。『寰宇通志』には見えない)

●南方の宣城・池州においては、『寰宇通志』と『大明一統志』は、一方を見さえすれば、大きな支障はないように思われた。しかし北方の済南の場合、『大明一統志』は、『寰宇通志』には見えない鵲山・鮑山・大明湖・舜泉・鵲山亭・北渚亭・水香亭・環波亭・百花橋・芙蓉橋の10項目において、詩句を引いている。(ただし『寰宇通志』に見える舜祠を欠く)

もちろん、その大半は作詩の継承性に乏しい場所であり、しかもその全てが北宋の曾鞏の詩である。この点を念頭に置いても、『大明一統志』のほうが、詩句の引用が多いことは明らかであり、詩跡研究では『寰宇通志』よりも重視すべきであろう。

[6] 『嘉慶重修一統志』巻162～164、済南府の条に見える、詩跡及びその候補に関するものは、以下の如くである。

【山川】

□華不注山 「本朝〔清〕乾隆十三年、高宗純皇帝東巡し、御製『華不注山』〔華不注〕の詩有り」とあるが、詩句を引かない。

□趵突泉 「本朝康熙二十三年、聖祖仁皇帝、済南に駕幸し、額を賜ひて「激湍」と曰ひ、「源清流潔」と曰ひ、並びに御製『趵突泉』〔趵突泉、留題源清流潔四字〕の詩あり。乾隆十三年、高宗純皇帝東巡して此を經、御製『聖祖の趵突泉の韻に次す』〔恭依皇祖趵突泉詩韻〕、及び『再び趵突泉に題す』の諸詩有り」とある。

□珍珠泉 「本朝康熙二十三年、聖祖仁皇帝、扁に御書して「清漪」と曰ひ、二十八年、再び幸して、扁を賜ひて「作霖」と曰ひ、並びに御製『珍珠泉を觀る』の詩あり。乾隆十三年、高宗純皇帝東巡し、亦た御製「珍珠泉」の詩有り」とある。

【古跡】

□会波楼 「本朝乾隆十三年、高宗純皇帝東巡して此に登り、御製『会波楼』〔登会波楼〕の詩有り」。

□歴下亭 「杜甫の詩〔陪李北海宴歴下亭〕に、『海右 此の亭古し』と。…本朝乾隆十三年、高宗純皇帝東巡し、御製『歴下亭』の詩〔三首〕有り」とある。

□水香亭 「曾鞏に詩〔水香亭〕有り」。(歴下亭の条に言及。『大明一統志』に見える)

□北渚亭 「曾鞏・元の郝經みく、皆な詩有り」とのみある。(曾鞏の詩「北渚亭」は『大明一統志』に見える。ちなみに郝經の詩は、「使宋過済南宴北渚亭」である)

□房家園 ○北齊・尹孝逸 詩「風淪歴城水、月倚華山樹」(2句。華山は華不注山。唐・段成式『酉陽雜俎』巻12、語資篇に見える)

【津梁】

□鵲華橋(百花橋は、その古名) ○宋・曾鞏 詩〔離齊州後〕(五首、其の4)「從此七橋風与月、夢魂長到木蘭舟」(『大明一統志』に見える) さらに「本朝乾隆十三年、高宗純皇帝東巡して此を經、御製『鵲華橋』の詩〔三首〕有り」

□灤源橋 「蘇轍に詩有り」とあるが、その詩は未詳。(灤の音はラク)

【祠廟】

□舜祠 「本朝乾隆十三年、高宗純皇帝東巡して此に登り、御製『舜廟に謁す』の詩有り」とある。

●済南市区における『嘉慶重修一統志』の記載は、清の康熙帝・乾隆帝の作詩記事が多いことを特徴とする。それは、本書が清朝官修の地理総志であるための、当然の帰結であろうが、注意すべき点は、両帝が作詩した華不注山・趵突泉・歴下亭・水香亭・鵲華橋・舜祠などは、大半が詩に詠みつがれた場所であった。この意味では、両帝の詩も詩跡研究に全く無価値なわけではない。他方、会波楼は乾隆帝が作詩したために設けられた新項目である。また房家園は、従来の地理総志に見えないものであるが、作詩の継承性に乏しい場所である。『嘉慶重修一統志』の詩跡関連の記事は皇帝中心であるため、北方の広範な詩跡を考察するうえでは『寰宇通志』や『大明一統志』よりも劣るが、詩跡の場所の確認等には、やはり重要な文献である。

〔小 結〕

南方の安徽省宣城市区と池州市、および北方の山東省済南市区を通して、詩跡（それに準じるものを含む）が、中国歴代の地理総志—唐代の『元和郡県図志』、北宋期の『太平寰宇記』『元豊九域志』『輿地広記』、南宋期の『輿地紀勝』『方輿勝覧』、元代の『元一統志』（残欠）『大元混一方輿勝覧』、明代の『寰宇通志』『大明一統志』、清代の『嘉慶重修一統志』—のなかに、どのように著録されているのか、それぞれの総志が持つ特色と関連づけながら具体的に見てきた。

この結果、ひとまずこう言えるであろう。唐代・北宋期の地理総志には、詩句の引用はほとんど見られない。ただ『太平寰宇記』のみは、まれに詩句を引く場合もあるので注意しなければならない。

こうした状況は、南宋期、民間で編纂された『輿地紀勝』や『方輿勝覧』において、大きく変貌した。この両書は、いわば詩文の創作・鑑賞のための地理知識に重点を置いた、新傾向の詳細な地理事典であった。「詩」（『方輿勝覧』では「題詠」）の部門が新たに設けられている。特に王象之撰『輿地紀勝』は、現存する地理総志の中、最大の規模で各地を詠みこんだ詩を意欲的に集録し、それと緊密な一体感のもとに想起される場所、いわゆる詩跡を多く著録した。なかでも詩跡ごとに多数の詩を分類・集録した区分けは、地理総志のなかでは唯一の試みであり、詩跡研究の観点から特に注目に値する。

『輿地紀勝』のコンパクトな形態を持つ『方輿勝覧』は、『輿地紀勝』が保有する多大・猥雑なエネルギーには欠けているものの、かえって主要な詩跡の状況を容易に知りうる利便性を備えている。

『元一統志』の残欠が惜しまれるが、小型の地理総志『大元混一方輿勝覧』は、詩跡考察のうえでは参照価値に乏しい。続く明代の『寰宇通志』と『大明一統志』は、『方輿勝覧』なみのレベルで詩跡と作品を収録しており、いわゆる詞章の学に偏った最後の地理総志として、充分参照すべき文献である。ただこの両書は編纂年代が続き、資料も

類似しているため、南方の地域の場合、一方を調査すれば大きな支障は生じないであろう。

南宋期の『輿地紀勝』と『方輿勝覽』は、基本的に南宋の領域のみを対象とした編纂物であり、1300巻の規模を誇った『元一統志』がほとんど失われた現在、『寰宇通志』と『大明一統志』の両書が、北中国の詩跡の著録を調べるうえで、最初のまとまった地理総志となっている。言い換えれば、淮河以北の北中国の場合は、両書の丹念な調査が必要であり、『寰宇通志』には見えない『大明一統志』の事項には特に注意すべきである。

清代の『嘉慶重修一統志』は、詩句自体の引用は乏しいが、地理総志の最高レベルとして、詩跡の場所の確認には必須の文献である。

[注 釈]

- (1) 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』（吉川弘文館、1969年再版）に収める「唐宋時代の総誌及び地方誌」（463～4頁）にいう、— 地理総志のなかに詩を引用するのは、北宋初期の樂史撰『太平寰宇記』に始まるという（『四庫全書総目提要』巻68、地理類1、『太平寰宇記』の条）が、『太平御覽』巻59、地部・水下に引く『方輿記』のなかに土地ゆかりの詩を引用しており、その萌芽は五代・南唐の徐鉉等撰『方輿記』130巻（散逸）であろう、と（要約）。
- (2) 松尾幸忠「中国における『詩跡』形成についての試論—日本の『歌枕』との比較考察から—」（『日本中国学会報』第51集、1999年）、植木久行「中国における『詩跡』の存在とその概念—近年の研究史を踏まえて—」（『村山吉廣教授古稀記念 中国古典学論集』汲古書院、2000年所収）など参照。
- (3) 黄永年『唐史史料学』（上海世紀出版集団・上海書店出版社刊、2002年）93頁以下によれば、『太平寰宇記』は、やや後の雍熙年間（984～987）、作者が史館詰めるときに完成した。これは私撰のために完成が遅れたのだ、と推測する。成書は遅くとも雍熙三年（986）以前と見なす説もある。
- (4) 清の王謨輯『漢唐地理書鈔』（中華書局、1961年）所収の『永初山川記』の輯本には、賽神を「賽雨」に作る。
- (5) 『アジア歴史研究入門』第三巻、中国Ⅲ（同朋舎出版、1983年）に収める梅原郁「Ⅱ 歴史地理学」（4 地志をめぐる）参照。「百科全書的な中国総志の祖型は『寰宇記』におかれよう」ともいう。
- (6) 松尾幸忠「北宋時期の書物に見られる詩跡的観点について」（『松浦友久博士追悼記念 中国古典文学論集』研文出版、2006年所収）。
- (7) 『四庫全書総目提要』巻68、地理類1、『太平寰宇記』の条には、「後来の方志（総志・方志を含めた広義の用法）、必ず人物・芸文を列ぬる者は、其の体 皆な史（樂史）に始まる」という。

青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』465頁には、「往々詩を引用し」、「詩を引くは徐鉉の方輿記の所で述べた通り寧ろ一段と豊富にしたものと云うべく」云々とある。確かに巻1、東京上、開封府浚儀県、望京樓の条に、唐の節度使令狐陶（令狐楚の誤り）の「登臨詩」を引き、巻89、潤州丹徒県、甘露寺・金山寺の条に、唐の盧肇・張祐・周樸・孫昉の詩が引かれ、「二寺は江山の勝絶為り。復た名人の篇什有り。故に之を紀す」などの例も見えるが、本書全体にわたって、詩が豊富に引かれているわけではない。『四庫全書総目提要』巻68、地理類1の導入部の説明にいう、「『太平寰宇記』は増すに人物を以てし、又た偶ま芸文に及ぶ。是に於いて

- 州県の志書の濫觴と為る」と。
- (8) 同書の前言(王文楚・魏嵩山)によれば、『元豊九域志』は元豊3年に完成したが、その後も修訂を行い、所載の政区(行政区)は元豊8年の制であり、その刊行は元祐元年(1086)正月以後という。
- (9) 『新定九域志』10巻は、政区・沿革・地里・戸口・土貢等の項目は、基本的に『元豊九域志』と同じであるため、新たに増補された「古蹟」の部門のみを録出した、王文楚・魏嵩山点校『元豊九域志』の附録(中華書局、中国古代地理総志叢刊)による。『新定九域志』は『新定元豊九域志』とも呼ばれる。
- (10) 李勇先「前言」(『輿地紀勝』四川大學出版社、宋元地理志叢刊、2005年)125頁以下の、「『勝覽』編纂體裁的確立主要是受當時方志的影響」参照。また松尾幸忠「南宋の地方志に見られる詩跡的觀點について」(早稲田大學『中國文學研究』第32期、2006年)も参照に値する。
- (11) 『輿地紀勝』については、鄒逸麟「『輿地紀勝』的流傳及其價值」(『輿地紀勝』中華書局、1992年所収。『古籍整理與研究』第7期、1992年にも収める)や、李勇先「前言」(『輿地紀勝』四川大學出版社、宋元地理志叢刊、2005年、これとほぼ同じ内容は、すでに李勇先『《輿地紀勝》研究』[巴蜀書社、1998年]のなかに見える)参照。鄒逸麟の説によれば、『輿地紀勝』の初刻は、紹定初年(紹定元年は1228年、宝慶3年の翌年)であり、その620余年後、清の道光29年(1849)になって、ようやく再刊された(岑氏懼盈齋本)。いいかえれば、宋代から清代にかけて『輿地紀勝』はあまり流布せず、清初一度失われ、四庫全書にも未収である。これは、類似の内容を備えた簡略本『方輿勝覽』が広く流布していたために、『輿地紀勝』は必備の書物にならず、しだいに流傳を断つたらしい。ちなみに、李德清「『輿地紀勝』的成書年代」(『古籍整理與研究』第7期、1992年所収)にいう、「『紀勝』一書自序作於嘉定十四年(1221)。其所述歷史沿革、以理宗宝慶三年(1227)為断、如需指明具体月份、似可断在七月。其最後成書、則不早於宝慶三年末」と。
- (12) 譚優学「前言一論『方輿勝覽』的流傳與評價問題」(『宋本方輿勝覽』上海古籍出版社、1991年。これは早くも『中華文史論叢』1984年第4輯の中に、副題の名で発表された論文)に、「『元和志』『寰宇記』只是偶或引用前人詩文片言隻語。『紀勝』除專闢詩(題詠)・四六兩門外、又都搜羅了大量與一地風俗・形勢・景物・人物有關的詩・賦・記述文字、分繫於各門各條之下」とあり、鄒逸麟「『輿地紀勝』的流傳及其價值」(『輿地紀勝』中華書局、1992年所収)にもほぼ同じく、「『元和志』『寰宇記』只是偶而引用前人詩文的片言隻語。『紀勝』除了新增詩・四六二門專輯錄前人詩文外、又搜集了大量與一地風俗形勝・景物・古跡・人物有關的詩・賦・記述文字、分繫於各門各條之下」と指摘されている。また、梅原郁「II 歴史地理学」(前掲)にいう、「著者自身および兄弟たちの各地での見聞と地理的文献の蒐集をもとに、風俗、形勝、山川の景物や人物などをことこまかに列記し、碑記や詩にも多くの部分をさく。つまりこれは詩文作製のための詳細な地理的事典であり、人物なども、伝記的関心よりも、その地域を詠む詩文に彼らを点綴する目的でとりあげられている傾向が強い」と。
- (13) 王象之の自序にいう、「至若收拾山川之精華、以借助於筆端、取之無禁、用之不竭、使騷人才子於一寓目之頃、而山川俱効奇於左右、則未見其書。此『紀勝』之編、所以不得不作也」と。ただ意味内容を正確に取りがたい箇所があるので、李堽の序に引く王象之の言葉、「我書收拾天下郡縣山川之精華、使人於一寓目之頃、而山川俱若効奇於左右、以助其筆端、取之無禁、用

之不竭」を参照して理解した。

- (14) 林宜陵『采石月下聞謫仙—宋代詩人郭功甫』(秀威資訊科技股份有限公司、2006年) 参照。
- (15) 李勇先「前言」(『輿地紀勝』四川大學出版社、宋元地理志叢刊、2005年) にいう、「『紀勝』成書於寶慶三年九月、書中所載之事還及於紹定・嘉熙年間、而『勝覽』於嘉熙三年寫成刊印、若從成書時間先後來看、兩書相距甚近」と。
- (16) 呂午の序にいう、「學士大夫端坐窓几而欲周知天下、操弄翰墨而欲得助江山、當覽此書、毋庸他及」と。毋庸は、…するに及ばない意。
- (17) 譚優学「前言—論『方輿勝覽』の流伝与評価問題」(『宋本方輿勝覽』上海古籍出版社、1991年) には、「『方輿勝覽』が広く流布した理由について、こういう、「因為宋人在撰寫表啓文時、例須用四六儷語、為樓閣亭堂作記叙文的風氣、也盛極一時。元明時代、四六之風雖漸衰歇、記叙文仍流行勿替。所以這部書正投合了這一段時期內文人墨客的需要」と。李勇先「前言」(前掲) 139頁にいう、「四六之作不僅為文字大家所樂用、而且与宋代科舉以及官場用文習尚密接相關、『朝廷以此取士、名為博學宏詞、而內外兩制用之、四六之芸、咸曰大矣。下至往來箋記啓狀、皆有定式。故謂之應用、四方一律』」と。應用とは四六駢儷文を指す。
- (18) 施和金点校『方輿勝覽』は、上海圖書館所藏の咸淳3年、吳堅・劉震孫刻本を底本とする。
- (19) 『方輿勝覽』については、譚優学「前言—論『方輿勝覽』の流伝与評価問題」(前掲)、施和金「前言」(『方輿勝覽』中華書局、中国古代地理總志叢刊、2003年) 参照。
- (20) 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』475頁にいう、「この兩書は撰者が多年各地を周行し諸書を涉獵したもの丈に治政の参考に供することは極めて略で、地方文化に詳しく、宦遊之士が名勝旧蹟を探るに誠に好適のものであったのである。… 前代のことを詳記し、詩文を豊富に掲載すると共にその出典を示す一方、伝説的記載は稀で時に考証をも附するは述ぶべき特色である」と。

『四庫全書總目提要』卷68、地理類1、『方輿勝覽』の条にいう、「惟だ名勝古跡に於いてのみ、臚列する所多し。而して詩賦序記は、載する所独り備はる。蓋し登臨題詠の爲にして設け、考証の爲にして設けず。名は地記爲るも、実は則ち類書なり。… 文章に益有り。摘藻採華(華麗な表現)は、恒に引用する所。故に宋元より以來、操觚家(文字を書く人、文学者)は、其の書を廢せず」と。ただ四庫館臣が、『輿地紀勝』を見ていないことには注意しなければならない。登臨題詠のために設けたのは、むしろ王象之『輿地紀勝』のほうであり、『方輿勝覽』ももちろん役立つが、編纂目的は主に四六表啓文を作成する用途に応えるためであった。(譚優学「前言—論『方輿勝覽』の流伝与評価問題」参照) いわば文学的必要を満たす作詩文用の地誌で、日本でも室町時代盛んに愛用されている。

清初の顧祖禹『讀史方輿紀要』凡例に、「『勝覽』以下(の地理書)は、皆な詞章の学(詞章之学)に偏る」とある。詞章の学(詞章之学)に偏るとは、名勝古跡や人物を中心とした、詩文の創作・鑑賞のための地理知識を重視して、国計や民政に関わる地域の実態を捉えるものではないことをいう。後述の『大明一統志』も、そうした「詞章の学」を代表する地誌であった。大澤頭浩「『詞章之学』から『輿地之学』へ—地理書にみえる明末」(『史林』第76巻第1号、1993年)参照。ちなみに「輿地之学」とは、経世致用を重視する地理書を指す。

- (21) 本書の解説は、郭声波整理『大元混一方輿勝覽』(四川大學出版社、宋元地理志叢刊、2003年)に収める「整理者弁言」による。『大元混一方輿勝覽』は『聖朝混一方輿勝覽』とも記される。

なお『方輿勝覽』の祝穆・祝洙父子と『大元混一方輿勝覽』の劉応李の両家は、同じ建寧府建陽県（福建省）出身で、代々つきあいがあったという。また詹有諒も建寧路建安県の人で、劉応李の学生であろうという。

- (22) 譚優学「前言一論『方輿勝覽』的流伝与評価問題」参照。
- (23) 山根幸夫「大明一統志について」（『和刻本 大明一統志』汲古書院、1978年、上巻所収）参照。それには、「多少の異同点を挙げれば、公廨が公署に、宮殿・樓閣・堂亭・池館・台榭を併せて宮室に、橋梁を関梁に改めている。また、館駅・関隘・井泉・遷謫・科甲・題詠の各項を刪去し、流寓・列女・仙釈の三項を増加している。しかし、これらの項目の出入はそれ程大きな違いとはいえないだろう」という。
- (24) 渡部武「中国明代の旅行家徐霞客の旅と飲食」（神崎宣武編『食の文化フォーラム20 旅と食』ドメス出版、2002年所収）参照。
- (25) 『四庫全書』所収の『大清一統志』500巻（424巻、子巻を加えると500巻）は、第2次版（乾隆29年勅撰本）である。
- (26) 諸書に見える逸文のほかに、清の岑建功編『輿地紀勝補闕』10巻、李裕民『輿地紀勝輯佚』を加えて編纂された。ちなみに、この大量の逸文については、その信憑性を否定する説もある（譚優学「前言一論『方輿勝覽』的流伝与評価問題」など）。

中国詩跡考

—安徽省—

植木久行

はしがき

平成17年度から3年間にわたって、「詩跡（歌枕）研究による中国文学史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に関する研究—」に対して、科学研究費補助金（基盤研究B）が交付されることになった。この課題を研究する一環として、初めの2年間に一度ずつ中国の詩跡の実地調査と資料・情報の収集を行うことにした。

平成17年度は、9月3日（土）から9月13日（火）にわたって、江南地方の詩跡を集中的に実地調査した。この調査に参加した者は、筆者のほかに、李梁（弘前大学）・松尾幸忠（岐阜大学）・許山秀樹（静岡大学）の3人である。今回の主要な探訪地は、江蘇省鎮江市（潤州）→揚州市→安徽省滁州市→和県→馬鞍山市→当塗県→宣城市（旧・宣州市）→南陵県→涇県→九華山→池州市（旧・貴池市）である。

今回の調査によって、詩跡の再建・復元に関する新しい知見が得られた。たとえば、鎮江市では王昌齡の詩にちなむ芙蓉楼が、本来の場所とは異なる金山公園内に造られていた。また揚州市では、大明寺の境内に九層の棲霊塔が再建され、観光産業に役立っていた。また本来、城外にあった二十四橋（1つの橋の名。本来の用法とは異なる）が、古典詩語の持つ高い知名度のために、瘦西湖公園の中に組み込まれていたことも、この意味で印象的であった。

揚州市では、杜牧の詩にちなむ竹西公園（竹西亭・月明橋）、さらに杜牧の詩に見える禪智寺（後の上方寺）跡の探訪は、有意義であった。現在中国では、都市の変貌と価値観の多様化が激しく、近年まで伝存していた詩跡も地上から失われて、その在りかさえ不明になるものが多い。たとえば、北宋の詩人、梅堯臣の故郷は、宣城市の南郊外であるが、今回の探訪では、その祠の所在すら不明であり、当地の故老の話でようやく跡地を探し当てることができた。ゆかりの碑石が小川（梅溪）の橋として利用されている現状に接して、私たちは愕然とした。

当塗県では、汗を流しつつ包子山に登って、李白が敬愛した謝朓ゆかりの青山謝公祠・謝公井の跡地を探索したことも忘れがたい。また宣城の敬亭山では、山中の太白独坐楼を訪ねる途中、玄宗の妹・玉真公主の墳墓の存在を知り、そのほとりに、李白が飲用したと伝える皇姑泉（相思泉）もあって、思いもかけない収穫を得た。

謝朓・李白・杜牧などの詩に彩られた宣城市では、謝朓楼・宛溪・句溪^{こうけい}・開元寺塔・

響山などを訪ね、入手した市街図も参照して、それぞれの位置関係や距離感を確認することができた。かつて明鏡にたとえられた宛溪は、現在かなり汚濁しており、句溪は今日、溪流としての姿はすでに失われて、部分的にしか残存していなかった。李白や梅堯臣の詩に歌われた響山の探索では、民家や畑の間を縫うように歩き、当地の人に尋ねて、ようやく確かめ得た時の思いは忘れがたい。

涇州の醉翁亭、涇県の水西寺の塔、桃花潭、李白「秋浦の歌」に歌われた池州の清溪河(白羊河)など、それぞれ印象深く、杜牧の詩にちなむ杏花村古井文化園などは、観光資源の目玉として美しく整備されていたが、同じ池州の齊山は少し荒廃感を漂わせていた。

本稿は、安徽省の詩跡調査を踏まえた論考である。今回取り上げた詩跡は、涇県の①桃花潭 ②水西寺、宣城市の③謝公亭・謝亭 ④宣州開元寺 ⑤饗山 ⑥広教寺(俗称双塔寺)、滁州市の⑦西澗 ⑧琅琊山 ⑨醉翁亭、[附録]和県の⑩陋室である。

【涇 県】

①桃花潭

涇県(宣城市の西南)の西南約40キロ、桃花潭鎮にある、涇川(青弋江中段の名。涇県の名の由来となる)上流の、清澄な深い潭の名。天宝14載(755)ごろに作られた李白の「汪倫に贈る」詩、「李白 舟に乗って 将に行かんと欲す、忽ち聞く 岸上 踏歌の声、桃花潭水 深さ千尺、及ばず 汪倫 我を送るの情に」によって、忘れがたい詩跡となった。

汪倫とは、李白が涇県に遊んだとき、美酒をもてなしてくれた「村人」の名。近年発見の家譜によれば、汪倫は名を鳳林ともいい、先祖伝来の別業(莊園)を持つ当地の豪族であり、涇県の長官にもなったことがあるという。^(注1)李白を招いたとき、すでに桃花潭のほとりに閑居していた、名門の豪士であつたらしい。

本来測りようもない心の深さ。それを眼前の潭の深さ千尺との計量的比較を通して、生き生きと実感させる巧みな着想である。「桃の花さく潭」という地名も、美しい。

北宋の楊傑は、「太白の桃花潭」詩(『無為集』巻7、題下注に李白の詩を引く)のなかで、謫仙人李白を思慕して、こう歌う、「桃花潭は似たり 武陵(陶淵明の「桃花源記」の舞台、武陵桃源)の溪に、太白の仙舟 去りて迷わんと欲す。岸上の踏歌 人 見えず、年年 空しく鷓鴣(南国の鳥の名)の啼く有るのみ」と。同じく北宋の胡瑗「石壁」詩には、李白の同時期の作「汪氏の別業に過ぎる」2首(胡瑗「石壁」詩序には、詩題を「涇川の汪倫の別業に題す」2首とする^{注2)}を踏まえつつ、「李白 溪山を好み、浩蕩として 涇川に遊ぶ。詩を題す 汪氏の壁に、声は動かす 桃花の洲を」云々と歌う。「声は動かす 桃花の洲」は、「汪倫に贈る」詩を踏まえた表現であろう。

元の潘白修は、「李伯時 太白の舟を泛ぶる小像を画く」という題画詩(『元詩選』2集巻17)を作り、「一笑して髻を掀ぐる[口ひげを動かす]は 底事にか縁る、桃花潭上に汪倫を見る」という。「汪倫に贈る」詩にもとづいて作成された絵であつたらしい。^(注3)

明の郭奎の「涇県」詩(『望雲集』巻4)には、「馬を立てて 空しく慙づ 李白の題(詩)



桃花潭

に」と歌った後、「但だ願う 功成りて 身退くこと早きを、桃花潭上 幽棲を結ばん」と歌い、同じ明の宗臣「涇県にて桃花潭を望む」詩（『宗子相集』巻11、題下注に「即ち李白 詩を題して汪倫に贈る処」とある）には、「桃花潭水 陵陽（宣城）に近く、潭上の春風 石梁に満つ。流水 仙客に随って去らず、秦人 何ぞ必ずしも三湘を渡らん」云々とあり、桃花潭附近は 武陵桃源のごとき別天地にも見立てられていく。他方では、離別（送別・留別）の地として 桃花潭の語を用いたものも見られる。（明の邵宝「馬天常と留別す」『容春堂統集』巻5）など）美しい友情につつまれた離別の地としてのイメージからである。

こうしたなか、『大明一統志』巻15、寧国府・山川の条に「桃花潭」の名が見え、「涇県の西南一百里に在り、深さ測るべからず」の後に李白の詩が引用されて、詩跡として確立する。他方、明代、汪倫が李白を見送ったとされる渡し場（東園古渡）、桃花潭の東岸（桃花潭鎮翟村）の地は、2人の深い友情を記念して「踏歌古岸」と呼ばれ、岸边に2層の「踏歌岸閣」が建てられた。清の乾隆年間、民国初期の再建を経て、今もなお現存する。^(注4)

今日、桃花潭西岸の切り立つ岩（彩虹岡）の上には、李白をしのぶ「懷仙閣」が再建されている。そこには、『宛陵郡志』の記載に拠れば、墨玉墩・彩虹岡は、俱に（涇）県の西 桃花潭の上りに在り。唐の李白、万巨・汪倫と与に詠遊せし処」という石碑が、岩のうえにはめ込まれている。^(注5)

その彩虹岡の南端あたりに、汪倫の墓がある。墓碑には、「光緒十一年（清末の1885年）季秋（9月）重建 / 謫仙題 / 史官之墓汪諱（この1字は小字）倫也」とある。傍らに立つ「重修汪倫墓碑記」（1983年、涇県陳村郷人民政府建立）によれば、汪倫の墓は、もともと涇県水東（鎮の名、桃花潭鎮の旧名）翟村の東、金盤献果の地にあった。1958年、陳村水電站（水力発電所）を建設したとき^(注6)、壊されたが、文化部門が資金を配分して彩虹岡（岡）に再建したという。

なお旧墓のあった地の近くには、清の乾隆32年（1768）、翟氏一族が建てた文昌閣があった。文昌閣の創建は、李白の来遊を記念し、一族の文風の隆盛を顕すためとされ、現存のものは1990年の再建、3層八角、高さ25メートルの木造建築である。^(注7)
今日、付近は「桃花潭景区」として整備された観光地となっている。

(注1) 詹鍔主編『李白全集校注彙集評』(百花文芸出版社、1996年) 卷11、「汪倫に贈る」詩の条参照。

(注2) 清の王琦輯注『李太白全集』 卷34、附録4、叢説に引く『寧国府志』所載の胡安定(名は瑗)「石壁」詩序参照。「石壁」詩の1部も引かれている。

(注3) 明の王慎中「桃花潭水の別意の巻に題す」詩(『遵巖集』 卷7)にいう、「水に映る桃花 千尺の潭、水は花の色を涵して 転た深きを看る」と。これも、題画詩である。

(注4) 蕭夢龍主編『江南勝跡』(江蘇科学技術出版社、1993年)に拠る。『嘉慶重修一統志(大清一統志)』 卷115、寧国府の条には見えない。

(注5) 『嘉慶重修一統志(大清一統志)』 卷115、寧国府、山川、桃花潭の条に、「涇県の西南に在り。唐の李白、万巨・汪倫と与に此の潭に遊ぶ。上に釣隠台・彩虹岡・墨玉墩有り。皆当時遊詠の所。李白の詩に、『桃花潭水 深さ千尺』と。即ち此なり」とある。

(注6) この時できた人造湖が、太平湖(旧名は陳村水庫)である。

(注7) 主に注4と同じ蕭夢龍主編『江南勝跡』による。一説に 乾隆35年(1770)に建てられたともいう。

【補 注】

清の袁枚(1716～1797)『隨園詩話補遺』 卷6(顧学頤校点、人民文学出版社、1998年版)にいう、「唐の時の汪倫なる者は、涇川の豪士なり。李白、将に至らんとするを聞き、書(手紙)を修めて之を迎えんとして、詭りて云う、『先生は遊を好むか、此の地に十里の桃花有り。先生は飲を好むか、此の地に万家の酒店有り』と。李、欣然として至る。乃ち告げて云う、『「桃花」は、潭水の名なり、並びに桃の花無し。「万家」は、店の主人、姓万なり。並びに万家の酒店無し』と。李、大笑し、款びて留まること数日、(汪倫は)名馬八匹、官錦十端を贈りて、親ら之を送る。李、其の意に感じて、桃花潭絶句の一首を作る」と。この面白い話は、近年しばしば桃花潭の解説に引用されるが、その拠る所について、袁枚自身全く触れておらず、未詳である。本条には、続いて「今 潭は已に壅塞す。張惺齋(炯…原注)題して云う、『蟬は一葉を翻して空林に墜ち、路は桃花を指して 尚お尋ぬ可し。怪しむ莫かれ 世人の交誼の浅きを、此の潭は 復た旧時の深さに非ず』」云々とある。桃花潭が壅塞して浅くなったという指摘は、張惺齋の詩にもとづく推測なのであろうか。李白当時の桃花潭の深さが「千尺(約300メートル)」という詩的表現しか伝わらない現状では、壅塞についての確な判断を下しかねるが、現在の桃花潭は、昔に比べてかなり浅くなっている可能性が高い。実際に訪れてみた印象では、極度に深い潭には見えなかった。

②水西寺

宣城市の西南、涇県の城の西郊2.5キロの地、「林壑深邃」(『方輿勝覽』 卷15)な水西山にあった古刹の名。水西とは、涇溪(涇県内を流れる青弋江のこと、賞溪ともいう)の西側にあるための呼称である。涇溪を隔てて涇県城と向き合う。李白が晩年、「水西に遊

び、鄭明府に簡す」詩のなかで、「天宮 水西寺、雲錦（朝焼け）のごとく 東郭に照る。清湍（清き早瀬） 廻溪に鳴り、緑竹 飛閣を繞る。涼風 日び瀟灑、幽客（隠士） 時に憩泊す。五月（盛夏） 貂裘（暖かいテンの皮衣）を思い、秋霜落つと謂言えり」云々と歌ったところである。

清の趙宏恩ら監修『江南通志』巻47、寧国府 涇県の条にいう、「崇慶寺は県の西に在り。南齊の永平（永明？）元年（483？）に建て、凌巖と名づく。唐の上元の初め（760）、天宮水西寺と改む。大中（847～859）の時、相国の裴休重建し、黄蘗（＝黄檗）禪師住持す。宋の太平興国（976～983）^{（注1）}、今の名を賜う」と。これによれば、李詩は最晩年の上元年間（760～1）の作となろう。（李白は762年没）

中唐の詩僧皎然「峴山（浙江省湖州市南）にて崔子向の 宣州に之きて、裴使君に謁するを送る」詩にも、「秋天 水西寺、古木 宛陵城」と見え、中唐前期、すでに宣城（宛陵）付近の名刹として知られていた。^{（注2）}

続いて晩唐の杜牧が、宣州（宣城）滞在時に水西寺を訪れている。後に「昔遊を念う」その3に、「李白 詩を題す 水西寺、古木 廻巖 樓閣の風。半醒半酔 遊ぶこと三日、紅白 花は開く 山雨の中」と歌い、涇県の水西寺を詩跡化した。^{（注3）} 寺のある水西山自体も、北宋末の曾紆「宣州の水西」詩に、「宣州の水西 天下の勝」（『方輿勝覽』巻15）と歌われている。

ただ水西山には、唐代すでに水西寺（宝勝寺）・天宮水西寺（崇慶寺）・水西首寺（唐の上元年間建立。唐末の乾寧2年〔895〕、白雲院となる）の、いわゆる水西3寺が対峙して^{（注4）}、亭台・樓閣が林立していた。

従って単に水西寺といった場合、厳密には3寺のどれを指すか未詳であり、3寺の総称としての用例もあろう。宣城出身の北宋の著名な詩人、梅堯臣「擬水西寺東峰亭九詠」詩の水西寺は、水西首寺を指している。ただ詩跡化の源泉である李詩との関係でいえば、主に天宮水西寺、後の崇慶寺が中心となろう。

北宋の徐鉉「元上人の 水西寺に還るを送る」詩（『騎省集』巻22）には、「李白 高吟の処、師帰りて 竹関を掩さん」という。また南宋の李彌遜「秋霜閣」詩（『筠溪集』巻14）にも、「十月 水西寺、興窮まるも 還お為に留まる。幾く（李）太白を傷ましむるを知らんや、五月 貂裘を念う」とあり、原注として山中の寺院の肌寒さを詠んだ李白の詩句（五月思貂裘、謂言秋霜落）を引いて、秋霜閣の名の由来を説明する。宣城出身の清初の著名な詩人、施閏章「水西の行」の序には、「水西寺は黄蘗道場為り。……李太白、數ば嘗て遊詠」し、「此の山は太白を以て名あり」云々とあり、「釣魚台下 青玉を浮かべ、秋霜閣畔 貂裘を思う」と歌っている。秋霜閣は崇慶寺の背後にあって、「水西の勝を擅にす」（『大清一統志』巻80）るところという。

現在、水西3寺のうち現存するものは、宝勝寺（黄蘗寺）のみである。その前（西）には、北宋の崇寧年間に建て始め、大觀2年（1108）に成る七層（高さ50メートル）の、いわゆる大觀塔（崇寧塔、水西大磚塔）がそそり立つ。宝勝寺から少し離れた右側（北）、白雲泉

のほとりに位置する七層（塔頂は崩壊）の古塔は、南宋の紹興31年（1161）に建造された紹興塔（小方塔、乾応塔）である。この2つの古塔は「水西の双塔」と呼ばれ、なかでも堂々たる威風を持つ大観塔は、今もなお登って眺望を楽しむことができる。李白・杜牧ゆかりの天宮水西寺（後の崇慶寺）が失われた現在、宋代の古塔付近を散策して、在りし日々を偲ぶほかないのである。ただし『大清一統志』巻80、宝勝寺の条によれば、水西寺の旧名をもつこの寺こそ、「唐の李白・杜牧、俱に詩有りて遊びしを紀す」ところとする。

（注1） 現在、大観塔のそばにある「水西双塔記」によれば、太平興国5年（980）、崇慶寺に改名されたという。

（注2） 北宋の林逋「送思齊上人之宣城」（『林和靖集』巻1）にも、「蕭閑水西寺、駐錫莫忘歸」とある。

（注3） 南宋の韓元吉の詞「水調歌頭」（和龐祐甫見寄）に、「紅白山花開謝、半醉半醒時節、春去子規愁。夢繞水西寺、回首謝公樓」とある（『南澗甲乙稿』巻7）。これは、明らかに杜牧の詩を踏まえる。

（注4） 前引の『江南通志』巻47、寧国府涇県の条や、李白「山僧に別る」詩に対する清の王琦注（『李太白全集』巻15）等によれば、宋代以降の宝勝寺（旧名は水西寺・五松院、北宋の元豊5年〔1082〕の改名）が水西寺、崇慶寺が天宮水西寺、（白雲泉のほとりにある）白雲院が水西首寺である。

【補 注】

唐の宣宗に「涇県の水西寺に題す」（大殿連雲接賞溪、鐘声還与鼓声齊。長安若問江南事、說道風光在水西）という詩が伝わる。『万首唐人絶句』巻69、『全唐詩』巻4等所収。唐の宣宗李忱は太子であったとき、宝勝寺で出家・隠棲したことがあり、この詩句を作ったという。またゆかりの太子泉の名も伝わる。（現地で収集した「安徽水西国家森林公园旅游風景区」と題されたパンフレットによる）清の施閏章「水西の行」の序の、「又た伝う、唐の宣宗龍潛の処」の語は、この伝承に基づく。古くは、『方輿勝覽』15、寧国府、水西山の条に引く『郡志』に、宣宗詩の後半2句を引く。また宋の華岳「早春十絶」（其7、水西）には、「詩道風光在水西、水西我意未為奇」という。（『翠微南征録』巻11）上句は、宣宗の詩を踏まえている。

【宣 城】

③謝公亭・謝亭

六朝・齊の詩人謝朓が、宣城郡太守在任中（495～496年）、零陵（湖南省）の内史として赴任する友人、范雲を見送った場所とされ、北宋の黄裳『新定九域志』巻6、宣州の条に、「齊の宣城太守謝玄暉（朓）置く」という。^{（注1）}現在の宣城市区の北側、宛溪・句溪（ただし、現在、その跡が部分的に残存するのみ）・水陽江の合流する三叉河付近（「宣城市交通導游図」山東省地図出版社、2005年1月第2版によれば、上新村に属する地）である。^{（注2）}

謝朓が、范雲を見送った本来の送別地は、建康（南京市）の西南郊外の新亭（勞勞亭）であったが、李白はあえて当地の伝承に従って「謝公亭」詩を作り、「謝亭は 離別の処、風景 毎に愁いを生ず。客は散ず 青天の月、山は空し 碧水の流れ」云々と歌う。^{（注3）}

謝亭は、謝公亭の略称である。

晩唐の許渾は、「謝亭送別」詩^(注4)のなかで、「勞歌（「勞勞亭歌」の略。送別の歌の意）一曲 行舟（旅立つ舟のともづな）を解く、紅葉 青山 水 急に流る」と歌いあげ、宣城の著名な送別の詩跡として確立した。^(注5)少し後の池州出身の詩人、張喬の「謝公亭懷古」詩^(注6)にいう、「六朝の旧跡 詩を遺して在り、三楚の空江 雁有りて廻る」とある。遺詩とは、謝朓の「新亭の渚にて范零陵雲に別る」（『謝宣城集』巻3、『文選』巻20）を指す。また李洞の「張喬の下第して宣州に帰るを送る」詩には、「成る無くして 来往して過ぎ、謝亭の松を折り尽くす」という。この謝亭の語も、宣城の離別の地としてのイメージを踏まえたものである。

北宋の李彭「潤上人の 宛陵（宣州）に帰るを送る」詩（『日涉園集』巻1）に、「唯だ謝公亭のみ有りて、頗る復た清夢に到る」というのは、すでに述べた離別の地としてのイメージを踏まえて望郷の念を表したものであろう。南宋の朱翌「宣城書懷」（『澗山集』巻3）中の、「謝公の亭 范（雲）に別る」は、既述の伝承を踏まえる。

明の湯右曾の詩「朱立山太守 新詩を枉げられて奉答す」（『懷清堂集』巻6）の、「彷彿たり 白綿 紅雨の両句に、謝公の亭外 旧青山」^(注7)や、清初の著名な宣城出身の詩人施閏章の、「郝元公学博 母艱（母の死）を以て潁州に帰る」詩（『学余堂詩集』巻31）の「謝公亭畔の路、相送れば 離愁満つ」など、謝公亭には、いずれも離別の悲しみがまつわりつく。

伝承（幻想）に従って作られた李白詩の力によって、宣城の詩跡と化した謝公亭そのものは、今日すでに失われているが、その跡地とされる付近は、今もなお舟の渡し場となり、江南の風情に満ちた景勝地である。我々一行は、のどかな風景を眺めつつ、しばし懷古の情にふけた。

(注1) 南宋の葉廷珪『海録碎事』巻4下にもいう、「謝公亭、在宣城。太守謝玄暉置。范雲為零陵内史、謝送別于此」とある。『輿地紀勝』巻19、謝公亭の条には、「在宣城城北二里。九域志云、『齊太守謝玄暉置』。旧経云、『謝玄暉送范雲零陵内史。此其処也』」という。

(注2) 宛溪・句溪（現在は宛溪のみ）は、長江の1支流・水陽江にそそぐ。

(注3) 『李太白文集』（宋版）巻20の題下原注に「蓋し謝朓・范雲の遊ぶ所」とある。李白はまた、「敬亭の北の二小山に登る…」詩（『李太白文集』巻19）にも、「客を送る 謝亭の北」という。

(注4) 許渾が大中4年（850）、潤州城（江蘇省鎮江市）南郊の丁卯潤村舎で手写了した自撰作品集の一部分「唐許渾烏糸欄詩真蹟」（南宋の岳珂『宝真齋法書贊』巻6所収）には、「謝亭送客」（謝亭にて客を送る）と題する。

(注5) 中晩唐の姚合に「遊謝公亭」詩（『全唐詩』巻500）がある。

(注6) 『文苑英華』巻308所収。『全唐詩』巻639には、「題宣州開元寺」の異文として注される。

(注7) 原注に「太守に『白綿 細草に鋪き、紅雨 芳溪に落つ』の句有り。往事 敬亭に在りて作るなり」とある。

④宣州開元寺

宣州(宣城)城内にあった名刹。より詳しく言えば、州庁(県庁)の北の陵陽山第三峰(現在の宣城市区・開元小区、区政府の東北に位置する^[注1])に置かれ、宛溪(境内の東側を北流する)に臨む広大な寺院の名。著名な謝朓楼はその南に、また宛溪にかかる濟川橋(李白詩の双橋の1つ。現在の名は東門大橋)はその東南にあった。東晋期に創建された寺は、初め永安寺、初唐期に大雲寺、そして玄宗の開元26年(738)、開元寺となり、「蘭若(寺院)中の最も勝れし者」(『大清一統志』巻80)であった。北宋の景德年間(1004～7)、景德寺となって以降は、清代・民国まで景德寺として存続した。

晩唐の杜牧は、観察使の幕僚として、生涯に2度、宣州(宣城)に滞在した。開成3年(838)、36歳のとき、寺の古い歴史に思いを馳せつつ、楼上から眺望した感懐を、「宣州開元寺の水閣に題す」詩のなかで、「鳥去り鳥来る 山色の裏、人歌い人哭す 水声の中。深秋 簾幕 千家の雨、落日 楼台 一笛の風」云々と歌った。

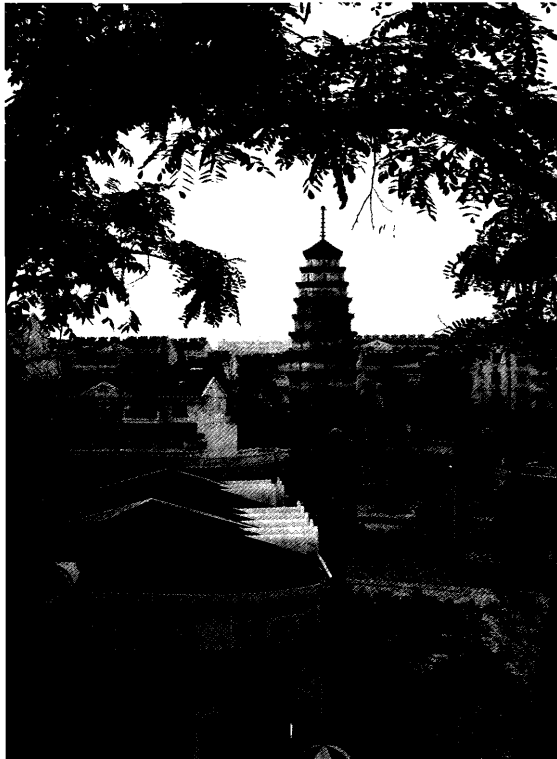
また同じ頃の作、「宣州の開元寺に題す」詩には、広大で静謐な境内の様子が、「楼は飛ぶ 九十尺、廊は環らす 四百柱。高高下下の中、風は繞る 松桂の樹。青苔 朱閣に照り、白鳥 両に相語る」云々と描写されている。さらには、「小楼 纔かに受く 一床の横たわるを、終日 山を看て 酒 満傾す」と歌う「宣州の開元寺の南楼」詩もあって、杜牧は、この宣州の開元寺に深い愛着を示した。

さらに杜牧は、後に「何人か為に倚らん 東楼の柱、正に是れ 千山 雪 溪(宛溪)に漲る」(「宣州の開元寺に寄題す」と詠んで懐かしむ。

杜牧と交遊した趙嘏の「開元寺の水閣に題す」詩(『輿地紀勝』巻19)に、「(宛溪の)波は十里を穿って 橋は寺に連なり、絮(柳絮)は千家を圧して 柳は春を送る」とあるのは、暗に前掲の杜牧詩の影響下であろう。またやや後の杜荀鶴「開元寺の門閣に題す」詩の「何れの処の画橋(画船)か 緑水を尋ね、幾家の鳴笛ぞ 红楼に咽ぶ」(『唐風集』巻2)も、同じであろう。

杜牧の名詩に彩られた宣州開元寺は、北宋期、景德寺と改名されたためであろうか。詩跡として成長することはなかったようである。宣城出身の北宋の詩人、梅堯臣は、「開元寺の明上人の仮山(庭園の築山)に寄題す」(『宛陵集』巻36)を作るが、この開元寺は、景德寺を旧称で呼んだものであろうか。^(注2)

現在、寺跡の一角には、北宋期の姿を留める開元塔(景德寺多宝塔、9層高さ34メートル)のみが残っている。明の著名な劇作家・湯顯祖は「開元寺の浮図(仏塔)」詩のなかで、美しい眺望を、「嶺樹 嵐(山氣)に湿うかと疑い、岩花 暝(=暝、日暮れ)に入りて薫る」と歌っている。^(注3) 塔の倒影は、かつて宛溪のさらに東を北流していた句溪(現在、この川は痕跡のみを残す)の水面に映っていた。これが「句溪の塔影」と呼ばれる宣城の勝景である。清の劉方霽「句溪の塔影」詩にいう、「中より湧く 江城(宣城)の塔、波の痕 廻るも迷わず(明瞭なさま)」と。^(注4)



宣州開元塔

(注1) 「宣城市交通導游図」(山東省地図出版社、2005年1月第2版)による。

(注2) 『大明一統志』卷15、寧国府・景德寺の条に、「府城の内に在り。本と晋の永安寺。唐、開元に改む。宋、又た今の名に改む」とあり、『江南通志』卷47、寧国府・景德寺の条に、「宋の景德中、今の名に更^{あら}たむ」という。

(注3) 安徽宣城市文化局編『歴代名人吟宣城』(皖内部性資料図書2004-092号、宣城市中亜印務公司印刷)所収。

(注4) 宣州市地方志編纂委員会編『宣州概覽』(黄山書社、1988年)64頁所引による。

⑤響山

宣城市の東南郊外1.5キロの地にあり、山の形が葫蘆(ひょうたん)に似ているため、俗に葫蘆山とも呼ばれる景勝地。李白が天宝12載(753)の重陽節の日、宣城の別駕李某とともに新たに築かれた楼台に登って宴会を開いたときの作とされる「九日登山」詩に、「土を築いて 響山に接し、俯して臨む 宛水(宛溪)の湄に。胡人 玉笛を叫らし、越女 霜糸(白き絃)を弾く」云々とある。同じ李白の「宣城にて九日 崔四侍御 宇文太守と敬亭(山)に遊ぶを聞く。余 時に響山に登りて 此の賞を同じゅうせず。酔後、崔侍御に寄す 二首」詩も、同時期の作とされる。その1に、「晩に南峰(城南の響山)より帰れば、蘿月(ツタカズラの間から漏れる月光が) 水壁(みぎわの石壁)に下る」という。

元和2年(807)、宣州刺史・宣歙池觀察使、路応は、響山亭を作り、さらに軍隊の兵

営を左右に設置した。翌年、それをほめたたえた宰相権徳輿の文が、響山の岩に刻まれた。権徳輿「宣州響山の新亭・新営の記」(『全唐文』巻494)には、付近の風景がこう記されている、「兩岸聳峙し、蒼翠対起す。其の南に響潭を得たり。清泚(清澄)にして鑑とすべく、縈迴して澹淡なり」と。響山の東南端は宛溪と青溪に臨み、二水の合流点に、響潭があった。こうして響山の名勝は知られ始めたのである。

北宋の著名な詩人で、宣城出身の梅堯臣が、「宣州雜詩二十首」(『宛陵先生集』巻43)その3の冒頭で、「一たび響山の畔を過れば、常に路中丞を思う」と歌うのは、響山を開発した路応への思慕である。同じ詩中の「旧刻 磨滅多し」の旧刻とは、前述の「唐宣州響山新亭新営記」(権載之[徳輿]撰、『輿地紀勝』巻19)を指していよう。梅堯臣はまた、「久しく門前の勝を憶い、聊か逸興に乗じて遊ぶ」の句で始まる五律「響山に遊ぶ」詩の中で、幽邃・静寂な風景を、「寒篙(船をおし進めるさお) 溪曲に進み、古木 城頭に暗し。鳥は空潭を過ぎて響き、船は碧瀨に随いて流る」と歌うが、初めて響山を詠んだ詩人李白には、全く触れていない。

ところが元の呉師道の五言古詩「九日 響山に登り、同遊者に奉呈す」(『元詩選』巻44)は、登高が行われる重陽節に作られた李白の詩を念頭に歌い始める。「響山は 響潭に臨み、曾て太白(李白の字)の来るを識れり。我 其の間(その地)に遊ばんと欲し、却って仙才に非ざるを愧づ。況んや乃ち微官を博て、終年 塵埃に走るをや。幸いに茲に九日至り、群彦と陪うを獲たり」云々とある。そして「前に孤城(宣州城を指す)の低きを睨い、下に清溪の迴るを瞰る。諸峰 遠色を送り、攬結(攬は手につかむ) 何ぞ雄なる哉。野菊 半ば英を含み、濁醪(濁り酒) 初めて発醕す」とうたう。

清初の著名な詩人で、宣城出身の施閔章は、「唐寓庵使君に陪いて舟を響山潭に汎べ、因りて玉山に登る」詩(『学余堂詩集』巻37)の前半に、「陵陽(宣城)の南畔 釣龍湾、



響 山

赤壁^(注1)の高台 緑水の間。一たび錦袍(李白が宮中で着た礼装用の錦の上着。ここでは李白を指す)仙去して後より、今に到るまで 烟月 意 長えに閑なり」云々とあり、「地は故と寶子明 白龍を釣りし処、李太白 嘗て游詠す」の原注が付されている。響山は、李白ゆかりの詩跡として認識されるようになったのである。^(注2)

今回、我々は、家々や畑の間を縫って、ようやく響山(葫蘆山)を訪ねた。昔の面影には乏しかったが、宣城の響山を探索した訪中団は、おそらく我々が唯一ではなかろうか。ここにその写真を発表できるのは、深い喜びである。

(注1) いわゆる響山の赤壁と呼ばれる、高さ6メートル、幅10メートルの、水辺の名勝。清の蔡大杰「響山の赤壁」詩にいう、「響山突出す 鰲峰(宣城のまちの中にある)の前、東南に雄踞して 虎の眠れるに似たり」(宣州市地方志編纂委員会編『宣州概覽』黄山書社、1988年、65頁所引)と。

(注2) 施閏章にはもう1首、「響山臨眺 諸子と同一に杓司を懐う有り」(『学余堂詩集』巻25)も伝わる。

⑥ 広教寺(俗称双塔寺)

宣城市北郊2.5キロの著名な詩跡、敬亭山の南麓にあった古刹の名。晩唐の大中3年(849)、宣歙觀察使・宣州刺史の裴休^{はいきゅう}によって建立された。^(注1) 北宋の紹聖3年(1096)には、27メートルの間隔で東西に対峙する方形(唐代風)の美しい仏塔、いわゆる双塔が建造されている。それぞれ7層が残存し(塔頂崩落)、高さ約17メートル、第2層の内壁には、元豊4年(1089)、北宋の蘇軾が書いて広教院の模上人に贈った『観自在菩薩如意輪陀羅尼經』(楷書)の墨跡を、15年後に模刻した石がはめ込まれている。かくして広教寺は、俗に双塔寺と呼ばれることになる。^(注2)

宣城出身の北宋の著名な詩人・梅堯臣は、広教寺に言及する詩を数首残している。「正仲・屯田と与に広教寺に遊ぶ」詩(『宛陵先生集』巻41)には、「古寺 深樹に入り、野泉 暗渠に鳴る。酒杯に 茗具(茶具)を参え、山蕨(わらび) 盤蔬(大皿に盛られた食べ物)に間う」とあり、「緒弟及び李少府と与に広教の文鑑師を訪ぬ」(『宛陵先生集』巻37)という詩には、「紫蕨は老ゆるも食うに堪え、青梅は酸なるも嫌わず。野蜂 時に座に入り、岩鳥 或に檐を窺う」という。いずれも俗塵を断った静謐な山寺の描写である。

北宋末の呂本中「昭亭(敬亭山)の広教寺」詩(『東萊先生詩集』巻11)には、「草暗くして 鼯鼠(むさび)出で、山深くして 鶻鳩(夜明けに鳴く黒い小鳥の名、俗称は催明鳥)鳴く」と歌う。元の何儒行「清明の前一日 施敬叔、約して広教寺に遊ぶ」詩(『宛陵群英集』巻9)には、境内の幽静な神聖さが、「山中 雨ふらざるに 花 常に潤い、林下 人無きに 蘭自から馨る」と詠まれている。続いて明の宣城出身の徐夢麟「広教寺に遊ぶ」詩^(注3)にいう、「真界(仏教寺院) 黄蘗(希雲)に開かれ、千年 塔 并存す。松風 絶壑(深く険しい谷)に生じ、蘿月 頽門を掩う」云々と。

そして宣城出身の清の著名な詩人・施閏章「双塔寺」(題下の原注「敬亭の麓に在り。黄

葉禪師より昉まる。一に広教寺と名づく、『学余堂詩集』巻8)には、「双塔 老翁の如く、蒼顔(老衰した顔色) 肩を比べて立つ。上に玉局(蘇軾)の銘有り、摩紗(なでる)せんとするに 層級(多くの階段)を隔つ」とあり、さらに建立時の荘厳な規模を、「裴守(裴休) 招提(寺院)を侈くし、棟宇 原隰(高原と低湿地)を蔽う」と思いやる。

広教寺(双塔寺)の場合、特定の源泉と言うべき名詩は見あたらないが、長く歌い継がれてきた詩跡である。現在、山門等が造られて整備されたが、寺院はすでに無く、千年弱の風雪を耐え抜いた双塔のみ、「老翁の如く」立ち、往事を偲ばせている。

(注1) 『江南通志』巻175にいう、「大中三年、裴休 宣州を知めしとき、(黄檗希雲を)迎えて開元寺に居らしめて法を受け、広教寺を敬亭(山)の南麓に創る」と。裴休は、大中2~3年、宣歙觀察使・宣州刺史であった。

(注2) 『江南通志』巻47、広教寺の条に、「山門に浮屠(仏塔)の 双峙する有り。一に双塔寺と名づく」とある。

(注3) 安徽宣城市文化局編『歴代名人吟宣城』(皖内部性資料図書2004-092号、宣城市中亜印務公司印刷)所収。

【滁 州】

⑦西 澗

滁州市の西郊(約1.5キロ)にあった谷川の名。もと小沙河に属し、滁州西部の山間から流れ出て東流し、烏兔河(烏土河)となり、滁州市の城を貫流して、城の東側を南流する清流河にそそぐ。その主な河道が、滁州城の西にあるための呼称。1950年代の末、城西水庫[ダム]が作られて水没した。「滁州市区交通旅游図」(安徽人民出版社、2003年刊)によれば、現在「城西湖」と呼ばれる、その湖面下に西澗の遺跡があることになる。

西澗は、建中3年(782)の夏、滁州刺史となった自然詩人韋応物が、建中4年か翌興元元年(784)の春、あるいはまた、興元元年の冬、滁州刺史をやめて、しばらく西澗付近に寓居していた貞元元年(785)の春に作られた名作、「滁州西澗」詩(独憐幽草澗辺生、上有黄鸝深樹鳴。春潮帶雨晚來急、野渡無人舟自横)によって、詩跡化された場所である。詩題は、唐人選唐詩(『御覽詩』、『又玄集』巻中、『才調集』巻1)には、いずれも単に「西澗」に作る。本詩は、北宋の紹聖2年(1095)、滁州の長官になった曾肇が、慶暦年間(1041~48)以前の滁州の事跡を詠んだ詩文を集めた『慶暦前集』の跋(南宋の王象之『輿地紀勝』巻42所引)に、「李衛公(徳裕)著懷嵩之記、李庶子(幼卿)刻泉石之銘、韋応物形野渡之詠」とあるように、滁州を詠んだ唐代の詩の代表作であった。なお韋応物は、「西澗即事 盧陟に示す」詩のなかで、「空林に 細雨至り、円文 遍水に生ず。永日 余事無く、山中 木を伐るの声」云々と歌い、貞元元年の元日になる「歳日 京師の諸季(韋)端・(韋)武らに寄す」詩では、「松を聴く 南巖の寺、月を見る 西澗の泉」とも歌う。

金の趙秉文は、「西澗に和す」詩(『擬和韋蘇州』の1、『閑閑老人滄水文集』巻5)を作っている。

それは、韋詩に対する次韻詩であり、「雨荒竹逕草叢生、樹隔前溪一犢鳴。歩尋幽澗疑無路、忽有人家略徇橫」（雨に竹逕〔竹の生える小道〕荒れて 草叢生し、樹は前溪を隔て 一犢（一頭の子牛）鳴く。歩みて幽澗を尋ぬれば 路無きかと疑い、忽ち人家有りて 略徇〔小さな木の橋〕横たわる）という。

明初、呉中の四傑の1人、徐賁は、西澗の地を訪ねて、韋応物の詩と人柄を偲び、「滁州の西澗」詩（『北郭集』巻10）を作った。「渡連西澗草還生、六月黃鸝幾箇鳴。為憶風流韋刺史、也曾來此澗邊行」（渡しは西澗に連なりて 草還お生じ、六月 黃鸝 幾箇か鳴く。為に憶う 風流なる 韋刺史、也曾來て此に來りて 澗邊を行く）。これは、韋詩の韻字のうち、生・鳴をその順序のままに用い、最後の韻字「横」のみ「行」字に換えて作った、依韻の七言絶句である。

明初の鄒緝も、「滁守陳璉の 任に之くを送る」詩（注1）に、「東郊 春已に歇み、西澗 潮還お生ず」と歌い、西澗が滁州を代表する詩跡であることを表している。

また明の著名な文人、文徵明は、「胡栢泉に寄す」詩（『甫田集』巻14）の中で、「遙かに知る 西澗 春潮急にして、野渡の孤舟 尽日横たわるを」と歌った。滁州出身の范麟の「西澗」詩（注2）は、韋詩を踏まえた、典型的な七律の詩跡詩である。「逶迤西澗郡城西、到晚潮声拍岸急、帶雨好山青隱隱、凝煙幽草綠萋萋。孤舟穩渡桃花浪、黃鳥間啼楊柳堤。消長誰能明此理、且將佳致入新題」（逶迤〔長く連なるさま〕たる西澗 郡城（滁州）の西、晩に到りて 潮声 岸を拍って急なり。雨を帯ぶる好山 青くして隱隱、煙を凝らす幽草 緑にして萋萋。孤舟 穩やかに渡る 桃花の浪（春の増水）、黃鳥（ウグイスの1種。黃鸝と同意）間に啼く 楊柳の堤。消長 誰か能く此の理に明らかなる、且く佳致（すばらしい景色）を將て 新題〔新作の詩〕に入れん）。

旅の機会を捉えて熱心に詩跡を探訪した清初の大詩人、王漁洋（士禛）は、康熙24年（1685）の5月29日、南海（広州）からの帰途、滁州を通り、「西澗」詩（『漁洋山人精華録』巻10）を作った。時に52歳である。「西澗蕭蕭數騎過、韋公詩句奈愁何。黃鸝喚客且須住、野渡庵前風雨多」（西澗に 蕭蕭〔馬の声〕として 數騎過る、韋公〔応物〕の詩句 愁いを奈何せん。黃鸝 客〔旅人たる私〕を喚べば 且く須らく住まるべし、野渡の庵前 風雨多し）。詩の自注に、「澗の上りに野渡庵有り、韋詩（の結句）を取って命名す」とある。譚慶龍編『琅琊山詩詞選』（黄山書社、1990年）には、野渡庵について、「寺庵の名。旧跡は西澗の水辺にあった。南北交通の通路にあるため、宋以後、僧がここに住み、寺庵を建てた。現在久しく廢れている」と注する。

滁州の西澗は、韋応物「滁州の西澗」詩1首によって詩跡化し、詩の意境と韋応物の人柄を偲ぶ詩跡となった。今日、すでに清らかな湖水の下に沈んでいるため、その地を直接探訪できないのは残念である。

（注1） 譚慶龍編『琅琊山詩詞選』（黄山書社、1990年）所収。

（注2） 譚慶龍編『琅琊山詩詞選』所収。同書は、「桃花浪」を「地名。西澗水の水源、桃花澗を指す」

とするが、誤りであろう。ちなみに本詩は、第2句の韻が踏み落としである。(第1句は押韻)

⑧琅琊山

琅琊山は滁州の西南5キロの地にあり、その名は、東晋の元帝司馬睿が即位する前、「瑯(=琅)瑯王と為り、地を此の山に避け」(戦乱を避けて山に寓居)たことにちなむという(『太平寰宇記』巻128)。(注1) 中唐の顧況「瑯瑯の上方に題す」詩にいう、「東晋の王家 此の溪に在り、南朝の樹色 窓を隔てて低る」と。韋応物の詩中では、西山とも呼ばれている。北宋の王禹偁「瑯瑯山」詩(『小畜集』巻10)の題下自注には、「東晋の元帝、瑯瑯王を以て、常て此の山に居る。故に溪山皆な瑯瑯の号有り。知らず 晋已然 何の名なるかを」という。

唐の滁州刺史李幼卿(注2)は、着任した大暦6年(771)、僧法深とともに瑯瑯山中に寺院を建て、境内に庶子泉を穿った。寺の名は宝応寺、宋代、開化寺となり、瑯瑯寺は、その通称である。庶子泉の名は、李幼卿の前官、太子庶子にちなむ。(注3) これ以降、瑯瑯山の開発が進み、建中3年(782)、滁州刺史となった韋応物は、「瑯瑯山寺に遊ぶ」「元錫と共に瑯瑯寺に題す」「秋景 瑯瑯の精舎(寺)に詣る」詩などを書いている。

北宋の至道元年(995)、滁州知事となった王禹偁は、「瑯瑯山」詩を作り、「名を流すは 東晋よりし、積翠 南譙(郡名。滁州の地)に満つ」と歌い、寺(開化寺)の名勝を詠んだ「八絶詩」8首(『小畜集』巻8)を作った。北宋中期には欧陽脩ゆかりの醉翁亭や豊楽亭(亭のある豊山は、広義の瑯瑯山の中に含まれる)が造られ、欧陽脩もまた、「瑯瑯山六題」詩(庶子泉・瑯瑯溪・帰雲洞など)を作っている。かくして北宋後期の曾肇『滁州慶曆集』序にいう、「泉石林亭の勝、天下に聞こゆるに至る」(『輿地紀勝』巻42所引)状況が生まれた。これは、主に「人口に膾炙し、天下伝誦」(『大明一統志』巻18)した、欧陽脩の名文「醉翁亭記」の力であった。

瑯瑯寺と庶子泉・瑯瑯溪(瑯瑯寺の前から谷に沿って曲折しつつ、現在の深秀湖にそそぐ溪流。命名者は李幼卿)等は、いずれも瑯瑯山の代表的な詩跡であるが、今回の訪中ではたまたま道路の補修工事のため醉翁亭付近で車を降りざるをえず、参観を断念した。瑯瑯寺(民国5年[1916]再建)は、醉翁亭の前の道を進みゆき、山中の奥に入ったところにあったからである。譚慶龍編『瑯瑯山詩詞選』(黄山書社、1990年)は、詩跡としての瑯瑯山を考えるうえで参考になる。

(注1) 中唐の独孤及「瑯瑯溪述」序にいう、「按図経、晋元帝之居瑯瑯邸而為鎮東也、嘗遊息是山、厥跡猶存」と。

(注2) 『大明一統志』巻18には、李幼卿について、「大暦中 太子庶子より出でて滁州を知し、善政有り。暇に瑯瑯山に遊び、景物を号して八絶と為し、滁の人 之を慕う」という。これは、独孤及「瑯瑯溪述」にもとづく。八絶は、王禹偁の「八絶詩」によれば、庶子泉・白龍泉・明月溪・清風亭・望月台・帰雲洞・陽冰篆・垂藤蓋をさす。

(注3) 姫樹明・俞鳳斌編著『琅琊山』(黄山書社、2003年再版)49頁によれば、明の嘉靖32年(1553)、鄭大同が濯纓の2字を石に刻して以降、庶子泉は濯纓泉とも呼ばれるようになったという。

⑨ 醉翁亭

北宋の官僚文人、歐陽脩は、慶曆5年(1045)、滁州の知事に左遷された。その翌年、琅琊寺の僧智仙は、彼のために風景の美しい琅琊山の麓に亭を作った。欧陽脩は、これを醉翁亭と名づけ、「滁を環りて 皆な山なり」で始まる名文「醉翁亭の記」を作り、まだ40歳であるのに自ら醉翁と号した。そしてしばしば賓客と一緒に、「翼然として泉上に臨んだ」醉翁亭を訪れては、なごやかな宴会を楽しんだ。「醉翁亭の記」にいう、「醉翁の意は、酒に在らず、山水の間に在るなり。山水の楽しみは、之を心に得て、之を酒に寓するなり」と。泉上とは、「山行六七里、漸く水声の 潺潺として両峰の間より瀉ぎ出づるを聞く者は、讓泉(釀泉とも書かれる)なり」と書かれた、讓泉のほつりを指す。彼の「滁州の醉翁亭に題す」詩には、「但だ(ひとえに)愛す 亭下の水の、乱峰の間より来るを。声は空より落つるが如く、両簷の前に瀉ぐ」という。

今日、讓泉とされるものは、醉翁亭の前を流れる小さな溪流(玻璃沼)のほとりに湧き出た、正門(欧門)のそばにある山泉を指し、清の康熙20年(1681)、当地の長官王賜魁が刻した「讓泉」の文字が伝わる。ただ水音があまり響かないのは、環境が昔と変わったためなのであろうか。讓泉に対する疑問が生じる。(注1)

明の永楽2年(1404)、滁州知事となった陳璉は、「醉翁亭記」を踏まえた「醉翁亭」詩を詠み、明の王世貞(16世紀後半)は、「滁陽に抵りて拱辰石(石星、字拱辰)太僕の将に至らんとするを聞いて留贈す」(2首その2、『弇州続稿』巻22)のなかで、「琅琊の山色 四時(四季)妍し、最も喜ぶ 清流 讓泉と号するを。先輩(欧陽脩)の風流 今又た見る、使君(石星)剛に及ぶ 醉翁の年(40歳)に」と歌い、明の于冕は「醉翁亭に



醉翁亭の入口

遊ぶ」詩のなかで、ついに訪問できた喜びを、「平生 夢想を勞し、今日 登臨を喜ぶ」と歌っている。^(注2)

熱心に詩跡を探訪した清初の大詩人、王漁洋（士禛）は、康熙24年（1685）の5月28日、南海（広州）からの帰途、滁州に着くと、雨のなか醉翁亭や豊楽亭等を訪ね、五律「雨に醉翁亭に過ぎる」詩3首（『漁洋山人精華録』巻10）等を作った。時に52歳である。その1には、「門前 苻溪の石、亭下 釀泉の流れ。禽鳥 鳴くこと何ぞ楽しき、松篁（松や竹の林） 颯として秋に似たり」とあり、その3には、「欧梅 池閣に映じ、半畝（の地に）

清陰を散ず」という。苻溪の石は、「即ち菱溪石」（作者の自注）、欧陽脩が菱溪（滁州城の東2.5キロの溪流）から三頭の牛に引かせて運んできたとされる岩をいう（現存）。また欧梅とは、欧陽脩の手植えとされる梅の木。亭の北にある高さ7メートルの古梅が、それであると伝える（後人が植え直したものともいう）。たとえ伝承にすぎないとしても、詩中に詠まれたものが存在するのは、きわめてうれしい。醉翁亭は、欧陽脩の名文「醉翁亭記」と彼の闊達な人柄を追慕する詩跡なのである。^(注3)

現存する醉翁亭の建物は、清の光緒7年（1881）、全椒出身の薛時雨^{せつ}が再建したものであり、二賢堂（欧陽脩と王禹偁をまつる祀堂、欧王二公祠）や宝宋齋（蘇軾筆の「醉翁亭記」の碑刻を保護する）などもある。醉翁亭自体も興廃を繰り返したが、しだいに付属の建築物ができて規模が拡大した。今日、北京の陶然亭・湖南の愛晚亭・蘇州の滄浪亭とともに、中国の四大名亭に数えられ、その筆頭に位置する。

醉翁亭の西南200メートルのところには、欧陽脩紀念館（原名は「醉翁亭記」にもとづく同樂園）がある。

ちなみに、欧陽脩は、慶暦6年（1046）、滁州の西郊にある豊山の北麓、幽谷泉（宋の元祐2年〔1087〕、知事の陳知新が改修し、名を紫薇泉と変える^(注4)）のほとりに、豊楽亭を建て、「豊楽亭記」を書いた。ここは、醉翁亭に次ぐ、欧陽脩ゆかりの詩跡として、1996年、豊楽亭等が再建されたが、現在未開放で参観できなかった。早期の開放を切に望んでいる。

(注1) 明初の洪武8年（1375）の歳末、滁州を通った宋濂「琅琊山に遊ぶ記」には、「泉の 両山の間より瀉ぎ出でて、流れを分かちて下る有りて、釀泉と曰う。潺湲として清澈、毛髪を鑑るべし」（『文憲集』巻2）とある。

(注2) 姫樹明主編『滁州古詩文選読』（天馬出版、2004年）所収。

(注3) 『漢詩の事典』第3章、滁州（西澗・醉翁亭）の条参照。

(注4) 姫樹明・兪鳳斌編著『琅琊山』（黄山書社、2003年再版）59頁による。

（附 録）

⑩陋 室

長慶4年（824）、和州刺史となった劉禹錫が、在任中に建てた州治（州庁）内の住まいの名。陋室は陋屋の類語。安徽省和県城（歴陽鎮）内の、陋室公園の中に再建されて

いる。南宋の王象之『輿地紀勝』巻48、和州・景物上・陋室の条に、「唐の劉禹錫の闢^{ひら}く所。又た陋室銘有りて、禹錫の撰する所、今見存（現存）す」とあり、同書同巻、碑記・唐劉禹錫陋室銘の条には、「（唐の著名な書法家である友人）柳公権の書、庁事（役所の執務室）の西偏の陋室に在り」という。

劉禹錫の「陋室銘」とは、「山不在高、有仙則名。水不在深、有龍則靈。斯是陋室、惟吾德馨」（山は高きに在らず、仙有らば則ち名あり。水は深きに在らず、龍有らば則ち靈あり。斯は是れ陋室にして、惟だ吾が徳のみ馨れり）」で始まる、全81字の短い名文。（ただし、劉禹錫の文集には未収。『全唐文』巻608等に所収^{〔注1〕}）元の王義山の詩（「和申屠御史来豫章韻」）の「一衣帶水繞洪城、水不在深龍則靈」（『稼村類藁』巻3）のごとく、「陋室銘」を踏まえた句を生んだが、陋室そのものは、詩中に詠まれて詩跡となることはなく、単なる名勝古跡に終わったようである。

しかし陋室自体は、劉禹錫の「金陵五題」（「山は故国〔古都〕を囲んで 周遭として在り」で始まる七絶「石頭城」、朱雀橋辺 野草花さき」で始まる七絶「烏衣巷」を含む5首）や、晩春の美しい風景を詠んだ名句「野草芳菲たり（花々が咲き匂う）紅錦の地、遊糸繚乱たり（空中に漂う〔蜘蛛の子が吐き出す〕糸が、乱れてからみつく）碧羅（あおい薄絹）の天」（「春日懐いを書し、東洛の白二十二〔居易〕・楊八〔帰厚〕に寄す」詩、『和漢朗詠集』春興所収）などが誕生した場所として忘れがたい。

現在の入口の門首に見える陋室の2文字は、著名な詩人臧克家^{（そうこくか）}の筆になる。また陋室内の主室には、劉禹錫の塑像が立ち、「政擢賢良」（政は賢良を擢^{（ぬきん）}づ）の扁額がかかる。陋室の建物は、清の乾隆年間、和州知事宋思仁が再建した後、光緒年間・民国時代の補修を経て、1987年、大規模に修復されたものという。^{〔注2〕}

〔注1〕 南宋の撰者未詳『錦繡万花谷』後集巻23には「陋室銘」の1部分、明の彭大翼『山堂肆考』巻130には、全文を収める。ちなみに、伊藤正文・一海知義編訳『漢・魏・六朝・唐・宋散文集』（平凡社、中国古典文学大系、1970年）には、「陋室銘」の訳注を収める。

〔注2〕 現在、陋室のところに建つ「陋室簡介」による。『嘉慶重修一統志』巻131（原44冊）、和州・古蹟、陋室の条には、「州治の後ろに在り、遺址猶お存す。唐の劉禹錫の築く所、陋室銘有り」という。

正確な読解と綿密な調査の「基本」を求む

—竹内実編著『岩波 漢詩紀行辞典』論評—

植 木 久 行

2006年5月、京都大学名誉教授・竹内実氏による『岩波 漢詩紀行辞典』が刊行された。やや小さな文字で組まれた「本文」のみで672頁に達し、目次や付録・索引等を含めると、800頁に及ぼんとする大著である。「読んで旅する、旅して読む 漢詩〔330編〕と竹内実の渾然の世界！」。魅惑的なキャッチフレーズを帯紙とした、岩波書店の意欲的な出版物である。

本書は、○凡例（序文にかえて）○目次（掲載詩一覧）○作者別掲載詩一覧 ○表題・名句一覧 ○本 文 ○作者略伝 ○用語解説 ○地名・事項索引 ○人名索引から成り、索引の類がきわめて充実している。そして本書の中心をなす本文は、以下のごとく中国の全土にわたっている。

序 章 禹 域

第一章 江南（江南・杭州・西湖・蘇州・紹興・沈園・鑑湖・南京・鎮江・揚州）

第二章 北京とその周辺（北京・北京郊外・易水・東北・朔北・山東省）

第三章 中 原（中原・洛陽・開封・嵩山・太原・雁門関・雲岡・五台山・内モンゴル）

第四章 長安と辺境（長安・長安東郊・長安西郊・陝北・辺塞・敦煌・甘肅・新疆・戈壁砂漠・青海）

第五章 巴 蜀（五丈原・棧道・漢中・劍門関・成都・峨眉山）

第六章 長江悠悠（三峡・荊州・赤壁・湖北・黄鶴楼・岳陽楼・洞庭湖・湘江・長沙・廬山・柴桑・景德鎮）

第七章 長江下流域（宣城・敬亭山・桃花潭・秋浦・杏花村・采石磯・阿育王寺・天童寺・普陀山・富春江・溪口・黄浦・龍華・^{うみにうかぶ}泛海・租界）

第八章 華南とその奥地（福州・^{フモイ}廈門・桂林・広州・海南島・貴州・昆明・ラサ）

第九章 扶 桑（東京・須磨・下関）

「域外として扶桑（日本）を加え、序章の『禹域』とあわせて全一〇章と」する。その下に約80箇所地名を項目としてかけ、当地ゆかりの330首の詩詞を厳選し、解説と訳注を施した辞典である。著者自身、本書執筆のねらいを、こういう、「旅をして胸をうたれることがある。この風景は、なにを訴えようとしているのか。むかしのひとはな

にを、どのように感じたのか。詩をつうじて知ることは、できないか。あえてこうした疑問、あるいは渴望にこたえようとした」と。そして詩詞を通して風景美を再生する作業のなかで、「地名にちなむ詩や詞が地名と刺激、共鳴しあって別格の詩境をみせる。土地も新しい風景に見えてきた」と述べて、「詩の旅の醍醐味」を表白する。(以上、凡例)

本書は、辞典として不可欠の網羅性という点から見れば、満足すべき構成を持つ。特に租界の項目や扶桑の章は、斬新ではある。しかし後者の扶桑の章は、中国人の作に限定しているため、内容は貧弱である。「禹域」の漢詩紀行辞典であれば、扶桑の章は本来不用である。日本の優れた漢詩を中心とした『日本漢詩紀行辞典』として、独自の一冊を編成すべきであろう。

本書に収める、地名ゆかりの作品は、狭義の「詩」だけでなく、「詞」の名作を多くまじえたことは、「名詩で旅する中国」^(注1)の魅力を、より一層深めることになっている。「廣大無辺の世界をうたったあまたの詩の中から三三〇編を厳選。これを読み解いて時空を超えた旅を試みようとしたユニークな辞典」と見なす書評^(注2)も、当然生じよう。

広大な中国各地を詠んだ無数の詩詞を収集して、その中から330首を選び、その解説と訳注を施す作業は、きわめて困難である。しかし本書の場合、詩詞の大半は、凡例にあげた楊剛編著『中国名勝詩詞大辞典』(浙江大学出版社、2001年)にもとづいており、辺境を詠んだ詩の選択も容易であった。^(注3)『中国名勝詩詞大辞典』は、楊剛氏が1982年、編纂に着手し、1992年、武漢市で刊行したものを補訂・再刊した書。中国各地を読み込んだ詩詞の搜集・編纂・注釈に20年近い努力を傾注した労作である。^(注4)しかし1126頁におよぶ大冊を、楊剛氏が独力で完成しているため、参照資料の悪さ、解説や注釈の誤解も散見される。従って本書を重要な参考資料として利用する際には、再度の検討が求められる。竹内実編著に、楊剛編著本の誤りを受け継いだところがあるのは、残念である。

本書は、朝日・読売両新聞の好意的な紹介・書評の影響もあって増刷されるほどの売れ行きである。しかし筆者には、そうした紹介や書評を行った人は、はたして漢詩の基礎知識を持った人なのであるだろうか、と疑問を抱かざるを得ない。というのは、著書の基本である、作品の正確な読解と綿密な調査の面で重大な誤りが多く見られることである。大部の著書であれば、誤読や誤解が多少生じるものであるが、本書は通常レベルを遥かに超え、読解の誤りや資料調査の不備が際だっている。このため、本書を熟読する読者ほど誤解を深めていく、悲惨な事態に陥る。以下、具体例をあげて、主要な問題点を指摘してみたい。

(1) 基礎的な知識に関する問題

●44頁、「題臨安邸」の注に、「題」を「眼前にあることがらやものについて詩文をつくる」意とする。しかしこの「題」は、題壁の風習を表す用例であり、詩を壁に書き記すこと。202頁の「題烏江亭」の注なども、同じ誤りを犯す。

●215頁「京城」の注に、「みやこ。洛陽は長安とならぶもう一つのみやこだった」とある。劉禹錫「賞牡丹」詩の結句「花開時節動京城」の京城は、瞿蛻園『劉禹錫集箋証』（上海古籍出版社、1989年、789頁）等に指摘されるごとく、じつは洛陽ではなく、長安を指す。当時（中唐）の洛陽は、すでに皇帝の訪れがとだえた、高官の退老の地と化していた。解説に「牡丹のみやこといわれるほど、洛陽ではさかんに栽培された」とあるが、洛陽の牡丹は、北宋以降盛大となり、唐代では、長安に著しく劣っていた。本詩を洛陽の条に収めるのは誤り。

●267頁「千秋楽」の注に、「花萼相輝楼というのは宴会用の建物だったろう。名称はりっぱだが、じつは仮設のテントだったかもしれない」とある。花萼相輝楼は、玄宗が住んだ興慶宮内の西南隅に、勤政務本楼とともにあった、豪華な高樓を指し、「仮設のテント」の可能性は全くない。拙著『唐詩の風景』（講談社・学術文庫）51頁以下等参照。

●268頁「兵車行」の第四句「耶嬢妻子走相送」の妻子は、文言の「つまこ」（訓）、「女たち、子ども」（269頁の訳文）ではなく、「耶嬢」と同じ白話としての用例。単に「妻」の意。松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店、1987年）399頁以下参照。

●270頁「擣衣」の注に、「衣服を洗うとき、汚れが落ちるよう砧^{きぬた}を打つ。辺境にいる夫に衣服を送ろうと洗濯している」とある。しかし擣衣は、織りあげた絹布を杵で打つこと。繊維中の膠^{にか}や不純物を除去し、布地をしなやかにして光沢を出す作業。このあと裁断する。拙著『唐詩歳時記』（講談社・学術文庫）318頁以下参照。「前線の夫に冬着をとどけようと、洗濯しているのだ」（271頁）は誤り。

●366頁3行目、岑参「経火山」詩の「何独然此中」の訓に、「なんぞひとりこのなかにかくある」とある。この「然」は、燃の本字、もえる意。「かく（ある）」ではない。「此中」は、二字で「ここ」の意。従って「なんぞひとりここにのみ然^もゆるや」となる。

●401頁、李白詩の第四句「珠箔懸銀鉤」の訓に、「珠箔^{しんじゆきんぼく}銀の鉤^{かぎ}にかかる」とある。しかし「珠箔」は真珠の簾を意味する一語。「真珠や金箔の簾」（訳文）ではない。

第7句「今来一登望」の「今来」の訓に、「いまきたり」とあるが、二字で「いま」の意。「今来」の来は、時間詞につく接尾辞。「夜来」「晚来」の来と同じ。「来」字を誤読した結果、誤訳「途中、散花楼をみかけ、楼上にのぼって眺望した」が生じた。

●467頁、本文1行目に、「…詩に詠じ、これをみやこの張九齡におくった」とある。しかし詩題は、「洞庭湖を望み張丞相（九齡）に贈る」である。贈は、直接相手に対して手渡しする意。離れた人に送る場合は、「寄」の字を用いる。従って「これをみやこの張九齡におくった」とするのは、誤り。

●528頁、「豊嶂楼」詩の第六句に、「刹影亭亭古寺幽」とある。冒頭の「刹影」の訓「刹^{てら}のつくり」は誤り。この「刹」は、寺の意味ではなく、仏塔（寺塔）のこと。「亭亭」は、その仏塔が高々と立つさま。従って「ちなみに第六句、刹と寺と文字をかえているのも、工夫したのだろう。境内にさまざまな建物があるといいたいのである」（530頁）は、誤解である。

●540頁、梅堯臣「采石（「月」字を脱す）贈郭功甫」詩の第七句「青山有冢人謾伝」の訓に、「青山 冢^{つか}あれば ひと ひろく伝えん」とある。しかし「謾」の字は、「ひろく」ではなく、「みだりに」（いかげんに）の意。訳文「なきがらがあれば、墓があって、ひとびとがひろくいつたえるだろうに」は、誤り。「（当塗県の）青山に墓があり、人々はいいかげんに（かってに）李白の墓だと言いつたえている」の意。「青山」の注「あおあおと樹が茂る山。骨を埋める理想の地とされ、この詩でも冢（墓の土まんじゅう）が言及されている」も誤り。この青山は、普通名詞ではなく、固有名詞。当塗県城の東南7.5キロの地、そこに李白の墓がある。松浦友久編『漢詩の事典』（大修館書店、1999年）518頁参照。

（2）詩形・押韻・対句の読みに関する問題

- 83頁、王羲之の「蘭亭詩」を、「五言律詩」と注するが、五言古詩の誤り。平仄上からも律詩ではない。当時、五言律詩の詩形など、まだ発生していなかった。
- 153頁、詩題「居庸疊翠」の注に、「七言律詩」とするが、七言古詩の誤り。換韻している詩は、すべて近体詩（絶句・律詩・排律）ではありえない。306頁「過六盤山」の注「五言排律。上声紙・麤韻（換韻）。…」とあるのも、同じ誤り。
- 200頁、「和垓下歌」の注に、本詩を「五言絶句」とするが、五言古詩の誤り。この伝・虞姬（項羽の愛妾）の作は、六朝以前の作。絶句は唐代になって、初めて成立した詩形である。しかも絶句の声律（平仄）にも合わない。
- 432頁、詩題「巫山高」の注に、本詩を「五言律詩」とする。確かに「二四不同」を犯す第五句を除いて、律詩の声律（平仄）に合うが、作者の范雲は律詩が成立する前の、六朝・梁の人。従って五言古詩と見なすべきである。
- 152頁、「居庸疊翠」詩の押韻は、鉄・裂・雪（第1・2・4句） / 道・老・小（第5・6・8句）である。（換韻）従って154頁の解説…「前半の「裂」「雪」は入声なので」「後半の「老」「小」は上声なので」の部分は、それぞれ「前半の「鉄」「裂」「雪」は入声なので」「後半の「道」「老」「小」は上声なので」に訂正すべし。
- 156頁、詩題「観滄海」（曹操の作）の注に、「押韻にとらわれない」という。しかし本詩は、海・峙・茂・起・裏と押韻する。于安瀾『漢魏六朝韻譜』（河南人民出版社、1989年）256頁参照。漢魏ごろの押韻は、後世の発音と大きく異なる口頭の発音によってなされ、通常の漢字音では推定がきわめて困難である。
- 213頁、詩題「公子行」（抄）の注に、「四句ずつ押韻」とする。しかし引用部分の詩は、4句→6句→2句で換韻し、韻字は、水・子・裏 / 砂・霞・花・家 / 香・傍となる。
- 329頁、詩題「胡笳歌送顔真卿使赴河隴西」（「西」字は衍字）の注に、「平声支（起句と第二句）・麻（第七、八句）・文（第九、十句）、上声皓（第五、六句）韻（ほか押韻にとらわれない）」という。しかしこれは、「平声支（起句と第二、四句）・麻（第七、八句）・文（第九、十、十二句）、上声皓（第五、六句）韻」と訂正すべし。具体的に言えば、本詩は、悲・吹・児 / 道・草 / 斜・笳 / 君・雲・聞と換韻する。中国の古典詩では、「押韻にとらわれ

ない」作品は基本的に存在しない。

●350頁「鳴沙山」(抄)の注に「七言古詩(押韻にこだわっていない)。…」とある。しかし本詩は、鳴・行・平/雨・舞/闌・仙と換韻しており、古詩の押韻法に従っている。「押韻にこだわっていない」とする指摘は誤り。

●355頁、詩題「涼州館中与諸判官夜集」の注に、「平声尤(第一、二句)・麻(三、四)・上声早(五)・平声寒(六)・平声真(七、八)・上声皓(九、十)・平声灰(十一)・上声皓韻(十二)(二句ずつ押韻。ただし五・六、十一・十二句は押韻せず)」とある。これでは、換韻の状況が不明、誤解も多い。本詩は、頭・州/家・琶/断・漫/人・春/草・老・倒と換韻する。「断・漫」[上声早(五)・平声寒(六)]は、古詩ゆえの通押。「五・六、…は押韻せず」は誤り。終わりの四句(第九～一二句)は、草・老・倒と押韻する。従って「十一・十二句は押韻せず」ではなく、第九・十・十二句が押韻するのである。従って「上声皓(九、十)・平声灰(十一)・上声皓韻(十二)」のうち、平声灰(十一)はカットすべし。かくして「二句ずつ押韻」も誤りとなる。「書記なかまの酒宴で、大酔泥酔したので、その無礼講をあらわすためか、押韻も一つの韻でとおす「一韻到底」ではなく、二句ごとに押韻し、しかも、押韻していない句もある」(356頁)も、明白な誤り。古詩の押韻法に従っており、「押韻していない句もある」は誤解。

●255頁、「賜宴諸蒙古」詩の第三句「霜仗輝煌明塞日」の下三字の訓を、「明塞の^{めいさい}日のひかり」とする。しかし下句(晴旂宛転捲辺風)の「辺風」と対をなすため、「塞日」で一語。(明塞では意味不明) 辺塞の太陽の光を受けて明るくきらめく意。「塞日に明るし[明らかなり]」と訓むべし。

●317頁、「夏城漫興」詩の頷聯「名存異代唐渠古、雲鎖空山夏寺多」の訓を、「名^かのこるも代^{こと}なり唐渠ふるく、雲とざす空山^か夏の寺おおし」とする。しかしこの二句は対句であるため、「異代」は「空山」と対し、「代^{こと}なり」ではなく、「ことなる代^{こと}」(後世、後代)の意。「時代を異にする」(「異代」注)意味ではない。通常の訓読では、「名^か異代に存して唐渠古く、雲空山を鎖して夏寺多し」となる。

●394頁2～3行目、「漢台」詩の「磊落真王氣、蒼茫大將壇」の訓を、「らいらくまことに王氣あり、そうぼう大將壇」とする。しかしこの二句は対句。従って「らいらく真王の氣(あり)、そうぼう大將の壇」となる。「まことに王氣あり」ではない。

●639頁2行目、「丹崖樹色著霜初」の訓に、「丹崖の樹のいろ^{たんがい}霜のはじめを^{きぎ}あらわす」とある。このうち、下三字の訓は誤読。上句の「揺浪処」(浪を揺らす処)と対をなすため、「霜を著くる初め」と訓むべし。

(3) 基礎調査の不備に関する問題

●14頁、詩題「江南春」の注には、三点の誤りがある。①「もとの題は、「江南道中春望」(『樊川文集』)」とする。しかし最良の『樊川文集』(四部叢刊)には、「江南春絶句」に作り、より古い『樊川文集夾注』(明正統五年朝鮮刻本)の詩題「江南春絶」は、「句」の一字を

脱したもの。②『三体詩』の編者が原題から二字をとって、楽器にあわせてうたう楽府の題とした」とする。これは、論拠のない誤り。③「江南道中春望」の道中は、旅の途中（路上）の意。この「道は行政区画」ではない。

●183頁2行目、玄宗の「経鄒魯祭孔子而嘆之」詩の「嘆鳳嗟身否」に対して、「おおとりを嘆じなげくこと、ありしとか」（訓）、「鳳凰が飛来してこないの、さすがに嘆息されたとか」（訳文）という。しかし句末の「否」は、「…したかどうか。わざと、ぼかして表現したもの」（注）ではなく、下句（傷麟怨道窮）の「窮」字と対をなし、「ものごとのふさがるさま、不運」（易の卦の名）の意。従って訳も「鳳凰が飛来してこないことを悲しんでは、わが身の不運をお嘆きになり」となる。

4行目「今看両楹間」の間は、「奠」字の誤り。従って「いま 両楹^{かん}の間をみるに」の訓は、「いま 両楹に^{まつ}奠らるるをみるに」となる。従って本句と次の句（当与夢時同）の訳文「さて、いまやこうして、お墓にお参りでき、生家をおたずねし、先生の夢にあらわれた東西二本の柱をまのあたりにみ、感激で、いっぱいです」（184頁）は、「いま私は、こうして（聖廟の）二本の柱の間に祭られているお姿を拝見している。きっと先生が夢の中でご覧になったのと同じ情景に違いない」に訂正すべし。

詩題「経鄒魯祭孔子而嘆之」の注に、本詩を「五言古詩」とするが、五言律詩の誤り。

184頁の解説に、「作者は唐の玄宗。王朝最盛期の皇帝にしては稚拙な詩である」というが、日中両国で愛読された清の孫洙『唐詩三百首』のなかに収める作品であり、「孔子に関する故事が各句に詠みこまれた力作」（田部井文雄『唐詩三百首詳解』大修館書店、1988年）、と見なすべきであろう。

●483頁、「省試湘靈鼓瑟」の注に、本詩を「五言古詩」とするが、五言排律の誤り。古詩ではなく、近体詩の一種、排律である。

「省試」の注「官吏採用試験『科挙』」は、「高等文官資格試験『科挙』」に訂正すべし。当時、科挙（進士）に受かっただけでは、役人になれなかった。

4行目、「苦調凄金石」の訓に、「かなしき しらべ 金石^{きんせき}をも さびしがらせ」、訳文「悲しい曲調は金石にまでしみいって、感情のない金石が悲しく思うほどであった」とある。この「金石」は、鐘や磬などの打楽器を指す。従って訓は「かなしき しらべ 金石よりも^{すさま}凄じく」となり、訳も「悲しい曲調は、鐘や磬よりも凄絶にひびきわたり」となる。

本文5行目の訳文に、「堯の二人の姉妹は、瑟をひくのがたくみで、湘靈となったあとも、その音色は消えず聞こえていた」とある。これは、詩の冒頭の二句「善鼓雲和瑟、常聞帝子靈」の訳であるが、その二句は一種の倒置法であり、「常に聞く 帝子の靈は、善く雲和の瑟を鼓すと」の意。従って上述の訳文は、不適切。

485頁3行目に、「湘水の水は渚をしめらせて流れ、洞庭湖の水面を悲風がわたっていく」とある。これは、「流水伝瀟[湘]浦、悲風過洞庭」の訳文であるが、「流水」「悲風」が、一種の^{かけことば}双関語であることを見逃している。「流れる水のような調べは、清らかな湘水の流れによって流域一帯に伝わり、悲しい風を思わせる調べは、吹きよせる烈し

い風によって洞庭湖の水面^{みのも}を渡っていく」の意。なお、本詩については、拙著『唐詩物語—名詩誕生の虚と実と』（大修館書店、2002年）118頁以下参照。

●545頁、「中峰夜坐」詩は、参照資料が劣る。古くは、北宋の釈惠洪『冷齋夜話』巻6、「智覚禪師の詩を誦す」の条に、「智覚禪師、雪竇^{せつとう}の中崑（岩）に住し、嘗て詩を作りて曰く」として、本詩を引く。（智覚禪師は宏智）文字の異同が大きく、『冷齋夜話』（中華書局、陳新点校、1988年）のほうがテキストとして優れる。

| | | |
|---------|-------------|-----------|
| ○竹内本 | ○『冷齋夜話』 | （〔 〕内が異文） |
| 哀猿叫落中岩月 | [孤] 猿叫落中岩月 | |
| 野客吟残夜半燈 | 野客吟残〔半夜〕燈 | |
| 此景此時誰會得 | 此〔境〕此時誰〔得意〕 | |
| 白雲深處坐枯僧 | 白雲深處坐〔禪〕僧 | |

ちなみに、清代の『御選宋金元明四朝詩』のうちの、『御選宋詩』巻74には、「雪竇中巖夜吟」と題する。^(注5) つまり本詩は、天童寺付近の作ではなく、雪竇山^{せつとうさん}（浙江省四明山の別峰。寧波の東郊ではなく、その西南50キロ弱の地）での作。従って「中峰」の注「寺（天童寺…引用者注）のまわり、太白山の山峰の一つ」などは、誤解。

●559頁、「龍華夜泊」詩を晩唐の皮日休の作と見なし、「この詩は上海、龍華（現在の上海市の城区…引用者注）をうたった詩としてはもっとも古い」と解説する。これは、安易に楊剛本に従ったものであるが、本詩は『全唐詩』『全唐詩補編』に未収であり、晩唐期の上海付近の状況を考えれば、皮日休の作とは見なしがたい。

●560頁に、陸游の作とする「登塔眺望」詩を収めるが、この詩題は、錢仲聯『劍南詩稿校注』（上海古籍出版社、1985年）のなかに見えない。（四庫全書本にも見えない）。陸游の詩ではなかろう。「作者はこの夜、龍華寺に一泊し、その感想をうたった詩もつたわっている」とするが、これは楊剛本に引きずられた誤解。楊剛本は、陸游の「宿龍華寂無一人、方丈前梅花盛開、月下独觀至中夜」詩を収録する（173頁）が、その詩は、じつは「宿龍華山中、寂然無一人。方丈前、梅花盛開。月下独觀、至中夜」と題し（『劍南詩稿校注』巻9、746頁）、四川省での作。『劍南詩稿校注』の説によれば、淳熙4年12月、広都での作。龍華山は広都県の南（成都市の西南郊外）にあった。つまり、「龍華寺に一泊し、その感想をうたった」詩は、上海市の龍華寺を詠んだものではない。

●625頁、「謫嶺南道中作」詩は、大中2年（848）5月の作。作者の李德裕が、大中2年、洛陽から潮州（広東省潮州市）司馬に左遷される途中の作。5月、貶所の潮州に着任するが、その直前、広東省での作。（傅璇琮・周建国『李德裕文集校箋』河北教育出版社、2000年など参照）従って本詩を海南島の条に収めるのは誤り。楊剛本も誤る。^(注6) また626頁の解説、「作者は唐王朝の宰相だった。それが海南島に流されたのである。流罪になっても官職をあたえられるが、低い。作者は司戸。…」も、もちろん誤り。本詩は、崖州司戸參軍に左遷される前の、潮州司馬在任中の作。

「嶺水争分路転迷」の訓「嶺の水は 分れをあらそい 路 まがり まよう」の訓は、

「嶺の水は 争い分かれて 路 転^{うた}た まよう」に訂正すべし。「転」は、動詞「まがる」ではなく、副詞「いよいよ、ますます」の意。訳文は当然訂正を要する。

「愁衝毒霧逢蛇草」の訓「毒霧にまかれ 蛇草に あうを うれい」も問題。下句（畏落沙虫避燕泥）と対をなすため、「毒霧にまかるを うれいて 蛇草に あう」と訓むべし。訳も「毒霧につつまれ、毒草にであうのがわたしのなやみの種だ」ではなく、「毒霧にぶつかることを心配しながら行くと、毒草に出会う」の意。「蛇草」の注、「蛇でさえ、これをかめば死ぬという毒草」は疑問。毒蛇が噛んだ草のこと。噛まれて枯れた後でも、人が触れると指が落ち、腕が曲がるという。『増注三体詩』巻2（富山房・漢文大系、明治43年）、村上哲見訳注『三体詩』上（朝日新聞社、1966年）等参照。

「三更津吏報潮鶏」の訓、「三更 みなとの 吏 潮^{したやく しお}を報^{とり}じる鶏と なる」は、上句（五月畚田収火米）と対をなすため、下三字は「潮鶏を報ず」と訓むべし。「まよなかに、下役が満潮をしらせる声がきこえる。ときをしらせる鶏のようなので、報潮鶏というあだなだ」（626頁）の訳も、「まだ真夜中なのに、渡し場の役人が、鶏が鳴いて潮が満ち、船出のときがきた、と知らせに来る」となる。

「不堪腸断思郷処」の訓、「腸^{はらわた} 断たれ ふるさと しのぶに たえざる ところ」は、「腸断たるるに たえず ふるさと しのぶ ところ（とき）」に、訳「断腸のおもいでふるさとをしのおと」は、「断腸のおもいにたえかねて、ふるさとをしのおとき」に訂正すべし。

要するに、本詩の場合、『三体詩』にも「嶺南道中」と題しおさめる」と注しながら、『三体詩』の訳注書を参照していないのが惜まれる。

（４）省略（抄）に関する問題

●231頁1行目「錦鱗…」(「題晋祠」詩)の句の前に、二句省略の注記が必要。それをせずに、単に「全十六句」という注だけでは、引用八句の後に、残りの10句が省略されていると錯覚してしまう。詩の前半・半ば・後半部の一続きの引用ならば、省略の語がなくとも、あまり問題とはならない。

●499頁、全88句の「琵琶行」詩に関していえば、一行目、「忽聞…」句のまえに4句の省略があり、そのあとにまた、4句の省略がある。続いて6行目、「未成…」句のあとに、2句の省略、8行目、「説尽…」句のあとに、第21句～第64句の省略、10行目、「相逢…」句のあとに、第67句～第86句の省略がある。このままの形で訳出されているため、読者にはどこに省略があるのか、全く分からない。分量の関係で「抄」にするのはやむを得ないが、せめて「中略」の指摘がほしい。

●553頁、「富春」詩の第2句「一川如画…」のあとに、中略の注記が必要。掲載のしかたは、楊剛本そのままであるが、律詩の首聯と尾聯をあげて、中間の頷聯・頸聯を省略し、中略の指摘もなくそのまま訳出する。本詩は有名な詩ではなく、律詩の前半部の如く錯覚しよう。

このように見てくると、本書は辞典の基本、正確な読解と綿密な調査をないがしろにした粗悪な書、と評せざるを得ない。新聞所載の高い評価は、書評者の漢詩知識の不足を露呈したものにほかならない。筆者はすでに詳細な札記を完成しているが、既述の文章で、本書の水準を充分推し量ることができよう。今はただ、著者と出版社が互いに協力して、誤解の流布を防止する具体的な方策を採ることを熱望して筆を置く。

【注】

- (1) 2006年7月3日、『読売新聞』の出版トピックスに見える、本書紹介の見出し。
- (2) 2006年7月16日、『朝日新聞』の読書欄に掲載された加藤千洋（本社編集委員）氏の書評。
- (3) 当然のことながら、作品の文字については、必ずしもそのまま従わず、別の資料を用いて検討している。
- (4) 同書の巻末に付す楊剛「編後記」による。
- (5) 詩の文字は、『冷斎夜話』と同じ。また『五燈会元』巻10,天台韶国師法嗣・永明延寿〔智覚禪師〕の条に見える詩の文字も、『冷斎夜話』と同じく、題を欠く（偈とする）。
- (6) 楊剛本の詩題「貶崖州司戸道中」は、ひどい誤り。

〔補注〕

本稿は、平成18年8月24日（木）、弘前大学総合教育棟4階、410講義室で行った科研費・基盤研究B「詩跡（歌枕）研究による中国文学史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に関する研究—」による研究会で、「竹内実編著『岩波 漢詩紀行辞典』に対する論評—将来の詩跡辞典作成構想と関連させつつ—」と題して発表したものを基礎に書き改めたものである。

〔追補〕

岩波書店のホームページの「謹告」をクリックすると、2007年11月12日 の日付で、次のような岩波書店の「お知らせ」が出た。—『岩波 漢詩紀行辞典』（2006年5月25日発行）は、第3刷までを刊行いたしました。内容に関わって読者の方々から多くの貴重なご指摘をいただき、第4刷に際して、編著者はそれらのご指摘もふまえて、あらためて全体的に検討・推敲をいたしました。その結果、訂正箇所が通常の重版訂正の範囲を大きく越えることになりました。つきましては、同辞典の第1刷から第3刷までを購入された方でご希望の方には、第4刷とお取り替えいたします。まことにお手数をおかけしますが、下記あてに着払いにてお送りくだされば、折り返し第4刷をお送りいたします。—

この第4刷は、かなり良く訂正されているが、頁数を動かさない方針のために、不十分な結果に終わっており、かえって悪くなっているところもある。著者の力量不足と修補の限界を露呈している、と評すべきであろう。

竹内実編著『岩波 漢詩紀行辞典』札記

植 木 久 行

序 章 禹 域

○5頁の「鶴鵲楼」注、鶴はこうのとり、鵲はかささぎ。→鶴鵲の2字で、こうのとり。鶴雀とも書く。後ろから2行目、蒲州県→蒲州の誤り。

○6頁、10行目、メロディ（声調。…）→トーン（声調。…）とすべし。

○8～9頁、張九齡「登荊州城望江」→劉斯翰校注『曲江集』（広東人民出版社、1986年）等には、本詩を4句ずつの2首と見なす。たとえ1首であるとしても、途中で換韻している以上、五言古詩であって、五言律詩（9頁の注）ではない。詩の第4句「復歎誰家子」の訳、「この城を守ったのは、どこの家の子弟だったのか。嘆息するばかりである」は、疑問。参考：入谷仙介『唐詩名作選』（日中出版、1983年）には、第3句を含めて、「お前が流れていく間に、どれだけの世代の人間をながめて通りすぎたのであろうか。そのことを思い、嘆息している人がいるが、あれはどこの人だろう」と訳す。ただし筆者は、劉斯翰校注『曲江集』に、「誰家子」を「詩人自謂」という説に従いたい。「西来昼夜流」の西来を、「西を眺めると」と訳するのは、意識しすぎ。「西から流れきて」と訳すべきであろう。

○11頁、「出塞」の訓「ただ龍城に飛将あらしめば」と、12頁4行目、「飛將軍とあだ名された李広が、龍城を守備しているかぎり」という第3句の訳文は、いずれも無理。松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店、1987年）参照（93頁、高橋良行執筆）。訓は「^た但だ龍城の飛将をして在らしめば」がよい。「龍城の飛將軍」と畏怖された李広のような名将が、今の世にいさえすれば、（異民族の騎兵たちに、みすみす陰山山脈を越えて侵入させることはあるまいに）の意。「龍城」の注、いまの河北省喜峰口にあった。→盧龍塞（いまの河北省喜峰口）のこと。通常の「龍城」の場所ではないため、こう書かないと、わからない。

○12～13頁、聴不尽→聴き尽くせず（最後まで聴くに堪えない）の意味でも、考察すべし。

○14頁、「江南春」の詩題注→3点の誤りがある。1、もとの題は、「江南道中春望」（『樊川文集』）。→『樊川文集』（四部叢刊）には、「江南春絶句」に作る。2、『三体詩』の編者が原題から二字をとって、…樂府の題とした。→論拠のない誤り。3、「江南道中春望」の道中は、旅の途中（路上）の意であり、この「道は行政区画」ではない。

○15頁、「四百八十寺」の注に見える「平声」のルビは、50頁にならって、「ひょうしょう」と読むべきである。

第一章 江南

○21頁、「江南」の解説、「漢代までは湖北省南部、湖南省、…をもさした」→唐代でも、広義の江南の用法は存在する。拙著『唐詩の風景』（講談社・学術文庫）173頁以下参照。「憶江南」の第3句「日出江花紅勝火」の訓、「日^{かわ}江より出で 花のくれない…」→「日出づれば 江べの花 くれないにして…」 2 + 2 + 3のリズムに従うべし。

○22頁10行・12行目では、いずれも「江」の1字を脱する。後ろから2行目、五十七歳→六十七歳 八二八年→八三八年の誤り。

○23頁1行目、「…曲により拍して句となす」→「…曲拍（曲の拍子・リズム）に依りて句をなす」の誤読。

○24頁、「春水碧於天」の句を、「江南の碧水^{あおいみず}」と訳する。もう少し丁寧な訳が必要。比較の「於」などが、訳されていない。後ろから3行目、「還郷須断腸」の訳、「うっかり故郷に帰ろうものなら、江南の方角をみやって、断腸のおもいで後悔しますよ」→「…、戦乱で変わり果てた故郷（中原）の姿に、きっと深い悲しみを覚えよう」。この解釈も充分考慮すべきである。唐圭璋ほか『唐宋词選注』（北京出版社、1982年）参照。

○29頁2行目、「（游女多）随陌上郎」の訳、「若者のあとをつけたりするのだ」→随の基本義は、あとに付き従う、ついていく。これでよい。「江村即事」詩の第2句、「水平風軟）燕飛回」の訓「燕飛びては もどる」→「燕飛び^{めぐ}回る」のほうがよくはないか？

訳文（30頁1行目）「飛んでいった燕が、またもどってきた」も、「燕が飛びかう」と訳すべきであろう。注の「水平」「河や水路にほとんど波がたたないこと」→こうした「水平」の平は、満ちあふれるさまをも表す。魏耕原『全唐詩語詞通釈』（中国社会科学出版社、2001年）参照。

○30頁4行目、訳文の「一杯のんで弁当をたべようか」は、本詩が眼前の景物を詠む「即事」の歌であることを考えれば、カットすべきであろう。詩題「烧筍」の注、上声養韻→平声陽韻の誤り。この五言絶句は、長と香が韻を踏む。長の字には上声養韻に属する発音もあるが、本詩では結句の「香」字と押韻するため、平声陽韻に属する発音である。

○33頁、乍の注、「ちょっと。しばらく」→「ふいに、いきなり」の意味であろう。32頁3行目の読み（訓）には、乍の字が訳されていない。34頁2行目の訳文にも、乍の字が訳されていない。訳文「舞を舞い」の箇所を、「ふいに」などと改訳した方がよい。

注の「丁丁」の読み「とうとう、ていてい」→ていていは、カットすべし（破読）。

○38頁、「試院煎茶」の詩形「七言古詩」→雑言古詩とすべきであろう。

○39頁、「煎水意」の注 むかしのひとが「水を煎^にるのであって茶を煎^にるのではない」といった、その秘訣。→原注の「古語云、煎水不煎茶」を指摘すべし。注「李生」の条、炎をあげさせた火でわかす→炎をあげさせた炭火でわかす（41頁の1行目にも、炭の字を入れる）ちなみに、「むかし李約というひとがいて」→「唐の李約は」とした方が簡明。注「蛾眉」の条、「眉が蝶、または蛾の触覚…」→「眉が蛾の触覚…」とし、「蝶、または」の部分は、カットすべし。注「公家」の条、「朝廷。…」→小川環樹・山

本和義『蘇東坡詩集』第2冊（筑摩書房、1984年）の説、「文彦博の家の点て方。つまりみずからの出身地西蜀の法である」に従うべきであろう。（公は瀟公の公） 従って訳文も異なってくる。

○41頁7行目以下、「不用撐腸拄腹文字五千卷」の訳文、「腹にはささえきれないほど知識がつまっているが、… ものものしい詩をつくることはしないのだ」→『蘇東坡詩集』のごとく、「腹いっぱい五千卷の文章をつめこむことなど、無用のさただ」と訳すほうがよい。

○42頁、陸游「臨安春雨初霽」詩 第4句「深巷明朝売杏花」の訓、「…明朝 杏の花を売らん」→「明朝 杏の花を売る」これは想像の句ではない。従って43頁、最後の行の訳「花売りが来て、呼び声をあげるだろう」も誤り。「翌朝は雨もあがって、花売りの声が聞こえてきた」の意。これは、「明朝」の語の誤解による。本詩の明朝は、一夜明けた朝、明るる朝の意である。 第5句「聞（閑）」は、「しずかに」の訓よりは、「気ままに」のほうがよい。そのほうが、44頁1行目の訳文（字くばりはいいかげんだ）ともかなう。42頁の注「騎馬」 たぶん驢馬だったろう。→カット。そのままに解すべし。

○43頁、「猶」の注「なお…のごとし」→「猶及清明可到家」の猶は、似るという意味ではない。それでもなお、の意。 後ろから6行目、世味の訳「世間の人情」→世の中に対する興味・関心。 後ろから5行目、「いったい、誰のために、わたしは驢馬に乗って、臨安にやってきたのか」の訳文も、穏当ではない。「誰か 馬にのりて みやこに 客たらしめたる」（竹内自身の訓）を、そのまま素直に訳すべきである。 後ろから4行目、嚴州の副知事→嚴州の知事の代理 これは「権知嚴州事」を指すが、権知は、臨時に治める意。

○44頁、「題臨安邸」の注「題」「眼前にあることがらやものについて詩文をつくる」→この題は、題壁の題、壁に書き記す意。

○48頁、「淡酒」の注、「あっさりと飲む酒」→うす酒、味の薄い酒。「相識」の注の3行目以下、「この詞では、一方的に恋したのではなく、恋人どうしだったことを暗示している」は、不可解。次の頁の訳文「ふるさとには思いだすひとがいる。むかし、しりあったひと。元気だろうか」は、前の句と飛躍がありすぎてよくない。中田勇次郎の訳（『歴代名詞選』[集英社、漢詩大系]）「おもへばまた これもむかしのなじみにぞありける」（しかしよくかんがえると実はこの雁もむかしのなじみだったのである。むかしは手紙をこつづける仲間だったのだ）の方向で再考すべし。「了得」の注、「それでは片づかないという反語にもちいる。…」→ここの了得は、ほぼ「説得了」の意。了は言い尽くす、くくる。従って訳文も再考すべし。このほかにも、この李清照の詞の訳文には、疑問が多い。

○49頁5行目、「二杯、三杯と、かるく酒を飲んでみたが、気が晴れない。たそがれの風が強くなった」（三杯兩盞淡酒、怎敵他晚來風急の訳）→中田勇次郎訳の、「二杯や三杯のうす酒ぐらいでは、どうして暮れ方の風のはげしいのに抵抗することができようか」のほうが、穏当。敵は、立ち向かえる意。 7行目、「ふるさとには思いだすひとがいる。

むかし、しりあったひと。元気だろうか」（却是旧時相識）→いとしい人に便りを運んでもらった、昔の友達なんだもの。（むかしなじみの雁が、無情にも飛び去ってしまったことを嘆く）
○50頁6～7行目、「文字を読むとき、メロディをつけなければならない」→メロディは、トーンに訂正すべし。10行目、「入声は消失してそれぞれ、一、二、三声に変わった」→「入声は消失してそれぞれ、一、二、三、**四**声に変わった」

○52頁、詩題「小隱自題」の訓、「小隱自ら題す」→「小隱に自ら題す」この小隱は、小さな隠宅の意。「作者が自ら小隱だと謙遜しているのである」（注「小隱」の条）云々は、誤り。第4句、「蜂懶得花疎」の訓、「蜂ものうく花をもとむれどまばらなり」と、その訳文「蜂は花をしたって飛ぶが、花はまばらだ」→ここは上句「鶴閑臨水久」と対句。従って久が鶴の動作である以上、下句の疎は、蜂の動作である。つまり、ものうくて、花から蜜を採ることもなおざり（熱心ではない）、の意。簡野道明『（和漢）名詩類選評釈』（明治書院、修正版）にいう、「蜂は懶くして花より蜜を採ることも疎なり」と。「懶」の注→「文人の理想とした状態。…」→蜂に対する擬人的表現であり、説明に飛躍がありすぎる。

○54頁、「激瀾」の注、「斂は、のびたものがちぢむ。艶は、つやがあって美しい」→激瀾は同じ韻母を重ねた疊韻の語であり、ある種の様態（満ちあふれた水面にさざなみがたって[きらめく]さま）を形容する。疊韻の語の場合、双声の語と同様に、一字一字解釈すべきではない。訳文の「水面はもりあがり、波がねっとりとのびちぢみしている」は、作家の文章としては面白いが、訳文としては不適切。「空濛」の注、「はっきりせず、だだっぴろく、くらい」も、「ぼんやりかすむさま」の簡明さには及ばない。

○55頁、「珠」の注「真珠。水の飛沫を真珠の粒にたとえた」→ここは、大雨の雨粒を真珠にたとえたもの。従って最後の行の訳「雨粒は白く光りながら、水面をたたきつけ、湖の水は飛沫をあげる。飛沫は船内にとびこみ、乗客は濡れた」（白雨跳珠乱入船の訳）も、「白い雨粒が、真珠をばらまいたかのように、ばらばらと船の中に飛び込んできた」（『続校注 唐詩解釈辞典 [付] 歴代詩』[大修館書店、2001年] 1010頁、内山精也訳）のほうが穏当。

○60頁の詩「夢游西湖」の第3句、「瞥然一見唱歌去」の上4字の訓、「ちらりながしめして」と訳文「姿をあらわし、こちらに流し目をくれては」→瞥然は忽然、ふいに、の意。流し目をくれる意味ではない。「一見」は、不意に姿をあらわすことをいう。見は出現の意。

また「藕糸」（第2句）の糸は、音通する「思」との双関語であろう。美しい娘たちへの、断ち切りがたい思慕の情が表白されている。

○61頁、詩の最後の句の「岩」は、『樊榭山房集』巻1（四部叢刊）に従って、巖（の旧字）に作った方がよい。

○62頁、「孤磬」の注、「禅寺は魚板という魚の形の木板をたたいて、時刻や食事などを知らせる。ここも、魚板のことか」→ここの磬は、架につるして、僧侶がうち鳴らす銅鉢の類。宇井伯寿監修『コンサイス仏教辞典』（大東出版社、平成2年第5刷）にいう、「銅製とし、仏前礼盤の右側の架にかけ、導師之を打ち鳴らす」と。

○64頁、「呉宮」の注、「唐代につくられた拙政園」→拙政園は明代（15世紀初）に命名された園林。（源流は六朝期にさかのぼるが…）

○65頁2行目、「其次憶呉宮」の訳文、「江南のどこが恋しいかといえは」→「其次」を訳して、「江南のどこが2番目に恋しいかといえは」とすべし。「楓橋」の注、「幅約30メートルの運河にかかる」→幅約30メートルの江南運河ではなく、そこへ流入する水路の上にかかる。南宋の「平江図」参照。（拙著『唐詩の風景』講談社・学術文庫、243頁に転載）

○67頁1行目、「七年」の注、夔州（四川省）→四川省は重慶市に訂正すべし。

「半夜鐘」の注、前詩「楓橋夜泊」に「夜半鐘声」とある。→陸游は「半夜鐘声」に作る「楓橋夜泊」のテキスト、『文苑英華』巻292などを読んでいたと考えられる。拙著『唐詩物語—名詩誕生の虚と実と』（大修館書店、2002年）第6章等参照。「巴山」の注「巴はいまの四川省重慶地方」→「巴はいまの重慶市地方」

○68頁、(詩題)「無題」(一)の注、五言律詩→五言古詩の誤り。この寒山詩は、たとえ8句であっても、平仄を守らず、対句もないので、明らかに古詩である。「無題」「寒山詩には題がない。この詩は第二句に寒山とあるので、寒山詩についてうたったとして、ここにおさめる」→通常、寒山詩に寒山とあった場合には、寒山が住んだと伝える天台山（浙江省）中の岩窟「寒巖」（寒石山）と考えるべきであり、蘇州の西郊、楓橋のほとりにある寒山寺とは、全く無関係である。拙著『唐詩物語—名詩誕生の虚と実と』第20章等参照。「幽松」の注「かすかに音をたてる松」→ひっそりとそばだつ松、もしくは、小暗く茂る松。訳文も、訂正を要する。

○69頁、第3句「隈牆弄蝴蝶」の上2字の訓、「牆に隈りて」の隈は、ここでは「よりかかる」(69頁の注)意味ではなく、「(物陰に)隠れる」意。従って「家の壁にもたれて」(70頁)ではなく、「身を牆の後ろに隠して」の意となる。項楚『寒山詩注』（中華書局、2000年）参照。第7句「鬪論争物色」は、確かに入矢義高（『陶淵明 寒山』新修中国詩人選集1、岩波書店）も、「いいたてて 争い物色すれど」（竹内の訓）の方向で解釈しているが、婦人の鬪花・鬪草の風俗を指し、物色は物品の意とする項楚『寒山詩注』の説が魅力的である。詩の第6句の篋は、いわゆるへらや櫛（注）ではなく、かんざしを指すと考えるべきであろう。「鬪論争物色」の訓「いいたてて 争い 物色すれど」、訳文「どのような場所が住みよいか。議論はつきず、あちこち探したが」は、妥当ではない。突如、1首の詩中で、内容が大きく乖離してしまう。争の字は「多」にも作る。項楚はいう、「鬪花鬪草之戲、務以品類多者為勝」、物色は物品とほぼ同意、と。この立場から考えて訳すべし。

○70頁4行目、「ここ寒山寺からの眺めがおもしろい」は、カットすべし。

○71頁の注「不勝春」「不は強調。勝はすぐれている。うたごえが春の景色よりすぐれている」→この勝は、七言絶句の平仄上（二四不同、二六対）、平声であり、仄声であるのではない。（菱歌清唱不勝春…歌は平声、唱は仄声）。勝は、すぐれている、まさるの意

味の時には仄声、持ちこたえる、たえる意味の時には平声。従って「勝はすぐれている。…」は、誤り。「春にふさわし」の訓も、「いかにも春らしい。むしろ、景色よりも春らしいが、それがかえって感傷をそそる」という訳文も、穏当ではない。惜春の思いに堪えきれない、などと訳すべきであろう。

○72頁、詩題「初晴游滄浪亭」の游は、「遊」の旧字にすべし。注も同じ。

○73頁、注「簾」の条、「婦人の部屋の出入口にたれているすだれ。…」→この簾は、滄浪亭のそれであって、「庭園のなかの婦人の部屋は、静かに簾がたれたまま」とする訳文は、第2句に「嬌雲」の語があろうとも、狭く限定しすぎである。注「乳鳩」「鳩のひな。…」→傳平驥・胡問陶『蘇舜欽集編年校注』（巴蜀書社、1991年）には、「子育てをする鳩（乳子之鳩）と注する。 訳文、「梅雨つゆになって」「これは春のしらせの水だ」「ひなに餌をやる親鳩」、この3者の季節感はあわない。

○74頁3行目、「漁父の辞」（『楚辞』離騷）→「漁父の辞」（『楚辞』）

○77頁、注「桑落酒」「桑の実がおちるころ醸造する…」→「桑の葉がおちるころ醸造する…」

○81頁、「水宿」の注「水のほとりの旅館」→ここでは、舟中に宿ることをいう。後ろから7行目、「…西洞庭山という山があるが、」→「…西洞庭山という島があるが、」のほうが、わかりやすい。

○83頁、「蘭亭詩」→遼欽立『晋詩』卷13（先秦漢魏晋南北朝詩、中華書局刊）には、詩の冒頭に「三春啓群品、寄暢在所因」の2句あり。第5句「大矣」の訓「大なり」→大なるかな こう訓んでこそ、「矣は感嘆の助辞」の注（84頁）にもかなう。第8句「適我無非新」の「新」→遼欽立『晋詩』卷13には、「新」字に作り、「詩話作親、詩紀同」の校記がある。訓の「したしまざるはなし」は、「新」ではなく、「親」の訓であろう。注の「新 親密でなごやか」（84頁）も同じ。ところが84頁、最後の行「はじめて耳にしたように感じられるのだ」は、明らかに「新」の字に従った訳である。矛盾する。

詩題「蘭亭詩」の注「五言律詩」→五言古詩。平仄上からも、律詩ではない。

○84頁、「閔寥無涯觀」の「觀」の注、「考え方、さとり」→この觀は、第一義的には「眺め」の意味である。 訳文の2行目、「寓目」の訳、「心をしずかにすると」→「目をとめて見ていると」 訳があまりにも原詩の言葉から離れすぎる。

○87頁、「禹陵」詩、第3句と第4句（礼同虞帝陟、神契鼎湖昇）は、対句。「神契」を「神のちぎり」（次の頁の「神契」の注、「神は神秘的で尊いということ。契は約束」と訓じるのは、誤り。上句の礼が名詞、伝が動詞であるごとく、神は名詞、契は動詞である。「神は神霊、契は、かなう、合う」の方向で考えるべし。従って89頁の訳文「聖人どうしの尊い約束ごと…」は改訂すべし。ちなみに、第4句の「昇」は、『亭林詩文集』卷3（四部叢刊）には、「升」に作る。第5句、「…形模古」を、「かたちは 古いにしへをまね」と訓み、「かたちはいかにも古めかしい」と訳するのは、誤り。第5句「窈石形模古」は、下句の「墟宮世代仍」と対句。世代が名詞の1語であるのと同様に、それと対する形模は1語の名

詞（形状、すがた、かたちの意）である。つまり、「かたちは古い」と訳すべし。

○88頁1行目、「…疑是穴」の訓み「…疑うらくは ^{ほらあな}この穴」は、妥当でない。この句「探奇疑是穴」は、下句の「考典或言陵」と対句。従って「疑うらくは ^{ほらあな}穴かと」ぐらいとなろう。いいかえれば、ここの「是」は、「この」という指示詞ではない。詩題「禹陵」の注、五言古詩は、五言排律の誤り。「全四十句。はじめの十二句をかかげた」も、重大な誤り。「考典或言陵」句の後に、26句が省略されており、「仄径長荒藤」句の後に、2句が省略されている。最後の「会稽山色好、…」の2句は、本詩40句の最後の2句なのである。排律の場合、冒頭と結びの2句は散句であり、対句にはしない。それ以外は、対句の連続となる。本詩を読んだ当初、「はじめの十二句をかかげた」の語に引きずられて古詩と考えたが、実はそうではなかったのである。つまり、著者は原典を調査せず、誤った楊剛本にそのまま従って記述したのであろう。

○89頁、「墟宮」の注、「宮殿のあと」→陵宮（陵寝、陵墓）とほぼ同意であろう。

注の最後に「凄」「惻」の2字を分けて説明するが、「凄惻」で1語。1語として注すべきであろう。

○92頁、詩の第4句、「未来景界却疑真」の却を「むしろ」と訓むが、「かえって」でよいだろう。第6句「仰屋嗟時氣益振」の「時」に対しては、訓みも訳もない。

○96頁、「莫 莫 莫」を、「やるな やるな やるな」と訓むのは、おかしい。中国の注釈書では、「罷 罷 罷」とほぼ同意と見なし、「ああ やんぬるかな」（村上哲見『円熟詩人・陸游』集英社、1983年）の訳もある。こちらが妥当である。詞牌「釵頭鳳」の注 押韻を示す「上声宥」は、「上声有」の誤り。

○99頁、後ろから4行目、「咽淚妝歡」の妝は装の誤り。

○100頁、詩の第2句、「沈園非復旧池台」の池台を、単に「池」とのみ訳するが、「池と楼台」を指す。

○101頁第2句、「沈園柳老不飛綿」の不飛綿は、主要なテキストでは「不吹綿」に作る。

○102頁、詩題「口占」は、『劍南詩藁』（四庫全書）巻102には、「春遊」に作る。第1句「沈家園裏花似錦」の似は、「如」の誤り。七言絶句の平仄上（二四不同、二六対）からも、如の字でなければならない。第3句「也信美人終作土」の信は、「たより。たよりを発信する」（注）意味ではなく、ごく普通の「信じる、信じて疑わない」の意。

○104頁、「鑑湖」の説明3行目、別名の1つ、監湖→南湖、もしくは長湖の誤り。注「枕戈」に「若いときは豪快な性格だったと、杜甫はみずからいっている」と述べ、「武器を枕にして横になり、会稽の恥を雪いだ勾踐のことをしのんだ」（105頁）と訳する。しかし、この「枕戈」は、杜甫の行為ではなく、越王勾踐が戈を枕にして呉王夫差への復讐を果たしたことをいう。これは、「枕戈憶勾踐、渡浙想秦皇」の2句が対句であることによって明白。つまり、「枕戈の勾踐を憶い、渡浙の秦皇を想う」意。

○106頁、後ろから3行目、「五月になって西施が（蓮の）実をとりにくる」（「五月西施採」の訳文）→採蓮は、蓮の実だけではなく、蓮の花を摘み取ることも指す。旧暦五月は盛夏。

季節的に蓮の実の採集は早すぎ、しかも第2句に「はすのつぼみに はすの花さく」とある。ここは、蓮の花を摘み取ることをいう。

○107頁、「漁歌子」→夏承燾・呉熊和『放翁詞編年箋注』（上海古籍出版社、1981年）には、「漁父」に作る。これは、『劍南詩藁』巻19による。第1句「挪藍」→掇藍（注も訂正）

注「漁歌子」の条「藍、三、帆が韻字」→「藍、三、南、帆が韻字」。また詞牌の下には、「燈下読玄言子（唐の張志和）漁歌、因懷山陰故隱、追擬」の原注がある。作品鑑賞に役立つ。淳熙14年の冬、嚴州（43頁参照）での作。

○108頁、「遊山西村」詩の第7句「従今若許閒乗月」の訓、「きょうよりのちは つれづれに月に乗ずるを ゆるせ」→やはり「若」（仮定のもし）の字を、正しく訳すべきであろう。かなりニュアンスが異なってくる。

○110頁、「南朝」詩の第2句、「（鶏鳴埭口）繡襦廻」の訓「宮女の絹のひるがえる」→劉学鍇・余恕誠『李商隱詩歌集解』（中華書局、1372頁）に、「繡襦、指宮人、廻、見其遊讌之頻、猶『重来』『又来』」とあり、「繡襦宮人又紛至沓来矣（またも続々とやってくる）」という。これに従って再考すべきである。ここの「廻」は、ひるがえる意味ではない。112頁の訳文「ひきつれる宮女は絹づくめで、下着まで絹だった」は、穏当ではない。

○111頁、「鶏鳴埭」の注「埭は堤防」→玄武湖の北堤であることを明記すべし。また、「南齊の武帝は、宮女と夜遊びをし、帰路、堤防をとおると、…」→前掲の『李商隱詩歌集解』に引く朱注所引『南史』に見える記事、「齊武帝数幸琅琊城、宮人常従、早発（早朝出発する）、至湖北埭、鶏始鳴。故呼為鶏鳴埭」を典故としており、「宮女と夜遊びをし、帰路、堤防をとおる」云々とは全く異なる。高橋和巳訳注『李商隱』（岩波、中国詩人選集）参照。112頁の訳文も、訂正すべし。こうした作品は、史実を踏まえて詠むと考えるべし。

注「朝見」「天子にめどおりを許されあいさつをすること。早朝である」→ここは、「南朝」詩の第3句、「誰言瓊樹朝朝見」に対する注であるが、2+2+3のリズムを考えれば、「朝見」ではなく、「朝朝見」でひとまとまりをなす。しかもこの句は、陳の後主の作と伝える「玉樹後庭花」（「後宮の庭の、玉樹の花」とは、愛妃張麗華たちの美貌を暗にたとえる）の逸句「璧月夜夜滿、瓊樹朝朝新」を踏まえた表現。従って「朝朝見」は、陳の後主が毎日、瓊樹（玉樹）のごとき美貌の張麗華たちと会って戯れた、その荒淫ぶりをいう。注「江令」の条、「中書令となり」→尚書令となり、

○112頁5行目、「…、愛妃の潘妃に歩かせたのにはかなわない」→頷聯「誰言瓊樹朝朝見、不及金蓮歩歩来」は、反語の対句（流水対）であり、「及ばないと、誰が言うのか」。陳の後主の荒淫ぶりは、南齊の廢帝のそれにも勝るとも劣らないことを言う。高橋和巳訳注『李商隱』も参照せよ。「石頭城」の第1句「故国」の訓「ふるき^{くに}国」→「ふるき^{みやこ}国」、この故国は、古都（六朝の旧都）の意。訳の「むかしの国」も、訂正すべし。

○114頁4行目、「この詩を読み白居易は感歎賞讃したというが、もっとである」→白居易が感歎したのは、第2句であり、著者がすぐれた表現として取り上げた第4句ではない。「金陵五題」の引参照。詩の第1句（朱雀橋辺野草花）の花は、動詞。従って、

訓みは「はな」ではなく、「はなさき」のほうが穏当。詩の前半は対句である。（「花」は第2句の「斜」の字と対する）

○116頁、解説「六朝のみやこは、…」は、唐代の南京の状況にそぐわない。拙著『漢詩の風景』（講談社・学術文庫）、南京の条参照。唐代、揚州や鎮江（潤州）が繁栄し、南京はさびれていた。

○117頁、絶海中津の詩「応制賦三山」の第2句、「(満山薬草) 雨余肥」の訓「雨あまりて肥ゆ」→「雨の余に肥ゆ」。雨余は雨後の意。余（平声）と後（仄声）は、平仄互用。

○118頁、明・洪武帝詩の第2句、「松根琥珀也応肥」の「琥珀」の注「…。松の根が養分を吸収して、琥珀も大きくなるのであろう」→琥珀は松脂の化石と考えられていたための表現。「琥珀孫」といえば、松脂のこと。「更不来」（第4句）の訓み「さらに帰らざらん」は、「さらに 帰らず」のほうが穏当。更不の更は、否定の語気を強める働き。「直到…」の注「もう帰ってこないだろうよ」は、句意がずれる。

○119頁、「鎮江」の解説、茅山は、茅山の誤りであろう。鎮江付近の茅山は、聞いたことがない。字形の誤りに気づかず、そのままルビをつけたものではないか。

○120頁、後ろから3行～2行目 解説の旅のルート、「瓜州で乗船」→「潤州（鎮江）で乗船」と考えるほうが自然。「おそらく徐州（江蘇省北西部）をへて」→徐州は、当時の大運河から離れすぎており、妥当ではない。「陸路を開封、鄭州にとり、洛陽に到着した」→黄河に出て、洛水に入り、洛陽に到着したのではないか。「片」の注、「一片月は、満月（地上からは平らに見える）とか、もしくは月にあかるくてらされた大地、城内とかをいう」→不十分。松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店）652～3頁（山崎みどり執筆）参照。

○121頁、「題金陵渡」詩の第1句の「小山楼」は、「小さき山楼」ではなく、「小山の楼」のほうが自然である。前野直彬編訳『唐代詩集』下（平凡社、中国古典文学大系）には、「小高い岡の楼上」と訳する。田部井文雄『唐詩三百首詳解』下（大修館書店、1990年）にも、「小さな山の上の楼」とする。「小山楼」の注に、「旅館をかねた駅舎」とするが、駅舎とは限らないであろう。「作者が宿泊した、渡し場に近い、小さな山の上にある高い建物」（田部井文雄『唐詩三百首詳解』下）ぐらいの意味に捉えておいたほうがよい。「小さな駅舎があった」の訳文は、断定しすぎである。「潮落」の注「鎮江のあたりまで、潮の干満がおよんでいたのである」→この、いわゆる江潮は、より上流の江西省九江市にまで及んでいた。拙著『唐詩の風景』（講談社・学術文庫）328頁参照。

○122頁、「登金山寺塔」の第1句、「数重楼枕層層石」を、「数重にも楼は枕す そうそうたる石」と訓み、「(…塔に登ってながめた。) 寺院内にはいくつもの楼閣が建てられ、楼閣のあいだにはあたかも長枕をたてたように太湖石がおびただしく飾られている」→これは、詩題「登金山寺塔」との関連で、「数層の高い金山寺塔が金山の重なれる岩山のうえに建つ描写」と考えるべきである。「長枕をたてたように太湖石がおびただしく飾られている」などとは、とうてい考えがたい。詩の第1句の「数重楼」は、「数層楼」

とほぼ同じく、詩題の「金山寺の塔」を指すであろう。訓みも「数重にも楼」ではなく、「数重の楼」であろう。124頁の訳「寺院内にはいくつもの楼閣が建てられ」ではなく、「この数層の塔は」であろう。枕は、よりそって建つ意。

○123頁の1～2行目、「挿雲金碧虹千丈、倚漢崢嶸玉一峰」は、塔上からの眺望を描写したものではなく、おそらく2種の比喻を用いて、金山寺塔の美しい姿を形容した表現であろう。この2句は対句であるため、挿雲は「さしはさむ雲」ではなく、「雲をさす」意。上句の訳文「夕焼けの西の空には、金色の雲がたなびき、暮色せまる紺碧の空には、千丈もの虹がかかっている」は疑問。これは、日中の金山寺塔の描写であろう。「天空の雲を突き刺さんばかりの、きらびやかな姿は、さながら千丈の虹」。こういう意味ではないか。下句は、夜の金山寺塔の描写であろう。「天の川に迫らんばかりにそそり立つさまは、あたかも一峰の玉（玉の峰）」。竹内訳は、「夕闇になって、天の河の星がいっぱいきらめく。玉のような峰が高くそびえて、天の河にとどきそうだ」である。注「金山寺」の条、「氏父山」→「氏父山」の誤り（氏の音はテイ）。 沢山寺→沢心寺

○124頁、最後の2句「想得高秋涼月夜、分明人世蕊珠宮」の訳文のうち、「涼気せまる秋の月の夜」→「涼気せまる秋の月の夜ともなれば」「はっきりとうかびあがっているようだ」→「はっきりとうかびあがっていることであろう」 詞牌「永遇楽」の楽の音は、おそらくガクではなく、ラクであろう。『漢語大詞典』第5巻、894頁には、「le」の四声とする。山本和義ほか『宋代詩詞』（角川書店、1988年）322頁には、「えいぐうらく」と読む。（永遇楽の語は、130頁に2回出る）

○125頁、「千古江山、英雄無覓、孫仲謀処」「舞榭歌台、風流総被、雨打風吹去」の部分は、俞平伯『唐宋词選釈』（人民文学出版社、1979年）に、「三句実只一句、亦不須分逗。今依調斷句。本篇多有此種句逗」にあたる。従って「孫仲謀処」の処は、「ここにいた、ということ」（127頁の注）ではなく、場所を表す通常の用例であり、「風流総被」の被は「おおわれている」（127頁の注）意味ではなく、通常の受け身の用例である。「雨打風吹去」を、「時代はめぐって、雨や風にうたれ、いま夕陽が…」云々と訳して、次の句「斜陽草樹」にかけるのも、妥当ではない。全6句の訓「千古の 江山、英雄を もとむれど なし、孫仲謀 ここにいて」「まい うたう 舞台、風流 すべてをおおいたり 雨うち 風ふきたれば」は、「千古の江山、英雄 孫仲謀を覓むる処無し」「舞榭歌台、風流 総べて雨に打たれ風に吹かれ去る」（村上哲見『宋词』筑摩書房、1973年）の方向で訓むべきであろう。最後の行「元嘉草草」の訓、「元嘉 やぶれたれど」→「元嘉のとき、あわただしく北上し」が妥当。

○126頁1行目、「封狼居胥」の訓、「狼居胥に封ぜしことあり」→「狼居胥に封ぜんとせしも」 またこの「封」を「封地としてあたえ」る（127頁の注）意味として解釈しているが、山上に壇を築いて天を祭り、勝利の記念にすることをいうのであろう。

「贏得倉皇北顧」の「贏得」に対する注、「勝利して獲物として入手する。劉宋の文帝も漢王朝と同じように勝利したいと念願して、と作者はいうのである」→これは、全くの

誤解。贏得は、勝ち取った、せしめたという、積極的な語気ではなく、「手に入れたものは、結局これだけだ」という気分をただよわせる語。「たかだか(せいぜい)…に終わる」意。岩波文庫『杜牧詩選』340頁以下参照。本書『岩波 漢詩紀行辞典』134～5頁の「贏得」と同じ用法である。

○129頁11行目、「北方の金の侵略になやむ五世紀に」→北方の**鮮卑族等**の侵略になやむ五世紀に」

○133頁、杜牧「寄揚州韓綽判官」詩の「寄」の注「手紙をおくる」→「本詩を送りとどける」「水」の注「長江の河水」→「揚州(羅城内)の水路(運河)」「二十四橋」の注「揚州城内には二十四の橋がかかるといわれ」→揚州城**内外**にかかる(虹)橋の総称。

○134頁2～3行目、「寄揚州韓綽判官」詩の前半2句(青山隱隱水迢迢、秋尽江南草未凋)の訳、「わたしが揚州をはなれたとき、山々のすがたがしだいにかすかになり、ついに消えました。長江のながれは、はるかかなたに、つづいています」→この2句は、揚州の城の景観を描写したものであり、上のような解釈は成立しがたい。岩波文庫『杜牧詩選』163頁以下参照。7行目、太和七年→**大和七年** 唐代の年号としては、大和が正しい表記。

○135頁、「遣懷」詩の「載酒」の注、この語を無理に竹林の一人、劉伶に関連づけているが、江南の水郷で行う遊びゆえの表現に過ぎない。従って「驢馬の背に酒甕さかめのをせ、あちこちかってきままに、歩きまわり、飲みたくなるところで、酒を飲んだという、むかしのひとを江南でまねた」という訳には、従いがたい。岩波文庫『杜牧詩選』338頁以下参照。

○136頁、牛僧孺(779-847)→牛僧孺(780-848) 拙著『詩人たちの生と死—唐詩人伝叢考』(研文出版、2005年)参照。

第二章 北京とその周辺

○139頁、「帝京詩」第4句(太行西脊引崑崙)の「引」は、上句(渤海東波連肅慎)の「連」と対文同義であり、伸びる、連なる意。「引首」の引。「引ききたる」(訓)、「ひっぱってきている」(訳、141頁)の意味ではなからう。

○144頁、「薊門煙樹」第7句、「揺落処」の訓、「花ちるところ」→揺落は、145頁の注に、「草木の葉などが(秋風に吹かれて…この語を補うべし)ひらひらと散る」とあるように、宋玉「九弁」以来、秋の季節を表す詩語であり、「花ちる」意味にはならない。従って「花の散るさま」の訳文(145頁)は、誤り。第8句「長吟惟是夕陽辺」の下3字の訓「夕陽のみかえる」は、不可解。これは、楊剛編著『中国名勝詩詞大辞典』に「辺」字を「還」に作るのに従った解釈であろうか。「辺」の字のままでは、「かえる」意味にはなり得ない。従って「夕陽ゆうひが西の山にかえってゆく。しかし、自分が家にかえるのは、いつのことか」という訳文は、恣意的な曲解以外の何者でもない。「夕陽辺」であれば、「紅い夕陽のなか」などと訳すべきであろう。ちなみに、「還」字の場合は、音はセン、「旋」と通じて、

めぐる、かえる意味になり得る。「偏」(第5句「行人歌馬偏留榻 [=憩]」の偏)の注、「自分のためにする。馬をいたわるついでに、自分もやすむ」→この偏は、充分、たっぷり、の意。

○146頁、詩の最後の行「誰聴上方鐘」の訓、「誰か^{たれ} きかんや そらのうえに なる 鐘のね」→上方は、仏寺の意。「天空のかなた」(注)の意味ではない。

○147頁10行目、金剛宝座塔→金剛**宝座** 詩題「戊戌八月国変記事」の記は、紀の誤りであろう。入谷仙介・福本雅一・松村昂『近世詩集』(朝日新聞社、1971年)には、紀に作る。(記事の語は、148頁に2度、149頁に1度出る)

○148頁、五言古詩→五言**律詩**

○150頁4行目、「ふるさとをしのんで鳴くほととぎすのように、^{あか}紅いまごころはわたしにもあるのだ」(「望帝杜鵑紅」の訳)→「(東海の国でながす涙は)かの望帝の魂が化したほととぎすの、口から滴らせる血の紅い色」。杜鵑の啼血のイメージを利用した表現である。

○151頁、「八達嶺」詩の第3句「尽日」の訓「ゆうひ さし」(注には、「尽日 夕日」とある)→ここは、下句の「終年」との対から、「一日中」の意。

○153頁、詩題「居庸疊翠」の注 七言律詩→七言**古詩** 換韻していれば、近体詩(絶句・律詩・排律)ではありえない。「嵯呀」(「嵯呀枯木無碧柯」の嵯呀)の注、「高い山。岩がごつごつした山」→楊剛『中国名勝詩詞大辞典』に指摘されるように、「樹木参差不齊」(木々の高低ふぞろいなさま)の形容と見なすほうが、穏当であろう。「老」(「駱駝夜吼黄雲老」の老)の注、「意味なしにつけることば」→この「老」字は「歴時長久」の意、(黄雲が)いつまでも消えずに天空に立ちこめるさま(黄雲が厚く立ちこめるさま)をいう、と考えるべきであろう。

○154頁7行目、〈前半の「裂」「雪」は入声なので〉→〈前半の「鉄」「裂」「雪」は入声なので〉 9行目、〈後半の「老」「小」は上声なので、ながくひきのばし〉→〈後半の「道」「老」「小」は上声なので、ながくひきのばし〉

○155頁、後ろから2行目、「幸甚至哉」の訓「さいわいにも ここに いたるかな」→この4字は、続く「歌以詠志」とともに、歌われる際の合いの手のようなもの。詩の内容とは直接関係せず、「ああ、何と幸福なことか」の意。

○156頁、詩題「觀滄海」の条、「押韻にとらわれない」→**海・峙・茂・起・裏**が押韻する。于安瀾『漢魏六朝韻府』(河南人民出版社、1989年)256頁参照。漢魏ごろの韻字は、通常の漢字音では推定がきわめて困難である。

○160頁、「易水」の説明、「荆軻がひとびとと別れたのは南易水である」→**中易水**であろう。松浦友久編『漢詩の事典』(大修館書店)306頁参照。

○161頁3行目、「荆卿」のルビ けいきょう→けいけい 卿は、漢詩文では漢音「けい」を用いて読む。キョウは呉音。「易水行」第7句の「擲」は、何景明『大復集』(四庫全書)巻6などには、「摘」に作る。この摘は、擲と通じて、なげうつ意。「擲」の字

になおす必要はない。　　ちなみに、第9句の「吁嗟乎」は、『大復集』には、「噫嗟嗟」に作る。

○168頁、「墨河」詩の第2句、「世祖深思創業難」の訓、「世祖 深くおもい 創業かたかりき」、訳「世祖は思慮深くあらせられ、りっぱに創業された」→訓は「世祖は深く創業の難きを思えり」、訳は「世祖は創業の困難さを痛感なされた」であろう。

○170頁、「勅勒歌」→韻字を指摘すべし。「下・野（上声馬韻）、蒼・茫・羊（平声陽韻）換韻。

○171頁、李賀「雁門太守行」の第4句「塞上燕脂凝夜紫」の訓、「とりでの べにのいろ 夜は むらさきに 凝る」（172頁の「塞上」の注「長城のうえ」「燕脂」の注「べに。べにをとる草。べには女性の化粧のことで、第1句の風景の異様な感じを強めた表現。長城の色を紫色というのは、古来からあった。…」）と、訳文「長城も、完成したばかりのときは、べにで化粧をした女性のようにあったろうが、いまや、べにはこり固まって、夜のように暗い紫色だ」（173頁）→「塞上燕脂」とは、辺塞の土を染めた血の燕脂色、いいかえれば、燕脂は、兵士たちの流した鮮血をたとえた語である。1句全体の訳は、「塞のほとりで流された兵士たちの、^{くれない}燕脂の血潮は、夜の闇のような濃い紫色に凝り固まる」の方向で考えるべきであろう。　　第7句「報君黄金台上意」の訓、「君に ^{きみ}むくいんとする 黄金台上の意」→「君の ^{きみ}黄金台上の意に ^{こころ}むくいんとし」この1句の訳文「雁門を守る太守は、忠誠を誓う。燕のとき、黄金台にあつまつた人材と同じ意気ごみだ」（173頁）も、おかしい。「（今こそ）黄金台を築いて私を招いてくださった、わが君の厚き知遇に報いようと思ひ」の意。

○173頁8行目、「嶺から嶺へとつづく長城は黒雲の圧力にたえられず」（第1句の「黒雲 圧城城欲摧」の上4字の訳）→城は「嶺から嶺へとつづく長城」ではなく、「城塞」と考えるべきであろう。　　後ろから4行目、「紅い軍旗もいきおいが無い。勇ましい^{けいか}荊軻が旅立った易水をおもい起した」（第6句「半卷紅旗臨易水」の訳）→「（戦に敗れて）いきおいを失った紅い軍旗が、易水のほとりに立ち並ぶ」。易水は、死地に赴く悲壮な決意を示すために、荊軻の故事で名高い「易水」の語を用いたもの。「勇ましい荊軻が旅立った易水をおもい起こした」とする訳文は、あまりにも恣意的である。

○174頁1行目、「このとき十七歳の李賀は天才肌で、鬼才といわれた」→李賀に対する呼称「鬼才」は、天才肌の人をいう言葉ではなく、文字どおり「冥界との交霊能力をもつ異能者」の意。

○175頁、「陳琳」の注「三国時代の文学者」→「後漢時代の文学者」。いわゆる三国時代までは生存していない。

○177頁、詩題「魯頌 閼宮」→魯頌 閼宮（抄）第6章の後半8句を省略。詩題の訓にも、（抄）の字を入れる。　　第3句「奄有亀蒙」の訓、「にわか^{きも}に ^も亀蒙 たちあがり」→「（魯の国は）亀・蒙の山を^{おお}奄^も有ち」奄有は、すべて領有する意。奄は覆（おおう）意で、「にわか^{きも}に。平地にあって、山がそびえるさま」（178頁の注）ではない。従って「亀

山も、蒙山も、そびえているよ」(178頁)という訳文は、成立しない。 詩題「魯頌 閼宮」の注「平声塩韻・東韻(通用)」→「平声塩韻・東韻(換韻)」これは八章から成り、その第五章。→これは八章から成り、その第六章。

○179頁、「登山」詩→参考：逸欽立編『晋詩』巻13には、「泰山吟」と題する。

第3・4句「巖中間虚宇、寂寞幽以玄」の訓、「岩のたにま おおらかなる 宇宙あり、寂寞たる 幽に 玄をあじわう」、訳文「巨岩の谷間の崖は、なにもない宇宙そのもので、寂寞として、幽として玄の気分だ」→星川清孝『古詩源』下(集英社・漢詩大系、121頁以下)には、「巖の中には、人の住まないがらんとした岩屋があつて、音もせず物影も見えず、奥深く暗い」と訳す。星川訳のほうが、穏当である。ちなみに、星川清孝『古詩源』下は、上句を「巖中に虚宇を聞れ」と訓読する。

○180頁4行目、「逝将宅斯宇」の訓、「ならば この宇宙は わが すみか」、訳文「さあ、それなら、わたしは自分の棲み家をここの宇宙(泰山)にきめようか」→星川清孝『古詩源』下に、「私はこれからこの岩屋を住みかとしよう」と訳す。なお「逝将」の将を「…を」と注するのは、誤り。この将は、「これから…しようと思う」意。「欲」と同意。

○182頁、玄宗の「経鄒魯祭孔子而嘆之」詩の第2句、「棲棲一代中」の訓、「つとめにつとめ このよにしらる」、訳文「生涯、ひたすら徳をみがき、ながいあいだ中心にあつて、世間のひとに仰がれておられる」→「一代中」は、「生涯の間」を意味し、「ながいあいだ期間、中心に存在する」(注)意味ではない。従つて「このよにしらる」「ながいあいだ中心にあつて、世間のひとに仰がれておられる」とは、訳出できない。「その生涯を、(人の世を救うべく)あわただしく過ごされた」の意。

○183頁2行目、「嘆鳳嗟身否」の訓、「おおとりを嘆じなげくこと、ありしとか」、訳文「鳳凰が飛来してこないで、さすがに嘆息されたとか」→これは、否の誤読による誤り。この否は、「…したかどうか。わざと、ぼかして表現したもの」(注)ではなく、下句の「窮」字と対になって、「ものごととのふさがるさま、不運」(易の卦の名)をあらわす。従つて「鳳凰が飛来してこないことを悲しんでは、わが身の不運をお嘆きになり」の意となる。4行目「今看兩楹間」の間は、奠の誤り。従つて「いま 兩楹の間をみるに」は、「いま 兩楹に奠らるるをみるに」となる。従つて本句と次の句との訳文「さて、いまやこうして、お墓にお参りでき、生家をおたずねし、先生の夢にあらわれた東西二本の柱をまのあたりにみ、感激で、いっぱいです。」(184頁)→「いま私は、こうして(聖廟の)二本の柱の間に祭られているお姿を拝見している。きっと先生が夢の中でご覧になったのと同じ情景に違いない」の意。 詩題「経鄒魯祭孔子而嘆之」の注 五言古詩→五言律詩。

○184頁、「作者は唐の玄宗。王朝最盛期の皇帝にしては稚拙な詩である」→日中で愛読された清の孫洙撰『唐詩三百首』のなかに収める作品であり、「孔子に関する故事が各句に詠みこまれた力作」(田部井文雄『唐詩三百首詳解』上[大修館書店、1988年])と見なすべきであろう。

○186頁、注1行目(上段)、「孟母の墓は鄒城市内の孟廟」→孟母の墓は孟母林にあり、そこは孟廟の地とは異なる。

○189頁、「北湖泛舟」の第3句、「閑看魚兒遊鏡裏」の「遊」は、「游」の字ではないのか。オヨグ。また、魚兒は、「うおのこ」(ルビ)、「幼魚」(注)の意味ではなく、単に「魚」の意。兒は接尾辞。唐代以来の白話である。「王允榛」の注「清朝時代のひと。伝記不詳」→張伝実・李伯齊『済南詩選』(齊魯書社、1982年)によれば、字は麓亭、号は澹村、新城(山東省桓台県)の人。歳貢生である。

第三章 中原

○199頁、「垓下歌」の第3句「可奈何」の訓「いかんせん」→いかんすべき 「可」は、正しく訳すべし。「不可奈何」の意となる。

○200頁、詩題「和垓下歌」の注「五言絶句」→五言古詩。この伝・虞姬の作は、六朝以前の作。絶句は唐代になって、初めて成立。しかも絶句の声律(平仄)に合わない。

○202頁1行目、「項王氣蓋世」を、「項王は氣を発散させ、その氣は世間すべてをおおったものだった」と訳すのは、「氣蓋世」の語が項羽「垓下の歌」の第1句を踏まえた表現であることを理解していない誤りである。「項王の雄々しい意氣(氣力)は、世の中をおおいつくすほど、強大であった」の意。「題烏江亭」の「題」の注、「そこにあるものや景色について詩をつくること」→この題は、(詩を壁などに)書きつける意。「兵家」の注「戦争、軍事」→軍事の専門家、兵法家。「不期」の注「期待できない。期待してはならない」→「予測できない」。いずれも岩波文庫『杜牧詩選』参照。

○206頁、「鄴中」詩の第3句、「乱世姦雄空復爾」の下3字の訓、「むなしくも なんじにかえるも」、注「むなしく、なんじ(曹操にむかっていっている)に評価がもどるのだ」→爾は、「なんじ」の意味ではなく、「しかり」、また復は、「かえる」意味ではなく、「空」字についた接尾辞。従って「むなしく しかり」と訓み、「いたずらにそうしたのだ」の意。従って1句全体の訳、〈「乱世の姦雄」と曹操は評されたが、そのとおりになった。まことにむなしい〉→〈「乱世の姦雄」という評は、曹操自らいたずらに選び取ったのだ。(同時に下された、「治世の能臣」という評語を選び取らずに)〉の意。「鄴中」詩、第6句「石馬先伝出水文」の下3字の訓、「水より 文をいだす」→上句(銅台未散吹簫伎[…簫を吹く おんな])と対句をなすため、「(石馬 まず つたう)水よりいづる 文」となる。

○207頁、後ろから4行目、「臨漳の夕暮の雲をながめ、わたし(作者)は嘆息する」→これは、想像の句として、「臨漳の夕暮れの雲をながめて、(天下統一の夢が破れた)曹操は嘆息したことであろう」このほうが、好くはないか。

○208頁、6行目、「刪丹」のルビ、さくたん→さんたん 8行目、「つぎの明帝の代に司馬氏が魏をほろぼし」→「元帝の代に司馬氏が魏をほろぼし」

○209頁、「洛陽」の解説、「唐王朝はみやこ長安の別荘地とし、…」→はなはだ不穏当な説明。唐王朝は両都制をしき、唐前期の洛陽は、長安に勝るとも劣らず繁栄し、後期

になって、高官の退老の地と化した。詳しくは、拙著『唐詩の風景』（講談社・学術文庫）参照。従って、213頁、「公子行」詩の解説、「唐王朝の皇族や貴族、有力者は、かたくりしい長安の生活にあきると、しばしば洛陽にいきぬきをもとめた」も、穏当ではない。

「名都篇」第4句、「被服麗且鮮」の訳「若い女たちの着るもの、かぶるものはきらびらかだ」(210頁)→これは、「少年」が色鮮やかな衣服をまとうことをいう。第1句に「妖女」が出るが、これは本詩の主題、「京洛」(後漢の都・洛陽)の「少年」の対として歌い出したものに過ぎず、第3句以下は、すべて京洛の少年の描写である。

○210頁、「代白頭吟」(抄)、第4句の後に、中略の指摘が必要。

○211頁、「好顔」の注「顔だち。好はうつくしい」→詩の第3句「洛陽女兒好顔色」に見える語であるが、下3字は、訓に「かんばせ うるわし」とあるように、「好 顔色」(顔色 好し)であり、「好顔 色」(好顔の色)ではない。従って「好顔 顔だち」という注の書き方自体、誤りである。

○212頁、「公子行」詩の第5句、「緑波清迴玉為砂」の訓、「緑波きよくめぐり」→迴(はるかに遠い)は迴(めぐり)とは異なる。従って「めぐり」は、誤り。

○213頁、詩題「公子行」(抄)の注、「四句ずつ押韻」→引用部分の詩は、4句→6句→2句で換韻。韻字は、水・子・裏 / 砂・霞・花・家 / 香・傍。最後の行、「天津橋は洛陽城の南、洛河(洛水)にかかっていた」→「天津橋は洛陽城の中(もしくは、洛陽城内)を貫く洛河(洛水)にかかっていた」。

○214頁4行目、「馬声廻合青雲外」の訳文、「天空では馬のいななきが雲とまじりあい」→「(多くの)馬のいななきが雲の上で一つにまじりあい」 6～7行目、「青雲離披錦作霞」(青雲 ちりゆき 錦 霞をなす)の訳「雲がわかれて、ちったのが錦のよう。じつは春霞であったのだ」→霞は、朝焼け・夕焼けの紅い雲気。無色の春霞ではない。ここは、錦のごとき紅い雲気が空に広がるさまを言う。ちなみに、中島敏夫『唐詩選』上(学習研究社、1982年)には、「錦を織りなす夕焼け雲」と訳す。

○215頁、「京城」の注「みやこ。洛陽は長安とならぶもう一つのみやこだった」→劉禹錫「賞牡丹」詩の結句「花開時節動京城」の京城は、瞿蛻園『劉禹錫集箋証』(上海古籍出版社、1989年、789頁)等に指摘されるごとく、じつは洛陽ではなく、長安を指す。「牡丹のみやこといわれるほど、洛陽ではさかんに栽培された」→洛陽の牡丹の盛大さは、北宋以降のこと。唐代では、長安に著しく劣っていた。「賞牡丹」詩、前半2句(庭前芍薬妖無別、池上芙蓉浄少情)の訳、「芍薬やはすのはなは、それぞれ、あでやかであるが…」→これでは、第2句の浄(清浄)の字が訳されていない。

○216頁4行目「吹尽当年道教衣」の衣は、灰の誤り。衣では、韻が合わない。

従ってその訳文「道士たちの道服も、あとかたもなくふきとばした。」(217頁)→「燃えて灰と化した道教の教典や靈宝を、あとかたもなく吹き飛ばした」の意となる。

○217頁1行目、「ここにくるたびに」(一回登此…の訳)→「ここ、寺内の焚経台にのぼるたびに」

○218頁、「奉先寺」の注、「龍門の北岸にあった。南岸の香山寺と対する」→「龍門の西岸にあった。東岸の香山寺と対する」特に前者の誤りは、不注意によるミス。なぜなら、219頁の2行目には、正しく「なかでも西岸、奉先寺の…」と記している。「天闕」の注「天の門。伊水兩岸に断崖がせまり、牛頭山の二つの峰が門（門柱）のようにむかいあっている様子」→「天然の宮闕たる龍門山（伊水の兩岸の山の総称）」のこと。従って訳文「天の門をおもわせる伊闕の両崖」は、「天然の宮門をおもわせる伊闕の両崖」のほうが妥当であろう。

○222頁1行目「百万の家があるというこの都会」（百万家）→「百万の人々の住む家がある、というこの都会」。「百万家」は「百万の人々が住む家」をいう慣用句。家が百万あるわけではない。「登龍亭」の第2句「繁台」のルビ、はんだい→はだい。これも、不注意によるミス。なぜなら、223頁、注の上段3～4行目に、正しく「日本の漢字音も『は』と訓む」と記している。「龍亭」の注「正式には万歳亭」→正式には万寿亭 下段1行目と「繁台」の注4行目に見える「周平」→周王の誤り。

○225頁、「中峰」詩の詩題と、その第1句「嵩山最高処」→范仲淹『范文正集』巻2（四庫全書）には、「和人遊嵩山十二題」詩のなかの一首である。

○229頁、「太原早秋」詩の第3句「霜威出塞早」の訓「霜^{きびし}威^{さい}く塞をいでしははやけれど」と訳文（230頁）「長城から外へでた。霜がきびしくならぬうちに、早めにでたのだ」（「塞」の注に、「長城をいう」とする）→この1句は難解であるが、「塞」は北方の辺塞に近い太原を指し（第5句の「辺城」は辺境のまち、太原を指す）、霜のきびしさは、ここ辺塞（辺境）のまち、太原ではひときわ早く生じることをいうだろう。出は、出現する、もしくは到る、の意。少なくとも塞を「長城」にとる解釈では、詩題の「太原の早秋」の意に合わない。一説に、「霜の厳しさは、辺塞を越えて早くも押し寄せ」とする。（高木重俊『名勝 唐詩選』上、日本放送出版協会、1996年） 第4句「雲色渡河秋」の訳文（230頁）「しかしはやくも、黄河をわたるいま、雲は、秋の気配だ」→「雲の色は、黄河を渡ると、すっかり秋らしくなった」。つまり、この1句も、上句と対になって、太原の早秋を描写しており、作者の体験そのものを直接詠んだものではない。「雲色」の注「黄河をわたる雲のいろ」も、不可解。 尾聯「思帰若汾水、無日不悠悠」の訳文（230頁）「帰りたい気もちはつよいが、帰国の日は汾水のながれのように、ゆっくりと、さきのさき。」→悠悠は、川の流れの遥かなさまに、望郷の憂愁の長きを重ね合わせた表現であり、帰国の日ははるかに遠いことをいうのではない。松浦友久『李白詩選』（岩波文庫）には、「帰郷を思えば、汾水の流れのように、一日として、悠かな憂いにとらわれぬ日はないのだ」と訳す。

○230頁、「題晋祠」→范仲淹『范文正集』巻2（四庫全書）には、「晋祠泉」と題する。『山西通志』巻221（四庫全書）には、「題晋祠」と題するが、まずは別集の詩題を採るべきであろう。ちなみに、明の曹学佺編『石倉歴代詩選』巻130（四庫全書）にも、「晋祠泉」と題する。

○231頁1行目「錦鱗無敢釣」句の前にも、2句の省略があることを注記する。それをせずに、単に「全十六句」という注だけでは、引用された8句の後に、10句が省略されたものと錯覚するであろう。

○232頁、「游懸空寺」詩の第4句、「嶺（楊剛編著『中国名勝詩詞大辞典』には、「岑」に作る）楼綴遠天」の下3字の訓、「遠天をつづる」と訳文「（高い楼閣が）高い^{そら}天をつづりあわせる」→綴は連の意。「つづる、つづりあわせる」では意味不明。「（高い楼閣が）高い天につらなる」意。訓も「遠天につらなる」と訓むべきである。

○238頁、「晴沙」の注「晴は青天」→「晴は晴天」の誤植であろう。

○240頁、「関外吟古詩」の訓「関外に古詩を吟ず」→おそらく「関外の吟（雁門関外でのうた）古詩」と訓むべきであろう。七言律詩（拗体）と見なしうるが、頸聯が対句でないこと、第2句の「不」の重複（第7句にも「不」がさらに出る）、第8句の「穿」の重複（同字重出のタブー）を考えれば、充分古詩とも見なしうるからである。「関外に古詩を吟ず」と訓み、本詩の詩形は七言律詩である（注）、と見なした場合、「古詩」2字の解釈が不明となろう。ただし、本詩を踏まえた元好問の詩「雁門関外」の首聯によって、「関外にて古を吟ずる詩」と訓むことも、充分可能である。いずれにしても「関外に古詩を吟ず」ではない。

○241頁、「雁門関外」詩の第3句の「据」→「原詩は正字」の方針に従えば、「據」（その簡体字が据）に作るべきである。

○243頁、「娘子関偶成」詩の第2句「娘子関前…」→王世貞『弇州四部稿』巻51（四庫全書）に「娘子軍前…」に作る。そうでないと、第3句に「関」字が見えるので、同字重出のタブーを犯すことになる。（訓も同じく改める）

○247頁6行目「関河無数柳」→姚奠中主編『詠晋詩選』（山西人民出版社、1981年）には、「関前無数柳」に作る。「前」のほうが、穏当であろう。「雲州」の注「山西省大同寺に…」→山西省大同市に…

○248頁、後ろから6行目、「枯れた草」→白草は「牛馬の飼料になる北方の草」（247頁の注）の名であり、「（秋になって）枯れた草」ではない。生命の輝きに満ちた「青草」とは対照的な、塞外の地に多い植物の名（一種の固有名詞）。

○250頁、「台山雜吟」→元好問の『遺山集』巻14（四部叢刊）等には、「台山雜詠」と題する。「太行直上猶千里」の訳文（251頁）「山つづきの太行山脈をこえてきたが、山峰の頂上には、ここからさらに千里も奥へゆくのだ」→この1句は、ややわかりにくい表現であるが、「千里」は高さの差をいうであろう。「五台山は高々とそそり立って、連なる太行山脈から、更にまっすぐ千里も上へと登り行く」ことを言う。あくまでも五台山の高峻なさまの描写であって、作者の登山行為を詠んだものではなからう。「井底残山枉叫号」の訳文（251頁）「ここ、たかい五つの山峰にとりかこまれた台内にいると、まるで井戸の底にいるようだ。とり残されたひくい山はなき叫ぶが、むだなことだ」→「（近くの）ほかの峰々（支脈）は低くて、（五台山に対して）あたかも井戸の底でむなしい叫び声をあげているかのようだ」の意。

○254頁、「朝朝」の注「まいあさ」→まいにち（毎日）。 「馬策・刀環」の注「馬のむちと刀のかざりの環」→馬のむちと刀。刀環は馬策と対にするための表現であり、ここでは、単に刀の意。環は韻字となる。

○255頁7行目、「辺境の守備兵に徴用されたわたしは、…」→本詩は、「征人怨」とも題されるように、一種の樂府新題（『唐詩三百首』所収）。一般的な征人（出征兵士）の嘆きを詠んだものであり、作者の体験を詠んだ作品ではない。 「三春白雪歸青冢」の訳文、「この土地では春でも雪が降る。春に降る雪はかくべつだが、例年どおり、王昭君の墓につもり」→「（出征兵士が）春、まだ消え残る白雪を踏んで、王昭君の墓のほとりに帰ってくると」 「賜宴諸蒙古」詩の第3句「霜仗輝煌明塞日」の下3字の訓「明塞の日のひかり」→下句の「辺風」と対になり、「塞日」で1語をなす。（明塞では意味不明）
辺塞の太陽の光を受けて明るくきらめく意。（塞日に明るし〔明らかなり〕）

○256頁5行目、「歛然尽職化鈞公」→『聖祖仁皇帝御聖文』第2集、卷47（四庫全書）に、職を「識」に作る。「識」が正しい。従って本句は、「歛然 職を尽して 鈞公に化せしめん」ではなく、「歛然として^{ことごとし}尽く^し識る^{かきん} 化鈞の公を」となろう。「化鈞の公」とは、あまねく教化が及ぶ功績（公は功と音通）のことであろう。

○257頁、「青冢」詩の第1句「環佩魂歸青冢月」の訳文（258頁）、「女性のアクセサリーに環佩があるが、王昭君のたましいが帰ってきたのは、ここの墓で、いまは月が照らすのみだ」→杜甫の詩「古跡に詠懐す」の、「環珮（=佩）空しく帰る 月夜の魂」、杜牧「青塚」詩の「夜夜 孤魂 月下に愁う」を踏まえた表現。岩波文庫『杜牧詩選』152頁以下参照。「おびだまの音を立てて、その孤独な魂のみ（体からあくがれいで、ここ青冢から（夜ごと）月光のもと故郷へと帰っていく）」の意。

○258頁2行目、「泉下相逢也含羞」の含羞は、「合羞」の誤り。元好問編『中州集』卷7（四庫全書）等参照。従って「泉下に あわば 含羞せん」の訓は、「泉下に あわば またまさに羞じるべし（也た合に羞づべし）」となり、訳文「あの世で王昭君に会ったなら、武将らは恥しいだろうな」は、「あの世で王昭君に会ったなら、武将らは、やはりきつと恥じ入るはずである」となる。「含羞」では、弱々しすぎる。

第四章 長安と辺境

○262頁、「玉輦…・金鞭…」の注「主第（公主=皇女のやしき）侯家を通りすぎたり、訪問したりしている」→「玉輦縦横過主第」の過は過訪（訪ねる）の意で、下句（金鞭絡繹向侯家）の「向」とほぼ同意（対文同義）。「通りすぎる」意味ではない。

○263頁、「飲中八仙歌」（抄）の、第2句と第3句の間、第6句と第7句の間に、中略の注記が必要。

○264頁、「張旭」の注、〈「書聖」「草聖」といわれた〉→書聖は、王羲之を指すのが通例であり、書聖の2字はカットすべきであろう。 後ろから9行目、「賀知章は玄宗（第六代）、肅宗（第七代）に仕え」→「、肅宗（第七代）」をカットすべし。賀知章は肅宗

の時代にはすでに没している。

○265頁、「年少」の注「いくらか非難をこめていっている」→これは、今日的な見方で、本詩ではむしろ共感をこめて歌う。「落花」の注「城門は夜間は閉ざされ、郊外の五陵から遊びにくるのは、昼間にかぎられていた」→唐代の五陵付近は、松柏が茂り、盗賊の出没する、荒涼たる墓地である。従って「五陵」の注に見える「長安の富豪が移り住み、…」(この記述も不正確ではあるが)は、あくまでも漢代のこと。唐詩の「五陵の少年(年少)」の五陵は、すでに豪奢で粋、もしくは無頼・遊侠の徒を暗示する一種の飾り言葉となっていた。松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』(大修館書店)673頁以下(植木久行執筆)参照。

○267頁、「千秋楽」の注「音楽あり、曲芸ありの祝日の雰囲気であらわそうと、題を千秋楽としたのであろう」→「千秋楽」は、唐代の教坊の曲名。もっぱら玄宗の誕生日「千秋節」のために作成されたもの。一種の楽府新題である。同条「花萼相輝楼」というのは宴会用の建物だったろう。名称はりっぱだが、じつは仮設のテントだったかもしれない→花萼相輝楼は、興慶宮の西南隅に、勤政務本楼とともにあった、豪華な高樓。拙著『唐詩の風景』(講談社・学術文庫)51頁以下等参照。第4句「一伎初成趙解愁」の「初成」の解釈、「いままでになかった芸」(267頁の注)、「だれもこの芸をしたことがなく、趙がさいしょに演じたので『初成』と聞いた」(268頁の説明)→ここでは、「(趙解愁は)折しもその絶妙な芸を、みごとに決めて見せた」の意。初は「折しも、やっと…したばかり」、成は完成する意。

○268頁4行目、「唐王朝は匈奴におびえ」→唐代には匈奴は消滅。突厥等をあげるべきである。「兵車行」の第4句「耶嬢妻子走相送」の妻子は、文言の「つまこ」(訓)、「女たち、子ども」(269頁の訳文)ではなく、「耶嬢」と同じ白話としての用例。意味は単に「妻」である。松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』(大修館書店)399頁以下(宇野直人執筆)参照。

○270頁、「擣衣」の注「衣服を洗うとき、汚れが落ちるよう砧を打つ。辺境にいる夫に衣服を送ろうと洗濯している」→擣衣は、織り上げた絹の布を杵で打つこと。繊維中の膠や不純物を除去し、布地をしなやかにして、光沢を出すために行われた。このあと、裁断するのである。拙著『唐詩歳時記』(講談社・学術文庫)318頁以下参照。「前線の夫に冬着をとどけようと、洗濯しているのだ」(271頁の訳文)の意味ではない。

○275頁4行目、「簪でしらがあたまをかくと」(白頭搔…)→簪ではなく、手で髪をかきむしる、苦悶・焦燥の行為であろう。「空海」の注「恵可和尚」→恵果和尚

○275～6頁、「在唐」の注「804—806。徳宗、順宗のとき」→「804—806。徳宗、順宗、憲宗のとき」276頁、後ろから2行、「第一句と第二句は対句」→「看竹看花本国春」(第1句)と「人声鳥啣漢家新」(第2句)は、上4字が対せず、対句とはいえない。

○277頁、「長安東郊」の解説、「正方形の城内」→「方形の城内」、「東郊には楽遊原がひろがっていた」→唐代、楽遊原は、東郊ではなく、長安城内の東南部、昇平坊を中心としていた。282頁の「楽遊原」の注も誤る。拙著『唐詩の風景』参照。あるいは『漢

- 詩の事典』319頁以下参照。 岑参詩の第4句「磴道盤虚空」(訓…磴道 虚空をめぐる)の「磴道」の解釈、「磴道は塔の入口までの石段」(278頁、「登臨」の注、および訳文)→これは誤り。磴道は、塔の上に登り行く石段の道を指す。章八元の詩(279頁)第5句の「迴梯」と同じものを指し、螺旋状の階段であったため、盤(めぐる、とぐるをまく)と表現したもの。
- 279頁、「十層」の注「代宗が十層にした」→この論拠は何か。単に代宗のときの作者の詩に「十層」とあるのみでは、文学的虚構とも充分考えられ、論拠にはなりえない。
- 280頁、後ろから5行目、「最上階にいたって」は、詩の第6句「絶頂初攀…」の訳文であるが、「初」の字の訳がない。「ようやく最上階にたどりつくと」の意。
- 281頁、「憶秦娥」の第3句、「秦娥夢断秦楼月」の訓、「秦娥 夢はたつ 秦楼の月」→「秦娥 夢はたゆ 秦楼の月」
- 282頁、「秦娥」「秦楼」の注に見える「箫史」→蕭史
- 285頁3行目、「騁望琅邪台」の訓、「馬をはせて 琅邪の台をのぞむ」、訳文(286頁)「さらに琅邪台まで馬車をはしらせて、海を眺望した」→これは、「騁望」(望みを騁す)の誤読。目路のかぎり眺めやることをいい、「馬(車)を走らせる」意味ではない。 5行目、「起土驪山隈」句の後に、中略の指摘が必要。そうでないと、「全二十四句」の残り十句は、引用文の後に続く誤解しよう。 6～7行目、「但見三泉下、金棺葬寒灰」の訓「ただみる 三泉の下、金棺 さむき灰に葬るを」、訳文(286頁)「地底深く、金棺が埋葬されたのは、けっきょくさむざむとした灰のなかだった」→「寒灰」は「寒骨」(〔始皇帝の冷たい死骸)とほぼ同意。押韻するために、灰の字を用いたもの。従って訓の「さむき灰に葬る」は「さむき灰を葬る」に訂正すべきであり、訳文も誤り。彼(始皇帝)の冷たい亡骸が金棺のなかに入れられ埋葬されていることを言う。ちなみに、「但見三泉下」句の前に、中略の注記も必要。
- 287頁、「長恨歌」の5句目、「春宵」の宵のルビ、よい→よる 春宵は「春夜」の意。また、この句の前に中略の注記が必要。「長恨」の注「いつまでもきえないうらみ。ただし、恨は男女のあいだの愛情をいう」→最愛の人、楊貴妃と死別した玄宗の、永続する無念の思いをいう。「華清池」の注「池は湯池。ひろい湯ふねをいう。湯ふねにはいる入浴の習慣はなかった」→この説の論拠は何か。疑問。
- 290頁、「長安西郊」の解説、「乾陵も、西郊にある」→乾陵も、西北郊にある。「阿房宮」詩の第3句「帝王苦竭生靈力」の苦は「若」字の誤り。従って訓の「はなはだしく」は、「もし」に改めなければならない。注の「苦」の条はカットすべし。訳文(291頁)「帝王の権力は大きい、権力にまかせて民衆をしぼりとり、しぼりつくすことは、してはならない。そんなことをすれば」→「帝王がもしも民衆(の財力)をしぼりつくして愛惜しなかったならば」 「阿房宮」の注「六国を滅ぼした始皇帝は一国を滅ぼすごとに、ここにその宮殿の様式で建物をたて、その国の美女をおいた」→これは、咸陽の北阪に築いたものであり、阿房宮とは無関係である。
- 291頁、「長恨歌」、「驚破…」句の後に、中略の注記が必要。

○293頁、「馬嵬坡」詩の第1句「旌旗不整奈君何」の下3字の訓「君 いかんせん」→君をいかんせん。「奈君何」の注(294頁)「君は玄宗をさす。玄宗はどうしたらよいか、わからなかった」→君は楊貴妃をさし、玄宗が楊貴妃の命を助けてやれなかったことを言う。「南去人稀北去多」の「北去」の注(294頁)、「安祿山側にしたがう」→太子李亨(肅宗)に随って北の靈武に赴いた人を指す。従って訳文「北の叛乱軍に投降するものは多い」も、訂正しなければならない。

○295頁、「這廻」の訓「このみゆき」、注「這はこのたび、廻は避難すること、天子がみやこにもどること」→この「這廻」は、このたび、今回、の意。「帝幸蜀」詩の第3句「阿蛮」の注、「玄宗は肉親のまえでは、阿蛮と自称していた。」→この説には、論拠なし。また玄宗の小字(幼名)は阿瞞であって、阿蛮ではない。阿蛮は、楊貴妃が寵愛した芸妓(女嬪)、謝阿蛮を指す。李之亮『羅隱詩集箋注』(岳麓書院、2001年)参照。従って「幼名でよぶが、蛮ちゃんも文句が良かったろう」(訳文)も、訂正すべし。

○296頁、「長陵」詩の第2句、「…尽列侯」の訓、「ことごとく 侯に列す」→「ことごとく 列侯」 第5句「耳聞英主提三尺」の訳文(298頁)、「明主がみずから剣をふるって、秦の蛇を斬った話はきいているが」→「明主がみずから三尺の剣をふるって、天下をとった話は聞いているが」 第8句「渭城斜日重回頭」の訳文(298頁)「渭城の落日をみようと、また、ふりかえる」→「渭城のほとり、日が傾くころ、またも(長陵のほうを)ふりかえりみる」 「唐彦謙」の注「并州のひと」→并州(山西省)のひと

○298頁、「乾陵」詩の第3句「自是」の訓、「おもいたち」、訳文「自分で思いついて」(299頁)→「自是」は、「もとより(むろん)…だ」の意を表す慣用句。

○300頁3行目、「宮床」→床は牀の俗字。原詩は正字を用いる方針であるから、牀に訂正すべし。また「宮の床」のうちの、床のルビ→床は寝台(寝たり坐ったりする台の総称)であり、「ゆか」ではない。

○301頁、「晚煙」の注「夕方の炊事のけむり」(「ゆうがたの炊煙」…302頁の訳文)→煙は、ここでは香煙ではないか。

○303頁、「飛龍引」詩の第5句「雲愁海思(令人嗟)」の訳(305頁)、「(黄帝が去って)雲も海もうれい」→「愁思が雲や海のごとく果てしなく広がって」。

○304頁、「鸞車」(下段)の注→「太微天帝は」は、「太微天帝君は」の誤り、また「黒羽の風に駕す」の風は鳳の誤り。『太平御覽』巻677参照。

○305頁2行目、「(黄帝は荆山で鼎を鑄造し、)不老不死の仙薬をつくった。仙薬は黄金となり」(「鍊丹砂、丹砂成黄金」の2句の訳)→「その鼎を利用して丹砂を鍊り、丹砂から黄金ができあがった。それを服用して昇仙できるようになり」

○306頁、詩題「過六盤山」の注「五言排律。上声紙・夔韻(換韻)」→換韻されている以上、近体詩の1種、排律ではありえない。詩形は五言古詩。「会当」の注くまさに…すべし。「まさに絶頂をしのぐべし/うちみれば衆山は小なり」(会当凌絶頂/一覽衆山小)という杜甫の詩句…→いつかきつと…しよう。また杜甫詩の「会当」は、2句全体にかかり、

「^{かなら}会^{まさ}ず^{まさ}に^{まさ}絶頂を凌ぎて / 一たび衆山の小なるを覽るべし」(いつかはきっと、あの頂上によ
じのぼり、まわりの山々を足もとに小さく見おろしたいものだ)と訓まなければならない。

「三輔」(下段)の注「^{けいちやういん}京兆尹、^{さひやうよく}左馮翊、^{ゆうふふう}右扶風という三つの官庁が長安を治めた」→
「^{けいちやういん}京兆尹、^{さひやうよく}左馮翊、^{ゆうふふう}右扶風という三長官がともに長安を治めた」

○317頁、「夏城漫興」詩の第2句「賀蘭西望碧嵯峨」の訳文(319頁)、「西のかた、賀
蘭山をながめると、山頂の雪が碧玉のようで、山容はけわしい」→ここは、そそりたつ
賀蘭山の緑の山容であって、雪をいただく山頂を詠んだものではなからう。 領聯
「名存異代唐渠古、雲鎖空山夏寺多」の訓、「^な名 のこるも ^よ代 ことなり ^{とうきよ}唐渠ふるく、
雲 とざす ^か空山 ^か夏の寺 おおし」→2句は対句。異代は空山と対し、「^よ代 ことな
り」ではなく、「^よことなる代」(後世、後代)の意であり、「時代を異にする」(318頁の「異
代」注)意味ではない。通常の訓読では、「名 異代に存して 唐渠古く、雲 空山を鎖
して 夏寺多し」となる。

○320頁、「青銅峽」の注「銀川から東へ五七キロ」→銀川から西南へ五七キロ

○321頁、「賀蘭夏雪」の第3句、「翻疑五月江城笛」の翻の訓「ひるがえって」→「かえっ
て」。ここでは、「反」「倒」の意。 「暮冬」の注「冬のなかでもっとも寒いころ。真
冬」→冬の末、陰暦12月。

○324頁、「柳色」の注、「柳色新は楊柳新とする版本もある」→「柳色新は楊柳春とす
る版本もある」

○326頁、詩の第6句、「葡萄」→蒲萄

○328頁、岑參の詩題「胡笳歌…赴河隴西」→最後の「西」字は衍字。カット。

○329頁、詩題「胡笳歌…赴河隴西」の注、「平声支(起句と第二句)・麻(第七、八句)・文(第九、
十句)、上声皓(第五、六句)韻(ほかは押韻にとらわれない)」→平声支(起句と第二句、**第四句**)・
麻(第七、八句)・文(第九、十句、**第十二句**)、上声皓(第五、六句)韻。 具体的に言えば、「悲・
吹・児 / 道・草 / 斜・笳 / 君・雲・聞」となる。 基本的に中国古典詩では、「押韻
にとらわれない」ものは存在しないことを銘記すべきである。 「岑參」の注「南陽
(河南省)のひと」→荊州江陵(湖北省)のひと。「南陽のひと」とするのは、いわゆる郡
望である。「河隴」の注「隴右(青海省西寧)」→隴右(青海省**楽都県**) 「天山」の注「新
疆ウイグル自治区の中央を横断し、…」→ここは、いわゆる天山山脈ではなく、祁連山
脈のことであろう。

○330頁5行目、「ふきはじめて、ねいろがつたわってくると、ここ^{ろうらん}楼蘭を守備する漢
人の若者は、郷愁にかられる」(「吹之一曲猶未了、愁殺楼蘭征戍兒」の訳)→本詩は都長安
での作。(陳鉄民ほか『岑參集校注』、劉開揚『岑參詩集編年箋注』など参照) 従って「ここ楼
蘭を守備する…」は、誤り。ここは単に胡笳の音色の悲しさを強調するために、楼蘭の
地名を用いたもの。松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』(増子和男執筆)の訳文を、参考
にあげる。「胡笳を吹いて、一曲がまだ終わらないうちに、(その悲しげな音色は)遙か楼蘭
まで出征している(勇猛な)守備兵たちをさえも、深い愁いに沈みこませてしまうほど

なのだ」 6行目、「秋になった。八月（陰曆）、蕭関をとおり、一本の道すじ」（「涼秋八月蕭関道」の訳）→「今は仲秋八月（陰曆）、君が通る蕭関の道」 10～11行目、「はるかに秦山の山なみ。隴山には雲がかかる。/ へんびな城砦で守備していると、まい晩かなしい夢ばかりみる」（「秦山遥望隴山雲、辺城夜夜多愁夢」の訳）→これでは、主題の送別との関連がわからない。参考として前引の『校注唐詩解釈辞典』の訳をあげる。「ここ秦山から遥か（君の赴く）隴山にかかる雲をながめやるのだ。（君は）辺境の町で、夜ごと愁いに満ちた夢を見ることであろう」秦山は、ここでは送別地である都長安（付近の山々）を指す。

○331頁、「馬上催」の注、「樂人が馬にのって、琵琶をはやいリズムでかき鳴らし、出発を催促する。おそらく出陣の儀式だった」→「杯をほせと、飲酒をうながすように（琵琶が）馬上でかき鳴らされる」。この催は、「出発を催促する」（訳文）意味はない。

○332頁、「涼州詞」第1句「黄河遠上白雲間」の訳文、「西をながめると、黄河が雲のあいだをのぼってゆく」→「黄河の上流、白雲のたなびくあたりまで、さかのぼっていく」。「孤城」の注「玉門関のこと」→玉門関より西の城塞。

○334頁1行目、「俳優たちは怒って席までつめよってきたが」→この有名な逸話には、このことは見えない。→「わけがわからず、立ち上がってたずねてきたが」

○336頁2行目、「胡霜払劍花」の訓、「えびすの霜 劍の ひばな はらう」と、訳「胡の地、砂漠におりる霜は、劍と劍がうちあってちらす火花にも降りかかる（霜は天から降ると考えられていた）」→この句は、上句の「辺月随弓影」と対になり、伝統的な訓読では、「辺月は 弓に随う影、胡霜は 劍を払う花」となり、下句は「胡の地、砂漠におりる霜は、劍に降りかかって花とさく」意。払は、「触れる、到る、おおう」意。「劍花」で1語をなすわけではない。従って「劍の ひばな はらう」「劍と劍がうちあってちらす火花にも降りかかる」などの意味にはならない。

○338頁、「嘉峪関感賦」→『嘉峪関詩選』（甘肅人民出版社、1987年）には、「出嘉峪関感賦」（嘉峪関を出でて感じて賦す）に作る。

○339頁、「天山」の注、「天山山脈。新疆ウイグル自治区の中部を横断し、…」→ここも、いわゆる天山山脈ではなく、祁連山脈のことであろう。魏嵩山『中国古典詩詞地名辞典』（江西教育出版社、1989年）など参照。 注「巉削」のルビ、ざんしょう→ざんさく「削は峭に同じ」→必ずしもそうとはいえない。『漢語大詞典』第3巻、876頁に、巉削を「chánxuē」とする。「天山巉削（摩肩立）」の訳「天山は、けずったような絶壁で…」→「天山は、高くそそり立ち、…」。「絶壁をけずり」の訓（338頁）も、高峻の意味で訓むのがよい。

○340頁、李白「蘇武」詩の、「白雁上林飛、空伝一書札」の「空」字は難解。竹内本には、訳を欠く。久保天随訳注（続国訳漢文大成）には、「決して、書札をつたえることは無かった」と訳し、「天子が上林で雁を射て、武の帛書を得たといふのは、常恵が漢使に教えた作り言で、もとより事実ではない。詩中、白雁上林飛の二句は、この事実を翻用し、白雁

は上林に飛んでも、武の書札を帯びず、つまり音信全く絶えて居たといふ意を述べた」と解釈する。

○341頁、「月窟水」の注「西域の月氏国の水」→昔、月の帰宿するところは、西方であると考え、それで極西の地を月窟という。「西極の地の冷たい水」。「河梁」の注「橋。橋をわたらなければならぬほどの別離。また、別れた土地」→『文選』巻29に収める、李陵が蘇武を見送るときの詩「与蘇武」(蘇武に与う)、その3に「手を携えて 河梁に上る、遊子 暮れに何くにか之く」を踏まえた表現。「橋をわたらなければならぬほどの別離」という意味はない。ちなみに、後世、「河梁」といえば、離別の地を表す慣用語となる。

○344頁、「孤城」の注、「唐の武将。哥舒翰が青海湖畔に、吐蕃にそなえてきずいたとりで」→限定しすぎであり、イメージのふくらみを阻害する。「黄沙」(「黄沙百戦穿金甲」の黄沙)の注、「砂漠の砂が風にまきあげられて、吹き付ける」→「沙場」の語もあるように、「黄沙の広がる(砂漠の)戦場」の意。「穿」の注「穴をあける。戦地でながくたたかい、砂があたって鎧に穴があいた」→甲冑も破損するほど、激しい戦闘(奮戦苦闘)をする意。

○348頁、第2句「沙凝…」の後に、中略の注記が必要。

○350頁、「鳴沙山」詩の第4句「漁陽慘急…」の訓「漁陽 はげしく …」→「漁陽 慘 はげしく …」漁陽慘は鼓曲「漁陽慘搥」の略称。(『漢語大詞典』第6巻、96頁参照) 従って注「慘急」(351頁)の条に「慘は鼓のうちかた。…」とするのは、妥当ではない。

詩題「鳴沙山」(抄)の注「七言古詩(押韻にこだわっていない)。…」→「鳴・行・平/雨・舞/闐・仙」と換韻しており、古詩の押韻法に従っている。「押韻にこだわっていない」とする指摘は、誤り。

○351頁、「月牙泉」の第1句「徳水源泉星宿海」→楊剛本では、泉を「伝」に作る。「徳水(黄河)の源は伝う 星宿海と」のほうが、「徳水 みなもとのいずみは 星宿海」(竹内本の訓)より穏当であろう。

○355頁、詩題「涼州館中与諸判官夜集」の注、「平声尤(第一、二句)・麻(三、四)・上声早(五)・平声寒(六)・平声真(七、八)・上声皓(九、十)・平声灰(十一)・上声皓韻(十二)(二句ずつ押韻。ただし五・六、十一・十二句は押韻せず)」→これでは、換韻の状況が不明であり、誤解も多い。本詩は、頭・州/家・琶/断・漫/人・春/草・老・倒と換韻する。「断・漫」[上声早(五)・平声寒(六)]は、古詩ゆえの通押。従って「五・六…は押韻せず」は、誤りである。終わりの4句は、「草・老・倒」と押韻しており、「十一・十二句は押韻せず」というのも、誤解。終わりの4句は、第9・10・12句が押韻するのである。従って「上声皓(九、十)・平声灰(十一)・上声皓韻(十二)」のうち、平声灰(十一)の部分はカットしなければならない。かくして「二句ずつ押韻」も誤りとなる。「書記なかまの酒宴で、大酔泥酔したので、その無礼講をあらわすためか、押韻も一つの韻でおす「一韻到底」ではなく、二句ごとに押韻し、しかも、押韻していない句もある」(356頁)も、明白な誤り。古詩の押韻法に従っており、「押韻していない句もある」

は、大きな誤解である。「河西」(下段)の注「黄河の西。黄河にのぞむ…」→ここでは、河西節度使が置かれた涼州(甘肅省武威)のこと。「三五春」の注「三月十五日、春のさかり」→「三、五年(三~五年)」。「花門」の注「…涼州にウイグル人が宿泊する施設があり、花門楼といった」→きわめて難解。劉開揚『岑參詩集編年箋注』(巴蜀書社、1995年)によれば、花門楼は、涼州の西北の城楼か、と推測する。涼州の西500里の花門山に向いているため、とする。「ウイグル人が宿泊する施設」とする説は、岑參はウイグル人ではないため、違和感を覚える。

○356頁6行目、「**あに よく 貧賤にして 老いたるを みんな**」といているのは、貧しく地位がひくいから老後の心配がないわけではないが…→「豈能貧賤相看老」の訓と訳文であるが、この1句は、「あに よく 貧賤にして **あいみすみす**老いんや」と訓むべきであり、(相看は、^{あいみす}相看みす)「貧賤のままにみすみす老人となつてたまるものか」(高木重俊『名勝 唐詩選』上、日本放送出版協会、1996年)の意である。

○357頁、「涼州郊外遊望」詩の第3句「**婆娑**」の注、「秩序がないこと。ばらばらとあつまるさま」→通説の「踊るさま」でよい。後ろから3行目、「よごれたくつしたで、みこがおどっていた」(最終句の「羅袜[この字は襪の正字にすべし] 自生塵」の訳)→「舞うたびに足もと(絹のくつしたの下)から、塵(細かい土ぼこり)がまいあがる」。この句は、女巫の軽やかな舞の足どりを、曹植「洛神の賦」を踏まえて述べたもの。「きぬのくつした **いつしか ちりによごれたり**」(訓)ではない。

○358頁、「亭皋」の注「…水辺のあずまや」→水辺の平地(『漢語大詞典』第2巻、365頁参照)。亭は、ここでは「あずまや」ではなく、「平」の意。

○360頁、「遊」(因人作遠遊の遊)の注「役人としての旅ではないから遊といった」→「官遊」の語もあり、公私に関係なく「遊」字は使用できる。しかも本詩では、遊は韻字でもある。「魚龍」の注「…ただし、辞書には龍魚川とする」→辞書の名は不明であるが、これは魚龍川の誤植であろう。最後の行、七五六年→七五七年

○361頁5~6行目、「華州の司空に任命された。司空は形式だけの職名で…」→司空は、**司功参軍**の誤り。「形式だけの職名」ではない。

○363頁、「白雲謡」の第4句、「山川 これに まじる」→「山川 **これを へだつ**」 詩題「白雲謡」の注、「押韻にとらわれていない」→古代の歌で字音が後世と大きく異なっているため、韻字の指摘がむずかしい。しかし、基本的に「押韻にとらわれていない」詩歌は存在しないことからすれば、本詩は偶数句ごとの押韻、「出・之・来」が韻字であろう。出には「スイ」の字音もある。

○364頁、「瑤池」の第2句「黄竹歌声動地哀」の訓、「黄竹の**歌声** 地をどよもしてかなしむ」→「黄竹の歌声 地をどよもして**かなし**」

○366頁3行目、「何独然此中」の訓、「なんぞ ひとり このなかにかく ある」→この「然」は、燃の本字。もえる意。「かく(ある)」ではない。「此中」は、2字で「ここ」の意。従って「なんぞ ひとり ここにのみ **然**ゆるや」となる。「不知陰陽炭、何独

然此中」の訳文、「そのとおり陰陽の炭が火焰山になったのだから、なぜ、ここでだけ、このようなのか」→「陰陽の炭（陰陽という名の燃料）は、どうしてここ（火焰山＝火山）だけで、燃えるのであろうか」。（不知は、「いったい…かしら」といぶかしむ語感） 最終句「孰知造化功」の訓、「いづくんぞ 知らん 造化の功」→「たれか 知らん 造化の功」 「孰知」は、ここでは、「誰も気づくまい」の意。 詩題「経火山」の注「五言律詩」→五言古詩。句数も10句であり、8句の律詩ではあり得ない。平仄も近体詩の規則に従っていない。

○367頁6行目、「城あとがのこる蒲昌の東に、突出している」（「突兀蒲昌東」の訳）→「（西州）蒲昌県城の東にそそりたつ」。「城あとがのこる」をカットすべし。岑参の時代、廢墟ではない。「火州城」詩の第1句、「高昌旧治月氏西」の訓、「高昌 むかし治めし 月氏の西」→「高昌の旧治は 月氏の西」「旧治」の治は治所。旧治で旧都の意。

○368頁3行目、「居人争睹漢官儀」の訓「すむひと あらそいみる 漢官の儀」→「すむひと あらそいみる 漢の官儀」 漢官儀は上句の「唐制度」（唐の制度）と対をなすため、漢官の儀とは訓めない。

○371頁、「風雪」詩の第2句、「漫空沙石乱飛揚」の「漫空」の訓、「ひろき 空」→漫空は「漫天」（満天、天空をおおう）の意。「漫」の注「ひろびろとしている」も誤り。漫は、「おおおう、あまねし」の意。 第3句、「窮川大漠連朝暗」の訓、「なにもなき ひろのはてしなき 沙漠 朝も 暗し」→連朝は、「連日」の意。「朝も」の意ではない。 第4句「多少征人委異郷」の訓「かぞえきれぬ 兵士 異郷に うちすてらる」→この征人は、兵士ではなく、遠行する旅人を意味しよう。

○372頁、「婦女」詩の第4句、「不関山色失胭脂」の訓、「山の色にもかかわらず 胭脂をうしなう」→「山色 胭脂をうしなうに かかわらず」。 解説（373頁）「せっかく胭脂山という山があるのに、二十をすぎると胭脂（口紅やおお紅、おしろい）をつけない」→胭脂山は燕支山とも書き、かつて匈奴の女性たちが、ほおや唇にぬる紅（胭脂）を作る紅藍（べにばな、燕支草）の産地として有名。『史記』巻110、匈奴伝に引く『西河故事』には、霍去病の軍に敗退して、焉支山（＝胭脂山・燕支山）等を失ったとき、女性たちが化粧に困った歌が収められている。その一節に言う、「我が焉支山を失い、我が婦女をして顔色無からしむ」と。「不関山色失胭脂」の句は、おそらくこの歌を踏まえていよう。「紅藍の育つ山を奪われて化粧できなくなった事態とは、まったく無関係である」と。

第五章 巴 蜀

○379頁、蘇軾の詩、「万騎…」句の後、「豈止…」句の後、中略の注記が必要。

○380頁、詩題「五丈原」（抄）の注「題は仮題」とあり、381頁、後ろから5行目に、「この詩には題がない。北山僧舎にある懷賢閣にちなみ、懷賢閣と題するむきもある（引用者注…楊剛本を指す）が、うたっている内容どおり、五丈原という題にした」→蘇軾の詩には、題がある。「是日至下馬磧、憩於北山僧舎。有閣曰懷賢、南直斜谷、西臨五丈

原、諸葛孔明所従出師也（是の日 下馬磧に至り、北山の僧舎に憩う。閣有りて懷賢と曰う。南は斜谷に直り、西は五丈原に臨む、諸葛孔明の 従りて師を出せし所なり）」（『蘇軾詩集』〔王文誥輯注、孔凡礼点校、中華書局、1982年〕176頁）が、そうである。一見、序文のようであるため、「この詩には題がない」と錯覚したのであろうか。「漢巴」（「万騎出漢巴」の漢巴）の注、「漢はここを国（蜀漢）とした劉備が漢の正統であることをいった。…」→ここでは、漢水の流域（漢水・巴山。漢中が中心）をさす。従って「漢の正統をつぐ巴（四川省）から出撃したのであった」という訳文（381頁6行目）にも従いがたい。

○381頁1行目、「七月二十七日、斜谷にきて、蟠龍寺に宿泊した。この日のひるは北山僧舎でしばらく休憩し、…」→「この日のひるは」は、翌日（二十八日）。孔凡礼『蘇軾年譜』（中華書局、1998年）参照。3～4行目、「犬の牙のようにするどい山峰がいくつもそびえている」→原詩は「三山如犬牙」。「犬の牙の如し」とは、「するどい」さまの形容ではなく、出たり入ったりして複雑に入りくむさま、じぐざぐで整齊でないさまをいう。小川環樹・山本和義『蘇軾詩集』第1冊（筑摩書房、1983年）468頁に、「犬の牙の食い違うさまの三つの山」と訳す。9～10行目、「むかしの物語にちなむ山は、よりそってたずねても、涓水がながれるだけだ」（「故山依涓斜」の訳）→「山だけは昔のままに、涓水（の岸边）によりそって傾く」。

○383頁、「五丈原懷古」→『陝西通志』卷97（四庫全書）には、「過郿県懷古」（郿県を過りて古を懷う）と題する。「蔣之奇」の注「徽宗（第八代）にとりたてられ、歐陽脩を弾劾して官をおとされたが復活」→「歐陽脩を弾劾して官をおとされたが復活。徽宗（第八代）にとりたてられた」。時間的前後に従うべきである。

○385頁、「蜀道難」の第9句、「可以横絶峨眉巔」の「可」は、静嘉堂所蔵の宋版（『李太白文集』卷3）には、「何」に作る。とすれば、この「可」は、「何」の意である可能性が高い。（『詩詞曲語辭匯釈』卷1、可の条に、「可、猶豈也、那也」とある）。この場合、上句「西当太白有鳥道」の鳥道は、「飛ぶ鳥の道。鳥しか通れない」（386頁の注）の意味ではなく、「鳥しか通れないような険阻な山道」を意味しよう。

○386頁、「四万八千歳」の注、〈「国がひらけたことは、太古の蚕叢から三万四千歳」と揚雄『蜀王本紀』にある〉→前半は、「蜀王の先、蚕叢・…・開明と名づく。開明従り上りて蚕叢に到るまで三万四千歳を積む」の誤読。いいかえれば、開明は蚕叢とともに、古代の蜀の王の名であり、「国がひらけたこと」ではない。「天梯石栈」の注に見える「石栈」の意味「石でつくったかけ橋」→岩壁に造ったかけ橋。

○388頁、「星河」（下段）の注「あおいで息をひそめる」（仰脅息の訳）→あおいで苦しい息をつく

○389頁、詩の第6句、「経綸乃武文」の乃は、上句「事業侔伊呂」と対をなすことを考えれば、「及」字の形訛かもしれない。

○392頁、「川原」（下段）の注「川は陝西方言で平地をいう」→この説の論拠は未詳。

○393頁6行目、「平原にみなぎる意気はさかんだ」（「地連秦雍川原壮」の下3字の訳）→

平原が大きく広がる。 10～11行目、「大散関はまた、むなしく秋をむかえた」（「大散関頭又一秋」の訳）→大散関のほとりで、またも秋がむなしくすぎてゆく。「漢台」詩の第3句の「意」は、「竟」の誤り。

○394頁2～3行目、「磊落真王氣、蒼茫大將壇」の訓「らいらく まことに王氣あり、そうぼう 大將壇」→2句は対句。従って「らいらく 真王の氣（あり）、そうぼう 大將の壇」となる。「まことに王氣あり」ではない。

○396頁、詩の第5句「兩崖崇墉倚」の訓、「兩崖 たかきしろのかべ せまり」→「兩崖 たかきしろのかべのごとく そそりたち」「倚」は「崖が両側からせまる」（397頁の注）意味ではなく、（両側の崖が高い城壁のように）そそりたつことをいう。「まんなかの道をはさみ、よりかかるように、迫っている」（訳文）ことではなかろう。

○399頁、「劍閣」（抄）の注「七言古詩」→雜言古詩。

○400頁、後ろから5行目、「岩石はくろい鉄の色で、空がはれているのに、しめったような岩肌だ」（「鉄色黠黠晴猶湿」の下3字の訳）→「（岩石はくろい鉄の色で、空がはれているのに、）岩肌は依然としてしめっている」「猶」を正しく訳す。

○401頁、李白詩の第4句「珠箔懸銀鉤」の訓、「珠 箔 銀の鉤に かかる」→珠箔は「真珠の簾」の意で、珠簾の類語。「真珠や金箔の簾」（訳文）ではない。いいかえれば、「箔」は「金箔」（「珠箔」の注）ではなく、すだれ（簾）の意。 第8句「春江繞双流」の訓、「春江 双流を めぐる」→「春江 双流を めぐらす」「双流」の注（402頁）「成都近郊の県。…」→県名ではなく、二筋の川（二江。具体的には郫江・流江）の意。従って「春の岷江は双流県城をめぐって流れる」意味ではなく、「春の大江は、二筋に分かれて、益州〔成都〕の城をめぐって流れている」意。 譚其驤主編『中国歴史地図集』〔隋・唐・五代十国時期〕（地図出版社、1982年）、65-66にのせる「成都附近」図参照。 第9句「今来一登望」の「今来」の訓、「いま きたり」→「いま」。「今来」の来は、時間詞につく接尾辞。夜来・晩来の来と同じ。「来」字を誤読したために、「途中、散花楼をみかけ、楼上にのぼって眺望した」という誤解が生まれた。

○402頁、「錦城頭」の注、「成都をとりまく江山が織物のように美しいので、唐のころ錦の城といった」→これは俗説に過ぎず、405頁の注に見える「錦官城」の略称、と考えるべきであろう。 続く注「頭は意味のない助辞。いまここにいるぞ、という親しみをこめる」→この解説は、不可解。 後ろから3行目、「黄金で飾られた窓と刺繡の布が貼られた戸がならび」（「金窓夾繡戸」の訳）→「夾」字が正しく訳されていない。久保天随の訳（続国訳漢文大成『李太白詩集』）、「黄金を纏めた窓があつて綺麗に彩色したる戸を嵌めこみ」のほうが、妥当である。 最後の行「蜀道（蜀の棧道）の絶壁の階段は緑雲のなかまで高くのび」（「飛梯緑雲中」の訳）→「飛梯」の注「高いきざはし。うえに登る石段が高くまでつづく」は妥当。しかし続く「梯はハシゴにかぎらず、崖に刻まれた足がかりもふくむ」は、カットすべし。この飛梯（高いきざはし。うえに登る石段）とは、蜀道（蜀の棧道）の絶壁のそれではなく、「錦城の散花楼に登る」と題された散花

楼のそれである。そう考えてこそ、下句の「極目散我憂」（とおく ながめ わが うれい 散ず）へと続くのである。突然、「蜀道（蜀の栈道）の絶壁」など、出てくるわけがない。○403頁2行目、「暮れがたの雨のなか、船をやって三峡にむかおうとした」（「暮雨向三峡、春江繞双流」の上句の訳）→これも、誤解。「終日ここに遅留すると、暮雨は三峡に向つて飛び去り」（久保天随の訳）、「日暮時瀟瀟細雨漂向三峡」（詹福瑞・劉崇徳ほか『李白詩全訳』〔河北人民出版社、1997年〕764頁）の意。 岑参の詩の第3・4句、「感通君臣分、義激魚水契」の訓、「君臣の分を 感通し、義 魚水の ちぎり を 激す」→2句は対句であり、「感通じて 君臣の分あり、義 激して 魚水の契あり」となろう。「感通じて」「義激して」とは、劉備と孔明が意気投合して感激するさまをいう。「義 魚水の ちぎりを 激す」では、意味が通じがたい。 「先主武侯」の注、「天子となった劉備に武郷侯（略して武侯という）に封じられた」→孔明を武郷侯に封じたのは、劉備ではなく、後主劉禪である。『三国志』巻35、諸葛亮伝参照。

○404頁、「英霊」（下段）の注「諸葛亮をいう」→「先主武侯廟」の詩題によれば、諸葛亮と劉備の2人を指す、と考えるべきであろう。

○406頁4行目、「みやこをはなれ、華州（陝西省華県）、秦州（甘肅省天水）、さらに同谷（甘肅省成県）へとうつり住み」→「華州、」をカットすべし。華州は杜甫が官を辞して秦州に赴く前の任地。 後ろから3行目、「やしろの階段のわきには、緑の草が生え、…」〔「映階碧草…」の訳〕→「映」字を誤解。この映は、「掩う」意。

○408頁、後ろから8行目、「梓州」のルビ、しんしゅう→ししゅう

○411頁、後ろから2行目、「桃花駿馬青糸鞵」の句に対して、「この詩句では桃の花がうたわれている。燃えるような、くれないの色である。…」→これは、名馬・桃花馬（毛色白中有紅点的馬）について述べたもの。

○412頁、「峨眉山月歌」の「平羌」の注「一里＝四〇〇メートル」→一里＝五〇〇メートル 「清溪」の注「四川省犍為県清溪鎮」→ここは、板橋溪（樂山市の上流、約15キロの小鎮）。清溪鎮は、「平羌」（青神から樂山までの区間）より約50キロ下流となり、不適切。松浦友久『李白詩選』65頁、補注〔19〕参照。 「三峡」の注、「平羌江はいま青衣江という」→李白詩中の平羌江は、岷江の1区間の名。現在の青衣江は、岷江にそそぐ支流の名であり、（417頁、「凌雲」の注参照）両者は全く異なる。

○413頁1行目、「作者はこのとき、二十二歳、あるいは、二十五歳だったろう」→「二十二歳、あるいは、」は、カットすべし。信頼すべき22歳説はない。

○416頁、「却話」（下段）の注、〈口語的表現で、却説ともいう。講談などで、「さて」といって、話をくぎるのと同じ〉→かつてこのような説も通行したが、穏当ではない。「ふり返って語る」意。松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』610頁以下（鈴木義昭執筆）参照。

○417頁2行目、「載酒…」句の後に、中略の注記が必要。 5行目、「謫仙此語誰解道」の訓、「謫仙の この語 たれか ときあかさん」→「謫仙の この語 たれか 解く道わん（もしくは「道を解ん」）。「解道」は「説明していう」（418頁の注）意味ではなく、

表現の巧みさをほめたたえる慣用語。「よくぞみごとに表現したものだ」の意。従って「謫仙という、李白のこの一語（「峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流」の2句…引用者注）は味わいが深く、誰にも説明できるものではない」は、誤り。「峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流」の絶妙な表現に対する賛美である。「韓荊州」の注、「生まれては万戸侯の封をもちいず（生不用封万戸侯の訓訳）」→「生まれては万戸侯に封ぜらるるをもちいず」不用は「…するには及ばぬ」の意。「漢嘉守」の注「守は地位が低いが長官を代行する」→守は太守（郡の長官）。しばしば刺史（州の長官）の代称として用いられる。従って「嘉州の下っ端役人」（418頁の訳）は、誤り。

○418頁、後ろから7行目、「詩を贈られた相手の張嘉州についてはわからない。張は姓。官職名を姓のあとにつけて呼ぶのは礼儀上のしきたりである」→王朝謙・林恵君主編『巴蜀古詩選解』（四川大学出版社、1998年）によれば、張嘉州は張伯温、あざな嘉父。北宋の呉興の人。宋の元祐年間、嘉州太守になったので、張嘉州という、と。

○419頁4行目、「謫仙」といわれた→「謫仙人」といわれた。最後の行、「晚渡平羌江…」→晩は「暁」の誤り。

第六章 長江悠悠

○423頁、「三峡」の解説、「四川省奉節」→重慶市奉節 428頁の「白帝」の注も、同じく誤る。「客」の注「杜甫の生まれた故郷は河南省鞏県」→杜甫の生まれた故郷は河南省鞏義市。

○424頁、解説（地の文）1行目、「渝州（四川省重慶地方）」→渝州（重慶市）

○426頁、解説（地の文）2行目、「ひろがる白い霧が、しだいに闇のなかにきえる」（「逶迤白霧昏」の訳）→「白い霧が、うねうねと這いひろがって、暗くとざす」。

○428頁、「白帝」詩の第3句、「高江急峡雷霆闘」の下3字の訳文、「天空ではかみなりといわずまがたたかっている」→ここは、豪雨のために水かさを増した、峡中の長江の激流、そのすさまじい音を、「雷霆が闘う〔ごろごろと頻発する〕」と表現したものであろう。

○429頁、「灘瀨歌」の注、「民謡」→この8句は、楊剛『中国名勝詩詞大辞典』に、「選自『古詩源』『南史』『水経注』」と指摘するように、楊剛が「取り合わせ作り上げた」ものであり、この形で一般に流布する歌ではない。このことを、やはり注記すべきであろう。いいかえれば、本来、いろいろな形で伝わってきたものであり、押韻は2句単位の毎句韻（たとえば、第1・2句では、馬と下が押韻）となる。歌の第9～10句、「灘瀨大如鼈、瞿塘不可絶」の訓、「灘瀨 でっかいぞ 鼈すっぽんのよう、瞿塘 しめられない」の、「絶」字の解釈→「鼈」の注にも「すっぽん。絶は料理にさいし、しめること。ひとを噛むので、あぶない」というが、疑問。この歌は水面に浮き出た暗礁の「大きさ」によって、危険度を比喩・表現したものにすぎず、絶は、「渡る」の訓（越過、横度）で好いだろう。歌の第6句、「瞿塘不可流」の訓、「瞿塘 ながれない」も、「瞿塘 流れ下れない」と考

えるべきであろう。

○430頁、詩の第1句「三峡伝何処」の訳(431頁)、「三峡のどこをほめようか」→「三峡の名は、いつ、どこから伝わってきたのであろうか」。もしくは、「三峡のなかで、最も有名なのは、どこであろうか」の意。「伝」を、ほめる意にはとらえがたい。詩の第4句「穿水忽雲根」の訳(431頁)、「長江のながれは、門を突破したあとたちまち雲となる」→対句の上句(「入天猶石色」)は、瞿塘峡を形成する「岩石の絶壁」(双つの断崖)が、上の天空に伸びゆくさま、下句は、下の江中の底へと突きぬけるさま。「(下の方は)江水をつきぬけて、ふいに雲根が現れる」ぐらいの意。「雲根」の注「崖の波うち際が雲をうんでいる。…」→ここでは、岩の意。「穿水」の注「穴をあけんばかりに岩にぶつかる長江の水」にも、従いがたい。ちなみに、鈴木虎雄・黒川洋一の訳に、「下の方は水の奥そこまで穿っても忽ち雲根(石をいふ)をみとめるのである」とある。(岩波文庫『杜詩』第7冊)

○432頁、「巫山高」の第6句、「林暗鳥疑飛」の訓「林 くらく とり とぶをうたがう」→現代語訳が省略されているので、このままでは「うたがう」意がきわめてわかりにくい。ここの「疑」は、恐れる意。 樂府題「巫山高」の注「五言律詩」→律詩の声律(平仄)をほぼ守るが、作者の范雲は律詩が成立する前の、六朝・梁の人であるので、五言古詩と見なすべきである。 第8句「相望徒依依」の訓、「望めども いたずらにとおく かすか」→「巫山を眺めて、いたずらに思いをつのらせるばかり」。「依依」は、「遠くてぼんやりしたさま」(433頁の注)ではなく、恋しがるさま、思慕の情を断ち切りがたいさまをいい、「とおく かすか」の意ではない。

○433頁、「隔江」の注、「屈原の生まれた屈平がある」→屈原の生まれた屈坪がある。

○439頁、「荊州」の解説、「唐のときは長安につぐ大都会で、人口は百万」→この説の論拠は何か。疑問。

○441頁、詩の第5句、「城分蒼野外」の訓、「城 あらわれて分つ 蒼野のそと」→分は分明、城の姿が、くっきりと現れる(見える)意。「城壁がみえてきて、城外の原野と区別できる」の注(442頁)は、明瞭さを欠く。また「蒼野外」の注(442頁)に、「蒼野が城の外側にあるということ。蒼野のまたその外側ということではない」とあるが、この説明も煩雑すぎる。王鐔『詩詞曲語辞例釈』(増訂本、中華書局、1986年)「外」の条には、詩詞中の「外」字は、融通性に富み、内中・辺畔・上・下などの意を表すとする。この外も、「(蒼野の)なか」ぐらいの意に解してよい。詩の第6句、「樹断白雲隈」の訓、「樹 のびて断つ 白雲のきわ」→断は、対をなす上句(城分蒼野外)の「分」の反意語。「断つ」ではなく、「断ゆ(消えて見えない)」の意であろう。「樹々は、(高く伸びゆきて)白雲の深みのなかに消えている」。「天空の雲が分断される」(442頁、下段「断」の注)、「白雲は梢で分断されている」(442頁の訳文)ことではあるまい。

○443頁、「詠懐」詩の第2句、「上有楓樹林」の「上」の訓は、「うえ」よりも、「ほとり」のほうが、穏当であろう。訳文には、「岸べ」とする。 第9句、「朱華振芬芳」の訓

「朱^{あか}きはな さきてちり かおりよく」→下3字は、「芬芳^{ふる}を振う」、つまり、「かおりをまき散らす」意。「さきてちり かおりよく」の意味ではない。 第10句、「高蔡相追尋」の訓、「蔡^{さい}のみやこに 馬はしらせ あそぶ」、訳文(445頁)「むかしの蔡国^{さいこく}の王、靈侯は歡樂を求め、みやこで馬車をはしらせた」→下3字「相追尋」は、歡樂を追い求め美女をたずね追いかける意。「馬はしらせ」「馬車をはしらせた」などの訓訳は、句意を離れすぎている。

○444頁1行目、「一為黄雀哀」の訓、「一たび 黄雀の かなしみ なさば」→「一たび 黄雀^{ため}の^{かな}為に 哀しみ」 この「為」は、「ために」の意であり、「なす」ではない。黄雀は、安泰に居て、危険を忘れし者の比喩。「黄雀のように射おとされれば」の訳も、わかりにくい。

○446頁、詩の第3句、「詩書敦宿好」の訳(447頁)「もともと作詩や読書が好きだった」→「詩書」は、『詩経』や『書経(尚書)』、広く(儒家の)古典・経典を指す。「作詩や読書」の意味ではない。

○450頁、「短歌行」の第4句、「去日苦多」の訓、「去りし日 くるしみ おおし」→「去りし日 はなはだ おおし」 「苦」の注に、「はなはだ。ここは、くるしい」(451頁)とあるが、「ここは、くるしい」とする解釈は、誤り。「過ぎ去りし日々の、まことに多きことよ」の意であり、「むかしをおもえば、くるしみばかり」(452頁の訳)ではない。

○451頁3行目、「青青子衿」の訓、「くろき 衿^{えり}の きみ よ」→「青青」を「くろき」と訳するのは妥当であるが、「青青子衿」の注で、青衿を「えりのいろがあおい」としており、読者は、くろいのか、あおいのか、とまどうであろう。細心の注意が必要である。

6行目、「沈吟」のルビ、しんぎん→ちんぎん 沈には、チン・シンの2音があるが、この場合は、チン。「曹操」の注「五十四歳の作」→この説は、白話小説『三国志演義』第48回に記される、赤壁の前夜の作と見なす話にもとづくのであろうが、それは単なるフィクションにすぎない。むしろ赤壁の戦い以後の作、と見なすほうが穏当である。少なくとも「？」をつけなければならない。

○455頁4行目、〈炎でこちらまで赤く染った。それで「赤壁」といい〉→これは俗説であろう。むしろ前の頁(454頁)の最後の行、「江岸の崖が赤色を呈」するのと同じ理由であろう。長江のほとりに赤壁が何か所も伝えられるのも、このためである。 後ろから5行目、「鳥のはねの扇^{おうぎ}」→454頁、下段の「羽扇…」の注には、「鳥の羽でつくった、うちわ」とある。読者は、扇は「うちわ」か「おうぎ」か、と迷うであろう。扇のルビの「おうぎ」は、「うちわ」に訂正すべきである。

○458頁、詩題「漢江臨泛」の訓、「漢江^{ながれ}の泛に臨む」→この詩題は、そのまま「漢江臨泛」としか訓めない。臨泛は、「漢江に臨んで(漢江の水辺に到り)舟^{うか}を泛べて楽しむ」意。泛には、「ながれ」の意味はない。従って「いまものこる襄陽の古城は、城壁にのぼると、漢水^{とうとう}が滔滔と北をながれるのが眺望できる、というのが題の意味である」(460頁)も、誤り。

○459頁5行目、「留醉与山翁」の訓、「酔い とどめおき ^{さんおう}山翁とともに せん」→「留醉（留まりて酔う→この地に留まって心地よく酔う意）山翁と与にせん」留醉は、「酔いとどめおき」（訓）、「日をあらためて、山翁と酒を飲もう」（注）の意ではない。1句全体では、「ぜひともこの地に留まって、山翁（王維が訪れた時の襄陽太守）と心地よく酔いたいものだ」の意であり、「酒を飲むのは、日をあらためて、山翁とともに酔うこととしよう」（460頁の訳）ではない。

○460頁6行目、「船にのって渡ると、岸への町が…」→「船にのって進むと、岸への町が…」 詩題「隆中」→「南陽」 「隆中」の注に〈「南陽」と題した版本もある〉とするが、主なテキストは、みな「南陽」と題し、「隆中」と題するのは、俗本（楊剛本）である。ちなみに、第4句の「草廬」も「舊（旧）廬」のほうがよい。 第3句の「蜀主」は「蜀王」の誤り。「主」では、平仄（二四不同、二六対）に合わない。 第4句の「争得」には、注が必要。というのは、第3・4句の訓は意識であり、読者には、「争得」の意味がつかみがたい。「争得」は、「争でか…するを得ん」と訓み、「どうして…することがありえたであろうか」（反語）の意。

○462頁、「山中」の注「湖北省安陸県城から…」→湖北省安陸市から…

○464頁、「六義歌」の第4句、「登台」は、対をなす上句の「入省」とほぼ同意。いいかえれば、台は省と同じく、中央官署を指し、「招待客の宿舎」（465頁の訳文）の意味ではなく、「戦国時代、燕の昭王が高い台をきずき、…」（「台」の注）云々にもとづく語でもない。

○465頁3行目、「智積禪師が円寂をむかえるときき、かけつけて、このうたをしたためたという」→唐の李肇撰『唐国史補』巻中に、「異日（後日）、他処に在りて、禪師の世を去るを聞き、之を哭すること 甚だ哀し。乃ち詩を作りて情を寄せ」云々とあり、この解説とは異なる。

○466頁、「黄鶴楼」の解説、滕王閣→滕王閣

○467頁、「鸚鵡洲」の注「いまは漢陽とつながっている」→鸚鵡洲は、明代に崩落して水没。

○468頁、「孟浩然」の注「李白より十三歳としただった」→李白より十二歳としただった。「広陵」の注「揚州は広陵郡にあった」→広陵は、揚州の古名。唐代、揚州の郡名ともなる。

○469頁、「史郎中欽」の注「郎中は車馬や建物を管理する職」→唐代の郎中は、尚書省（中央の行政官庁）の六部（吏部・戸部・礼部・兵部・刑部・工部）にそれぞれ「郎中」の職がある。（各部局の高級官僚）「郎中は車馬や建物を管理する職」は不適切。「五月」の注「初夏」→仲夏 後ろから2行目、〈曲は「落梅花」だった〉→〈曲は「梅花落」だった〉「梅花落」を「落梅花」としたのは、主に押韻のためである（花が韻字。沙・家・花で韻を踏む）。従って「笛の曲は、なんと落梅花だ」という訳（470頁）は誤りである。

○470頁5～6行目、「自分は流罪の旅人となって、はじめてここ、長沙に流されたひとの悲しみがしみじみ、おもいやられる。長沙から西の空をみても、長安の家はみえない」

→これは、「一為遷客去長沙、西望長安不見家」の訳文であるが、「長沙」の語は、夜郎（貴州省）に流される我が身の左遷を、長沙に流された漢の賈誼にたとえていった表現に過ぎず、李白が実際に湖南省の長沙（洞庭湖の南）に赴いているわけではない。黄鶴楼のある武漢市での作。

○476頁、「恥聖明」の注に「孟浩然が玄宗皇帝の不興をかったこと」とし、「ふだんの緊張が足りず皇帝陛下の機嫌をそこねた」と訳するが、従いがたい。第6句「端居恥聖明」の端居は、上句（欲濟無舟楫）の「欲濟」（わたらんとす〔ほつす〕）の対であり、「へいぜいのおこない」（訓）ではなく、「居を端す」意。松浦友久『中国詩選—唐詩』（社会思想社、1972年）には、1句を「じつと我が身をただして、聖明なる天子の御徳に恥じ入るばかりだ」と訳す。本文の1行目、「… 詩に詠じ、これをみやこの張九齡におくった」→詩題は、「洞庭湖を望み張九齡に贈る」である。贈は、直接相手に手渡しする意。離れた人にとどける場合は、「寄」の字を用いる。従って「これをみやこの張九齡におくった」とするのは、誤り。本文4行目、「張九齡は作者より十六歳としようえ」→張九齡は作者より十一歳としようえ。張九齡は678年生、孟浩然是689年生である。

○477頁、「岳陽楼」の第2句「影到深潭赤玉幢」→これは、朝日を背に受けて、あかあかと湖面に伸びる楼影の描写であろう。「夕方、岳陽楼にのぼり、…」（後ろから2行目）ではなかろう。（岳陽楼は洞庭湖の東北端にある）その楼影が、深い湖水の中につつて、「赤玉の幢（赤玉でできた経幢〔仏名や経文を刻んだ石柱〕）のようだ」（478頁）の意。「玉幢」を「仙人のすむところ。湖のぬしがいる龍宮城。…」と注するのは、楊剛本の説に従ったものであるが、穏当ではない。従って「湖面にうつる岳陽楼のすがたは、湖底の龍宮にまでとどくようだ」の訳文にも、従いがたい。

○478頁、詩の作者に関する注、「唐温如 晩唐の女流詩人。伝記不詳」→陳貽燾『増訂注釈 全唐詩』巻766によれば、**元末・明初**、会稽（浙江紹興）の人。名は珙、温如は、その字。これは、『全唐詩』の誤収である。

○481頁、「湘夫人」の第2句、「目眇眇兮愁予」の訓、「まなこ ほそめ ながしめして われをみる」（482頁の訳文「やさしいまなざしで わたしをみる」）→「見はるかす彼方はかすみ、わが心は悲しむ」。竹内本の訓・訳には、「愁」字の訓・訳がない。また注（482頁の上段）に「眇眇は、目がかわいらしい」とあるが、そうした意味はないように思われる。（『漢語大詞典』第7巻参照）第4句「洞庭波兮木葉下」の訓、「洞庭の波 木の葉 ふる」→「洞庭 **波だちて** 木の葉 ふる」波は、ここでは動詞。また本句のあとに、中略の注記が必要。

○482頁、下段の注「潺湲」のルビ、せんかん→せんえん この「湲」は、「言」字と押韻しているため、エンのほうが妥当。

○483頁4行目、「苦調淒金石」の訓、「かなしき しらべ ^{きんせき}金石をも さびしがらせ」、訳文「悲しい曲調は金石にまでしみいって、感情のない金石が悲しく思うほどだった」→ここの「金石」は、鐘や磬などの打楽器を指す。従って訓は「かなしき しらべ ^{きんせき}金

石よりも^{すさま}凄じく」となり、訳も、「悲しい曲調は、鐘や磬よりも凄絶にひびきわたり」となる。詩題「省試湘靈鼓瑟」の注「五言古詩」→五言排律。古詩ではなく、近体詩の排律である。「省試」の注「官吏採用試験『科挙』」→「高等文官資格試験『科挙』」唐代、科挙（進士）に受かっただけでは、役人になれななかった。

○484頁、下段の注「瀟 瀟水のこと。…」→詩の内容の一貫性から、「瀟」を「湘」に作るテキストに従うべきである。本文5行目、「堯の二人の姉妹は、瑟をひくのがたくみで、湘靈となったあとも、その音色は消えず聞こえていた」→これは、詩の冒頭の2句「善鼓雲和瑟、常聞帝子靈」の訳。この2句は一種の倒置であり、「常に聞く帝子の靈は、善く雲和の瑟を鼓すと」の意。従って上の訳文は、不適切。

○485頁3行目、「湘水の水は渚をしめらせて流れ、洞庭湖の水面を悲風がわたっていく」→これは、「流水伝瀟[湘]浦、悲風過洞庭」の訳であるが、「流水」「悲風」が、一種の^{かけことば}双関語であることを見逃している。「流れる水のような調べは、清らかな湘水の流れによって流域一帯に伝わり、悲しい風を思わせる調べは、吹きよせる烈しい風によって洞庭湖の^{みのも}水面を渡っていく」の意。なお、「省試湘靈鼓瑟」詩については、拙著『唐詩物語—名詩誕生の虚と実と』（大修館書店、2002年）118頁以下参照。

○468頁、「坐」（下段）の注「そぞろに。目的があつてのことではない」とあり、「坐愛楓林晩」を「なにごととも考えずに、楓の林がくれてゆく気分をたのしんだ」（487頁）と訳す。この「坐」は、じっと集中するさまを表し、「坐愛」は、「われ知らずじっと見入る」ことを言う。「坐愛楓林晩」は、「夕陽に映える楓樹の林の美しさに、われ知らずじっと見入る」意、詳しくは、岩波文庫『杜牧詩選』255頁以下参照。

○493頁、下段「孤舟・独釣」の注、「転句（第三句）と結句（第四句）も対句といえる」→「孤舟蓑笠翁、独釣寒江雪」の舟は名詞、釣は動詞（釣る）で、文法構造を異にしており、対句ではない。本文2行目、永州（湖南省零陵）→永州（湖南省永州）

○494頁、「香炉」の注「香炉峰。廬山の北峰の名。中腹に瀑布がかかるので有名」→「前川」等の注は、いわゆる北香炉峰ではなく、南香炉峰にかかる瀑布について述べており、矛盾する。詳しくは『漢詩の事典』582頁前後参照。

○496頁、「隱若白虹起」の訓、「おくより^{はっこう}白虹 おこる」→「おぼろげに 白い虹が（天空に）立ち上るかのよう」注に「隱若 かくれている。奥ふかいこと」とあるが、「若」は、「ごとし」の意。隱は、おぼろげなさまをいう。「仰觀勢^{いまい}轉雄」の訓、「あおぎみれば^{いまい}勢^{ゆう}雄に轉じ」→転は動詞ではなく、副詞。「いよいよ、ますます」の意。伝統的に「うたた」と読む。従って「転雄」は、「ますます雄大になる」の意。

○499頁、「琵琶行」、1行目、「忽聞…」句のまえに、中略の注記が必要。（4句省略）

1行目、「忽聞…」句のあとに、中略の注記が必要。（4句省略） 6行目、「未成…」句のあとに、中略の注記が必要。（2句省略） 8行目、「説尽…」句のあとに、中略の注記が必要。（第21句～第64句省略） 10行目、「相逢…」句のあとに、中略の注記が必要。（第67句～第86句省略）

○500頁、「索索」の注、「なにかを求める気もちがあつて、さびしい」→「秋風の寂しい音の形容」。

○501頁、詩の第3句「又怪…」の訓「また すぐれたりとす…」→「また いぶかしむ（あやしむ）」。「怪」は、「奇抜である。普通ではない」（502頁の注）の意味ではなく、「江州刺史韋応物の詩情が清閑であるわけを不思議に思う」意であろう。（「又怪韋江州、詩情亦清閑」）

○502頁、「題」の注、「そのものにちなんで詩を作ること」→詩題「題潯陽樓」の題は、（詩を）書きつける意。「寒見底」の注「寒い冬には河川の水量が減り、河底があらわれるところもある」とあり、「大江寒見底」を、「冬になって長江は水がすくなく、川底の岩石や砂地がみえ」とある。→「見底」とは、明らかに澄んで川底までも見える意。重点は「水量が減る」ことにあるのではない。「清輝」の注、「日の光や月光をうけて山や樹や河がかがやく」とあり、「きよらかな朝日と月の光」（503頁）と訳されている。しかしこの「清輝」は「清光」の類語で、「深夜 湓浦の月」を受けて、「清らかな月の光」を指し、朝日（日の光）は全く含まない。これに対して、「靈氣」は「平旦 炉峰の煙」を受けて、「山峰や長江の水の靈氣」（503頁の訳）ではなく、香炉峰に立ち上る靈妙な雲気をいう。「孰」の注「だれ、なぜ」→「孰為来其間」と見える字であるが、ここでは、「孰為」の2字で1語をなし、「なんすれぞ」と訓み、「なぜ、どうして」の意。

○504頁、「柴桑」の解説、「廬山の南東、星子は、…。ここがかれの故郷・柴桑（江西省九江県）で、…」→九江県は廬山の北にあり、「廬山の南東、星子」とは矛盾する。ちなみに、陶淵明の故郷、柴桑は、本来、廬山の北にあった。詳しくは、『漢詩の事典』532頁以下参照。

○505頁、本文の6行目、「小児」→「小人」の誤り。

○506頁、詩の第8句「守拙…」句のあとに、中略の注記が必要。

○507頁、「自然」の注、「規則やしきたりにしばられないこと。また、丘陵や林、田畑といった大自然」→「本来あるがままの状態、本性を損なわない状態」の意味を追加すべきであろう。「返自然」の訳、「自然のなかの自由な生活にかえる」も、「本来あるがままの伸びやかな生活にもどる」と訳した方が、より適切である。

○512頁、本文の4行目、「千人ものひとが、…」→これは、「千指」の訳であるが、厳密に言えば、1人は十指をもつから、「百人ものひとが…」とすべきである。もちろん、多くの人の意であるが。

○513頁、〔原注〕のなかの「寮制長円形如覆甕」の訓、「寮^{かま}のかたちは長円形にして、たおれたる^{かめ}甕のごとし」→「寮制長円、形如覆甕」と句読し、「寮^{かま}のかたちは長円にして、形はたおれたる^{かめ}甕のごとし」と訓むべきであろう。

第七章 長江下流域

○519頁、詩の第4句、「靈異俱然棲」→「俱」は通行する「居」の誤り、と考えるべき

であろう。居然は、のどやかに、安らかに、の意。「俱然」の語は熟さない。また、本句のあとに、中略の注記が必要。「敬亭山」の注「宣城県城」→宣城市（527頁、「敬亭山」の注も、同じく訂正）521頁、「宣城」の注には、正しく「宣城市」と書いてある。

○522頁、本文1行目、「郊外の陵陽山に楼をきずき、…」→「宣州城内の（宛溪を見おろす）陵陽山に楼をきずき、…」本文3行目、「流れにのぞむ城壁は、」→これは「江城（如画裏）」の訳。「流れにのぞむ城は」本文4行目、「二つの橋に虹がかかる」→これは「双橋落彩虹」の訳であるが、誤り。「二つの橋は、美しい虹となって、川面に影を落とす」の意。

○523頁4行目、「欲上青天覽明月」の訓、「青天にのぼりて 明月をみん」→これは「青天にのぼりて 明月を覽らんとす」ここの「覽」は、「攬」（とる）の通仮（音通）。「宣州謝朓楼…」の注、「平声尤韻。第六、八句は入声月韻」→これは「平声尤韻。第五、六、八句は入声月韻」「校書叔雲」の注、「叔雲は名。おそらく姓は省略」→叔雲は「叔の雲」、すなわち一族の叔父の世代に属する李雲。（姓は李白と同じ李）

○524頁、本文5～6行目、「文章は漢、詩は骨っぽい建安。その中間にあって謝朓先生は…」→このままでは、「その中間」は、漢と建安の中間になってしまい、誤解を与える。この中間は、建安と現代（唐代）の間の意。（そのあと、現代との間にあって）

○526頁、最後の行、「杜鵑、つまり子規は、一こえなくあいだに城内を一方から一方へ、とぶ。そして、腸がちぎれる」→これは「一叫一廻腸一断」の訳。松浦友久『李白詩選』（岩波文庫）に見える、「血を吐くように一と声鳴けば、一とたび故郷が回想され、腸も一とたびちぎれる思い」が、最も明解。特に「一こえなくあいだに城内を一方から一方へ、とぶ」の部分は、従いがたい。これと関連して、6行目『「一廻」は、…」以下4行のなかの、「一断」の部分以外は、理解に苦しむ。

○528頁6行目、「安徽、江西、貴州各省をさまよったあと」→貴州をカットすべし。李白は貴州には行っていない。詩の第4句の「爆泉」→瀑泉の誤り。（元の汪沢民・張師愚同編『宛陵群英集』巻7）瀑泉は「わく泉」ではなく、「瀑布」と同意、滝のこと。

第6句の「刹影」の訓「刹のつくり」→この刹は、寺の意味ではなく、仏塔（寺塔）のこと。「亭亭」は、仏塔が高々と立つさま。いわゆる開元塔（景德寺塔）のことであろう。従って「ちなみに第六句（刹影亭亭古寺幽…引用者注）、刹と寺と文字をかえているのも、工夫したのであろう。…」（530頁）は、誤解である。

○529頁、「暈嶂楼」の注、「謝朓楼。… 現存せず」→謝朓楼は再建されている。「斗牛」の注「星座の北斗七星と、牽牛」→ここでは単に「天空の星々」をいう。注の「瀟瀟」→重言の「瀟瀟」として注すべし。

○530頁1～2行目、「謝公城、つまり宣城城内はにぎやかだが、謝公楼のまわりは荒い崖で、岩肌がむきだしている」→謝公楼も、宣州城（=宣城県城）の城内にある。3行目、「谷川の波が光り」→これは「波光瀟瀟前溪満」の、大まかな訳であるが、この「前溪」（前方の谷川）とは、宛溪のこと。

○531頁、「桃花潭」の解説、「翟村にある」→桃花潭鎮にある。「桃花潭」の注「いま水

東郷龍潭村」→いま桃花潭鎮

○533頁、第3句「客愁不可度」の度の訓、「はかる」→534頁に「癒す」と訳す。「すくう」と訓むほうがわかりやすい。

○534頁、「揚州」の注、「当時は南京につぐ大都会」→当時(唐代)の南京は、さびれており、揚州こそ江南で最も繁栄した大都市であった。拙著『唐詩の風景』参照。本文4行目、「わたしの心がわかるかね。」→これは「汝意憶儂不」の訳。「わたしを忘れずにおぼえているかね」憶は、記憶の意。

○535頁、「似箇」の注「似は口語、どうやら。箇は調子をととのえる助辞。這箇の略、この。文語では如此」→「このように」の意を表す口語(俗語)。箇は「此」。「箇は調子をととのえる助辞。這箇の略、この。」の部分は、不可解。本文、1行目「鏡をみておどろき…」、5行目「鏡のなかのわたし」→李白の詩中の「明鏡」(転句)は、秋浦の地を流れる清溪河の、清澄な水面を見立てた「水鏡」^{みづかがみ}のことであり、通常の鏡ではない。松浦友久『詩語の諸相—唐詩ノート』(増訂版、研文出版、1995年)参照。

○536頁、「清明」の注「平声元韻」→平声文・元韻

○537頁、「至此廻」の注〈「直北廻」と訂正する意見もある〉→現存最古の宋版『李太白文集』巻19(静嘉堂文庫所蔵)に、「直北廻」(直北に廻る)に作る。いいかえれば、「至此廻」の文字は、テキストとしては劣っている。

○540頁、「采石贈郭功甫」→「采石月贈郭功甫」。従って詩題の訓は、「采石にて郭功甫に贈る」から「采石の月 郭功甫に贈る」となる。第1句「采石月下逢謫仙」の「逢」は、「訪」もしくは「聞」に作るべきであろう。「逢」は、最も劣っている。朱東潤『梅堯臣集編年校注』(上海古籍出版社、1980年、757頁)、『古文真宝』(前集)など参照。第5句、「不応暴落飢蛟涎」の訓「なにごとぞにわかにおちたり 飢えたる 蛟の涎」、訳文「きゅうに河のなかにおちて、飢えたみずちが涎をながして近づいた。月をつかまえようとすべきではなかったのだ」→誤読。伝統的な訓読では、「応に暴かに飢えたる 蛟の涎に落つべからざれば」となり、「(謫仙人李白のこと)たちまち涎をながす飢えた蛟のえさになってしまうはずはないので」の意。第7句「青山有冢人謾伝」の訓「青山 冢あれば ひと ひろく伝えん」→この「謾」は、「ひろく」ではなく、「みだりに」(いいかげんに)の意。訳文「なきがらがあれば、墓があって、ひとびとがひろくいつたえるだろうに」は、誤り。「(当塗県の)青山に墓があり、人々はいいいかげんに(かつてに)李白の墓だと言いつづけている」の意。「青山」の注、「あおあおと樹が茂る山。骨を埋める理想の地とされ、この詩でも冢(墓の土まんじゅう)が言及されている」→この青山は、普通名詞ではなく、**固有名詞**。当塗県城の東南7.5キロの地、そこに李白の墓がある。『漢詩の事典』518頁参照。「郭功甫」の注「名は祥生」→名は**祥正**

○541頁、「騎鯨」の注、「采石磯につきでた岩があり、李白はここから長江にとびこんで月をとらえようとしたという。捉月台」→「李白はここから長江にとびこんで月をとらえようとしたともいう。捉月台」この伝説は、梅堯臣の詩に詠まれた「水中捉月」

伝説とは異なるため。本文3行目、「酔ったあげく、長江の河底にのぼった月をながめて気に入る」→これは「酔中愛月江底懸」の訳であるが、「酒に酔いつつ江面に映る月影をめで」のほうが、わかりやすい。

○543頁、「游育王寺」の作者「日本国使者」→楊知秋編注『歴代中日友誼詩選』（書目文獻出版社、1986年）には、五山文学晩期の策彦周良（1501～1579）の作とする。

○544頁、本文6行目、「老樹に雲がかかり、猿の叫びに、わたしの心もかなしい」→これは「雲埋老樹断猿哀」の訳。「断猿哀」は、「人のはらわたを断つほど、猿が哀しげになく」の意。後ろから2行目、「育王寺のなかは塔や高い土台がならぶ」→これは「擡頭東塔又西塔、移步前台更後台」の訳。「高い土台」は高樓（楼台）とすべし。

○545頁、「中峰夜坐」詩は、参照資料が劣る。古くは、北宋の釈惠洪『冷齋夜話』巻6、「智覚禪師の詩を誦す」の条に、「智覚禪師、雪竇の中巖（岩）に住し、嘗て詩を作りて曰く」として、本詩を引く。（智覚禪師は宏智のこと）それによれば、文字が大きく異なり、『冷齋夜話』のほうがすぐれている。

（竹内本） （冷齋夜話） [] のところが異なる。

| | |
|---------|----------------|
| 哀猿叫落中岩月 | [孤] 猿叫落中岩月 |
| 野客吟残夜半燈 | 野客吟残 [半夜] 燈 |
| 此景此時誰會得 | 此 [境] 此時誰 [得意] |
| 白雲深處坐枯僧 | 白雲深處坐 [禪] 僧 |

ちなみに、清代の『御選宋金元明四朝詩』のうちの、『御選宋詩』巻74には、「雪竇中巖夜吟」と題する。（詩の文字は、『冷齋夜話』と同じ。また『五燈会元』巻10、天台韶國師法嗣・永明延寿〔智覚禪師〕の条に見える詩の文字も、『冷齋夜話』と同じく、題を欠く〔偈とする〕）重要な点は、本詩は、天童寺付近の作ではなく、雪竇山（浙江省四明山の別峰）で作られていることである。従って「中峰」の注、「寺（天童寺のこと…引用者）のまわり、太白山の山峰の一つ」、および、「中岩月」の注も、誤解となる。ちなみに「得意」は、「意にかなう」の意。第2句の「吟残」は、「吟じのこす」（訓）、「詩を吟じ、その余韻が耳にのこる」（訳）ではなく、「吟じやむ」（吟詠〔作詩〕をやめる）意であろう。

○547頁4行目、「海のかなたから、僧侶がひとり、いっしょうけんめいに、やってきた」→これは「海外精藍特特来」の訳。「特特」は、「得得」とも書き、長旅を続ける足音の形容。日本語の「てくてく」にあたり、「いっしょうけんめいに」とは、少し異なる。

○549頁、詩題「游普陀」は、『佩文齋詠物詩選』巻65には、「遊補陀」に作り、第2句の「見」を「上」に作る。

○553頁、「富春」詩の第2句「一川…」のあとに、中略の注記が必要。（掲載のしかたは、楊剛本のまま）

○554頁、「古風 其十二」→古風 其十一

○555頁、本文7行目、「巖は、客星とともに、隠者としてくらすつもりで」→これは「身将客星隠」の訳。「客星のごとく世間から身を隠し」の意。ここの「将」は下句の「与」

とともに、「…のように」の意。

○556頁、本文5行目、「武嶺には武嶺門が…」→「武嶺頭には武嶺門が…」 「武嶺」の注に見えるように、武嶺頭（小山の名）とすべきである。

○558頁、詩の第2句「万頃淙淙夜更幽」の訳、「平地の畑はとおくまでつづき、夜のこととて水の音はかすかだ」→万頃は「広々と果てしない水面」を指し、「広々とした平地の畑」ではない。

○559頁、「龍華夜泊」詩を晩唐の皮日休の作と見なし、「この詩は上海、龍華（現在の上海市の城区にある…引用者）をうたった詩としてはもっとも古い」とする。この説は、楊剛本に従ったものであるが、本詩は『全唐詩』『全唐詩補編』に未収であり、晩唐期の上海付近の状況を考えれば、皮日休の作とは見なしがたい。

○560頁、「登塔眺望」詩→この詩題は、錢仲聯『劍南詩稿校注』（上海古籍出版社、1985年）に見えない。陸游の詩ではあるまい。「作者はこの夜、龍華寺に一泊し、その感想を歌った詩もつたわっている」とするが、これは楊剛本に引きずられた誤り。楊剛本は、「宿龍華寂無一人、方丈前梅花盛開、月下独觀至中夜」詩を収録する（173頁）が、その詩は、じつは「宿龍華山中、寂然無一人。方丈前、梅花盛開。月下独觀、至中夜」と題し（『劍南詩稿校注』巻9、746頁）、四川省での作。『劍南詩稿校注』の説によれば、淳熙4年12月、広都での作。龍華山は広都県の南（成都市の西南郊外）にあった。つまり、「龍華寺に一泊し、その感想を歌った詩」は、上海の龍華寺を詠んだものではない。

○561頁、第2首の第2句「浦江午日鬧龍舟」の訓、「浦江 ひるにして 龍舟 にぎわう」→午日は端午節のこと。「ひるにして」の訓は不適切。

○562頁、「潮頭」の注、「潮は潮の干満。頭は重要な部分。潮頭で満潮の景色のみどころ」→これは「十八潮頭最壯觀」（十八は陰暦8月18日）の「潮頭」に対する注であるが、潮頭は通常の「波がしら」（『漢語大詞典』巻6巻、126頁にいう「潮水的浪峰」）でよくはないか。「頭は重要な部分。潮頭で満潮の景色のみどころ」という部分は、不可解。

○563頁、詩題「吳淞行吊陳將軍」の訓「吳淞^{ごしょう}に行き 陳將軍^{とむら}を吊う」→「吳淞^{ごしょう}の行陳將軍^{とむら}を吊う」と訓むべきであろう。

○570頁、詩の第2句、「遂密群科濟世窮」の訓、「遂密^{すいみつ}なる群科^{ぐんか} 世のゆきづまり すぐう」→「群科を遂密^{すいみつ}して 世のゆきづまり すぐわん」 「遂密」は、「遂は奥がふかく、くわしい、密はこまかく、くわしい。近代科学の傾向をいった」（571頁の注）ではなく、「綿密（精密）に研究する」意。従って「遂密群科」は、「奥ぶかい社会学を学んで」（572頁）ではなく、「社会科学を深く研究して」の意となる。

○578頁、詩の第5句「忍看朋輩成新鬼」の訓、「忍^{しの}び みんな 朋輩^{おに} あらたに 鬼となるを」→「看る^みに忍びんや 朋輩^{しんき} 新鬼となるを」 「鬼」は「死者をいう」（注）のであるから、誤解を与えやすい「おに」の読み（ルビ）は避けたい。

○581頁、「凭吊」の注、「凭はもたれる、よりかかる。思いいれの姿。吊は死者をとむらう。楼閣の欄干にもたれて景色をながめ、むかしをしのぶ」→「凭（憑）吊」は、旧跡など

に立ち寄り（あるいは遺物を前にして）、昔を思い起こして弔う意。「楼閣の欄干にもたれて景色をながめ、むかしをしのぶ」の説明は、不可解。

第八章 華南とその奥地

○589頁、詩題中の「於山」のルビ、うさん→おさん

○590頁4行目、「拔雲」→撥雲 6行目、「民懐切」→ここで双調の上片がおわり、次の句から下片がはじまるので、1行あけたほうがわかりやすい。 後ろから4行目、「台畔班師酣醉石」の訓「台のほとり 酣醉^{かんすい}せる石 ならび」→この2句は、下句「亭辺思子悲啼血」と対になり、「台のほとり 師^{かえ}を班す（あるいは意識して「凱旋す」）酣醉せる石」と訓むべきであろう。班師は軍隊をかえす、凱旋する意。「班」の注(592頁)に「ならぶ」とするのは誤り。「班師」は、下句の「思子」（子を思う）と対をなし、「師（軍隊）を班す」意。従って「祠堂のほとりには石がならぶ。…」の訳文（592頁、最後の行）は、訂正すべし。

○591頁、「岳武穆」の注の9行目、「於山威武毅公詞…」→詞は祠の誤り。「於山」の注「於越」のルビ、うえつ→おえつ

○594頁、「武夷山」の注「崇安県」→武夷山市

○595頁、「九曲樞歌」の注、『朱文公文集』は「九曲樞歌」と題す→『朱文公文集』（目録上）は「武夷樞歌」と題す。

○597頁2行目、「瑶壇瀟灑回無塵」の訓、「瑶壇 瀟灑^{ようだん しょうしゃ} 無塵に かえる」→回^{かえ}の字は難解。この回^{かえ}は、「かえる」ではなく、周回の回、つまり周囲の意味に解釈できないであろうか。

○599頁、「南普陀」の注、「五老山」→五老峰 600頁の「五老」の注も、同じく訂正。

○601頁、詩の第6句「為邦復好音」の訓、「くにのため よきしらせ たまわれよ」、訳文（602頁）「どうか、くにのために、てがらをたてて、しらせて下さい」→伝統的な訓読では、「邦を^{くに}為^{おさ}めて 復^また好音あり」となる。ここの「為」は、「ために」（仄声●）ではなく、「おさめる」（平声○）である。そうでないと、「邦」の字が、近体詩（律詩）の禁忌、孤平^{こひょう}を犯すことになる。（「為」が「ために」の場合、為邦復…は、●○●…となってしまう）訳は、「そのうえ（桂州の）長官として立派な政治上の業績をあげられているとの、よい知らせを聞くことができ（うれしく思い）ました」の意。

○602頁、「五嶺」の注、「湖南、江西、広西、広東など南方各省の五つの山脈をいう」→湖南・江西と、広西・広東との間の、省境をなす五つの山脈をいう。 本文2行目、「南方の五嶺はどこも暑いが、…」→これは「五嶺皆炎熱」の訳。ここの「五嶺」は、五嶺以南の地、つまり嶺南（広西・広東）のこと。「南方の五嶺は」の訳は、穏当でない。

○603頁、詩の第1句、「蒼蒼森八桂」の訓「そうそうと しづまれる 八桂^{はちけい}」、訳文（604頁）「八桂という月の宮殿にたとえられる桂林は…」→「音に聞く八株の桂樹が、蒼蒼^{あおあお}と茂っているところ」の意。「森」は「森林のようにしづまりかえっている」（注）意味ではな

く、盛んに茂るさま。また「八桂」も「伝説によると、月には宮殿があり、桂樹が八本うわっている。桂林を月の宮殿にたとえた」(注)わけではなく、『山海経』巻10、海内南経に見える「桂林八樹」(郭璞の注「八樹にして林を成すは、^{まこと}信に其れ大なり」)を踏まえた表現、と考えるべきであろう。「巖大夫」の注「名は暮」→名は謨(もしくは暮)

○604頁、「不暇」の注「そんなひまはない」→…するには及ばない、の意。「飛鸞不暇驂」の1句全体では、「鸞^{らん}に乗り、昇天するひまなど、ないのだ」→「(桂林は仙境のような場所だから、わざわざ)鸞^{らん}に乗り、昇天して世外の仙境をたずねるには及ばないのだ」。

本文5行目、「陽山県(同韶関市)」→陽山県(同陽山県)

○605頁、最後の行、「鄭亜が罪をえて循州(広東省惠州)に流されるとこれにしたがい、三年たって長安にかえった」→鄭亜が罪をえて循州(広東省惠州)に流されるとこれに従わず、途中、荊巴に滞在した後、その年(大中2年[848])の冬初、長安に帰った。

○606頁3～4行目、「ひろびろとながれる瀧江は、まちをうかべている」→これは「江寛地共浮」の訳。「瀧江^{りこう}がひろびろとながれて、大地(桂林のまち)は万物ともども(広い水面に)浮かんでいるかのよう」

○607頁、詩の第1句「臘雪同雲嶺外稀」の訓、「臘雪 雲に同じ 嶺外 まれなり」、訳(608頁)「十二月、雪がふるときは、雲が雪と同じ色になる。ただし五嶺の南では、雪はまれである」→これは、「同雲」の同の意味を誤解している。『詩経』小雅「信南山」の「上天 雲同^{あつま}り[原文は、上天同雲]、雪を雨すこと 霧霧^{ふんぶん}たり」を踏まえた表現。つまり、「同雲」は「雪がふるまえ、空の色が同じになるものをいう」(注)のではなく、「雲^{あつま}が同りそろって、雲一色の雪空をいう」語である。「十二月、雲が(天空を一面におおうように)集まって雪が降りだすことは、五嶺の南ではまれである」の意。

○609頁、「漳・汀・封・連」の注、「漳州(福建省漳州)」→漳州(福建省漳浦)、「連州(広東省連県)」→連州(広東省連州[市]) 「九廻腸」の注、「九は数がおおい。廻腸は腸をめぐらす。…」→「九廻の腸」の訓に従って注すべきであろう。たとえば、「悲憤のあまり、一日に腸^{はらわた}が九回も(なんども)ねじれること」のように。

○610頁1行目、「はてしない海いっぱい、わたしの愁いはひろがるのだ」→これは「海天愁思正茫茫」の訳。中国古典の「海」が持つイメージにそって、「海天」は「辺境(極遠の地)の大空のもと」と訳す方が、「はてしない海いっぱい」よりも、穏当であろう。

4行目、「まがりくねる河」→まがりくねる河(柳江)

○612頁、(二)の第3句、「一江春水緑於染」の訓、「一江の春水 緑に染まり」、訳「春の珠江は緑に染まり」→これは、「緑於染」を誤読してしよう。「緑於染」は、水の色が染(藍などの染料)よりも緑^{あお}いことをいう。白居易「憶江南」に「春来れば 江水^{きた} 緑^{あお}きこと 藍^{あい}の如し」とある。「一江」の「一」が、「満」(まんまんと満ちあふれる)の意味であることも、訳出が必要。

○613頁、(三)の第1句、「幾処春煙横断霞」の訓、「いくつのところか 春煙 霞を横にたち」、訳「春のもや、春のかすみ、いりまじり」→「横断霞」は「霞^{しゅんえん}を横^{かすみ}にたち^{よこ}」

ではなく、「断霞（きれぎれの赤い雲気）がたなびく」意。従って「あちこちにたちこめる春のもや、きれぎれの朝焼け雲が美しくたなびく」の意となろう。中国の「霞」の基本義は、無色透明な「かすみ」ではない。「譚敬昭」の注に「清朝の官吏。→略伝」とあるが、付録の「作者略伝」には見えない。

○615頁、第1句、「辛苦遭逢起一經」の訓、「辛苦 めぐまれて 一經を おこし」→「辛苦のめぐりあわせ 一經より起こり」と訓むべきであろう。この「遭逢」は、運命、めぐりあわせの意であり、「南宋朝廷の科挙を受験、合格した」（注）ことを言うのではない。また、「起一經」の「一經」は、杜甫の詩「秦州にて勅目を見るに…」に見える「二子 同日に声あるも、諸生 一經に困しむ（仕官せぬ多くの学者ども [暗に自分を含む] は、一つの經書を学んで困窮している）」を踏まえていよう。「苦勞して受験に合格、經典をきわめた」（616頁の訳）ではなく、「困難に出会って辛苦する運命は、經書を学んで物事の筋を通す大切さを知ったときに始まった」（『漢詩で詠む中国歴史物語5 宋～近代』世界文化社、1996年、宇野直人訳注）のほうが、妥当。あるいは「經典を学んで起用されて以来、あらゆる辛酸に遭遇し」（松枝茂夫編『中国名詩選』下[岩波文庫]）と訳してもよいだろう。「惶恐灘頭」の注、「惶恐灘。頭は強調したいいかた」→「頭は強調したいいかた」の部分は、不可解。頭の字は下句「零丁洋裏…」の「裏」に対して、「…のあたり」の意。「強調したいいかた」とは考えられない。

○618頁、詞の第1句「玉粟収余」の訓、「玉粟 とりいれて あまりあり」→この1句は下句「金糸種後」と対句をなし、「余」は「後」と対文同義。「あまりあり」ではない。

○620頁4行目、「取次回舷」の訓、「つぎつぎに 船 たちかえるべし」→「取次」は「つぎつぎに」（621頁の注）ではなく、「あわただしく、あわてて」の意。

○625頁、「謫嶺南道中作」の作は、大中2年（848）、作者の李徳裕が、洛陽から潮州（広東省潮州市）の司馬に左遷される途中の作。5月、貶所の潮州に着くが、その直前の広東省での作。（傅璇琮・周建国『李徳裕文集校箋』河北教育出版社、2000年など参照）従って本詩は「海南島」での作ではない。それを海南島の条に収めるのは、誤り。楊剛本も誤る。また626頁の解説、「作者は唐王朝の宰相だった。それが海南島に流されたのである。流罪になっても官職をあたえられるが、低い。作者は司戸。…」も、誤り。本詩は、崖州司戸參軍に左遷される前の、潮州司馬在任時の作。「嶺南」の注（625頁）「ひろく広東省をいうが、作者は崖州（海南島崖県と中心とした州）に流された」も誤り。この嶺南は広東省の潮州を指す。「嶺水争分路転迷」の訓、「嶺の水は 分れをあらそい 路 まがり まよう」→「嶺の水は 争い分かれて 路 転た まよう」転は、動詞の「まがる」ではなく、副詞（いよいよ、ますます）の意。1句全体の訳は、「分水嶺の水はわずかな傾斜で、流れてゆく方向がちがう。山道もまがりくねり、分かれていて、人を迷わせる」→「五嶺に発する水は、争うようにいくつにも分かれて流れ、山道はいよいよ迷わんばかりである」 「愁衝毒霧逢蛇草」の訓「毒霧にまかれ 蛇草に あうを うれい」→下句と対であるため、「毒霧にまかるるを うれいて 蛇草に あう」と訓む

べきところ。訳も「毒霧につつまれ、毒草にであうのがわたしのなやみの種だ」→「毒霧にぶつかることを心配しながら行くと、毒草に出会う」の意。「蛇草」は、「蛇でさえ、これをかめば死ぬという毒草」→毒蛇が噛んだ草のこと。噛まれて枯れてしまった後でも、人が触れると指が落ち、腕が曲がるとされる。『増注三体詩』巻2（富山房・漢文大系、明治43年）、村上哲見訳注『三体詩』上（朝日新聞社、1966年）等参照。（以下も同じ）

「畏落沙虫避燕泥」の訳（626頁）「小さな虫が木から落ちてくるのを心配し、燕が口にくわえた泥をおとさないかと、身をよける」→毒虫が落ちてくるのを畏れて、燕が巣から落とした泥をもよけて歩く。「沙虫」に対する注がない。沙虫とは蛇の鱗の中に入り込む虫のこと。蛇は苦しんで沙上に転がって虫をこすり落とす。人がその虫にあたると、三日で死ぬという。「三更津吏報潮鶏」の訓、「三更 みなとの 吏 潮を報じる 鶏と なる」→上句と対をなすため、下3字は「潮鶏を報ず」と訓まなければならない。訳も「まよなかに、下役が満潮をしらせる声がきこえる。ときをしらせる鶏のようなので、報潮鶏というあだ名だ」（626頁）→「まだ真夜中なのに、渡し場の役人が、鶏が鳴いて潮が満ち、船出のときがきた、と知らせに来る」「報潮鶏」の注、「潮鶏は潮がみちてくると鳴くとり。ここは役人が満潮をしらせること」→「ここは役人が満潮をしらせること」の部分、カットすべし。「不堪腸断思郷処」の訓、「腸 断たれ ふるさと しのぶに たえざる ところ」→「腸 断たたるるに たえず ふるさと しのぶ ところ（とき）」 訳「断腸のおもいでふるさとをしのぶと」→断腸のおもいにたえかねて、ふるさとをしのぶとき。「蛮溪」の注「海南島は蛮地で、そこを流れる谷川」→広東省は蛮地で、そこを流れる谷川

○627頁、本文2～3行目、「元符元年(1098)の作」→ 元符2年(1099)春の作。孔凡礼『蘇軾年譜』（中華書局、1098年）参照。

○628頁、「余生」の注、「作者はすでに六十四歳だった」→作者はすでに六十五歳だった。（これまで基本的に数え年によって年齢を記す）

○629頁、後ろから3行目、「天空をみあげると、鶻がはやい速度で、低くきえた」→これは、「杳杳天低鶻没処」の訳。「海上杳々遠く、大空が低れ下がり、鶻が（吸い込まれるように）消えゆくあたり」の意。

○630頁、詩題の途中の1句「縁梯而上」は、「縁梯而上下」の誤り。（四部叢刊本『敬業堂詩集』巻2）。従って「梯に縁りて上る」は、「梯に縁りて上り下りす」となる。

○631頁、「獼猿家息久如懸」の「家息」は、「家室」の誤り。従って注の「家息 家族のくらし」は、カットすべし。家室は住まいの意。注の「如懸」に指摘されるように、これは『左伝』の「室如懸磬」（室は磬を懸くるが如し）を踏まえる。

○632頁、詩の最後の句、「陰月夕漫漫」の訓「くらき月 夕ぐれ しのびくる」、訳（633頁）「月はくらく、夜がせまる」→「夕漫漫」は、「夜の闇がひろがりゆく」意であり、「夜がせまる」ことではない。漫漫は、広がるさま。

○637頁、「三皇」の注、「神農をはずし黄帝とする説」→燧人をはずし黄帝とする説

○639頁2行目、「丹崖樹色著霜初」の訓、「丹崖の樹のいろ 霜のはじめを あらわす」→下3字の訓は誤読。上句の「揺浪処」（浪を揺らす処）と対をなすため、「霜を著くる初め」と訓まなければならない。訳の「紅葉した崖の樹は、やがて冬がくる気配である」→「紅い崖の緑の木々は、折しも霜に打たれて紅く色づきはじめた」の意。5行目、「却訝誰舟湓浦上」の第3字「誰」は、「維」（つなぐ）の誤字。（明の鄭若曾『鄭開陽雜著』巻4、明の沐昂『滄海遺珠』巻4など）従って本句の訓は、「かえって いぶかる 誰か湓浦に 舟をだし」→「かえって いぶかる 舟を湓浦の上りに 維ぎ、（芙蓉九疊 匡廬を看るか）」となる。かくして本句は、第6句に見える、夕陽をあびた釣り人の心への推測ではなく、作者自身が舟遊びで感じたことの表白となろう。湓浦江のほとりに舟をつないで、廬山を眺めているような気分を抱くのである。「あの釣りびとは湓浦の河口に舟をうかべたつもりで、陶淵明をしのんでいるのであろうか。いったい、誰なのか」（640頁）という訳文も、訂正すべし。

○640頁、詩の第2句、「渺渺金波接素秋」の訓、「びょうびょうたる 金波 しろき秋に せつす」→「接」をそのまま「せつす」と訓んでおり、わかりにくい。この「接」は、迎える、逢う意。「しろき秋を迎う」と訓むほうが明瞭。詩の第6句、「蘇生」の語、楊知秋編注『歴代中日友誼詩選』（書目文獻出版社、1986年）には、「蘇仙」に作る。昆明市文化局編注『歴代詩人詠昆明』（雲南人民出版社、1982年）に「蘇先」に作るのは、中国音が同じのために「蘇仙」を誤記したものであろう。楊知秋の注にいう、「『前赤壁の賦』のなかで、彼（蘇軾）は舟を浮かべて赤壁に遊んだとき、『飄飄乎として世を遺れて独り立ち、羽化して登仙するが如し』といった。それで蘇仙と称す」と。「蘇仙」の文字がすぐれていよう。

○641頁、注「渺 はるかに広いさま」→「渺渺 はるかに広いさま」 「白月」の注「秋の月」→「清らかに輝く月」 「謝客」の注「謝朓。南朝、齊の詩人。…」→謝客は、本来、「客児」を幼名とする謝靈運を指す言葉。次の「滄洲趣」の注に見える謝朓の詩句を、謝靈運の作と誤解した結果であろう。（楊知秋の注に指摘）

○642頁、詩の第3・4句「人從鼇背排煙上、地接龍潭得氣光」の訓、「人は鼇背にしたがい 排煙 のぼり、地は龍潭に せつして 気と光を えたり」→2句は対句。各句の下3字は誤読であろう。「… 煙（もや、雲煙）を排して（押し開いて）のぼり、… 氣を得て光る」。第6句、「禅宗雅重…」の訓「禅宗 みやび重んず…」→「禅宗 雅だ重んず…」 雅は、「甚だ」もしくは「もとより（平素から）」の意。第8句「瞻礼恭衣御座前」の「瞻礼」の訓、「礼をあおぎ」→「瞻仰（ふりあおぐ）礼拝」の意。

○643頁、最後の行から次の頁、「各階にはてすりがめぐらされ、建物をまきながら回転しているようだ」→これは、「層欄日月勢廻旋」の訳。「日月」（太陽と月）の語の訳がない。

第九章 扶 桑

○656頁、「荳蔻」の注、「これの二月の若葉の芽を杜牧がうたった」→これの二月の、今にも咲き出しそうな花（のつぼみ）を杜牧がうたった

○661頁、「浙江潮」の注、「夏に大潮のとき」→秋に大潮のとき 中秋の名月過ぎである。

○668頁、詩の第1句、「陽鳥」→陽鳥の誤り、従って訓のルビも、ようちょう→ようう となる。「鳥」の字でないと、二四不同にならない。注の「陽鳥」も、陽鳥の誤り。

詩の第3句、「海気失澄練」の訳(669頁)「海をながめると暗く、元気がない」→「海気」は、海面をおおうモヤ(霧)をいい、「海面からたちのぼる気(元気)」(注)ではない。1句は、「海上にモヤ(霧)がたちこめて、白いねり絹のごとき清らかな輝きを失い」の意。「澄練」の注に、「澄は水面が澄んでいる。練は布のようになめらかで、真っ白である」とあるが、この語がイメージする謝朓の詩(「晩に三山に登り、…」)の名句、「澄江 静かなること練の如し」に言及するべきであろう。ちなみに、唐の唐彦謙「漢代」詩に、「水淨疑澄練」(水淨くして 澄練かと疑う)とある。(疑は似るの意) ただし、この唐彦謙の用例は、ほぼ「白絹」の意で、少しイメージのふくらみに欠ける。

○669頁、本文5行目、「松も夕暮れの寒さに凍えている」→これは「松色寒晩翠」の訳。「松の翠も夕暮れの寒さに凍えている」とすべきであろう。

[付 録]

[作 者 略 伝]

○673頁、上段、後ろから3行目、佩文韻府→佩文韻府 後ろから3行目、図書集成→古今図書集成

○674頁、下段、韋莊の条、六十歳で科挙に合格。→五十九歳で科挙に合格。 韋曜の生没年は、201—273 曹道衡・沈玉成『中国文学家大辞典』(先秦漢魏晉南北朝卷、中華書局、1996年)による。

○676頁、上段、後ろから4行目、江陵→京山 下段、9行目、絳郡→絳州

○677頁、上段、王昌齡の条、江寧のひと、…→京兆(陝西省西安)の人。 刺史→刺史 王世貞の条、大倉のひと→太倉のひと

○678頁、上段、4行目、樂山県→樂山(市) 市の字は、一般につけていないので、県の字をカット。

○679頁、上段、韓愈の条、河南省孟県→河南省孟州 広東省潮安県→広東省潮州 史部侍郎→吏部侍郎 韓史部→韓吏部 機先は字→機先は法名であろう。

○680頁、上段、6行目、台湾の苗栗県→台湾の苗栗県 下段、11行目、湖北省江陵県→湖北省荆州市

○681頁、上段、嚴禹沛 「字は武進、常熟(江蘇省常州)のひと。康熙54年(1715)の進士」。これを補充すべし。(王叔盤・孫玉湊主編『歴代塞外詩選』内蒙古人民出版社、1986年参照)

○683頁、下段、吳融の生没年は、?—903

- 684頁、上段、蔡琰の条、生没年は、?—1743 康熙年間の進士→康熙36年(1697)の進士。 守素室詩集→守素堂詩集
- 685頁、上段、2行、「…といわれる。謝靈運」→「…といわれる謝靈運」
下段、秋瑾の字、璿卿は、璇卿が正しい。
- 686頁、上段、徐渭の条、青藤道士→青藤道人 下段、秦栄光の生没年は、1841—1904、『中国文学家大辞典』(近代卷、中華書局、1997年)参照。
- 688頁、上段、薛濤の条、生年には?をつけ、没年の831は832の誤り。
下段、宋教仁の条、桃源漁夫→桃源漁父 ではないのか。
- 689頁、上段、1行目、曹操の第三子→曹操の第四子 上段、曹操の条、三国時代の政治家→後漢時代の政治家。曹操の没後、正式に三国時代を迎える。
- 691頁、上段、張九齡の生年は、673ではなく、678。墓誌銘が発見されている。
上段、張澍の生年は、1776ではなく、1781ではないのか。『姓氏五書』→『氏姓五書』
張蟻の字は、象人→象文
- 692頁、下段、陳琳の条、三国時代の文学者→後漢時代の文学者。三国時代の前に没す。
江蘇省江都→江蘇省揚州
- 693頁、下段、5行目、夔州(四川省奉節)→夔州(重慶市奉節) 下段、8行目、孫の代になって平江県に葬られた→孫の代になって偃師県(河南省)に葬られた 下段、杜牧の没年は、853ではなく、852
- 694頁、下段、5行目、河南省泌陽→河南省沁陽
- 696頁、上段、李賀の条、ロバにのった童^{わらべ}→ロバにのるのは、李賀自身。また、童は下男の意。 下段、陸游の条、二万首以上つくった→一万首以上つくった
- 697頁、上段、2行目、栄陽→滎陽 5行目、詠物詩→詠史詩 上段、李世民の生年は、598ではなく、599 下段、8行目、青蓮郷→清蓮郷
- 698頁、上段、後ろから4行目、繼壯→繼莊 下段、4行目、監察御史→監察御史 襄行 零陵→永州 6行目、柳州(広西省馬平)→柳州(広西チワン族自治区柳州)
- 699頁、上段、2～3行、呂岩は、河中(山西省)のひと。進士科には落第し続けた。これが通説であり、進士合格など、聞いたことがない。 下段、後ろから3行目、盧照隣の没年は、679ごろではなく、689ごろ。
- 700頁、上段、1行目、享年四十→享年四十余 上段、和瑛の生没年は、1782—1850ではなく、?—1821とすべきではないのか。『清史稿』巻353によれば、道光元年(1821)7月没。

[用語解説]

- 702頁、上段、2行目、「漢字は、一字一字にメロディがあつて」→メロディはトーンとすべし。(709頁の下段にも、2カ所あり) 上段後ろから6行目、「漢詩として愛読されたのは『唐詩選』だった」→江戸時代を通して最も読まれた唐詩アンソロジーは、『唐

詩選』ではなく、『三体詩』であり、『三体詩』のほうが断然多く出版された。林望『書誌学の回廊』（日本経済新聞社、1995年）参照。

○703頁、下段、8行目「宰相（内閣総理大臣）」の（ ）内は誤り。当時は集団指導体制で宰相が何人もいた。

○705頁、上段、13行目 唐の年号、「太和」は、**大和**が正しい。

○706頁、上段、7～8行目「古詩（古体詩）とは、唐以降の近体詩にたいする呼称で、『詩経』『楚辞』を除くすべての唐以前の詩（近体詩成立以前の）の詩をいい」→『詩経』『楚辞』、特に『詩経』を除く理由が不可解。

○709頁、下段、6行目、「メロディ（^メ施律）」→**トーン**

○710頁、上段の右側の表、「陽平（一声）」、「陰平（二声）」は、「**陰平（一声）**」、「**陽平（二声）**」の誤り。上段後ろから4行目、「陽平、陰平、上声、去声」の順序は、「陰平、陽平、上声、去声」に訂正すべし。下段9行目「めいめいばらばらに一声、二声……に変化してしまった」。→**ほぼ系統的に変化した**。平声は一声・二声、上声は三声、去声は四声という風に。

○711頁、上段3行目、「仄字には平・上・去・入がふくまれる」のうち、「平」字をカットすべし。

○712頁、下段、平仄の図では、第1句の第3字は、○（平声）となっているが、実際の詩（「涼州詞」）の用字「美」は●（仄声）である。この場合も、許容されることを指摘する必要がある。

○713頁、上段後ろから4行目前後「孤平を避ける」の条の説明に、特に五言句の第2字目、七言句の第4字目を避けなければならないことの指摘が、ぜひとも必要である。

下段、〈四句は「絶句」、八句は「律詩」、八句以上は「古詩」という〉は、排律の説明とともに、もう少し慎重さが必要である。なぜなら四句の古詩、八句の古詩もあるからである。下段 絶句の絶の解釈は従来不明。むしろカットした方がいい。

○715頁の上段 後ろの3行の対偶（対句）の説明、「領聯と頸聯はかならず対偶（対句）にする。対偶というのは、正反対であるが対になったもので、たとえば男と女、昼と夜というようなものである」云々も、きわめて杜撰。せめて「上下2句間で文法と意味の両面に対応する修辞法」などと説明すべきである。

○716頁の上段 2行目「繁→濁 霜鬢→酒杯 と対偶」ではなく、「繁霜→濁酒 鬢→杯 と対偶」と考えるべきであろう。

以 上

南宋の地方志に見られる詩跡的観点について

松尾幸忠

【序】

詩跡研究の一環として、書物の中に見出される詩跡的観点の発生及びその展開のありかたを、これまで唐代の類書、北宋時期の類書・詩文総集及び地理書を中心に考察してきた。^(注1) ここではそれを承けて南宋時期の書物に見られる詩跡的観点について考察を試みる。対象とする資料はほぼこれまでと同じであるが、小稿ではまず地理書の中の地方志を扱う。

南宋が北宋と大きく異なる点は、北宋がほぼ中国全土を統一していたのに対し、南宋は南方に偏在を余儀なくされた王朝であったということである。そのため北宋のような統一的な官製の総志が編まれることはなかった。しかしその一方で、北宋以来、地方志(図経を含む)等の作成が盛んに行われるようになったことの影響を受け継ぎ、また南遷のうちに多くの資料が焼失したことなどの理由から、地方志及び私製の総志は数多く編纂された。総志の中で現存するものは『輿地紀勝』及び『方輿勝覧』両書のみであるが、地方志に関して見るとその残存率は北宋よりも高い。^(注2) しかも興味深いことに、総志であれ地方志であれ、この時期の地理書から、詩跡的観点がかなり明確に認められるものが増えてくるのである。総志については後日稿を改めて論じるとして、ここでは現存する南宋の地方志について実態を調査してみようと思う。

なお、本来なら幾つかの代表的な詩跡を取り上げ、それらが各地方志の中でどのような扱われ方をしているのかも調査すべきなのであるが、紙幅の関係から今回は全体の概略を述べるだけに止めておきたい。資料としては『宋元方志叢刊』(中華書局、1990年)に見える南宋の地方志を中心に考察する。^(注3)

【一】

もともと地方志は、それを総合して統一的な総志を作るための準備資料的な側面をもっており、治政の参考に供するのがその主な目的であったが、この時期になると官僚政治の発展から、為政者が自らの業績を記録しそれを中央に報告する、という意味も加わってきたという指摘がある。また、撰者としては府州の長官及びその意を受けた府州学の教授など、地元もしくはそれに関係する文人や知識人が大半を占めていた。^(注4)

この時期の地方志から、詩文を含む文化的側面の重視が見られるようになってくるのは、その様な時代背景も影響していると考えなくてはならない。

では、現存する南宋の地方志に見られる詩跡的観点の実態を見てみたい。『宋元方志叢刊』の中で該当する書籍は以下のものである。

| 書名 | 巻数 | 成立時期 | 詩文についての記述 |
|--------|------|------------------|-----------|
| 雍録 | 10巻 | 1163~1188 (孝宗時期) | × |
| 乾道四明図経 | 12巻 | 1169 (乾道5年) | ○ |
| 乾道臨安志 | 15巻 | 同上 | × |
| 新安志 | 10巻 | 1175 (淳熙2年) | × |
| 淳熙三山志 | 42巻 | 1182 (淳熙9年) | × |
| 淳熙嚴州図経 | 3巻 | 1185 (淳熙12年) | × |
| 呉郡志 | 50巻 | 1192 (紹熙3年) | ○ |
| 雲間志 | 3巻 | 1193 (紹熙4年) | ○ |
| 琴川志 | 15巻 | 1196 (慶元2年) | ○ |
| 嘉泰会稽志 | 20巻 | 1201 (嘉泰1年) | ○ |
| 嘉泰呉興志 | 20巻 | 同上 | ○ |
| 嘉定鎮江志 | 22巻 | 1213 (嘉定6年) | ○ |
| 剡録 | 10巻 | 1214 (嘉定7年) | ○ |
| 嘉定赤城志 | 40巻 | 1223 (嘉定16年) | ○ |
| 宝慶会稽統志 | 8巻 | 1225 (宝慶1年) | ○ |
| 宝慶四明志 | 21巻 | 1227 (宝慶3年) | × |
| 澈水志 | 2巻 | 1230 (紹定3年) | (*) |
| 淳祐玉峯志 | 3巻 | 1251 (淳祐11年) | × |
| 淳祐臨安志 | 52巻 | 1252 (淳祐12年) | ○ |
| 寿昌乘 | 不分巻 | 1253~1258 (宝祐年間) | × |
| 仙溪志 | 4巻 | 1257 (宝祐5年) | × |
| 開慶四明統志 | 12巻 | 1259 (開慶1年) | (*) |
| 景定健康志 | 50巻 | 1261 (景定2年) | ○ |
| 景定嚴州統志 | 10巻 | 1262 (景定3年) | × |
| 咸淳臨安志 | 100巻 | 1268 (咸淳4年) | ○ |
| 咸淳毗陵志 | 30巻 | 同上 | ○ |
| 咸淳玉峯統志 | 1巻 | 1272 (咸淳8年) | × |

詩文の引用の有無については、あくまでも詩跡的観点が窺われるかどうかという規準から判断した。従って、詩文の引用はあるもののそれが極めて断片的であったり、また著名な詩人が訪れたことがないため、その地を代表する作品に乏しいような場合は、調査の対象から外した。

(*)例えば『澈水志』(2巻)には巻下「詩詠門」があるが、採録する詩文は纂者常棠を始めとして鎮(『澈水志』は鎮の地誌としては最初のもの)の役人の作のみであり、『開慶四明統志』(12巻)には巻9・10「吟藁」及び巻11・12「詩余」があるものの、全て撰者呉潜の作品しか採録していないのでここでは取り上げなかった。ただこうした詩文の部門を設けること自体、詩跡的観点が地方志に必要であるという、新しい認識の表れであろう。

なお、ここに挙げられた書籍は、全てが完本の形で伝わっているわけではなく、失われた部分に詩文が採録されていた可能性もある。しかし失われた部分については考察の手だてがないため、ここではあくまでも現時点で存在する資料からのみ判断することにした。以下、具体的に詩文の収録情况及び内容について眺めてみたい。纂修者については原則として『宋元方志叢刊』に従う。

【二】

○乾道四明図経（12巻）張津等纂修〈浙江省鄞県〉

巻8に「古賦・古詩・律詩・絶句・長短句」がある。作品として胡幹化「九経堂賦」、李白「対酒憶賀監」2首のほか、胡幽貞、王安石、鄭獬^{かい}、呉充、舒賈^{たん}、曾鞏、司馬光などを収める。その他、巻9・10に「記」、巻11に「碑文・銘・賛・伝・書」がある。

またこの時期になると、これまでの地理書が県などの行政単位で区分していたのと異なり、内容によって分けたものが登場してくる。この書もこれまでの地理書と異なり、巻として詩文を独立させた点が注目される。

○呉郡志（50巻）范成大纂修 汪泰亨^{たいこう}等増訂〈江蘇省蘇州〉

巻49に「雑咏」を立てるが、この書は全体に詩文の引用が目立つ。特に集中しているのは巻8及び巻9の「古蹟」であるが（各目につき、関連する詩文を引用。例えば巻8「館娃宮」には殷堯藩「呉宮」、李嘉祐「傷呉中」、皮日休「懐古」などを載せる）、その他、巻3「城郭」、巻6「官宇」、巻12「祠廟」、巻14「園亭」、巻15「山」、巻16「虎丘」、巻17「橋梁」、巻18「川」、巻29及び30「土物」、巻31「宮館」、巻32～36「郭外寺」、巻37及び38「県記」、巻39「冢墓」など、およそ土地や建築物に関する項目にはできる限り多くの詩文を引用しており、全体的に見た数量の多さにおいて恐らく他の書物を圧倒していると思われる。また、一般の山とは別に、巻16に「虎丘」を独立させているのは、それが呉の地方における詩歌の題材としてとりわけ大きな意味を持っていたと作者が認識していたことの表れであろう。なお、引用作品の中で特に皮日休、陸龜蒙の作品が目立つのは、『松陵集』の存在が影響を与えていると見てよい。^(注5)

○雲間志（3巻）楊潜修、朱端常、林至、胡林卿纂〈上海市松江県〉

巻下に西晋の陸機「懐土賦」から始まり宋の葉清臣「祭滬瀆龍王文」まで、110首余りの当地ゆかりの賦・詩・墓誌・記・祭文などを収める。著名な詩人の作としては梅堯臣「顧亭林」ほか「華亭十詠」、王安石、同、蘇軾「李行中秀才睡眠亭三絶」、蘇轍、同、などがある。

○琴川志（15巻）孫応時纂修、鮑廉増補〈江蘇省常熟〉

巻14に「題詠」を立てる。作品として唐の常建「破山寺」、皎然「遊破山」から始まり65首ほどの詩を収録する。この書の興味深い点は、前出の2人のほか林逋、周邦彦などの著名な作家以外に、県令の孫応時を始めとする当時の為政者の作品が多く収録されていることである。孫応時自身は『燭湖集』（20巻）を遺す文学者であるが、現地に

由来する有名な作品に倣い継承的に歌い継ぐという姿勢は、この時期、詩跡的な認識が明確になってきたことの証左であろう。また、これは先に述べた、治政上の文化的功績を示す行為の一つと考えることもできよう。

○嘉泰会稽志 (20卷) 沈作賓修 施宿等纂 (浙江省紹興)

卷20に「古詩文」を立てる。作品として李斯「秦徳頌」(本文は卷16「碑刻」に掲載)、漢の武帝「賜巖助書」から始まり、邯鄲淳「曹娥碑」、王羲之「上巳日会蘭亭曲水詩并序」のほか郭璞、孫綽、謝恵連、孔稚珪、梁の簡文帝、謝朓、江総、謝靈運、顔延年、沈約など30首余りを掲載するが、唐代及びそれ以降の作品については採録されていない(この点については『宝慶会稽続志』の項を参照)。その他、卷9「山」、卷10「水」、卷11「泉・井・洞・石・津渡・橋梁」などで、該当する目についての詩文の引用がある(こちらでは唐代の作品が挙げられている。例えば「臥龍山」に元稹、白居易ほか、「若耶溪」に李白ほか、「石窓」に陸龜蒙、皮日休などの作品を引用する)。

○嘉泰吳興志 (20卷) 談鑰纂修 (浙江省湖州)

卷12の「古蹟」の目に白居易(「精舎禪院」、皮日休(「茶塢」。ただし『松陵集』の該詩には引用文に該当する句はなし)、劉禹錫(「洛中送韓七中丞之吳興口号五首」の4)などを引く。卷13の「宮室」の目では杜牧の詩に言及するが(「銷暑樓」、「霽谿館」)本文の引用はない。湖州は決して詩跡に恵まれない土地ではないはずであるが、全体として引用数は少数に止まる。

○嘉定鎮江志 (22卷 首1卷) 史彌堅修 盧憲纂 (江蘇省鎮江)

卷6「地理」山川に幾つか詩の引用もしくは詩題への言及がある(例えば「東山」に皇甫冉「同樊潤州遊東山」及び蘇舜欽「題花山寺壁」、「蒜山」に蘇軾「蒜山松林中可卜居…」、「京江水」に杜牧「杜秋娘」など)。ほか、卷21「雜録」の「文事」の目に詩文もしくは詩文に関する故事を挙げる(李徳裕「鼓吹賦」序を引くほか、『玉壺清話』、『東軒筆録』などの瑣記及び『陳輔之詩話』、『後山詩話』など詩文評類からの引用が多い)。しかし前掲書と同様、鎮江という土地柄から見た場合、引用は少ない方と言えよう。

○剡録 (10卷) 史安之修 高似孫纂 (浙江省紹興、嵊州市・新昌県)

卷6(上・下に分かち。上は唐代まで、下は宋代)に「詩」の項を立て「詩中有及剡者採焉」と述べる。「上」は謝靈運「登臨海嶠初發疆中作」から始まり沈約、杜甫、李白、楊巨源、許渾、皇甫冉、孟浩然、宋之問、王維、戴叔倫、韋応物、崔顥、張籍、李嘉祐、羅隱、劉長卿、錢起、賈島、張祜、嚴維、戎昱、温庭筠、趙嘏、陸龜蒙、孟郊などの作品を載せる。「下」は趙汝礪から始まり王十朋までの宋代の作品を載せる。その他、卷4「古奇跡」や卷8「物外記」の「道館」「僧廬」、及び卷9・10「草木禽魚話」(上・下)にも該当する目で詩を引用する。本書は県の地誌としては最古のもので、しかも内容的には府州のものに劣らぬくらい詳しいものとなっている。また六朝以来、剡溪は詩跡として名高い土地であっただけに、本書での詩の引用も系統的で極めて充実したものになっていると言えよう。

○嘉定赤城志（40卷）黄罈^{しゅん}、齊碩修^{せき} 陳耆卿纂^{きけい}（浙江省台州、天台県）

卷21「山水門三」天台山の目に、孫綽の賦を始めとして李白、張祜ほかの詩人を引く。卷28「寺観門」景德国清寺の目に劉長卿、皮日休、陸龜蒙、杜荀鶴ほかの詩人を引くが、全体として引用数は少ない。

○宝慶会稽続志（8卷）張溥纂修^{こう}

本書は『続志』という名称からも分かるように、『嘉泰会稽志』の後を継ぐものであることが張氏の序に述べられている。

会稽志作於嘉泰辛酉、距今二十有五年。夫物有變遷、事有沿革、今昔不可同日語也。…苟不隨時紀錄、後將何所攷。…所書固辛酉以後事、而前志一時偶有遺逸者因追補之、疎略者因增補之、譌誤者因是正之。…

従って、卷6に「進士 仙積 詩文」を立てるが、ここでの詩文の引用も限定されたものになっている。「詩文」の前言に

前志所載詩文、起秦漢止晋宋、而隋唐以來皆略之。蓋作者之衆不勝紀錄也。但蘭亭詩序与誓墓文皆王羲之作。…志乃録蘭亭而棄誓墓、又帛道猷一詩、…膾炙古今人口、不但見稱於白樂天而已、志乃略、…殊未為当、今悉録之、以補前志之闕。

高宗皇帝大駕南巡駐蹕会稽、暇日觀黃庭堅所書張志和漁父詞、因同其韻。比日御製又有「登臨望稽山、懷哉夏禹勤」之句、皆是邦光前絶後之盛事也。敢敬以冠之首、併以唐明皇送賀知章詩附之於後、以為越紹之佳話云。（傍点松尾。以下同様）

とあり、『嘉泰会稽志』が唐代以降の作品を掲載しなかった理由を推測し、作品としては高宗が南巡したおり会稽に立ち寄り、黄庭堅が書写した張志和の詞に和した御製と、唐の玄宗の「送賀秘監歸会稽詩」を掲載した後、帛道猷と王羲之の作を挙げるに止まる。

その他、卷4「山水 橋梁 堤塘 花果 蔬 草木 茶 竹 藥石 紙 禽獸虫魚」では、幾つかの該当する目に詩の引用がある（例えば「橋梁」会稽、春波橋に賀知章「回郷偶書」其2、同、山陰、柯橋に胡曾「柯亭」など）。

あくまでも前志を受け継いでその補足をするという意味から、引用作品は少なくなっており、また隋唐以来の作品が多すぎるため敢えて省略した点も同じであるが、前志同様、詩跡的観点は継承されていると見てよいであろう。

○淳祐臨安志（52卷、うち5卷～10卷のみ存する）施諤纂修（浙江省杭州）

卷5の「旧治古蹟」の項、虚白堂に白居易、有美堂に蘇軾の詩、卷6の「楼観」の項、望湖楼に蘇軾の詩、卷7の「館駅」の項、樟亭駅に白居易及び鄭谷の詩を収める。特に卷8～卷10「山川」の該当する目には白居易、蘇軾を始めとして多くの詩作を収める。本来の52巻のうち詩文を独立させた巻があったのかどうか、目録も存せず全貌が把握できない状況では推測する手だてはないが、現存の6巻から見ただけでも詩跡的観点がかなり認められることから、本来の詩文の引用数はかなりの数に上ったであろう事は容易に想像できる。

○景定建康志（50卷）馬光祖修 周応合纂（江蘇省南京）

卷33～37が「文籍志」1～5となっており、37「文籍志」5に詩章・樂府を立てる。六朝は陶潛から始まり謝朓、顔延之、沈約など、唐では李白、杜甫、韋莊、劉禹錫、杜牧、羅隱、皮日休、孟郊、許渾など、宋代では王安石、蘇軾、范仲淹、周必大、楊万里などの作品を系統的に収めており、その数もかなりのものである。なお、卷37の冒頭に「此卷不能尽者、各載于諸志所為作之下」とあるように他の箇所での引用も目立つ（例えば卷16「疆域志」2 街巷の烏衣巷ほか、卷17～19「山川」1～3、卷20～22「城闕志」1～3の該当項目など）。南朝以来の文化的伝統から数多くの詩跡に恵まれているため、引用が多岐にわたるのも当然であろう。

また、これ以前に南宋の史正志による『建康志』10卷（乾道5年）、朱舜庸による『建康統志』10卷（慶元6年）があった（いずれも現存せず）が、周応合が馬光祖から「乾道慶元二志、互有詳略、而六朝事迹、建康実録、參之二志、又多不合。今当会而一之、前志之闕者補之、舛者正之、慶元以後未書者統之、方為全書。況前志散漫而無統、…詩文之可以発揚者、求之皆闕如也。…」(景定修志本末。目録の末尾に載せる)と言われ、本書を編纂したことからこのことは理解できる。

○咸淳臨安志（100卷）潜説友纂修

『淳祐臨安志』の現存する部分と比較した場合、詩文の引用に於いて踏襲している部分が幾つか見出される。本書に特にその旨を記した部分はないが、前志を踏まえ内容的にさらに補ったのであろう。分量的にはほぼ倍になっている。そのうち卷22～38の「志 山川」1～18には『淳祐臨安志』に掲載されている詩文と重なるものが見られる。また、卷13「行在所録」宮館などに関連する詩文が引かれるが、卷15に「行在所録」賦詠としてまとめている。その他卷75～85の「志 寺觀」1～11、卷86「志 園亭」、卷87「志 冢墓」などにも関連する詩文を引用する。

○咸淳毗陵志（30卷）史能之纂修（江蘇省常州）

卷20～23が「詩翰」1～4で、1（闕）は表・書・記、2は記、3が前朝詩、4が本朝詩となっている。前朝詩は宋の劉鑠から始まり唐の杜審言、李白、白居易、杜牧、劉禹錫、許渾、張祜、羅隱、皇甫冉、顧況、嚴維、李嘉祐、劉長卿、皮日休、陸龜蒙などの作品を収める。本朝詩は王禹偁から始まり梅堯臣、歐陽修、蘇軾、黃庭堅、王安石、陸游、楊万里などの作品を収める。六朝から宋代に到るまでの詩文を系統的に集めているところは『景定建康志』と同様である。

【結】

以上見てきたところによれば、今日存する南宋の地方志の中でほぼ半数以上、14志に詩跡的観点が見出され、そのうち9志は詩文についての独立した巻を立てていることが確認された。北宋の総志、『太平寰宇記』に始まった地理書における詩文の引用。北宋の地方志ではまださほどに引用されなかった詩文が、南宋期に入り格段に増加したということは、この時期における地理書の性質の変化、言い換えれば土地に対する認識の

変化がより顕著になってきたことを表している。すなわち、中央から見て単なる統治の対象としての地方から、地方自身が自らの文化的存在を主張する立場に変化してきたことを意味していると考えられる。それがたとえ一地方の統治者にとって、治政上の業績報告書的な性格を有していたにしても、である。

南宋は、江南地方に偏在を余儀なくされた王朝である。そのため官製の総志は編まれず、やや特殊な条件下に置かれていたことを考慮しても、地方志に現れた変化は注目に値する。このような現象が、私製の総志である『輿地紀勝』や『方輿勝覧』ではどのような形で現れているのか、次回の考察の対象にしたいと思う。

【注】

- (1) 拙稿「唐代の類書に見られる詩跡的観点について」(『中国文学研究』第29期、2003年)、「北宋時期の書物に見られる詩跡的観点について」(『松浦友久博士追悼記念中国古典文学論集』研文出版、2006年)。
- (2) 青山定雄『唐宋時代の交通と地誌地図の研究』(吉川弘文館、1963年) 第一「唐宋時代の総誌及び地方誌」の「五 宋代の地方誌」1及び2参照。なお、唐代から宋代にかけて実際の程度の地方誌が編纂されたかは同「唐宋地方誌目録及び資料考証」(『横浜市立大学紀要』第92号、A121、1958年)に詳しい。ここで示されている資料は、著者によれば、宋代においては正史藝文志の地理類、崇文総目、中興館書目、郡齋讀書志、同付志、書録解題等の各書目、及び輿地紀勝の碑記、玉海の地理書、通志の藝文略地理条等も参考にしたとあるので、当時伝存していた書目についてほぼ網羅していると見てよい。これによって、南宋以降かなりの数の地方誌が編纂されたことがわかる。
- (3) 『永楽大典方志輯佚』(中華書局、2004年)にも幾つか南宋の地方志と思われるものが収録されている。しかし前掲の「唐宋地方誌目録及び資料考証」には見られないものが多く、しかも断片的で、それぞれについての年代考証もなされていない。そのため、今回は参考として見るだけに止めておいた。因みに該当する地方志について言及すれば、『宝祐惟揚志』、『太平州図経志』などには独立した「詩文」の項目が見られ、引用作品も多い。
- (4) 注(2)所掲「五 宋代の地方誌」3参照。なお、従来地方志は、県などを単位とした地域による分類が主であったが、この時期から行政区画のほか、各項目別(風俗・田土・賦税・地理・寺観・古蹟・宮室など)の分類を併用するものが目立つようになる。独立した詩文の項目が増えた背景には、このような体裁上の変化も影響を与えていたと見てよい(同「五 宋代の地方誌」4参照)。なお、のちの明清時代の地方志は、ほぼこの体裁を踏襲するようになる。
- (5) 咸通10年(869)、蘇州に至った皮日休は、同年、蘇州刺史に着任した崔璞の従事となる。1月後、この地に閑居していた陸龜蒙が自分の作品を持参して面会を求めてきたのを機会に、両者の間で詩の唱和が始まり、咸通12年春まで、ほぼ1年余りにわたって詠み続けられる。これらの酬唱詩を陸龜蒙がまとめたのが『松陵集』であり、序文は皮日休の手になる。

池州における二つの詩跡

—齊山と杏花村—

松尾幸忠

【序】

2005年9月3日から13日まで、科学研究費補助金・基盤研究（B）「詩跡（歌枕）研究による中国文学史論再構築—詩跡の概念・機能・形成に関する研究—」の一環として、筆者は杭州・揚州・鎮江・和県・馬鞍山・宣城・池州等の、江南地方における詩跡ゆかりの地を訪問した。現地調査の重要性を改めて認識させられた旅行であったが、その中で特に強い印象をのこしたのは、22年ぶりに訪れた安徽省池州市であった。

かつて貴池県と呼ばれていた同市は、83年に訪問した当時^(注1)、まだ未解放地区であった。江南地方らしいのどやかな農村風景があちこちに見られたものである。しかし今回訪れてみて特に興味深かったことは、街全体の大きな変貌ぶりもさることながら、杏花村が新たな観光名所—「杏花村古井文化園」—として整備されていたことである。

83年訪問時、尋ねた詩跡は齊山・清溪河・秋浦河等であった。杏花村の名はその中にはなかった。もともと杏花村は、その名を有名にした「清明」詩自体が杜牧の作であるという確証がないこと、しかも「杏花村」という名称が固有名詞なのかどうかという問題があるなど^(注2)、二重の意味で池州における詩跡とは断定できないものであった。

現地で入手した資料『千古杏花村』（丁育民・張本健主編、黄山書社、2002年）及び『杏花村古井文化園旅游指南』（安徽省杏花村文化旅游发展有限公司編印、2003年）によれば、杏花村古井文化園は2000年頃から修建の計画が立てられ、2003年に開園したらしい。近年来、経済成長が続く中国で、一種の村おこし事業のような形で計画が立てられたのであろう。園内の主だった遺跡には「黄公井」「黄公酒壚」「煥園（『杏花村志』の撰者、清・郎遂の故居）」「杏花亭」などがあり、回廊には「清明」詩に題材をとった、杜牧を主人公とする黄梅劇（安徽省における民間戯曲劇）の幾つかの場面が壁画として描かれていた。文化園が面する大通りの交差点には杜牧の大きな塑像が建てられており、ここでは杜牧は土地の有名人として大きく顕彰されていた。

一方、齊山は以前に比べ様相がかなり変化していた。草木が生い茂り、緑豊かな山になっていたのである。山の上に「繡春台」という展望台があり、かつてそこからは四方が見渡せたものだが、今では木々に阻まれてしまっていた。僅か二十数年のうちにこれだけの変貌を遂げるのであるから、杜牧が登った千年以上前は一体どのような風景だったのであろうか。入口には新しく案内図が建てられ、その説明文には「千百年来、齊

山憑其“以石勝、尤以洞奇”的自然風景吸引無数名人雅士前往覽勝觀奇。杜牧、司馬光、王安石、包拯、王十朋、陸游、岳飛、袁枚等、都曾登臨賦詩、盛贊“池陽勝境”的秀美景色」とあって、詩跡ゆかりの観光地として整備されていることは確かであったが、実際、文人ゆかりの遺跡らしいものは多くはなかった。杜牧に関係するものとしては、「九日齊山登高」詩に因んで作られた「翠微亭」があっただけである。他には、最近作られたと思われる「岳飛広場」というものがあり、岳飛の像が建てられ、その台座に彼の「登池州翠微亭」詩が刻まれていた。

詩跡形成に当たっての詩歌創作の継承性という点から見れば、齊山において「九日齊山登高」詩が果たした役割は、杏花村における「清明」詩のそれを遥かに凌いでいるはずであるが、興味深いことに、現実の詩跡に表れた杜牧の評価の形は必ずしもそれに比例していたとは言い難かった。そこで今回は、この二つの詩跡について、それぞれにおける作品の継承性という観点から比較を行い、この現象についての一考察を試みてみたいと思う。

【一】

池州で活躍した文学者といえば、六朝時代には昭明太子、唐代では李白と杜牧である。特に詩跡形成の点から見れば後者2人の果たした役割は大きい。^(注3) 李白は池州の秋浦河、清溪河を活動の中心とし、杜牧は齊山、清溪河を活動の中心とした。その中で後世への影響が大きかった作品は「九日齊山登高」詩である。

| | |
|---------|---------------------------------|
| 九日齊山登高 | 九日、齊山にて高きに登る |
| 江涵秋影鴈初飛 | 江は秋影を涵 ^{ひた} して 鴈 初めて飛び |
| 与客携壺上翠微 | 客と壺を携へて 翠微に上る |
| 塵世難逢開口笑 | 塵世 逢ひ難し 開口して笑ふに |
| 菊花須挿滿頭歸 | 菊花 須く滿頭 ^{もつ} に挿して歸るべし |
| 但將酩酊酬佳節 | 但だ酩酊 ^{もつ} を將て 佳節に酬い |
| 不用登臨恨落暉 | 用ひず登臨して 落暉を恨むを |
| 古往今來只如此 | 古往今來 只だ此くの如し |
| 牛山何必獨霑衣 | 牛山 何ぞ必ずしも 独り衣を霑さん（『樊川文集』卷3） |

当時、池州刺史であった杜牧は、彼を訪ねてきた友人の張祐を誘い、齊山を訪れた。会昌5年（845）、杜牧43歳の時である。詩中の「客」とは張祐を指しており、この時彼が杜牧に唱和した詩も伝わっている。^(注4)

詩中で杜牧はこのように言う。—俗世間に生きてると、口を開いて笑えるような楽しいことには滅多に出会えない。だから今日のようなめでたい日には菊の花を頭一杯に挿して楽しく帰りたいものだ。十分に酩酊して佳節に酬い、沈みゆく夕陽を恨むことな

どやめようではないか。昔も今も時はこのように過ぎ、人はこのようにして老いてきたのだから、斉の景公のように^(注5)死の到来をひとり嘆くことなど必要ないではないか、と。

お互い、自らの境遇に不満を抱く者同士。しかし古えから今日までの大きな時の流れの中に自らを位置づけてみれば、そのような問題は取るに足らないこと。今現在のこの良きひとときを大切にすることこそ大事なのではないかと、親友を前にして一つの達観した心境を表白している杜牧が、ここにいる。もちろんこう詠ったからといって、問題が根本的に解決したわけでないことは詩人自身も重々承知はしていたのである。後で述べるように、ここには、杜牧の数ある個性の中の一つの側面がよく表れていると言えるのである。

【二】

杜牧以後、唐代にも何人かの詩人が当地を訪れているが、斉山を詠んだ作品が増えるのは宋代からである。その中で（実際に斉山を訪れたか否かは別として）杜牧のこの詩を念頭に置いて作られた作品を調査してみると^(注6)夥しい数になる。時代的に見ると宋代がとりわけ多い。^(注7)以下、とりあえず宋代の別集類のみに絞り、詩題と作者、及び関連部分のみを掲げる^(注8)（詞及び碑記は除く。また、原典に当たり文字を訂正した箇所がある）。

依韻和通判徐郎中毗陵重陽 陳襄
却輸小杜憐嘉節、酩酊齊山夜始迴。（『古靈集』卷24）

登齊山 韋驥
况是重陽時節近、紫微前詠好開顏。（『錢塘集』卷5）

九日 韋驥
須憑酩酊酬佳節、追感齊山不浪吟。（『錢塘集』卷7）

和綺翁遊齊山寺次其韻 梅堯臣
辭韻險絕茲所駭、何特杜牧專當年。（『宛陵先生集』卷5）

紫微亭 梅堯臣
昔我来齊山、山僧迎道傍。…
牧之旧遊處、苔滑屐莫將。（『宛陵先生集』卷44）

次韻和吳仲庶池州齊山画図 王安石
更想杜郎詩在眼、一江春雪下離堆。（『臨川先生文集』卷19）

和王微之秋浦望齐山感李太白杜牧之 王安石
齐山置酒菊花開、秋浦聞猿江上哀。（『臨川先生文集』卷19）

儲溪重九阻風、戲呈同行黎東美 郭祥正
却憶齐山小杜歌、人世難逢笑開口。（『青山集』卷13）

重陽日独居浚水、君俞出遊杜曲惠詩、酬以來韻 李復
何似齐山江上客、菊花須插滿頭回。（『澗水集』卷13）

次韻施德初遊齐山 洪适^{かつ}
詩塵誰復數齊梁、小杜文章楚大邦。（『盤洲文集』卷4）

宿池州齐山寺、即杜牧之九日登高處 楊万里
謫仙狂飲顛吟寺、小杜倡情冶思樓。（『誠齋集』卷33）

未至池陽五里有齐山寺。寺後巖石巉然、緣嵯而上絕頂、有翠微亭、即杜樊川九日携
壺地也。自亭而西憩集仙洞 楊冠卿
携壺上翠微、一雨秋政晚。（『客亭類稿』卷11）

遊池州齊山 張栻
樊川有留詠、兀坐一長吟。（『南軒集』卷2）

高不疑与客登梁昭明釣台、李肩吾和前詩見遺、用韻謝之 魏了翁
遐想牧之歌晚月、閑尋白也詠平天。（『鶴山先生大文全集』卷10）

抵池陽未入関、泊于齐山数日、因窮岩壑之勝 戴昺
三十六洞猶昔者、四百余年無牧之。（『石屏詩集』卷9〔附録〕）

以下は、杜牧の詩に次韻もしくは用韻した作品である。しかしこれらの作品は、袁説友を除き、詩中で必ずしも杜牧に言及しているとは限らない。

同天寧院老遊齐山、次杜牧之韻 李綱 （『梁谿集』卷14）

由当塗回宿齐山、用杜牧之韻 喻良能 （『香山集』卷8）

遊齐山、用唐杜紫微韻 袁説友 （『東塘集』卷4）

空憶樊川秋影去、為誰重唱縷金衣。

登裴公亭、借用杜牧之登齐山詩韻二首 趙善括 （『応齋雜著』卷5）

以上の作品に共通するところは、①詩中に杜牧の詩句を用いている、②杜牧及びその作品に言及している、③杜牧の詩の韻に和している（用韻、次韻）の、いずれかの要素を必ず含んでいることである。

杜牧の詩が「豪」の側面と「艶」の側面とを持つことはしばしば指摘されるところであるが、それ以外にも「牧才高、俊邁不羈、其詩豪而艶、有気概」（宋・陳振孫『直齋書録解題』卷16）、「俊爽若牧之」（明・胡應麟『詩藪』外編卷4、唐下）、「宋人評其詩豪而艶、宕而麗」（明・楊慎『升菴詩話』卷5）等と評されるように、「俊邁・俊爽」、「不羈・宕」という側面をも持ち合わせていたことに注目すべきであろう。「九日齊山登高」の詩に見られた闊達な感懐の吐露は、まさにそのような面が、時間の推移への感傷と巧みに緋い交った形で表現されている。それだからこそ、後世にかくも多くの追随作品が生み出されたのであろう。創作の着想がどれを出発点としたものであるにせよ、「重陽（九日）」「齊山」「杜牧」という三つの要素が、密接に関連し合っ一つ一つの作品の中に詠み込まれるということは、齊山が杜牧ゆかりの詩跡として明確に認識されていることに他ならない。言い換えれば齊山は、作品に内在した継承性を有する、典型的な詩跡の一つであると言えよう。

【三】

次に杏花村について見てみたい。杏花村に関わる詩は、言うまでもなく「清明」である。

| | |
|---------|----------------|
| 清明 | 清明 |
| 清明時節雨紛紛 | 清明の時節 雨 紛紛 |
| 路上行人欲斷魂 | 路上の行人 魂を断たんと欲す |
| 借問酒家何処有 | 借問す 酒家 何処にか有る |
| 牧童遥指杏花村 | 牧童 遥かに指さす 杏花村 |

（南宋・劉克莊『分門纂類唐宋時賢千家詩選』卷3）

「杏花村」もしくは「杏花の村」という詩語自体は唐代の作品の中に窺われるが、それは勿論、池州の杏花村のことではない。もともと杜牧の別集類には見られなかったことから、「池州」と「杏花村」と「杜牧」の三者が結びつくとなれば、劉克莊『千家詩選』以後からということになる。確かに南宋期から元にかけて、この作品を踏まえたと思われる作例が、若干存在する。^(注9)

次韻杜若川春日雜興集句（二首の一） 宋・于石
行約青帘共一樽、牧童遥指杏花村（『紫巖詩選』卷3）

老翁

宋・何応龍

杏花村酒家家好、莫向橋邊問牧童（陳起編『江湖小集』卷25、橘潭詩稿）

遼陽

元・朱名世

問道錦州何處是、牧童遙指杏花村（『鯨背吟集』）

しかし、作家及び作例から見ても誠に寥々たるものであるし、さらに注意しなければならないのは、これらの作品が池州という土地とは関係なく詠われているということである。因みに、冒頭で紹介した資料『千古杏花村』には「二、古人吟詠杏花村」という章がある。見出しこそ「杏花村」の語が使われているものの、そこに集められた詩、詞、歌、賦は池州全体に関するものが多く、杏花村そのものを詠った作品は明代以降にしか見られない。^(注10) しかもその多くは池州出身者の手になるものである。^(注11) このことから、池州「杏花村」の詩跡としての歴史は、明代頃から始まると言ってよかろう。

ここで、地理・方志書の方面から杏花村についての記述を確認しておきたい。詩跡的観点が濃厚に窺える南宋の『輿地紀勝』や『方輿勝覽』等の総志類には、池州における杏花村の存在はまだ記されておらず、現存の地理書の中で最も早くその名が見えるものは『嘉靖池州府志』である。^(注12) しかし興味深いことに、該書の巻1「輿地篇・古蹟」には「杏花村」の名を挙げ、杜牧の「清明」詩を引用するものの、巻8「雜著篇上・芸文」には杏花村ゆかりの作品は一首も収録されていない。齊山ゆかりの作品が数多く収録されているのに比べ、実に対照的である。このことは先に述べたことを傍証するものであろう。

すなわち、「杜牧と池州」という結びつきはすでに唐代からあったが、南宋以後「杜牧と清明詩」という結びつきが新たに生まれ、その両者が一経緯の詳細は不明であるが—いつの頃からか融合し始め、明代には池州における杏花村の存在がかなり意識されるようになった、ということである。言い換えれば、明代になって、「池州—杜牧—杏花村」という図式がほぼ出来上がったのであろう。

また、このことは“千家詩”との関係も考慮しなくてはならないであろう。一般に“千家詩”と呼ばれるものには、劉克莊『分門纂類唐宋時賢千家詩選』（22巻）と、それを削り、場合によっては増やした謝枋得（偽托とされる）『千家詩』（4巻）とがあり、いずれも庶民向けに編纂されたものという点で共通している。特に後者は巻数も少なく、前者より一層流布したと考えられる。おそらく明代頃までにこの“千家詩”がかなり一般に流伝し、それも一つの影響力となって杏花村が詩跡として成立したのではないだろうか。齊山での作例に士大夫階級が多く、杏花村には下層知識人が多いことも、そのことを裏付けているように思える。この点についてはまた稿を改めて考察することとしたい。

【結】

詩跡の形成から比較した場合、杏花村は齊山より遙かに歴史が浅く、作例数及び作者層から見ても明らかに劣る。また、作品自体に内在する文学的影響力の点からも、「清明」は「九日齊山登高」に及ばないと言えよう。^(注13)しかし、杜牧に対する顕彰の程度は、むしろそれに反比例しているように思える。最後にこの問題について考えてみたい。

これはおそらく、詩人に対する（現代／現地）中国人の評価を表しているのではないだろうか。より具体的にいえば、皆は杜牧という詩人のエピソード性を高く評価しているということである。

杜牧がエピソードに富む詩人であることは論を待たない。若き日の揚州における風流韻事は有名であるし、それを題材にとった「杜牧之揚州夢」という劇本まであることから、それは明らかであろう。つまり、杜牧の闊達な一面がよく表れた「九日齊山登高」詩も良いが、こぬか雨の中、酒屋を求めて難儀する杜牧の方が、民衆の目にはより一層杜牧らしく映るのではないかということである。杜牧の「艶」なる側面、「風流才子」としての一面を、民衆は期待しているのである。その証拠に、文化園の回廊に描かれた黄梅劇「情灑杏花村」では、杜牧が村を訪れ、名歌妓の張鶴娘と詩のやりとりをしたことで気持ちが慰められるという場面が出てくる。やはり、「酒」と「女性」の方が、杜牧には似合っているのだ。「九日齊山登高」にも「携壺」「酩酊」が出てくるが、ここでは、重点はむしろ後半の闊達な感懐の吐露にある。一方の「清明」は、専ら「酒」。しかも杏の花に囲まれた、景色の良い酒屋に勇んで行こうとしたところで詩は終わっている。酒に困んだ「黄公酒壚」「黄公井」という遺跡のある杏花村古井文化園では、杜牧は前面に出ざるを得ない。その結果、齊山よりこちらの方が顕彰の度合いが高くなったのであろう。また、エピソード性からいっても観光地として人に受け入れられやすく、詩跡として整えるには実に好都合な場所であった。

この二つの詩跡は、同じ土地でどちらも杜牧に関係しながら、作品の影響力和杜牧への顕彰の程度とが逆転しているという、きわめて興味深い例であった。そこには図らずも、民衆の、詩人への評価が反映されていたということであった。このことはまた、詩跡形成に当たって、詩人の性格というものが大きく影響するということの、一つの良い例と言えるのではないかと思う。

【注】

- (1) 1983年、8月25日～9月8日、第2回早稲田大学中国古典詩歌研究訪中団（団長、故・松浦友久教授、主な訪問地は衡陽・長沙・岳陽・武漢・廬山・貴池・南京・無錫・蘇州等）
- (2) この点については松浦友久編『校注唐詩解釈辞典』（大修館書店、1987年初版）「清明」詩の項（高橋良行執筆）、及び松浦友久・植木久行編訳『杜牧詩選』（岩波文庫、2004年第1刷）補注56参照。一般には、南宋・劉克莊の『分門纂類唐宋時賢千家詩選』が初出とされる。なお、『千古杏花村』も『杏花村古井文化園旅游指南』も、いずれも「清明」詩が杜牧の作品であるとの前提で書か

れている。

(3) 参照、拙稿「池州刺史時代の杜牧」(『中国詩文論叢』第5集、1986年)

(4) 張祜の詩は以下の通り。

和杜牧之齊山登高 杜牧之の齊山にて高きに登るに和す
秋溪南岸菊霏霏 秋溪の南岸 菊霏霏たり
急管繁絃對落暉 急管繁絃 落暉に對す
紅葉樹深山徑斷 紅葉 樹深くして 山徑断たれ
碧雲江靜浦帆稀 碧雲 江静かにして 浦帆稀なり
不堪孫盛嘲時笑 孫盛の嘲り 時に笑ふに堪えざるも
願送王弘醉夜歸 王弘に送られて 醉ひて夜歸るを願ふ
流落正憐芳意在 流落 正に芳意在るを憐れむ
砧声徒促授寒衣 砧声 徒らに促す 寒衣を授くるを (『全唐詩』卷511)

(5) ここで齊の景公の牛山の故事を引用したのは、齊山→齊国への連想があったのと、李白の次の詩が念頭にあったことによるものであろう。

景公一何愚 牛山涙相統 (李白「古風五十九首」其23、『李太白全集』卷2)

無作牛山悲 惻愴淚沾臆 (李白「君子有所思行」『李太白全集』卷5)

また、ここで杜牧が重陽と牛山の故事とを結びつけたことにより、後世、本来は無関係であった両者を関連づけて詠う作品が増えた、と指摘する発言がある。

杜牧之九日齊山登高詩落句云、牛山何必淚沾衣。蓋用齊景公遊於牛山、臨其国流涕事、泛言古今共盡、登臨之際、不必感嘆耳、非九日故實也。後人因此、乃於詩或詞、遂以牛山作九日事用之。亦猶牧之用顏延年一麾出守為旌麾之麾、皆失於不精審之故也。

(朱弁『風月堂詩話』卷下)

これも「九日齊山登高」詩の、後世への影響の一つと言えるであろう。

今、『四庫全書』(集部)の検索をかけてみた場合、重陽と牛山の故事とを結びつけた作品には次のようなものがある(宋代のみ挙げる)。

九日 韋驥

四逢九日峽江湄、窃祿無功祇自嗤。把酒又遲今歲菊、開編還愧去年詩。牛山悽感何其昧、藍水歡吟乃所宜。白髮不辭吹帽落、更登山閣醉佳時。(『錢塘集』卷7)

酬楊高士 沈遼

秋來當砌看金錢、不為流年悵白顛。已向滄洲逢九日、更欣高士況新篇。牛山誰見沾衣客、籬下空懷採菊賢。遙望白衣猶未至、不妨細雨竹窓前。(『雲巢編』卷2)

九日登山亭會飲 李綱

淵明避世士、酷愛九日名。獨酌東籬下、悠然得此生。我輩正羈旅、佳節安可醒。相携陟翠巘、置酒松間亭。菊蕊弄新黃、橘苞破微聲。鬢邊插茱萸、未覺巾幘傾。雲山藹佳色、風林動疎聲。慷慨念平昔、醉舞屬群英。国歩方綴旒、衣冠正漂萍。山河拳目異、望遠若為情。方期汗漫遊、天池濯吾纓。何必楚囚泣、牛山良可輕。(『梁谿集』卷27)

重九彥清出獵獨處無聊 洪皓

獨上層樓意已闌、欄干倚遍悄無言。白衣不至黃花少、悵望庭闈涕淚繁。秋節堪悲惟暮節、牛山獨歎異龍山。解嘲不見狂從事、落帽風流作等閑。(『鄱陽集』卷1)

次韻學士重陽雪中見招不赴前後十六首（其3） 洪皓

二君氣概繼雷陳、九日哦詩妙入神。季友凌霄方草賦、孟公驚坐正延賓。難陪鳳嶺登高宴、且放牛山出涕辛。獨臥薦蒙思橘贈、數篇潛發洞庭春。（同）

重九宿王孫舖 鄧深

蘭江路盡接荊江、竹屋蕭條草樹荒。許久長晴坐極暑、霎時疎雨做重陽。明眸縱少新開菊、隨量何妨淺拳觴。駢舍明朝便陳跡、牛山往事莫徒傷。（『大隱居士詩集』卷下）

余有仲子之戚、九日親故携酒訪我於梅山之上。因詠昔人詩「人情皆向菊、天意欲摧蘭」之句、不覺淒然有感、遂易一字足成篇。 姜特立

九日上梅山、愁心卒未安。人情皆向菊、天意獨摧蘭。管女不及嫁、萊衣空自寒。牛山多感慨、把酒淚闌干。（『梅山統藁』卷11）

賀新郎 九日 劉克莊

湛湛長空黑、更那堪、斜風細雨、亂愁如織。老眼平生空四海、賴有高樓百尺。看浩蕩、千崖秋色。白髮書生神州淚、儘淒涼、不向牛山滴。追往事、去無迹。少年自負凌雲筆。到而今、春華落盡、滿懷蕭瑟。常恨世人新意少、愛說南朝狂客。把破帽年年拈出。若對黃花孤負酒、怕黃花也笑人岑寂。鴻北去、日西匿。（『後村集』卷19）

重九即席點韻 趙必豫

淵明我輩人、豈為口體累。歸歎三逕秋、清吟堯幽寄。醒眼對黃花、陶然已心醉。世俗兒女情、飲菊莢繫臂。長房果神仙、登高未為智。落帽狂參軍、聲利窮所嗜。興來盡君歡、得句輸杜二。牛山淚沾衣、鄙哉馬千駟。悠然千載吟、高韻未易次。人生聚幾何、此意非酒為。徜徉林壑遊、磊落湖海義。明年此會日、老健天所賜。（『覆瓿集』卷2）

(6) 『四庫全書』(集部)の検索による。

(7) 宋代に作例が多いのは、一つには当時、池州が要衝の地であり、訪れる人が多かった事とも関係している。陸游『入蜀記』(巻3、乾道6年、7月24日)では次のように言う。

初、王師平南唐、命曹彬分兵自荊州順流東下、以樊若冰為鄉導、首克池州、然後能取蕪湖當塗、駐軍采石而浮橋成。則池州今實要地、不可不備也。

なお、『入蜀記』にも池州における杜牧について言及した箇所が多い。

(8) 引用作品の全文は以下の通り。

依韻和通判徐郎中毗陵重陽 陳襄

自愴宮車別帝台、寄言籬菊不須開。心喪忍到行春浦、耳病慵携遲月杯。天色陰沈鳴雁過、物華零落暗蛩催。却輸小杜憐嘉節、醅酌齊山夜始迴。（『古靈集』卷24）

登齊山 韋驥

臨岐跋馬向齊山、苒苒烟蘿試一攀。怪石何年居物表、白雲終日伴僧閑。氣吞城郭紛囂外、勢接江湖浩蕩間。況是重陽時節近、紫微前詠好開顏。（『錢塘集』卷5）

九日 韋驥

重九蕭條秋已深、登高更在蜀江潯。黃花未肯趁時吐、白酒祇如常日斟。絕塞煙雲長滿目、故園風物愈關心。須憑醅酌酬佳節、追感齊山不浪吟。（『錢塘集』卷7）

和綺翁遊齊山寺次其韻 梅堯臣

蒼山南望截雲煙、中有紺宇通諸天。長橋直度清溪水、寒湖收潦曠平田。古木陰森大堤上、千峰濃澹高樓前。龍筍未進角出縮、虎石亂踞筋拳攀。陰崖乳泉濕苔蘚、陽谷暖氣留蘭荃。澗戶曉闢

煙的的、松軒夜啓月娟娟。聞有謫仙乘輿入、飄然欲拍洪厓肩。玩遊逐勝不覺遠、露奇癡怪工無全。捫蘿但識康樂徑、飲酒安問遠公禪。清猿不到俗土耳、香草已入騷人篇。水鳥念仏次淨界、野鹿銜花來象筵。在昔探賞猶可數、深景秀句今得傳。辭韻險絕茲所駭、何特杜牧專當年。重以平澹若古樂、聽之疏越如朱絃。秘藏楮中為不朽、咨諏坐上皆日然。誰意羸官獲此貺、洗去鄙吝空池邊。聊欲報言罕馭使、春郊唯見雁連連。

（『宛陵先生集』卷5）

紫微亭

梅堯臣

江雲如旗脚、墨點飛雁行。平圃采芳菊、上水酌桂漿。為言此何時、杜子逢重陽。醉思莊生達、晒彼齊景傷。至今孤亭間、獨有九日章。昔我來齊山、山僧迎道傍。騎馬到寺門、亂石屹若牆。值雨不徧歷、但取山泉嘗。牧之舊遊處、苔滑屐莫將。却返弄水涯、隔溪望青蒼。絕頂見茅屋、洪波日湯湯。雲霞與雁鷺、還動秋客腸。去逾十五年、遊宦韓陳梁。哀哀遭禍殃、乃再居南方。欲往尚未可、追吟寄支郎。

（『宛陵先生集』卷44）

次韻和吳仲庶池州齊山畫因

王安石

省中何忽有崔嵬、六幅生綃坐上開。指點便知巖石處、登臨新作使君來。雅懷重向丹青得、勝勢兼隨翰墨回。更想杜郎詩在眼、一江春雪下離堆。（『臨川先生文集』卷19）

和王微之秋浦望齊山感李太白杜牧之

王安石

齊山置酒菊花開、秋浦聞猿江上哀。此地流傳空筆墨、昔人埋沒已蒿萊。平生志業無高論、末世篇章有逸才。尚得使君驅五馬、與尋陳迹久徘徊。（『臨川先生文集』卷19）

儲溪重九阻風、戲呈同行黎東美

郭祥正

不登高、不飲酒、漠漠黃沙翳衰柳。扁舟繫纜未敢行、江頭白浪蛟龍吼。故園菊花已爛漫、客路無窮但搔首。却憶齊山小杜歌、人世難逢笑開口。（『青山集』卷13）

重陽日獨居浹水、君俞出遊杜曲惠詩、酬以來韻

李復

衆人有錢競沽酒、嗟我獨醒坐搔首。荒徑蓬蒿深映門、茅舍三間傍疎柳。南山奔騰呼欲來、雲散山容一笑開。何似齊山江上客、菊花須插滿頭回。（『澗水集』卷12）

同天寧聰老遊齊山、次杜牧之韻

李綱

東風初起白雲飛、禪客相邀步翠微。童稚舊遊如夢到、江山今幸返途歸。巖巒窈窕籠輕鷺、鷗鷺翩翩舞夕暉。歸覲庭闈詢往事、篋中先整老萊衣。（『梁谿集』卷14）

由塗回宿齊山、用杜牧之韻

喻良能

一望雲煙興欲飛、晴光聊復步熹微。幾年想像空懷古、今日登臨自送歸。寒菊有花宜靖節、澄江如練憶元暉。夜深靜坐清人骨、巖影侵階月滿衣。（『香山集』卷8）

遊齊山、用唐杜紫微韻

袁說友

聯鑣出郭疾於飛、好景留人倦式微。盡日山行惟所適、夕陽堤上詠而歸。摩挲苔壁嗟前事、徙倚巖亭惜寸暉。空憶樊川秋影去、為誰重唱縷金衣。（『東塘集』卷4）

次韻施德初遊齊山

洪适

詩塵誰復數齊梁、小杜文章楚大邦。曾為黃花酬九日、至今陳迹擅三江。新亭高下依喬木、遠岫參差倚曲牕。著屐與君時茗飲、後車何必酒盈缸。（『盤洲文集』卷4）

登裴公亭借用杜牧之登齊山詩韻二首

趙善括

春晚風花片片飛、登臨共惜景熹微。人生待足誰如意、官況苦無胡不歸。且向園林窮勝事、更憑山水發清暉。酒酣起舞君休笑、直欲淋漓身上衣。

風簾斜捲燕子飛、天氣清和酒力微。極目烟波無尽藏、関心春夢有時歸。香飄十里喧朝市、翠積千山斷晚暉。杖屨不妨頻一到、塵埃那解点征衣。〔『応齋雜著』卷5〕

池州九日用杜牧之齊山韻 范成大

年年佳節歌式微、秋浦片帆還欲飛。万里蜀魂思遠道、九歌楚調送將歸。杯中山影分秋色、木末江光借夕暉。細撚黃花一枝尽、霏霏金屑滿征衣。〔『石湖居士詩集』卷19〕

宿池州齊山寺、即杜牧之九日登高處 楊万里

我来秋浦正逢秋、夢裏重来似旧遊。風月不供詩酒債、江山長管古今愁。謫仙狂飲顛吟寺、小杜倡情冶思樓。問著州民渾不識、齊山依旧俯寒流。〔『誠齋集』卷33〕

未至池陽五里有齊山寺。寺後巖石巉然、緣嵯而上絕頂、有翠微亭、即杜樊川九日携壺地也。

自亭而西憩集仙洞 楊冠卿

泉石吾膏肓、佳處每忘返。携壺上翠微、一雨秋政晚。千巖如獻狀、秀色暈層巘。綠雲梯逕入、危磴石偃蹇。洞戶訪真仙、丹成骨已換。羽化今幾年、鸞鶴若在眼。〔『客亭類稿』卷11〕

遊池州齊山 張栻

旧聞齊山勝、抱病來登臨。蒼然俯平湖、秀出幾百尋。穹石天与巧、脩篁近成林。高攀極巉巖、俯探窮窈深。愛此堅貞姿、摩挲会予心。憶行西湖岸、亦復多嶽峯。頗恨人力勝、刻画時見侵。誰知醜石面、乃亦變孔壬。何如榛莽間、屹立長森森。天然抱幽獨、妙質逢賞音。支筇到絕頂、孤亭指遙岑。樊川有留詠、兀坐一長吟。〔『南軒集』卷2〕

高不疑与客登梁昭明釣台、李肩吾和前詩見遺、用韻謝之 魏了翁

籃輿軋軋度齊山、文獻風流數百年。遥想牧之歌晚月、閑尋白也詠平天。只余釣水梁台在、未弁登山謝屐穿。多謝秋風吹好雨、如陪杖屨俯魚淵。〔『鶴山先生大文全集』卷10〕

抵池陽未入関泊于齊山數日、因窮岩壑之勝 戴昺

瘦策相扶上翠微、眼驚奇怪足忘疲。三十六洞猶昔者、四百余年無牧之。漲水淼瀾春雨後、遠山重疊夕陽時。幾多江北江南恨、問着沙鷗總不知。〔『石屏詩集』卷9〔附録〕〕

なお、元代以降の有名な作家として、次の二人の作品だけ掲げておく。

夢登高山得詩二首 薩都刺

登高遠望四山齊、何處風流杜牧之。白苧曾聽松下唱、紫簫還向月中吹。野雲雨過無行路、芳草春深有斷碑。夢裏勝遊閑記得、翠微高上写烏糸。

杖藜踏破碧崔嵬、夢裏清游樂未回。万壑泉声松外去、數行秋色鴈邇來。文章小杜人何在、風雨重陽菊自開。山路雲深行客倦、竹鷄飛上独春台。〔『薩天錫詩集』後集〕

春日遊齊山寺用杜牧之韻二首 王守仁

即看花発又花飛、空向花前嘆式微。自笑半生行脚過、何人未老乞身歸。江頭鼓角翻春浪、雲外旌旗閃落暉。羨殺山中麋鹿伴、千金難買芰荷衣。

倦鳥投枝已乱飛、林間暝色漸霏微。春山日暮成孤坐、遊子天涯正憶歸。古洞湿雲含宿雨、碧溪明月弄清暉。桃花不管人間事、只笑山人未扪衣。〔『王文成公全書』卷20〕

(9) 『四庫全書』(集部)の検索による。

(10) 『千古杏花村』には、貴池出身の元代の詩人で、延祐年間(1314～1320)に池州路の教授に任じられたという「曹天祐」という人物の名を挙げ、「杏花村」と題した詩を載せる。しかし『杏花村古井文化園旅游指南』には「曹天祐」に作り、宋代の人とする。『安徽史志綜述』(史州著、

安徽教育出版社、2002年)には「曹天祐」に作り、同じく宋代の人とする。『杏花村古井文化園旅游指南』によれば、曹天祐(祐?/祐?)の名は光緒9年の『貴池県志』に初めて現れるようで、それ以前の地方志にはなぜか名が見えない。また、郎遂の『杏花村志』にも見えないので、ここでは待考としておく。

(11) 例えば、次のようなものがある。

杏花村

明・沈昌

杏花枝上著春風、十里煙村一色紅。欲問當年沽酒處、竹籬西去小橋東。

罷官歸里經杏花村故居

明・張思曾

鱸肥方返棹、悵望此村幽。故里翻成客、名園作廢丘。難逢小杜輩、喜共老僧遊。紅杏曾余幾、重來問酒樓。

杏花村(題詞詩)

明・顧元鏡

牧童遙指處、杜老舊題詩。紅杏添新色、黃壚憶舊時。遠山層作画、好鳥解吹簫。偷得余閑在、官錢換酒卮。

なお、この章に収められている作品群は、基本的に『杏花村志』巻5～8の「題詠」から収録しているようである。

(12) 注(2)『校注唐詩解釋辭典』の同項参照。

(13) この「清明」詩は、様々な人に改作意欲をわかせたようであるが、その点からも、この詩に対する評価がある程度窺われる。同前、備考(2)参照。

中国古典詩人における南方意識

—「瘴」の字を手がかりに—

許 山 秀 樹

1、はじめに

中国古典詩の歴史は長く、詩が詠まれた場所も広範囲にわたる。その場所の持つ風土が詩に反映されることもある。また、一篇の詩が契機となり、その土地に特定のイメージが共有された詩的名所となり、後の詩人がそれに即して詩を詠む、ということも行なわれてきた。我々がそういった詩を読むとき、その土地の持つ風土・イメージを切り離して鑑賞することはほとんど不可能である。

草木が比較的少ない北方中国で詠まれた作品には潤いの乏しさが感じられることがある。その一方、南方中国で詠まれた作品には、その風土・気候が反映し、詩の中に豊かさや明るさを感じることができる。

ところが、南方中国で詠まれた作品は、必ずしもその土地をほめたものばかりではない。その例と言えるものが「瘴」の字である。南方中国について詠まれた詩の中にしばしばこの「瘴」が用いられている。そしてこの「瘴」は南方中国の風土を否定的に詠うときに用いられることが多い。

と同時に、とりわけ中晩唐の詩人たちが江南の地で、心の平安を覚えつつその土地の風土を詠んだ作品の数々が存在することもまた事実である。南方中国をあしざまに詠う詩とたたえて詠う詩との併存……。この一見矛盾する現象をどのように説明すればいいのであろうか。本稿は、この疑問を解決するために、まず、「瘴」がどのように中国古典詩のなかで用いられているのかを考察することにする。そしてそれを手がかりにして、中国の詩人にとって江南以南の地がどのような意味を持っていたか、を考えていきたい。

2、辞書類における「瘴」字の意味

本章では、「瘴」の文字の成立と初期の使用例について考える。

白川静『字統』（平凡社、1984年）では、以下のように言う。

形声 声符は章。南方の湿潤の地には、風土病マラリアの類が多く、瘴癘しょうれいの地とされる。後漢以後の文献に至ってみえるのは、そのころ南方との交渉がはじまったからである。〔後漢書、馬援伝〕に「軍吏、瘴疫を経て死するもの、十の四なり」、また〔南蛮伝〕にも「死亡を致すもの、十に必ず四、五なり」とみえ、その猖獗しょうけつの

状を伝えている。

「後漢以後の文献に至ってみえるのは、そのころ南方との交渉がはじまったからである」という点は注目すべき指摘であるが、根拠が示されていない。^(注1)

しばしば辞典類に説明される「南方特有の風土病」「高温多湿の熱帯・亜熱帯地方にみられる悪気」という意味を、この「瘴」の字だけが持っていたわけではない。たとえば、『漢語大字典』(巻6)「瘴」⑬では、次のように指摘する。

通「瘴」。瘴気、熱帯或亜熱帯山林中の湿熱空気、《篇海類編・地理類・阜部》：「瘴、亦作瘴。」《後漢書・楊終伝》：「且南方暑湿、瘴毒互生。」《文選・左思〈魏都賦〉》：「宅土熇暑、封疆瘴癘。」李善注引劉逵曰、「吳・蜀皆暑湿、其南皆有瘴氣。」

このように、「瘴」にも同様の意味があったことがわかる。

諸文献を検索する限り、漢代およびそれ以前の文献には「瘴」字を見出しがたい。「瘴」がまとまって文献に現われるのは、管見の範囲では、『後漢書』である。「瘴」の字がこのような意味で用いられた例も、後漢以前の文献には見出しがたい。^(注2)

3、唐以前の用例

本章では、唐代以前の詩の中で「瘴」がどのように用いられているかを検証する。管見の範囲では、南朝・宋の鮑照の詩が最も古い。

代苦熱行 鮑照

| | |
|-------|--------------------------------|
| 赤阪横西阻 | 赤阪 西阻に横たわり |
| 火山赫南威 | 火山 南威 <small>さかん</small> に赫なり |
| 身熱頭且痛 | 身熱く頭は且つ痛み |
| 鳥墮魂来帰 | 鳥の墮つるがごとくして 魂のみ来帰す |
| 湯泉発雲潭 | 湯泉は雲潭 <small>き</small> に発し |
| 焦煙起石圻 | 焦煙は石圻 <small>き</small> に起る |
| 日月有恒昏 | 日月は恒に昏き有り |
| 雨露未嘗晞 | 雨露は未だ嘗 <small>かわ</small> て晞かず |
| 丹蛇踰百尺 | 丹蛇は百尺を踰え |
| 玄蜂盈十困 | 玄蜂は十困 <small>き</small> に盈つ |
| 含沙射流影 | 沙を含んで流影を射 |
| 吹蠱病行暉 | 吹蠱 <small>すいこ</small> は行暉を病ましむ |
| 瘴氣昼熏体 | 瘴氣は昼に体に熏じ |
| 茵露夜沾衣 | 茵露 <small>もうろ</small> は夜に衣を沾す |

| | |
|-------|-----------------------------------|
| 飢猿莫下食 | 飢猿も下りて食する莫く |
| 晨禽不敢飛 | 晨禽も敢て飛ばず |
| 毒涇尚多死 | 涇に毒するすら尚お多く死す |
| 度瀘寧具腓 | 瀘を度りては寧ぞ具に腓むのみならんや |
| 生軀蹈死地 | 生軀は死地を蹈み |
| 昌志登禍機 | 昌志は禍機に登る |
| 戈船榮既薄 | 戈船は榮既に薄く |
| 伏波賞亦微 | 伏波も賞は亦た微なり |
| 爵輕君尚惜 | 爵輕きを君は尚お惜しむ |
| 士重安可希 | 士の重んぜらるるを安んぞ希う可けん ^(注3) |

「瘴氣は昼に体に熏じ、茵露は夜に衣を沾す」という部分に「瘴」が用いられている。この二句は「昼には瘴氣が身体に染みこみ、夜は毒草の露が衣を沾す」という意味であり、身体に有害な氣として「瘴」が用いられている。

「赤阪」は焼きつけるほどに熱い坂のことをいう。「南威」は南方の暑く厳しい気候をいう。この作品は、『文選』（巻28「苦熱行」注）や『樂府詩集』（巻65注）に引く曹植「苦熱行」を踏まえたものと思われる。佚文には「行遊到日南、經歷交阯郷。苦熱但曝露、越夷水中蔵」とあるように、南方の酷暑を詠ったものである。

同時期にもう一例、用例がある。呉邁遠「權歌行」に「瘴」の字が用いられている。

| | |
|-------|--------------------------|
| 權歌行 | 吳邁遠 |
| 十三為漢使 | 十三にして 漢使と為り |
| 孤劍出皋蘭 | 孤劍もて 皋蘭に出ず |
| 西南窮天險 | 西南 天險を窮め |
| 東北畢地関 | 東北 地関を畢す |
| 岷山高以峻 | 岷山 高く以て峻なり |
| 燕水清且寒 | 燕水 清く且つ寒し |
| 一去千里孤 | 一たび去りて 千里孤なり |
| 辺馬何時還 | 辺馬 何れの時にか還らん |
| 遥望煙嶂外 | 遥かに望む 煙嶂の外 |
| 瘴氣鬱雲端 | 瘴氣 雲端に鬱なり |
| 始知身死処 | 始めて知る 身の死する処 |
| 平生從此残 | 平生 此より残す ^(注4) |

ここで注目しておきたいのは、この用例の場合、必ずしも南方の厳しい気候を詠んだわけではない、という点である。第2句の「皋蘭」は今の甘肅省蘭州市の南にあり、第

五句の「岷山」は今の四川省西北部の山であり、いずれも南方にあるわけではない。この詩全体を通覧しても、南方において酷暑に苦しむ部分を読み取ることができない。「瘴」が詩の用例の最初期において、必ずしも南方の酷暑・湿潤の風土を指すわけではなかった、という事実は注意しておくべきであろう。

唐以前の詩には、この2首以外に次のものがある。

隋・孫万寿「遠戍江南寄京邑親友」

賈誼長沙国、屈平湘水濱。江南瘴癘地、從來多逐臣。……

隋・王胄「臥疾閩越述浄名意詩」

客行万余里、眇然滄海上。五嶺常炎鬱、百越多山瘴。……^(注5)

この2首についていうと、「瘴」の字に関してなされる一般的な解釈がここで合致している。つまり、「江南瘴癘地」や「五嶺常炎鬱、百越多山瘴」というように、長江以南の南方の地について述べられている。

4、唐代の用例

a 初唐

『全唐詩』の用例を、巻数順に分けて考えることにする。便宜上、初唐を巻115まで、盛唐を巻235まで、中唐を巻509まで、晩唐を巻900までとする。必ずしも実態に即した分け方であるとは言えないが、おおよその傾向はこれによって見て取れると思われる。

まず、初唐の用例は22例である^(注6)。そのうち、宋之問が6首、沈佺期が5首である。この時期に、「瘴」の字を含む著名な作品がそろって出てきていることは興味深い。

題大庾嶺北駅 宋之問

| | |
|-------|---------------|
| 陽月南飛雁 | 陽月 南飛の雁 |
| 伝聞至此回 | 伝え聞く 此に至って回ると |
| 我行殊未已 | 我が行 殊に未だ已まず |
| 何日復帰来 | 何れの日か復た帰来せん |
| 江静潮初落 | 江静かにして 潮初めて落ち |
| 林昏瘴不開 | 林昏くして 瘴開かず |
| 明朝望郷処 | 明朝 郷を望む処 |
| 応見隴頭梅 | 応に隴頭の梅を見るべし |

至端州駅、見杜五審言・沈三侘期・閻五朝隱・王二無競題壁、慨然成詠 宋之間

逐臣北地承巖譴 逐臣 北地に^{げんけん}巖譴を承け
調到南中每相見 調せられて南中に到れば 毎に相い見んとす
豈意南中岐路多 豈に^{おも}意わんや 南中 岐路多く
千山万水分郷県 千山万水 郷県を分かつとは
雲揺雨散各翻飛 雲揺^{うご}き雨散じて各の翻飛し
海闊天長音信稀 海闊く天長くして音信稀なり
処処山川同瘴癘 処処の山川 同じく瘴癘
自憐能得幾人帰 自ら憐れむ 能く幾人か帰るを得ん

遥同杜員外審言過嶺 沈侘期

天長地闊嶺頭分 天長く地闊くして嶺頭に分かつ
去国離家見白雲 国を去り家を離れて白雲を見る
洛浦風光何所似 洛浦の風光 何の似たる所ぞ
崇山瘴癘不堪聞 崇山^{すうざん}の瘴癘 聞くに堪えず
南浮漲海人何処 南のかた漲海に浮かんで 人 何れの処ぞ
北望衡陽雁幾群 北のかた衡陽を望んで 雁^{いくむれ} 幾群ぞ
兩地江山万余里 兩地の江山 万余里
何時重謁聖明君 何れの時にか 重ねて聖明の君に謁せん

端州別高六戩 張説

異壤同羈竄 異壤 羈竄^{きざん}を同じくし
途中喜共過 途中 共に過ごすを喜ぶ
愁多時拳酒 愁多くして 時に酒を拳げ
勞罷或長歌 勞罷^やんで 或いは歌を長くす
南海風潮壯 南海 風潮壯^{さかん}にして
西江瘴癘多 西江 瘴癘多し
於焉復分手 焉^{ここ}に於いて 復た手を分かつ
此別傷如何 此の別れ 傷ましきこと 如何せん

ここで注意しておきたいのは、宋之間・沈侘期・張説がいずれも北方出身の詩人で、政争に敗れて南方に左遷された経験を持つということである。右にあげた作品は、その経験を反映させたものである。その一方で、張九齡は広東出身で、例外的存在である。自分の郷土、もしくはそれに近い風土を「瘴」の字を用いて表現していることも併せて興味が惹かれる。

なお、これ以外にも、辛常伯、もしくは駱賓王の作品と見なされる作品が一首ある。(注7)

b 盛唐

盛唐の用例は37例を数える^(注8)。そのうちの22首を杜甫が占めている。残存する詩数を考慮に入れても、杜甫の用例の多さはこの時期の大きな特徴をなしている。^(注9)それ以外の詩人は、劉長卿が5首^(注10)、高適が3首、孟浩然が2首である。

杜甫の用例のうち、最も著名なものは、次の「夢李白」であろう。

夢李白二首 其の一 杜甫

| | | |
|-------|---------------|--------|
| 死別已呑声 | 死別 | 已に声を呑み |
| 生別常惻惻 | 生別 | 常に惻惻たり |
| 江南瘴癘地 | 江南 | 瘴癘の地 |
| 逐客無消息 | 逐客 | 消息無し |
| 故人入我夢 | 故人 | 我が夢に入り |
| 明我長相憶 | 我が長く相い憶うを明かにす | |
| 恐非平生魂 | 恐らくは平生の魂に非ざらん | |
| 路遠不可測 | 路遠くして測る可からず | |

盛唐期の用例の特徴は、先にも述べたように、杜甫の使用例がぬきんでて多い、という点である。そして、盛唐の詩はこれまでの用例を忠実に受け継いでいる、という点も特徴としてあげられよう。初唐期までに見られた用例「瘴癘」「瘴江」「秋瘴」「瘴氣」などが盛唐期の用例の中に数多く見出せる。盛唐期になって新たに見出せる新しい用例としては、「炎瘴」「瘴毒」「瘴雲」などがあり、「瘴」を含む用例の拡大が広まりつつある。

c 中唐

中唐期の用例は141例である。中唐期にこの「瘴」の字の使用が詩において拡大したことがわかる。141例のうち、白居易が31首^(注11)、元稹が29首^(注12)、韓愈が9首、柳宗元が7首、張籍・盧綸・李紳^(注13)が6首となっている。^(注14)

この時期にも、「瘴」の字が用いられた著名な作品がいくつかある。

新樂府 新豊折臂翁 戒辺功也 白居易

(前略)

| | |
|---------|------------------|
| 点得驅將何処去 | 点し得て驅り將て何れの処にか去く |
| 五月万里雲南行 | 五月 万里 雲南に行く |
| 聞道雲南有瀘水 | 聞道く 雲南に瀘水有りと |
| 椒花落時瘴煙起 | 椒花 落つる時 瘴煙起こる |
| 大軍徒涉水如湯 | 大軍 徒渉するに 水 湯の如く |
| 未過十人二三死 | 未だ過ぎざるに 十人に二三は死す |

(後略)

左遷至藍関示姪孫湘 韓愈

一封朝奏九重天 一封 朝に奏す 九重の天
夕貶潮州路八千 夕べに潮州に貶せらる 路八千
欲為聖朝除弊事 聖朝の為に弊事を除かんと欲す
肯将衰朽惜残年 肯て衰朽を将て残年を惜しまんや
雲横秦嶺家何在 雲は秦嶺に横たわり 家何くにか在る
雪擁藍関馬不前 雪は藍関を擁して 馬前まず
知汝遠来応有意 知る 汝が遠く来る 応に意有るべし
好收吾骨瘴江辺 好く吾が骨を收めよ 瘴江の辺

夜坐 元稹

雨滯更愁南瘴毒 雨滯りて更に愁う 南瘴の毒
月明兼喜北風涼 月明かにして兼ねて喜ぶ 北風の涼
古城楼影横空館 古城の楼影 空館に横わり
湿地虫声遶暗廊 湿地の虫声 暗廊を遶る

(後略)

「瘴」字に関する、この時期の特徴的な点は、表現の拡大である。中唐以前では「瘴」が単独で用いられるほか、比較的少数の用例を検出するにとどまったが、中唐以降になるとこれまでなかった用例が拡大してくる。盛唐ころまでは、「瘴癘」「瘴氣」「秋瘴」などが用例の多くを占めていたが、中唐期になるとこれまで目にしてこなかった用例を検出できる。たとえば、「瘴雨」「瘴霧」「瘴海」「瘴煙」「瘴色」「瘴痾」「瘴水」などを新たな用例としてあげることができる。

このころから「瘴」の字が詩語として強く意識され、中唐期の詩人たちによって様々な組み合わせられて詩の中に取り込まれていったのであろう。これは、詩人たちの南方生活が増えたことが要因の一つと考えられる。中唐期になって、科挙を通じて詩人たちが中央官界に入ることが増えた。しかし、そういった新興士大夫階層の台頭を拒む勢力もいて、ほとんどの詩人が左遷を経験する。結果的に、詩人たちは南方の風土や事物を直接経験した。その経験を中唐期以降の詩人たちは詩の中に取り込んでいったのであろう。

d 晩唐

中唐期までは「瘴」を含む詩を10首以上詠んだり、もしくは著名な作品を残した詩人はいたが、晩唐期にはその傾向が薄くなる。晩唐の用例中、最も作品が多いのは鄭谷と齊己の7首であり、次いで許渾・貫休の5首である。

晩唐の用例は93例^(注15)であり、中唐の141例に比べて、絶対数において少ない。詩全体の相対的な割合から言えば、中唐詩がほぼ15000首、晩唐詩が暫定的な数字としてほぼ20000首^(注16)であるとすると、晩唐詩の「瘴」を含む詩の割合は中唐期の約50%にすぎない。この点は、唐代の詩人の南方意識を考える点で興味深い。

将之瀘郡、旅次遂州、遇裴晤員外謫居於此、話旧淒涼、因寄二首（其一） 鄭谷

| | |
|---------|----------------------------------|
| 誰解登高問上玄 | 誰か解く 高きに登りて上玄に問わん |
| 謫仙何事謫詩仙 | 謫仙（官？） 何事ぞ詩仙を謫せると |
| 雲遮列宿離華省 | 雲は列宿を遮りて華省を離れ |
| 樹蔭澄江入野船 | 樹は澄江を蔭 <small>おほ</small> いて野船に入る |
| 黃鳥晚啼愁瘴雨 | 黃鳥 晩に啼き 瘴雨を愁い |
| 青梅早落中蠻煙 | 青梅 早に落ち 蠻煙 <small>あ</small> に中たる |
| 不知幾首南行曲 | 知らず 幾首の南行の曲 |
| 留与巴兒万古伝 | 巴兒に留与して 万古に伝わらん |

送歐陽袞歸閩中 項斯

| | |
|-------|---------------------------------|
| 秦城幾年住 | 秦城 幾年か住む |
| 猶著故郷衣 | 猶お著す 故郷の衣 |
| 失意時相識 | 意を失いし時 相い識り |
| 成名後独帰 | 名を成して後 独り帰る |
| 海秋蛮樹黒 | 海秋 蛮樹黒く |
| 嶺夜瘴禽飛 | 嶺夜 瘴禽飛ぶ |
| 為学心難満 | 学を為すも 心 満ち難く |
| 知君更掩扉 | 知る 君 更に扉 <small>とぎ</small> を掩すを |

などが知られるが、用例の減少とともに著名な作品も少ない。これはどうしてであろうか。晩唐期においても南方での生活を経験した詩人は多いので、用例の減少は何らかの理由があるはずである。筆者は次の点を理由としてあげうると考えている。つまり、

- ①中唐期において詩人の南方経験が拡大したので、晩唐期では南方の風土・事物はすでに珍しいものではなくなっていた、
- ②南方で実際に生活することにより、南方の風土の実態を知り、「南州水土温暑、加有瘴氣、致死亡者十必四五」（『後漢書』南蛮伝）などという現実とは乖離した意味で「瘴」を使いづらくなった、

という点である。中唐期にまでしばしば見られた、「瘴」が死を含意する意味の用例^(注17)が晩唐期ではあまり見られないことはその傍証となろう。^(注18)

なお、「瘴」の持つ詩的イメージにおいて、この晩唐期に特に変化が現われている。これについては、次章で述べたい。

5、結 び

「瘴」の使用例をみていくと、いくつかの興味深い点が指摘される。

たとえば、「瘴」と季節の問題である。暑さと関わる語であるから、「夏瘴」の用例があってもおかしくはないが、実際には「夏瘴」は『全唐詩』には検出できなかった。その一方で、秋と「瘴」の関わりが強い。「秋瘴」の用例は『全唐詩』に6例ある。北方では秋になると暑さも和らぐが、南方では残暑が厳しいので、北方の人にとっては「秋瘴」こそが特に耐え難い気候と感じられたのであろうか。なお、それ以外の季節と組み合わせたものは「春瘴」が1例（白居易）あるだけである。また、『全唐詩』には「冬瘴」はない。

次に指摘すべき点は、「瘴」と土地の関係である。よく知られるように、「瘴」は嶺南、四川や江南の地においてもしばしば使われている。しかし、それだけではない。次の詩のように、北方の地についても使われる。（第3章に挙げた南朝・宋の「權歌行」[吳邁遠]も同じ）

| | |
|---------|---------------------------------|
| 出塞作 | 武元衡 |
| 夙駕逾人境 | 夙に駕して人境を逾え |
| 長驅出塞垣 | 長驅して塞垣を出ず |
| 辺風引去騎 | 辺風 去騎を引き |
| 胡沙払征轅 | 胡沙 征轅を払う |
| 奏笳山月白 | 笳を奏でて 山月白く |
| 結陣瘴雲昏 | 陣を結びて 瘴雲昏し |
| 雖云風景異華夏 | 風景 華夏と異なると云うと雖ども |
| 亦喜地理通樓煩 | 亦た喜ぶ 地理 樓煩に通ずるを |
| 白羽矢飛先火炮 | 白羽の矢飛ぶこと 火炮に先んじ |
| 黄金甲耀奪朝暉 | 黄金の甲耀くこと 朝暉を奪う |
| 要須灑掃龍沙浄 | 要 ^{かなら} ず須らく 龍沙を灑掃して浄め |
| 帰謁明光一報恩 | 帰りて明光に謁して一に恩に報ゆべし |

「出塞作」の詩題によっても、これが南方での作品ではないことが分かる。また、「樓煩」は古代北方の部族名であり、「龍沙」は広く塞外漠北辺塞の地を指す。作者の武元衡は中唐期の詩人である。中唐期においても、南朝・宋と同じく、北方の地の風土においても、「瘴」を用いていたことが確認できる。以上のように、「瘴」は必ずしも「南方特有の風土病」「高温多湿の熱帯・亜熱帯地方にみられる悪気」とは限らないのである。

次に注意すべき点は、「瘴」に込められた意味である。「瘴」が本来持っていた、「高温多湿の熱帯・亜熱帯地方にみられる悪気」という厳しい気候そのものに焦点を当てた意味ではなく、そのような風土を持った南方の土地という意味を「瘴」に込めた用例が増えてくる。「瘴」が本来持っていた自然現象への関心が薄れ、土地に重点があり、そういう風土の南方という意味で使われるのである。たとえば、先に挙げた項斯「送欧陽袞歸閩中」を再度見てみよう。

海秋蛮樹黒　海秋　蛮樹黒く
嶺夜瘴禽飛　嶺夜　瘴禽飛ぶ

この詩の「瘴」は「蛮」と対を成しており、「高温多湿の熱帯・亜熱帯地方にみられる悪気」という意味は後退し、その風土を意識しつつも中心義としては土地そのものに重点が移っていると見てよいだろう。「瘴禽」は「南国の鳥」という程度の意味であろう。

このような用例は、中唐以降になって見られるものである。中唐では、張籍「送蛮客」詩の「柳葉瘴雲湿、桂叢蛮鳥声」や殷堯藩「九日」詩の「瘴雨蛮煙朝暮景、平蕪野草古今愁」、袁不約「送人至嶺南」詩の「瘴煙迷月色、巴路傍溪声」がそれに当たるだろう。賈島「黃子陂上韓吏部」詩の「涕流聞度瘴、病起喜還秦」は「瘴」と「秦」が対を成している。晩唐にもその用例を挙げることができる。先に挙げた項斯や鄭谷の詩は、「蛮」と「瘴」が対になっている。また、許渾「送從兄別駕歸蜀」詩の「家留秦塞曲、官謫瘴溪湄」や曹松「送陳樵校書歸泉州」詩の「閑遙秦雁斷、家近瘴雲低」は「秦」と「瘴」が対になっているほか、貫休「送劉逖赴閩辟」詩の「路入閩山熟、江浮瘴雨肥」は「瘴」が「閩」と対になった例である。いずれの例も、「高温多湿の熱帯・亜熱帯地方にみられる悪気」という気候・風土そのものよりも、その字義を踏まえつつ、そういった風土を持った南方の土地という意味で使われていると思われる。

また、中唐期以降、「瘴海」という語が現われる。『漢語大詞典』で「指南方海域」（傍点は引用者）とし、晩唐の翁綬「行路難」詩の「双輪晚上銅梁雪、一葉春浮瘴海波」を引く^(注19)。ここからも、「瘴」字に含まれていた「悪気」「風土病」などの字義の希薄化を見ることができよう。

さらに、鄭谷「荔枝樹」では、以下のように言う。

二京曾見画図中　二京にて曾て見る　画図の中
数本芳菲色不同　数本芳菲として　色同からず
孤櫂今来巴徼外　孤櫂もて今来たる　巴徼の外
一枝煙雨思無窮　一枝　煙雨　思い無窮
夜郎城近含香瘴　夜郎の城近くして香瘴を含み

杜宇巢低起暝風　杜宇の巢低くして暝風起こる
腸断渝瀘霜霰薄　腸断す　渝瀘　霜霰薄くして
不教葉似灞陵紅　葉をして灞陵の紅に似たらしめざるを

ここにいう「瘴」も「風土病」や「悪気」といった伝統的な字義も薄れて、好ましい「香瘴」として扱っており、ここでは「瘴」が南方の空気という程度の意味で用いられている。

中国古典詩人が抱いていた南方に対する意識の変遷を、以上のように「瘴」の字から推測できるように思われる。

【注】

(1) 第3章に挙げるように、初期の用例に、南朝・宋の吳邁遠「櫂歌行」がある。ここでは、北方の風土を描く場面で「瘴」が用いられており、「瘴」字に南方限定の意味がこの時期にあったとは断定できないだろう。初期の用例では、たとえば「瘴氣」を「障氣」と表記されることもあり、それならば、「身体に障る氣候」という一般的な意味としてとらえることもできる。南方のことを専ら指すようになったのは後の転義である可能性を否定できない。

なお、加藤常賢『漢字の起源』（角川書店、1970年）、藤堂明保『漢字語源辞典』（学燈社、1965年）には、「瘴」を取り上げない。

(2) この「障」の字がどのような過程を経て生まれたのかを考える上で、本稿で扱う意味での「障」の使用例を考えることは有益なことである。後漢以前の文献には管見の範囲では検出できなかったが、詳細な検討を今後に期したい。

(3) 「瘴」の字、李善本『文選』などでは「鄣」に、四部叢刊本は「障」に作り、『樂府詩集』は「瘴」に作る。また、六臣本『文選』では、「五臣作「瘴」」という。

(4) 「瘴」の字、四部備要本『樂府詩集』・『古樂苑』、「障」に作る。ただし、中華書局本『樂府詩集』（中国古典文学基本叢書）は「瘴」に作る。『先秦漢魏晉南北朝詩』は「障」に作り、「万曆本『詩紀』作「瘴」」という。

(5) なお、この2首は「瘴」の字に異同が検出できなかった。この点から、南朝・宋の頃には「瘴」の字がまだ定着しておらず、「瘴」で書かれたり「障」で書かれたりしたが、「南方特有の風土病」「高温多湿の熱帯・亜熱帯地方にみられる悪気」という意味では「瘴」の字を当てることが隋代のころにはほとんど定着していた、と考えられよう。

(6) 『全唐詩』（巻806）の寒山の用例を、初唐に入れた。

(7) 『全唐詩重出誤収考』（唐詩研究集成、陝西人民教育出版社、佟培基編、1996年、46頁）は、「按唐人唱和之例、此詩當為辛常伯作、附于駱集中、遂訛為駱作」といい、辛常伯の作とする。ただし、『唐詩大辞典』（周勛初主編、江蘇古籍出版社、1990年、233頁）では、「作辛常伯恐誤」（陳尚君執筆）とする。なお、辛常伯の事跡は不詳だが、『全唐詩重出誤収考』では、「此辛（心）常伯、疑為太常伯或少常伯之誤、乃官職名。」といい、「辛常伯」という名前に疑問を提出している。

(8) 盛唐詩の用例数に、『全唐詩』（巻732）に収める高力士の断句「煙燠眼落膜、瘴染面朱虞」を算入した。

(9) 同時期の詩人李白に1例も見いだせないことを考えると、杜甫に22例もの用例があることは、

2人の詩風の相違について考える際に興味深い視点を提供しているように思われる。たとえば『苕溪漁隱叢話』（前集卷24）所引『桐江詩話』で「杜甫一生愁」と言うように、自分のまわりの事物・事象の悲哀・苦悩を一身に受け止めているようである。一方、李白は、「李白の自己肯定的な放縦性・楽天性が、いかに本質的なものであったか」（松浦友久『李白伝記論—客寓の詩想—』研文出版、1994年、322頁）とあるように、物事を否定的に捉えることが相対的に少なく、むしろ樂觀的に捉えることが多かった。2人のそういった詩風の差を考えると、両者の「瘴」の使用度の違いについては首肯できる。風土に対する李白と杜甫の意識の差異については、別稿で論じたい。

- (10) ただし、劉長卿「貶南巴至鄱陽、題李嘉祐江亭」詩の「地遠明君棄」の句が、『全唐詩』で「一作瘴近余生怯」とされているものを含んでいる。近年の校本『劉長卿詩編年箋注』（儲仲君、中華書局、1996年）、『劉長卿集編年校注』（楊世明校注、人民文学出版社、1999年）は、いずれも「地遠明君棄」をとる。
- (11) 白居易詩の「得微之到官後書、備知通州之事、悵然有感、因成四韻」の二箇所に「瘴」が用いられている。これについては2例とした。
- (12) 「思婦樂」「遣病十首」「酬樂天東南行詩一百韻」は各詩、2箇所において「瘴」が用いられている。これについても、それぞれ2例とした。
- (13) 李紳の「趨翰苑遭誣構四十六韻」、「逾嶺嶠止荒陬抵高要」は、各詩2箇所に「瘴」を用いている。これについてもそれぞれ2例とした。
- (14) 賈島「寄韓湘」詩の「過嶺行多少、潮州漲滿川」で、『全唐詩』が「漲」の字に「一作瘴」としたのも、1例として数えた。
- (15) 『全唐詩』（巻525）に収められた「杜牧「蛮中醉」」は、注7所掲『全唐詩重出誤収考』（322頁）に従い、張籍作品（「蛮州」）と見なして除外した。また、『全唐詩』巻554と巻555に項斯と馬戴の作品として、ほぼ同じ詩が掲載されている。これについては1首とみなした。なお、注7所掲『全唐詩重出誤収考』（427頁）は「此篇作者究竟屬誰尚難断定」とする。
- (16) このデータについては、『唐代の詩篇』（唐代研究のしおり、平岡武夫ほか編、同朋舎出版、1977年）によって大まかな推測を立てた。つまり、盛唐期を『全唐詩』巻235までとした場合、その最後の詩の番号が『唐代の詩篇』で11994番と付けられている。また、中唐期が『全唐詩』巻509までとした場合、その最後の詩に27129番が付けられている。さらに、『全唐詩』最後の作品の番号が49403番である。したがって、中唐期の詩数はおよそ15000首、巻510以降の詩数はおよそ22000首と判断した。ただし、この22000首という数字がそのまま晩唐の詩数を正確に反映したものではないことは言うまでもない。『全唐詩』の巻767の孫元晏以降の詩人は『全唐詩』編纂時は伝記が未詳であったために「以下無考」とされており必ずしも年代順に並んでいないこと、聯句・無名氏や名媛・僧道・仙神・鬼怪などは更にその後に配列されていること、などを理由として、巻767以降の作品は本来、そのままでは晩唐期に算入することはできない。しかしながら、巻767以降の「瘴」の用例24例を検討してみると、齊己や貫休など17例が晩唐以降の作品である。（初唐期のものが1例、中唐期のものが5例である。）ここから考えると、『全唐詩』巻767以降の作品には数多くの晩唐期の作品が含まれていると判断されよう。『全唐詩』において、詩人を年代順に並べた最後の巻である巻766最後の作品の番号は42452番であるから、その作品までの作品数は15000首となる。よって『全唐詩』の含まれる晩唐詩の数は、15000首から

22000首の間であり、その中でもやや22000首寄りの数であると思われる。

- (17) たとえば、初唐・宋之問「至端州駅、見杜五審言・沈三佺期・閻五朝隱・王二無競題壁、慨然成詠」、盛唐・杜甫「又上後園山脚」、中唐・韓愈「左遷至藍關示姪孫湘」などがそれに当たる。
- (18) 一例を挙げれば、「瘴癘」（「感受瘴氣而生的疾病。亦泛指惡性瘡疾等病」（『漢語大詞典』漢語大詞典出版社、1991年、卷8）、「高温多湿の熱帯・亜熱帯地区に蔓延する悪気」（松浦友久編『続 校注 唐詩解釈辞典〔附〕歴代詩』大修館書店、2001年、231頁、植木久行執筆）の語はすでに隋代に見え、古くから詩語となっているが、唐代では初唐に10例、盛唐に11例を数えるものの、中唐は5例、晩唐は3例となっている。残存する詩数から考えると、「瘴癘」の用例頻度はかなり低くなっていると言えるだろう。このことは、「瘴」が字義としてもつ、悪性の疾病、もしくは身体に有害な風土という意味が中唐期以降に薄れていったとする指標の一つと言えるだろう。
- (19) 漢語大詞典出版社、1991年、卷8。ただし、「指南方有瘴氣之地」という項も立て、中唐・盧綸の「夜中得循州趙司馬侍郎書、因寄回使」詩を挙げる。

景観形成における詩跡の位相

——中国江南の古城鎮江の場合——

李 梁

はじめに

—詩跡研究の可能性をめぐって—

詩跡とは、和歌や俳諧の歌枕・俳枕から触発されて、これまで、主として松浦友久、植木久行、松尾幸忠および寺尾剛など中国古典文学、とりわけ唐詩研究者の研究・提唱によって、漸次学界で認知され、定着しつつある新しい詩学概念である。植木久行は、「中国歴代の地理総誌に見る詩跡の著録とその展開」（本科研報告書所収）において、詩跡の概念内容を次のように定義する。すなわち、詩跡とは、「歴代の詩人たちに詠みつがれて著名になり、詩歌の新しい創造に点火して表現の核となりうる力をたたえた地名（古典詩語）。詩歌との緊密な一体感（詩歌によって生み出された独特の連想作用—特定の景物・情緒・発想・テーマ・語彙など）を伴って認識・理解される場所（宮殿・高楼・橋・亭・関所・祠廟・旧宅・墳墓・寺院などを含む）で、単なる名勝古跡とは異なる、詩歌を主体とした概念」である、と。あえて驥尾に附して敷衍すれば、詩跡の成立には、2つの前提条件が必要であろう。つまり、1つは、代々詠み継がれてきた名詩であること、そしてもう1つは、単なる名勝古跡とは異なる、いわば詩歌との緊密な一体感をもつ場所、というのがそれである。たとえば、李白の「静夜思」や杜甫の「春望」の如く、それこそ、人口に膾炙する名篇ではあるが、上述したような場所を想起させる詩句がないため、詩跡としては成り立たないのである。これに対し、張継の名篇「楓橋夜泊」を読むと、どんなに遠く離れていても、直ちに「寒山寺」という特定の場所や建築物に思いを馳せ、恰も船の中まで伝わってきた夜半の鐘声が聞こえてきそうな詩情豊かな想念に駆られてしまうのである。詩跡が、すなわちこれによってはじめて成立するといえる。

一方、周知のように、景観とは、かつて植物学者の三好学（1861～1939）がドイツ語のラントシャフト（Landschaft）に与えた訳語である。そもそも19世紀末頃からの用語としてのラントシャフト＝景観自体には、ほぼ同時期に隆盛をみせた地域主義や郷土学（Heimatkunde）の意味合いも含まれており、その中にはすでに視覚的意味と地域的意味の並立が認められる。それは、ラントシャフトが古くから持っていた地域という意味に、ルネサンス期に絵画的意味が付加され、それが人間の視覚に映る形態すなわち相観という意味に発展したことに由来する、と考えられている。この意味で、いわゆる景観美、景観条例という使い方のように、景観も風景と同じ意味合いをもつ概念であると見なし

てよいが、景観がより客観的で中立的な意味や価値をもつものに対し、風景は、その主観性、人文学的意味あいを色濃く有するといえよう^(注1)

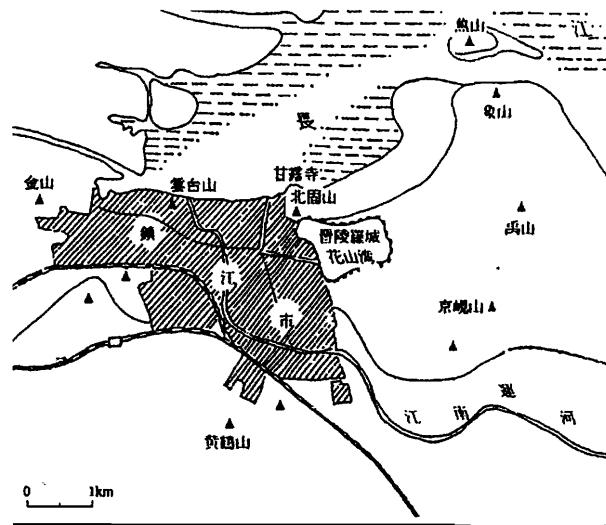
そもそも洋の東西を問わず、古くから絵画論をはじめ様々な風景論が存在している。たとえば、中国の場合、宋代に選定された瀟湘八景や西湖十景などのように、美しい風景を詩文や山水画に表現する伝統がある。これにならって日本でも、日本三景とか近江八景（16世紀の初め頃）を先例として、各時代にさまざまな景勝地の風景セットが賞揚されてきた。しかし、風景—最初の用例は5世紀前半の『世説新語』に見えるが—も景観も、領域横断の学問的概念として成立したのは、早くも早期近代のことである。ヨアヒム・リッターによれば、風景とは「感情と感覚をもって観照する者に対して、眺望の内で美的に現前するような自然のことである。（中略）人間が自らも自然の中にあろうとして、いかなる実用上の目的ももたずに、「自由」に享受しつつ観るという姿勢をとって向かい合う時に、初めて、それらのものが風景になる」^(注2) のである。いわば、「風景の雄大な眺めが心情に及ぼすいっそう深い作用がゆるぎなく証拠立てられたのは、ダンテからである」^(注3) と喝破されたように、風景美を知覚するような心性や自立的形成が古代または中世に明らかに存在しなかったのである。

ちなみに、日本における近代風景の成立（発見）は、やはり志賀重昂（1863～1927）の『日本風景論』（明治27年）からであると考えられている。しかし、ここ二十年来、上述の志賀著書を皮切りに盛り上がっていた20世紀初期の風景論争を大いに凌ぐ勢いと規模で、歴史地理学、農学、建築学、都市工学、歴史学、民俗学、文化人類学、観光学、環境学、心理学ないし法学といった様々な領域からの風景論、景観論が盛んに行われている。「風景という把握もまた、アジア研究、ここでは中国研究における、きわめて斬新な手法である」^(注4) という主張も現れたように、風景論や景観論を手掛かりに、特定領域の研究に用いるという手法がよくみられるようになったのである。

本稿は、そうした詩跡と景観との相関性、とりわけ詩跡が歴史的景観の再発見、復原、再建における役割とその可能性をめぐって、予備的な考察を行うものである。とはいえ、本稿のこうした試みは、あくまでも試論的なものである。成功か否かは別にして、この試み自体はむしろ有益なものであると信じたい。とくに、2004年2月10日に閣議決定された「景観法案」のように、今後、景観学は益々国または地方の行政と密接な関連性をもつ社会的・政治的な営為にも繋がるものである。この見地からみても、景観学には、理論的な側面と実践的な側面の両面が必要となろう。2005年の夏、同科研の研究会で行った「文化景観としての詩跡」と題する拙い報告は、その理論的な側面を敷衍しようとした試みである。

一、鎮江と詩跡

鎮江は、中国江蘇省の西南部、長江下流南岸に位置し、長江と京杭大運河とが交差する地点にあり、その北は長江を隔てて揚州と相望み、西南は南京、東南は常州、そして



鎮江市付近図 (劉建國『晉陵羅城初探』より)

図1

南は金壇と接する水陸交通の要地である (図1参照)。

清の顧祖禹撰『讀史方輿紀要』巻25・江南7に、鎮江は古く「禹貢の揚州の域、春秋の時、呉の地、後に越に属す。戦国は楚に属し、秦は会稽郡の地と為る。漢は之に因りて、後漢は呉郡に属す。三国の呉は京口鎮と曰う。……京口は常に重鎮^た為り。隋は陳を平らげ、州郡俱に廃して延陵県と為る。開皇十五年、潤州を置く……天宝の初めは丹陽と曰う。……宋は仍^なお潤州と曰う。……元は鎮江路と曰い、明初は江淮府と曰い、尋^ついで鎮江府と曰い、京師に直隸し、県を領すること三。今仍^なお鎮江府と曰う」とある。いわば、二千年も前から京口、潤州、丹陽などと呼ばれてきた古城名鎮である。そして、その地理的位置について、上述の史料は続けて、「府内は江湖を控え、北は淮泗^{ふせ}に拒^げぐ。山川形勝、昔より用武の処なり。杜佑曰く、『京口は山に因りて壘と為し、江に縁^よりて境と為す。建業の京口有るは、猶^なお洛陽の孟津有るがごとし』」とある。

すなわち、鎮江は「三面には山を負い、その地勢譬^{たと}えば我が国の鎌倉にも譬^{たと}うべく、いわゆる全呉の門戸にて形勝の地たるを失わず、京口一日その守を失わずんば、呉中枕を高くすることができる」^(注5)ともいわれるように、古来難攻不落の地勢を以て、歴代の権力者から駐守の軍事的要地とされてきたのである。

他方、海洋性気候の影響によって、鎮江は温暖湿潤、年平均気温は15.4℃、平均降雨量は1000ミリ以上、南京や蘇州よりも気候に恵まれている。それだけに、鎮江はまた古くから風光明媚な江南名城として人々から親しまれている。域内には著名な「京口三山」(金山、北固山、焦山)(図2参照)のような美しい自然景観がある一方、葛洪(284～364)、祖沖之(429～500)、陶弘景(456～536)、劉勰(465?～532?)、沈括(1031～1095)、賽珍珠(パール・バック、1892～1973)ゆかりの地など多くの重文建物や名人旧邸といった人文的景観にも富み、さらに様々な佛寺、道観、清真寺、也里可温教(景教つ



図 2. 京口三山図（『海内奇観』より）

まりネストリウス教の元代における称呼)の教会などが、古くからあちこちに点在している。これらは、いわば自然と人文の有形無形の景観形成において大きな役割を果たしている。それと同時に、詩跡化した景観もまた随処に見られる。

二、詩跡成立の要件と情景の一体性

周知のように、唐詩を代表とする伝統的中国古典詩（ここでは、詞も同じ範疇のものとして扱う）では、韻律・詞律などの規定以外に、いわゆる「情景交融」という表現手法が重視されている。いわば、名詩（詞）と評される作品であるほど、この情と景との融合が精緻に達成されるもの、言いかえれば有機的で自然的なものでなければならないとされる。そうした意味で、上述した詩跡の二大要件としての「名詩」と「場所」とは、こうした情景交融という技法に照応するものと見てよかろう。つまり、読み継がれて瞬時に新たな詩情を喚起させる名詩は「情」に、そして様々な景物あるいは風景、景観などを連想させる場所（自然的景観と人文的景観）は景に照応していると言えなくもない。この基準に即してみれば、詞賦も詩跡の概念の中に含まれるべきであろう。

ところで、中国文学、とりわけ古典文学において、詩歌の占める比重は、世界的にみても類例のないほど大きい、というのは歴然たる事実である。そこにはむろん、唐代以後の、「以詩取士」という制度的側面もあったが、それだけでは、やはり十全な説明にはなりえない。韻律平仄など詩歌自身の規範や作詩技巧の発達ほかに、根源的な思想的背景としては、吉川幸次郎が指摘したごとく、「非虚構の素材の尊重、言語表現の特別な尊重が、この文学史の二大特長と考えられる。二つは共に、この文明に普遍な方向である即物性によって説明されるであろう。歴史事実、日常の経験は、空想による事象よりも、より確実な存在である。表現された言語は表現される心象よりも、より確実に

把握される。この国の哲学も、ひとしく即物的であり、神、超自然への関心を抑制し、地上の人間そのものへ視線を集中したが、おなじ精神が、文学をも支配した」^(注6) からはではないかと思われる。いわば、『詩経』『楚辞』以下の中国詩歌をはじめとして、中国文学全般もそうしたすぐれてリアリスティックな思想性または心性によって色濃く規定されている。とくに唐代以降、「詩が単に刹那の感情の燃焼を歌うのみでなく、主張をもった思想を歌うこととなった」^(注7) のである。これも、また中国の史家陳寅恪（1890～1969）が『元白詩箋証稿』に示した「以詩証史」、「以史証詩」という手法による見解と通底するものとみてよかろう。要するに、詩歌と歴史が密接な関係性を有する以上、たとえ時代とともに詩風の変化—例えば唐詩の自由闊達さと宋明詩の理屈責めというように—が見られたとしても、詩歌の中国文学史上における地位は常に顕著でありうるといえよう。

2005年の夏、筆者は、植木久行教授を団長とする「中国詩跡調査団」（ほかのメンバーは岐阜大の松尾幸忠、静岡大の許山秀樹両准教授）の一員として、中国の江南地方、江蘇・安徽を中心とする詩跡の研究調査に加わった。9月3日より同12日まで、鎮江、揚州（以上、江蘇省）、滁州、和県、馬鞍山、当塗、宣城、南陵、涇県、九華山、池州、銅陵（以上、安徽省）を文字通り走り回って、詩跡の調査を行なった。

9月3日の午後、上海浦東空港到着後、真っすぐ列車で鎮江へ向かった。翌4日は、夕刻車で揚州へと移動するまで、終日鎮江の詩跡調査に費やした。われわれ一行が調査した詩跡は、主として金山（天下第一泉）、焦山（定慧寺）、北固山（甘露寺）、西津渡、京杭大運河、瓜洲古渡、丁卯橋遺跡、沈括の夢溪園である。ここでは、とりあえず鎮江をモデルケースとして、当地の詩跡状況の調査と詩文との照合を通して、詩跡研究だけでなく、詩跡と景観形成との関係について予備的な考察を行ってみたいと思う。

三、詩文と写真からみた詩跡

以下、実地調査と参考文献（16、17、18、19）を踏まえながら、調査時に撮影した写真と照らし合わせて詩跡の状況を検証してみたい。

1. 西津渡

六朝時代に始まる西津渡旧街は、市の西部にある雲台山麓に位置している。旧街の中に、六朝時代から清代に至る古跡が多く残され、西津古渡口は今まで1600年余りの歴史がある。唐代、鎮江は金陵とも呼ばれたため、金陵渡とも称せられている。今日長江が後退したため、渡口は実際に使われておらず、辛うじて残った待渡亭と上船用の石の踏み台によってしか、往時の古渡の風情を偲ばせるものがない。

図3は、西津渡街の一角にある元代の昭関石塔である。専門家の鑑定によれば、中国で唯一現存する最も古いラマ式の過街塔であるという。

詩跡として、唐代金陵渡を詠む名篇に、唐の張祜（792？～854？）の「題金陵渡」がある。

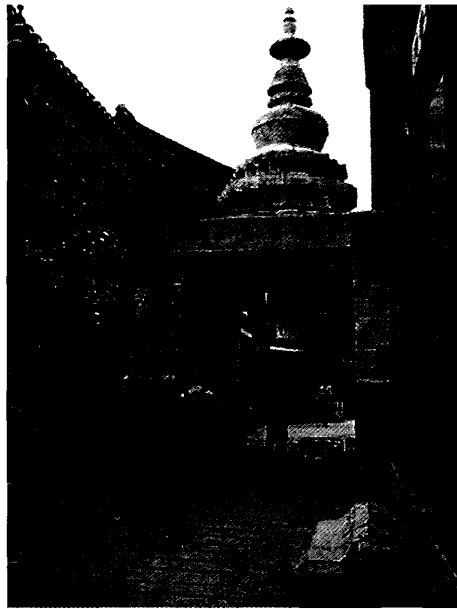


図 3. 西津渡旧街の一角にある元代の石塔

題金陵渡

唐 張祜

金陵津渡小山樓、一宿行人自可愁。
潮落夜江斜月裏、兩三星火是瓜洲。

本詩は、作者が金陵渡（西津渡）近くにある小さな二階建ての宿に泊まった時、目に映った景色に対する描写を通して、旅人の淡い旅愁と夜の静けさを表現する。静かになった夜の長江に一輪の残月が懸り、幽かにみえる二つ、三つの瞬く明かりが、遠く離れた長江対岸にある瓜洲渡であろう。恰も詩が画となったごとく、これこそ、情と景が渾然一体化して、詩跡の佳篇であるといえよう。

2. 北固山・甘露寺

北固山は、東は江中に焦山を望み、南は京口城を俯瞰し、西は遠く金山寺の塔をみ、金山、焦山と鼎峙して、鎮江の三山名勝の1つとなる。山上に甘露寺がある。甘露寺の由来には諸説があるようである（植木久行「名詩のふるさと（詩跡）」、434頁、同『唐詩の風景』、講談社学術文庫、1999年、212頁参照）が、かつて劉備がこの寺で、孫権の妹を娶って楽しみ、殆ど雄飛の志を忘れたというのは、強ち小説家流の杜撰でもないらしい。

唐の王湾（生卒年不詳）が詠んだ「次北固山下」は、この山麓にある風景である。

次北固山下（別題 江南意）

唐 王湾

客路青山外、行舟緑水前（一作 南国多新意、東行伺早天）。
潮平兩岸闊、風正一帆懸（一作 潮平兩岸失、風正一帆懸）。
海日生殘夜、江春入旧年。
郷書何処達、帰雁洛陽辺（一作 従来観氣象、惟向此中偏）。

王湾は開元期の名詩人であったが、彼の詩は殆ど散逸している。上に示したように、本詩に見える異なるバージョンの存在自体は、そうした境遇を暗示しているかのようである。「詩人以来、少有此句」（唐の殷璠『河岳英靈集』卷下）と評された「海日生残日、江春入旧年」一朝日が薄明の暁闇を破って、早くも東の海上からさしのぼり、年の暮れなのに、この長江沿いの地では、すでに春の気はい（参考文献16参照）—という名句は、時の宰相張説が自ら手書して政事堂に掲げて、詩作の手本としたほど、当時から非常に高い評価を得ていたのである。

なお、軍事要塞としての機能を備えた鎮江を詠んだ名詩の1つに、次の李白の「永王東巡歌」（第6首）がある。呉の地の関所とも言うべき北固山で防御にあたった永王の水軍の、高揚した意気込みと軍勢の壮観ぶりが生き生きと伝わってくる。

永王東巡歌（第6首）

唐 李白

丹陽北固是呉関、画出楼台雲水間。
千巖烽火連滄海、兩岸旌旗繞碧山。



図 4. 樹木の茂みに覆われている甘露寺

3. 金山・天下第一泉

金山は、かつて浮玉山とも称し、もともと海拔60メートルほどの水中の孤島であったが、江水の流れの改変により清末頃から陸続きとなった。かつては、長江の南北交通の要衝にあった。古来、西津渡から長江を渡って、金山、瓜洲をへて揚州に至る航路上では、日々様々な船が絶えなく行き交っていたのである。金山の山頂には、「江南でも屈指の巨刹」といわれる金山寺がある。金山寺は、かつて納豆、味噌を以て日本でも広く知られていた。清の乾隆中期、揚州大観堂文匯閣、杭州聖因寺文瀾閣とともに、金山寺文宗閣にも一部の『四庫全書』が所蔵されて、北方の文淵閣、文源閣、文溯閣、文津閣という「北四閣」にならって、それらが「南三閣」と称されていた。このことから、金山寺は当時の文化事業の推進にも一役を買っていたことが伺えよう。

「金山の絶唱」（元の方回『瀛奎律髓』巻1）と評された詩の1つは、前出の唐の張祐が詠んだ「題潤州金山寺」である。

題潤州金山寺

唐 張祐

一宿金山寺、超然離世群。
僧歸夜舡月、龍出曉堂雲。
樹色中流見、鐘声兩岸聞。
翻思在朝市、終日醉醺醺。

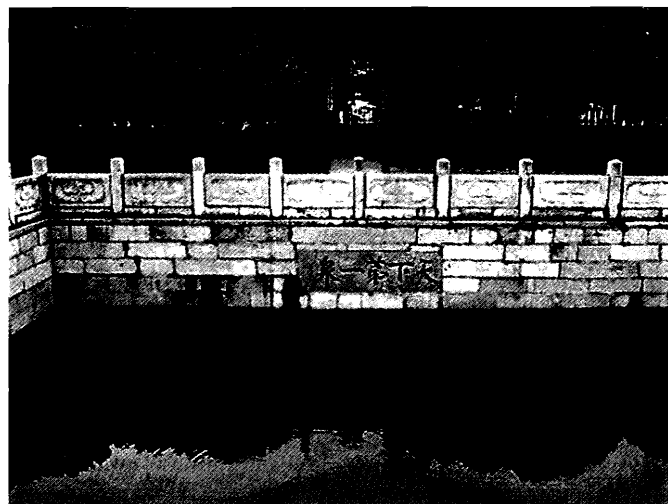


図 5. 金山天下第一泉

一方、北宋文人の蘇軾（1036～1101）も金山をこよなく愛し、それを詠んだ詩篇を数多く残している。「金山夢中作」は、その中の代表的一首である。

金山夢中作
宋 蘇 軾

江東買客木綿裘、
会散金山月満楼。
夜半潮来風又熟、
臥吹簫管到揚州。

4. 瓜洲古渡

鎮江と長江を隔てているもう1つの江南の名城揚州城は、じつは直接長江に臨んでいない。約15里(8キロ)離れたその南郊にある揚子津の地で、長江とつながっていた。だが、唐代になって、揚子津と長江との間の川底に、沙泥が堆積して出来た25里(約13キロ)におよぶ巨大な砂洲が、すなわち瓜洲である。瓜洲の詩跡化は、唐の張祜の前掲「題金陵渡」より始まるという(参考文献17、207～208頁参照)。



図 6. 瓜洲古渡

泊船瓜洲

宋 王安石

京口瓜洲一水間、
鍾山只隔数重山。
春風又緑江南岸、
明月何時照我還。

北宋の著名な政治家、文学家の王安石（1021～1086）は、熙寧8年（1075）、江寧（江蘇省南京）から都の汴京（河南省開封）に赴く際、京口から長江を渡って、瓜洲に着いた時に書いたのが、この詩である。本詩は、かつて黄庭堅から「雅麗精絶」と評された叙景詩の名篇である。とくに「春風 又 江南の岸を緑にす」という句は、名句中の名句であるといえよう。

5. 芙蓉楼

芙蓉楼とは、六朝以来、行政府が置かれた鉄甕城の城壁の上に建っていた城楼（角楼）である。現在、本来の場所とは異なる地（金山公園内）に再建されたが、詩跡の名篇としては、王昌齡の「芙蓉楼送辛漸」をまずとり上げるべきであろう。



図 7. 芙蓉楼

芙蓉楼送辛漸

唐 王昌齡

寒雨連江夜入吳、
平明送客楚山孤。
洛陽親友如相問、
一片冰心在玉壺。

非難の渦中にありながら、親友のために、夜を徹して送別の宴を開いた時の作である。芙蓉樓の詩跡化は、ひとえに「一片の冰心 玉壺に在り」という名句に負うところが大きいであろう。いわば、「逆境に生きる士人の、澄みきった孤高の精神」（参考文献14）をみごとに描き出しているのである。

四、結びと今後の課題

詩跡の研究は、中国文学の中で大きな一翼を担って詩歌の研究を深化させるだけでなく、景観の形成、とりわけ歴史的景観の復原・再建にも大きく寄与しよう。さらには観光産業の育成、とりわけ21世紀型のグリーン・ツーリズムの実現にも役立つであろう。これは、その現実的意義または社会的効果である。しかし、当該研究をより一層推進していくために、まだ多くの課題を克服せねばならない。たとえば、詩跡選定の基準は決められたものの、詩跡には、各時代の、複数の作品があるため、どの詩作を詩跡形成の基に認定すべきか、また選定された詩跡は、どのような方法で行政機関に働きかけて、景観形成や歴史的景観の復元に生かしてもらうのかは、なお未解決のままである。とくに古典詩歌をはじめとして、さまざまな人文的教養が日ごとに消え失われていく現代中国では、景観形成以前に、詩跡の研究・定着とその認知度をいかに推進し、広めていくのか、これが最初に取り組むべき課題であろう。これらは今後の課題として、更なる研究によって、実現可能または実行可能な解決策を見出していくことが要求されるのである。

【注】

- (1) 『<景観>を再考する』松原隆一郎ほか、青弓社、2004年、『風景の経験—景観の美について』J・アプトン著、菅野弘久訳、法政大学出版局、2005年、『景観生態学—生態学からの新しい景観理論とその応用』M.G.Yurner ほか著、中越信和ほか訳、文一総合出版、2004年など参照。
- (2) ヨアヒム・リッター「風景—近代社会における美的なものの機能をめぐって—」、佐藤康邦・安彦一恵編『風景の哲学』、ナカニシヤ出版、2002年所収。なお、このあたりは、八束はじめ「発明された風景—「田園」という倒錯」、同氏『思想としての日本近代建築』、岩波書店、2005年所収、竹内和「景観」『平凡社デジタル版百科大事典』など参照。
- (3) ヤーコブ・ブルクハルト「風景美の発見」、新井靖一訳『イタリア・ルネサンスの文化』筑摩書房、2007年新訳版、353頁。
- (4) 伊原弘「風景としての中国」、特集「風景としての中国」『アジア遊学』No.31、2001年9月、13頁。
- (5) 宇野哲人『清国文明記』、講談社学術文庫、2006年版、294頁。
- (6) 吉川幸次郎『中国詩史』上、筑摩書房、1965年10月初版、7頁。

(7) 同上著書、下、7頁。

【参考文献】

- 1、松原隆一郎ほか『<景観>を再考する』、青弓社、2004年。
- 2、J・アプルトン著、菅野弘久訳、『風景の経験—景観の美について』、法政大学出版局、2005年。
- 3、M.G.Yurner ほか著、中越信和ほか訳、『景観生態学—生態学からの新しい景観理論とその応用』
文一総合出版、2004年。
- 4、吉川幸次郎『中国詩史』上、下、筑摩書房、1965年10月初版。
- 5、特集「風景としての中国」『アジア遊学』No.31、2001年9月。
- 6、特集「長安の都市空間と詩人たち」『アジア遊学』No.60、2004年2月。
- 7、佐藤康邦・安彦一恵編『風景の哲学』、ナカニシヤ出版、2002年。
- 8、八束はじめ『思想としての日本近代建築』、岩波書店、2005年。
- 9、竹内和「景観」『平凡社デジタル版百科大事典』（1998年版）。
- 10、柴田陽弘編著『風景の研究』、慶応義塾大学出版会、2006年。
- 11、内藤湖南「日本風景観」、礪波護責任編集『東洋文化史』所収、中公クラシックス、2004年
- 12、宇野哲人『清国文明記』、講談社学術文庫、2006年。
- 13、桑原公徳編地籍図利用の歴史地理『歴史景観の復原』、古今書院、1992年。
- 14、顧祖禹撰『讀史方輿紀要』、中文出版社。
- 15、村上哲見『漢詩と日本人』、講談社選書、1994年。
- 16、植木久行「唐詩のふるさと（詩跡）」、松浦友久編『漢詩の事典』所収、大修館書店、1987年。
- 17、植木久行『唐詩の風景』、講談社学術文庫、1999年。
- 18、植木久行『唐詩物語—名詩誕生の虚と実と』、大修館書店、2002年。
- 19、趙玉明主編『南山詩徴』、鎮江市図書館、1997年。
- 20、傅道彬『晚唐鐘声 中国文学的原型批判』（修訂本）、北京大学出版社、2007年5月。
- 21、余定国著、姜道章訳『中国地図学史』、北京大学出版社、2006年。
- 22、呉樹南主編『江南名城鎮江』、江蘇人民出版社、2002年。
- 23、劉雨男『中国鎮江風景名勝』、南京大学出版社、2001年。
- 24、白謙慎『傳山的世界—十七世紀中国書法的嬗変』、北京三聯書店、2006年。

『浜松中納言物語』に描かれた和漢混淆的世界

——物語世界の造形と詩跡・歌枕の利用をめぐる——

伊 藤 守 幸

1

本稿で取り上げる『浜松中納言物語』（以下、適宜『浜松』と略す）は、古くは『御津の浜松』とも呼ばれており、作者が菅原孝標女（1008年～1059年以降）と想定されることから、11世紀の中葉乃至は後半に成立した作品であることが知られている。この物語の作者が孝標女と認められるのは、藤原定家（1162年～1241年）自筆写本『更級日記』（現存するすべての『更級日記』写本の祖本）の仮名奥書に記された、次の発言に基づいている。

ひたちのかみすがはらのたかすゑのむすめの日記也 母倫寧朝臣女 傳のとのゝはゝ
うへのめひ也

よはのねざめ みつのはまゝつ みづからくゆる あさくらなどは この日記の人の
つくられたるとぞ^(注1)

ここには、『更級日記』の作者が菅原孝標女であること、その人物が「傳のとの」（＝藤原道綱）の母（すなわち『蜻蛉日記』作者）の姪であること、更には彼女が物語の作者でもあることといった重要な情報が、ごく簡潔な筆致で記されている。ここに名前の挙げられた物語のうち、『みづからくゆる』と『あさくら』は散佚物語であり詳しい内容を知ることはできないが、現存する『よはのねざめ』（別称『夜の寝覚』）と『みつのはまゝつ』に関しては、それぞれの作品内容と照らし合わせる形で、奥書の信憑性を検証する作業が重ねられている。そのうち『みつのはまゝつ』については、作品の特異な主題や構成手法に関して『更級日記』との類似性が認められることから、これまでのところ定家の発言に対する格別の異議は提唱されず、この奥書がそのまま学界の定説となっている。意見が分かれたのは『よはのねざめ』であるが、それも近年では、読解の精密化とともに定家の伝承を肯定する意見が増えつつある。

奥書に記された事柄に関する知見を定家が得たのは、孝標女没後100年余りも後のことになるが^(注2)、『明月記』に見られる定家と菅原家の親しい関係から類推して、この情報はそれなりに裏付けのあるものだったと思われる（おそらくは菅原家から直接もたらされた情報であろう）。また、現存する2作品について孝標女作者説を肯定できることから推しても、奥書に挙げられた4作品に関する定家の発言は、基本的に信憑性の高いものと判断されるのである。本稿は、そうした立場から、『浜松中納言物語』の作者を菅原

孝標女と同定した上で、以下の議論を進めることにする。もちろん、先述したように、『浜松』の作者が孝標女であることについては、早くから研究者間の意見は一致していたのであるが、それでは『更級日記』の内包する豊かな情報が、『浜松』の読解のためにこれまで十分に活用されて来たかと言えば、作品分析の様々な局面で、両者の関係をめぐって考えるべき問題はなお残されているのである。本稿では、『浜松中納言物語』における「もろこし（以下、唐土と表記する）」造形の方法と『更級日記』における東海道上洛の記の表現方法を比較しながら、詩跡・歌枕の文学的利用の実態を検証してみたい^(注3)。

2

孝養のころざし深く思ひ立ちにし道なればにや、恐ろしう、はるかに思ひやりし波の上なれど、荒き波風にもあはず、思ふかたの風なむことに吹き送る心地して、もろこしの温嶺^{うむれい}といふところに、七月上の十日におはしまし着きぬ^(注4)。

『浜松中納言物語』は、このように主人公が唐土の温嶺（浙江省）に到着する場面から始まる。これがこの作品の本来の起筆部であるならば、女性作家の手に成る物語が、いきなり唐土を舞台として幕を開けることに、読者は（古代の読者と現代の読者を問わず）驚嘆させられるであろうし、同時にまた、「孝養のころざし深く思ひ立ちにし道なればにや」という書き出しが、いささか唐突な印象を与えることに、不審の念を抱かされることにもなるだろう。唐突な書き出しということ言えば、『蜻蛉日記』の序文も「かくありし時過ぎて……」といういささか落ち着いた悪い起筆部を有するが、『蜻蛉』の場合は、序文全体の読み取りにくい詰屈した文体と相まって、仮名散文成立期の悪戦苦闘の跡をとどめる表現と受け止めることもできる。しかし、『浜松』冒頭の一文は、見ての通り仮名文として極めて洗練されたものである。『竹取物語』や『土佐日記』のような漢文訓読調の硬さの残る文体と比べると、『浜松中納言物語』は、冒頭部を読むだけでも『源氏物語』以後の物語であることが直ちに了解されるだけの洗練された文体を獲得しているのである。そのような文体を身につけた作者が、「孝養のころざし」について説明することを忘れ、読者を置き去りにしたまま中納言の道行を書き進めるというのは、如何にも奇妙な話である。そして、この一文に続く場面を読み進み、そこで更に奇妙な文章に遭遇することになったとき、読者は、この起筆部の内包する問題が、作者に非のある問題ではなかったことに気づかされるのである。

そこを立ちて、杭州といふところに泊り給ふ。その泊り、入江のみづうみにて、いとおもしろきにも、石山の折の近江の海思ひ出でられて、あはれに恋しきことかぎりなし。

別れにしわがふるさとの鳩^{には}の海にかけをならべし人ぞ恋しき

場面は温嶺から杭州（浙江省）へと移るが、ここに突然登場する「石山の折」とか「鳩の海（=琵琶湖）にかけをならべし人」とは何を指すのであろうか。この筆法は、明ら

かに読者周知の事柄に触れる書き方であり（そう解釈しなければ余りにも不自然）、こうした書き方から、『浜松』の冒頭部分に重大な誤脱の存在することが知られるのである。しかも、物語を読み進めれば分かることだが、その誤脱部分の内容は、数葉の頁やエピソードの脱落といった程度で説明のつくものではなく、少なくとも1巻全体の佚亡が想定されるのである。そして、『浜松中納言物語』の江戸初期の写本（江戸時代以前の写本は未発見）がすでに首巻を欠いていることから、この散佚は、近世以前の出来事と推断されている。

ところで、如上の事柄は、今日では文学史的常識に属する事項にすぎないのだが、それを改めてこうして辿り直したのは、『浜松中納言物語』の高度な文体的洗練を確認し、あわせて、散佚部の内容を把握した上で読むときには、この起筆部が、間然するところのない巧みな構成を見せていることを確認しておきたかったからである。

佚亡首巻の内容については、現存本の内容や、『無名草子』、『物語二百番歌合』、『風葉和歌集』といった文献から、その概要を知ることができる。日本古典文学大系『浜松中納言物語』（松尾聰校注、岩波書店）や新編日本古典文学全集（池田利夫校注）には、校注者の研究成果をまとめる形で、佚亡首巻の内容が詳しく紹介されているので、詳細な内容についてはそれらに譲ることとするが、いずれにしても、中納言の渡唐の動機は、唐土の第三皇子として転生した亡父^(注5)に会いたいという強い思いであったし、左大将の大君（＝「鳩の海にかげをならべし人」と主人公の恋は、佚亡首巻の重要な主題であった。すなわち、現存本『浜松』の起筆部は、散佚部で展開されたふたつの重要なテーマに触れることで前巻とのつながりを確認しながら、新たな舞台である唐土における中納言の旅を書き起こすという巧みな構成の仕方を見せているのである。

引き続き、中納言の旅を辿ってみる。

それよりこほうだうに着き給ふ。いとおもしろくて、人の家ども多くて、日本の^{ひのもと}人過ぎ給ふとて、家々の人出でて見さわぐさまどもいとめづらし。歴陽といふところに船とめて、それより華山といふ山、峰高く谷深く、はげしきことかぎりなし。あはれに心細く、「蒼波路遠し雲千里」とうち誦じ給へるを、御供にわたる博士ども、涙を流して、「白霧山深し鳥一声」と添へたり。

「こほうだう」（「虚白堂」説と「黄浦江」説があるが、不詳）、「歴陽」（安徽省）、「華山」（陝西省）と、次々に地名が登場するが、中納言の旅程については、早くから地理的な不正確さが問題とされてきた。その点を確認するため、引き続き長安到着までの記事を見て行く（この場面では、「華山」で中納言の朗詠する詩が日本人の詩であることも問題となろうが、その点については後述する）。

山越え果てぬれば、函谷の関に着き給ひて、日、暮れぬれば、関のもとに泊り給ひぬ。「この関は、鳥の声を聞きてなむ開くる」といふことを「しか」と聞き、御供の人の中にはけたるものありて、「いざこころみむ」とて、夜中ばかりに、

鳥の声にいみじう似せて、はるかに鳴き出でたるに、関の人おどろきてその戸を開く。「いとよしなきことをしつるかな」と、人々言ひにくむを、君も聞き給ひて、「ふるき心、さすがにおぼえけるにこそ」と、うち笑ひ給ふ。

明るる日、この関に御迎への人々参りたり。そのありさまども、^{からくに}唐国といふ物語に絵にしるしたる同じことなり。日本のてんふ渡いて関を入るるに、中納言ひきつくるひて、いみじく用意し給へるかたちありさま、光るやうに見ゆるを、この国の人々めづらかに見たてまつりおどろきて、めでたてまつることかぎりなし。昔のわうかくしやうのあける高層に、中納言のおはしましどころ、心ことに玉をみがき、かかやくばかりにしつらひて据ゑたてまつる。

「歴陽」(安徽省)から「華山」(陝西省)へ、そこから更に函谷関(河南省)へ向かうというこの道筋は、目的地を長安(陝西省)とした場合、明らかに地理的錯誤を含んでいる。そのため、これまで多くの研究者によって作者の知識の不正確さが指摘されてきたのだが、そうした中であって、須田哲夫「浜松中納言物語に於ける作者の唐知識論」^(注6)は、学問の家菅原家に生まれた作者の「唐知識」にはそれなりの根拠があることを指摘して、独自の説を展開している。須田説の登場に至るまでの研究史については、以下に引く池田利夫の手際良い紹介が参考になるが^(注7)、ここに紹介された研究史そのものの中に、実は考えるべき重要なポイントが隠されているのである。

主人公が唐土へ渡る構想を一篇の骨子とする浜松中納言物語ゆえに、そこに描かれた唐土に就いては議論が重ねられた。かつて明治二十二年刊行の日本文学全書本の解説が、「まことに唐土へ渡りたりし人の作なるか、はた又留学僧などの帰り来りしものにつきて書けるものか」と述べて、忽ち藤岡作太郎氏に「唐の一字に拘泥して、無要の説を述べたるものなり、実にかの国の朝を見聞せるものならば、何ぞ描写のかくの如く浅薄ならんや」と一蹴されてしまったが、以来、この浅薄さの実証が主になされる一方、作者にも相応の用意があった事の反証も行われた。

すなわち、松尾聰氏は、その唐土に対する知識がいかに粗雑であるかを、本文中の具体例を多数挙げて証明されたし、山川常次郎氏は、遣唐使の渡唐時期や道順、又地理上の事実との相違を指摘されたが、瀬利(目加田)さくを氏は、時期はほぼ現実的であるものの、なお地理、唐土人の風俗描写の幼稚であることを示して、ただ作者が人間界に異類性の美を求めた点に意義を認められた。

その後、地理に関しては、宮下清計氏、須田哲夫氏等の発言があり、特に須田氏は道順が正当であるほか、それらの知識は、学者の家柄に生まれた作者の面目にかけてもそう低くあるはずのないことを強調し、おのずから別の立場をとられた。

『浜松中納言物語』における唐土造形の内包する諸問題のうち、地理的側面に関しては、この時点でほぼ論点が出尽くしているように思われるが、ここに整理された研究史は、同時に、現代の研究者の陥りやすいある陥穽をも浮かび上がらせていると言えそうである。

具体的に見て行くことにすると、たとえば、華山の位置について、須田論文は、従来指摘されている矛盾を解消するため、新たに河南省の「花山」説を提唱している。同論文は、『中国古今地名大辞典』に、中国国内の地名として「華山」5箇所、「花山」4箇所、都合9箇所の同名の山が認められることから、それらの山の位置を確認し、結果として、『浜松』の順路と矛盾しない唯一の山である河南省の「花山」を『浜松』の「華山」に比定したのである。しかし、こうした論法には、何か根本的な錯誤が含まれてはいないだろうか。その錯誤は、近現代の地理的知識に基づいて『浜松』の矛盾を指摘する多くの言説にも共通して認められるものである。

『浜松』の作者である菅原孝標女は、『更級日記』の冒頭に長大な紀行文を配置している。そして、13歳の少女の視点を通じて描かれたその紀行文（いわゆる東海道上洛の記）の中にも、『浜松』と同じような地理的錯誤が含まれているのである。とりわけ、わざわざ『業平集』を引き合いに出しながら、隅田川の位置を誤っている点については、古来不審な記事として議論が重ねられている。それが勘違いによるものにせよ、構成的意図に基づくものにせよ、いずれにしても『伊勢物語』の愛読者ならば誰でも知っている隅田川について、「武蔵と相模の中にあて、あすだ川といふ、在五中将の「いざ言問はむ」と詠みける渡りなり、中将の集には隅田川とあり^(注8)」などと堂々と記す孝標女が、揚子江流域から函谷関へ北上する道順について、果たしてどれ程正確な知識を有していたのであろうか。また、その種の地理的な厳密さに、彼女はどれ程のこだわりを持っていたのだろうか。

揚子江からの道筋に「華山」ならぬ「花山」が存在し、そこから函谷関へ向けて険峻な山脈が続いているということを孝標女が知っていたとは、にわかには信じ難いのであるが、仮に菅原家の娘としての彼女の学識が、そのような記述を可能にしたのだとしても、その場合、今度はそうした彼女の意図を、当時の読者の誰が正確に読み解けたのかということが問題となる。『浜松』の冒頭を読み進めて、「歴陽といふところに船とめて、それより華山といふ山、峰高く谷深く、はげしきことかぎりなし」という一文に遭遇した当代の読者は、まず間違いなく五岳（五名山）のひとつとして有名な「あの」華山を連想したに違いないのである^(注9)。

前掲池田論文^(注10)は、孝標女の唐知識の源泉として、漢籍や耳学問とともに唐絵の存在意義を強調している。華山の描写についても、「はげしきことかぎりなし」という、当代物語の山容の描写としては珍しい表現が使われているところに、「エキゾチックな景観」を描こうとする作者の意図を読み取り、その背景に絵画的イメージを想定している。絵画的イメージと言えば、杭州について、「その泊り、入江のみづうみにて」と記すあたりにも、明らかに杭州（及び西湖）の絵を思い浮かべながら書き進めている筆触が感じられる。孝標女が華山や杭州の絵を目にしていた可能性は高いと思われるが、それは、それらの土地（地名）が、日本国内においても「詩跡」的価値を有する「あの」華山であり、「あの」杭州だからである。これはまさしく歌枕を利用した景観描写の唐

土版と言うべきものであり、こうした筆法を考慮に入れるとき、彼女がこの場面で、わざわざ知る人も少ない河南省「花山」周辺の地理に言及する必要はなかったと推断できるのである。

「代々文章博士家の人であった作者」が極端な過誤を犯すはずがないという前提に立つ須田論文は、主人公の行路と矛盾しない場所に別の華山を探すという方法によって、かえって隘路に迷い込んでしまったように見える。『浜松』の唐土に登場する地名の多くが日本人にも周知の場所であり、その造形に当たって、歌枕の利用法と同様の手法が援用されていること、更には、孝標女が『浜松』の読者としてどのような水準の人たちを想定していたのかといった事柄に思いを致せば、現代の中国地図に細かな検索の網をかけることの意味も、自ずと問い直されることになる。

ところで、須田論文の内包するこうした問題は、地理上の錯誤を指摘する他説にも共通する問題である。『浜松』に描出された唐土を正確な中国地図に基づいて検証することに、そもそもどんな意味があるのかという内省は、この種の研究にとって必須である。そうした内省を欠いたままなされる短絡的裁断は、作品や作者の実態からかけ離れた無意味な批判に終わるおそれがある。平安時代に書かれた『浜松』にとっては、藤岡作太郎によって「一蹴」された日本文学全書本の解説こそが、理想的読者像に最も近いものかもしれないのだ。唐土を舞台にする独自の長篇物語を初めて創作したという一点において、菅原道真嫡流の家に生まれた孝標女の面目は、すでに十分に施されていたのである。杭州、華山、函谷関といった地名に異国趣味を満たされた当時の読者は、地理上の矛盾など誰も問題にしなかったに違いない^(注11)。現に、『浜松』に対して以下に見るような高い評価を与えている『無名草子』は、唐土の地理や風俗のことなど、何一つ問題にしないのである。

『みつの浜松』こそ、『寢覚』『狭衣』ばかりの世のおぼえはなかめれど、言葉遣ひ・有様をはじめ、何事もめづらしく、あはれにもいみじくも、すべて物語を作るとなればかくこそ思ひ寄るべけれ、とおぼゆるものにて侍れ。^(注12)

このような絶賛に近い言葉で『浜松』論を語り起こした『無名草子』は、しかし、この作品の有するわずかな欠点として、たとえば次のような点に言及している。

式部卿の宮、唐土の親王に生れ給へるを伝へ聞き、夢にも見て、中納言、唐へ渡るまではめでたし。その母、河陽県の后さへ、この世の人の母にて、吉野の君の姉などにて、余りに唐土と日本と一つに乱れ合ひたるほど、まことしからず。

日本と唐土を舞台として、転生と混血という設定のもとに主要な作中人物が複雑に絡み合う有様に対して、「まことしからず」という厳しい評言を記したわけだが、実は「唐土と日本と一つに乱れ合」うという点こそが、この物語の核心を成しているのです。最後にその問題に触れて、論の閉じめとしたい。

『無名草子』の発言は、作品の基本的構想に関わる批判だったわけだが、本稿では、あくまでも唐土の造形方法という点に的を絞って、和漢の混淆したその態様を確認しておきたい。

すでに見た通り、杭州の風景は琵琶湖に譬えられていたわけだが、引き続き華山中納言と博士たちの唱和した「蒼波路遠し雲千里 白霧山深し鳥一声」という詩もまた、橘直幹による石山での作である。^(注13)そして、華山を越えたところに函谷関が待つわけであるが、この関所で夜を明かす場面は、ほぼ全面的に孟嘗君の故事に依拠している。

ここまで見てくればすでに明らかだと思うが、一連の唐土描写において孝標女が駆使しているのは、近世文学において隆盛をきわめることになる見立ての技法である。函谷関の場面を読んで孟嘗君の故事に接した当時の読者が直ちに連想するのは、「夜をこめて鳥のそらねははかるともよに逢坂の関はゆるさじ」という清少納言の歌である。杭州、歴陽、華山を經由して函谷関を抜け、長安へと至る道筋は、琵琶湖、石山、逢坂の関をこえて平安京へと至る道筋に見立てられているのである。そして、華山が石山に見立てられているという点からして、山の位置そのものに関する錯誤はそれとしても、東から西へという基本的な方向性や長安への順路の立て方において、孝標女自身の考え方の中に矛盾はなかったのだと思われる。

それにしても、繰り返し引き合いに出されるのが石山であるという点が興味深い。失われた首巻との関わりや函谷関(=逢坂の関)との位置関係を考えれば、当然の見立てとも言えるが、『更級日記』には、少女期の東海道上洛の旅で見た関寺の仏のことや、中年期の2度にわたる石山参詣のことが記されており、これに東海道下向の旅も加えれば、石山は孝標女にとって思い出の多い場所だったことが知られるのである。また、そのことに限らず、少女時代に経験した東海道上洛の旅が、『浜松中納言物語』の成立に深く関わっている点についても押さえておくべきであろう。遠い東の果てから西の都を目指す旅という基本構造において、『浜松』の中納言の旅は、少女時代の孝標女の旅とよく似ている。想像によって描かれた中納言の旅は、『更級日記』の紀行文に比べて、その内容は余りにも貧弱ではあるが(『浜松』の唐土よりも『更級日記』の「あづま路」の方が、遙かに遠く感じられるのだ)、唐土まで物語の舞台を拡大しようという大胆な構想にとって、自身がかつて遠い旅を経験したことがあるという事実は、その構想の貴重な支えとなったのではあるまいか。

総じて『浜松』に描かれた唐土については、筆が長安周辺に及ぶにつれて現実との齟齬が大きくなる傾向が見られるが、そのことも如上の見立ての方法と関わるところが大きいと思われる。そもそも平安京自体、洛陽、長安に見立てて造営された都市だったわけだが(洛陽=左京、長安=右京)、『浜松』においては、先に確認したような見立ての技

法が繰り返されるうちに、長安周辺のスケールが山城盆地のスケールに矮小化されてしまったように感じられるのである。唐後の住む場所として物語の重要な舞台となる河陽県が、長安と隣接するように描かれていることなども、地図を持ち出して錯誤を指摘するよりも、池田論文^(注14)の指摘する嵯峨天皇の河陽離宮（淀川の北、山崎の辺り）と京都との関係を重ね合わせて読み解く方が、建設的な議論が期待できそうである。

京都周辺の土地や風景を、唐土の名勝に見立てるのは、平安京の文人たちの日常的な発想である。孝標女は、その発想を逆手にとって幻の唐土を造形したのであるが、こうした方法では、舞台のスケールが小さくなるのはやむを得ない仕儀であった。ただ、女性の作家である彼女が、なぜ文人的発想を駆使できたのかと考えれば、やはり菅原家という学問の家に生まれ育った事実を無視することはできないだろう。父孝標や兄定義の日頃の言動や、漢籍を目にする機会の多い日常が、彼女の発想に影響したと考えるのが自然である。

学者の家の日常については、たとえば菅原道真が『書斎記』を残し、『紫式部日記』にもそうした話題に触れた記事があるが、道真嫡流の孝標女の自叙伝には、ただの一言もその種の記述は認められないのである。あたかも、女性が教養を見せることを諫めた紫式部の教養を忠実に守ろうとでもするかのように、菅原家のある側面について、彼女は徹底して緘黙するのであるが、如何に口をつぐもうとも、彼女の家が道真の嫡流であるという事実は動かないし、兄の文章博士定義が菅原家中興の祖と目される優れた文人であったことも明らかなのである。しかも、彼女の少女時代には『和漢朗詠集』が編纂され、晩年には『本朝文粹』が成立している。『浜松中納言物語』は、そのような家と時代に生まれ合わせた作家の作品としてふさわしいものであり、『更級日記』の空白部分を補完する役割も期待されるのである。

本稿は、作品の冒頭部分に触れることしかできなかったが、残された問題については改めて考察する機会を持ちたい。

【注】

- (1) 便宜上、原文に濁点を付して翻刻した。
- (2) 『浜松中納言物語』の影響を色濃く覗かせる『松浦宮物語』は、藤原定家による作品として現存する唯一の物語であるが、『無名草子』（1196年～1202年頃）に「定家の少将の作りたる」という記述が見られることから、定家の少将時代（1189年～1202年）乃至はそれ以前に執筆時期を限定することができる。すなわち、定家は、30代の頃にはすでに自作の典拠として利用できるほどに『浜松中納言物語』を読み込んでいたのであり、菅原孝標女が『浜松』の作者であることについても、当然その時点で知っていたはずである。
- (3) 平安時代に、「歌枕」と対応する「詩跡」という言葉が存在したわけではないが、渡唐経験のない日本の文人（11世紀の王朝貴族の殆どが該当する）が、唐土の地名、人名、故事に言及するとき、その言説が漢籍や絵画等の資料に依拠したものとなるのはやむを得ない仕儀であり、そうした場合に唐土の地名等の果たす役割は、歌枕の機能と同様である。

- (4) 以下、『浜松中納言物語』本文の引用は、新編日本古典文学全集『浜松中納言物語』（池田利夫校注、小学館）による。
- (5) 故式部卿の宮。故宮の転生に関する情報は唐土からの帰朝者によってもたらされ、中納言自身も同趣旨の夢をみている。
- (6) 須田哲夫「浜松中納言物語に於ける作者の唐知識論」（『文学・語学』5号、昭和32年9月）。
- (7) 池田利夫『更級日記 浜松中納言物語攷』第二部第八章「浜松中納言物語に於ける唐土の問題」（武蔵野書院、平成元年、初出は『芸文研究』10号、昭和35年6月）。
- (8) 『更級日記』本文の引用は、新潮日本古典集成『更級日記』（秋山虔校注）による。
- (9) 「峰高く谷深く、はげしきことかぎりなし」という表現は、山容の険しさで有名な華山にふさわしいものである。また、たとえば『和漢朗詠集』（1013年頃）には、華山も含めて「五岳」の山々が度々登場する。
- (10) 注7に同じ。
- (11) 外国の名所、旧跡を舞台にした作品が、異国趣味に応えることを旨として現実の地理を無視することは、現代の映画やTVドラマ等でもしばしば見受けられることである。一例として、アガサ・クリスティー原作の映画化として知られる『ナイル殺人事件』を挙げておくと、この映画は、作品そのものへの評価は別として、大規模なエジプトロケを敢行して観客の異国趣味に応えた点が評価されているのだが、ルクソール周辺に詳しい者が観れば、明らかに現実の地理と矛盾する展開が含まれているのである。しかし、もちろんそんなことは誰も問題にはしなかった。この映画の想定する観客が、上エジプトの住民ではなく、カルナック神殿やハトホル神殿の威容にただ驚き、その順路のことなど問題にもしない異国人だからである。
- (12) 『無名草子』本文の引用は、新潮日本古典集成『無名草子』（桑原博史校注）による。
- (13) この詩句は、『和漢朗詠集』に採録され、『江談抄』にも逸話が載るなど、名句として知られていた。
- (14) 池田利夫『更級日記 浜松中納言物語攷』第二部第九章「唐土観形成の素材と傾向」（武蔵野書院、平成元年）参照。

